

一般国道11号高松東道路建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

第二冊

SAKO MATSU NO KI
浴・松ノ木遺跡

1994.3

高松市教育委員会
建設省四国地方建設局

浴・松ノ木遺跡正誤表

頁	行	誤 →	正
6	右14	木樋口	木樋の
10	5	いたった	いたった
13	左2	弾正原古遺跡	弾正原古墳
23	15	末退去	末退去
24	1	(第 図)	(第4~8図)
29	10	出ある	である
	16	褐色灰色	褐灰色
30	20	ラミナー上	ラミナ状
43	7	北端部ぶ	北端部
	27	乏しく、	乏しく、
		花粉分析	花粉分析
49	15	埋土は期の	埋土はⅢ期の
52	4	ヘラ描き	ヘラ描
	3	刻目	刻目文
54	1	刻み目文	刻目文
	4	もつものと(1~4)と	もつもの(1~4)と
	8~9	いずれも破片も	いずれの破片も
	20	数状	数条
55	1	1	(1)
	3	2	(2)
	5	柄穴	柄穴
57		11の右	12
		12	13

頁	行	誤 →	正
58	6	23.5 [・] cm	23.5 [・] m
	22	直立す	直立する
	25	大部	体部
61	4	凹線 [・] 条	凹線 [・] 状
62	5	数 [・] 状	数 [・] 条
63	2	に近い調整は	に近い [・] 調整は
66	23	SR003	SR03 [・] は
67	7	至までの	至るまでの
73	3	ものものと	もつものと
76	4	現存長22、径5	現存長22 [・] cm、径5 [・] cm
77	1	第5節	第5節 古墳時代の遺構 と遺物
83	10	拳 [・] 台	拳 [・] 大
	22	いずれの土器に ヘラ描き	いずれの土器も ヘラ描
88	12	の脚部である(28)に	の脚部である。(26)に
90	30	第 [・] 節	第2 [・] 節
93	3	何ら関係が	何らかの [・] 関係が
105	16	年代 [・] 感	年代 [・] 観
110	3	行われていた [・]	行われていた
	20	高松市教育 [・] 程員会	高松市教育 [・] 委員会
119	27	讃岐国山田 [・] 田図	讃岐国山田 [・] 郡田 [・] 図
120	20	B [・] 型類	B [・] 類型



1. 4層水田完掘状況（北部 西から）



2. 4層水田完掘状況（南部 西から）



1. 完掘状況（北部 西から）



2. 完掘状況（南部 東から）



SR04權状木製品出土状況



SD06出土土器

は じ め に

私たちの郷土高松市は、瀬戸内の穏やかな気候とおむすび形の山々が点在するのどかな田園風景に育まれてきました。そして、この風景は同時に郷土の歴史のゆりかごとも申せましょう。郊外の水田地帯に広範囲に残る条里地割、日本霊異記に収められた三編の高松を舞台とした仏教説話、律令期に輩出した多くの学者高僧など、高松市が古代から都に直結した先進文化圏であったということはつとに知られているところです。

このたびの高松東道路の建設に伴う発掘調査は、高松市教育委員会が平成元年度から足掛け4年の歳月を費やして進めてきたもので、現在は、その調査成果を順次とりまとめているところです。本書に報告する浴・松ノ木遺跡では、弥生時代から古代にわたる水田跡、木製品、土器等の豊富な遺物が出土しており、原始以来の高松の先進性をうかがうことができます。

発掘調査が、長い間地下に眠っていた文化遺産を白日にさらすことによって、私たちの祖先の営みを復元するとともに、将来の発展に資することを目的とするものであることは言をまたないところです。しかし、それは換言すれば、未来に残すべき遺跡を現代限りで破壊してしまう行為でもあり、このことは私ども常々心に銘記しつつ、日々文化財行政に精励しているところです。何卒、ご理解とご教示、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

最後に、事業の実施にあたり、建設省香川工事事務所、地元関係者各位ほか多くの方々のご協力をいただきましたことを厚くお礼申し上げるものです。

平成6年3月

高松市教育委員会

教育長 山口 寮 弑

例 言

- 1 本書は、一般国道11号高松東道路建設にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書の第2冊で、高松市林町に所在する浴・松ノ木（さこ・まつのき）遺跡の調査報告を収録した。
- 2 本事業は、高松東道路、上天神－前田東間8kmのうち太田第2土地区画整理事業地に含まれる約1.7kmを対象とする。
- 3 本事業は、建設省四国地方建設局から高松市が受託し、高松市教育委員会が発掘調査を実施した。
- 4 事業費は、建設省四国地方建設局が全額を負担した。
- 5 調査にあたって下記の関係諸機関ならびに方々の助言と協力を得た。記して謝意を表したい。

建設省四国地方建設局 建設省四国地方建設局香川工事事務所
香川県教育委員会 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
高松市都市開発部太田第2土地区画整理事務所

香川大学 木原溥幸 丹羽佑一 東京大学 石上英一 京都大学 金田章裕
奈良国立文化財研究所 工楽善通 牛嶋 茂 高松工業高等専門学校 権藤典明
立命館大学 高橋 学 高知大学 内田忠賢 （敬称略）

- 6 本書の報告にあたっては、次の方々に分析および鑑定を依頼した。

木製品樹種鑑定 金沢大学教養部生物学教室 鈴木三男
森林総合研究所木材利用部 能城修一

プラントオパール分析鑑定 皇学館大学 外山秀一 （敬称略）

なお、昨年度の浴・長池遺跡の報告書で未収録の鑑定結果報告については、本報告書に併せて収録した。

- 7 調査全般を通じて、高松市内在住、末光甲正氏の協力を得た。

- 8 本遺跡の調査および整理作業は、文化財係長藤井総括のもと山本、中西、山元があたった。本報告書の執筆分担は執筆分担表に記したとおりである。全体の編集は山元が行った。
- 9 写真は、遺構については調査担当者が撮影し、遺物写真については写房 楠華堂（楠本真紀子）に委託した。
- 10 本遺跡の調査における各業務の委託先は次のとおりである。
- | | |
|-------------|----------------|
| 発掘調査掘削工事 | 佐伯建設工業株式会社 |
| 遺跡写真測量業務 | アジア航測株式会社 |
| 出土木製品保存処理業務 | 財団法人 元興寺文化財研究所 |
- 11 本書で使用する遺構略号は次のとおりである。
- S D 溝状遺構 S R 自然旧河道 S X 性格不明遺構
- 12 本文の挿図中で国土地理院発行の5万分の1地形図「高松」、「高松南部」、「丸亀」、「玉野」を一部改変して使用した。
- 13 浴・松ノ木遺跡の概要はこれまでに下記の文献によって一部報告をおこなっているが、いずれも調査終了時点のものや、整理作業中の成果であり、その後の整理作業の中で事実誤認が確認されたり、新しい成果が加わり遺構の時期に違いがでてきている。これらの時期については、今回の報告が正式なものとなる。
- 山本英之「浴・松ノ木遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報 平成2年度』香川県教育委員会 1991.3
- 山本英之「浴・松ノ木遺跡」『讃岐国弘福寺領の調査』高松市教育委員会 1992.3
- 『むかしの高松 創刊号』高松市教育委員会 1992.3

浴・松ノ木遺跡発掘調査報告書

本文目次

はじめに

例言

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査の経緯	1
第2節 調査の経過	2
第3節 整理作業の経過	7
第2章 地理的環境・歴史的環境	9
第1節 地理的環境	9
第2節 歴史的環境	10
第3章 発掘調査の成果	23
第1節 調査区の設定	23
第2節 遺跡の概要と層序	24
第3節 弥生時代前期の遺構と遺物	43
1 SX01	43
第4節 弥生時代中・後期の遺構と遺物	46
1 SD02	46
2 SD04	58
3 SD06	58
4 SD07	65
5 SD09	66
6 SD10	66
7 SR03	66
8 SR04	67
第5節 古墳時代の遺構と遺物	77
1 SD11	77
2 9a層水田	79
3 SR04 9～10層出土土器	83

4	SR04	7層出土土器	84
第6節		古代の遺構と遺物	86
1	SD03		86
2	SD05		86
3	SR04	5～8層出土土器	88
第7節		中・近世の遺構と遺物	89
1	SD01		89
2	SD08		89
3	SD12		90
4	3a	層水田	90
5	4a	層水田	93
6		包含層出土土器	99
第4章		調査のまとめ	101
第1節		遺構の変遷について	101
第2節		出土土器について	105
第3節		水田遺構について	111
第5章		おわりに	123

附章 分析結果

第1節 浴・松ノ木遺跡、浴・長池遺跡における

プラント・オパール分析結果

第2節 高松市浴・松ノ木および浴・長池遺跡出土の木製品の樹種

挿 図 目 次

第1図 試掘トレンチ設定位置図…………… 2	第30図 S D06出土遺物実測図(4)……………64
第2図 高松東道路路線内 遺跡調査位置図……………3~4	第31図 S D06出土遺物実測図(5)……………65
第3図 主要遺跡分布図……………11~12	第32図 S D07エレベーション図……………66
第4図 調査区設定図……………25~26	第33図 S D07出土遺物実測図……………66
第5図 遺構配置図(1)……………27~28	第34図 S D09土層図……………66
第6図 遺構配置図(2)……………27~28	第35図 S D10土層図……………66
第7図 土層図(1)……………31~32	第36図 S R03平面図……………67
第8図 土層図(2)……………33~34	第37図 S R04内杭列実測図……………68
第9図 土層図(3)……………35~36	第38図 S R04内樞状木製品 出土状態実測図……………68
第10図 土層図(4)……………37~38	第39図 S R04出土遺物実測図(1)……………69
第11図 土層図(5)……………39~40	第40図 S R04出土遺物実測図(2)……………70
第12図 S X01実測図……………41~42	第41図 S R04出土遺物実測図(3)………71~72
第13図 S X01出土遺物実測図(1)……………44	第42図 S R04出土遺物実測図(4)……………74
第14図 S X01出土遺物実測図(2)……………45	第43図 S R04出土遺物実測図(5)……………75
第15図 S D02土層図……………46	第44図 試掘トレンチ出土遺物実測図……………76
第16図 S D02実測図……………47~48	第45図 S D11平面図(推定)……………77
第17図 S D02出土遺物実測図(1)……………50	第46図 S D11木槌実測図……………78
第18図 S D02出土遺物実測図(2)……………50	第47図 S D11出土遺物実測図……………79
第19図 S D02出土遺物実測図(3)……………51	第48図 9 a層水田区画図……………79
第20図 S D02出土遺物実測図(4)……………52	第49図 S R04 9 a層水田 石組畦畔実測図…81~82
第21図 S D02出土遺物実測図(5)……………53	第50図 S R04 9~10層 出土遺物実測図……………84
第22図 S D02出土遺物実測図(6)……………55	第51図 S R04 7層出土遺物実測図……………84
第23図 S D02出土遺物実測図(7)……………56	第52図 S D03土層図……………86
第24図 S D02出土遺物実測図(8)……………57	第53図 S D03出土遺物実測図……………86
第25図 S D04エレベーション図……………58	第54図 S D05土層図……………86
第26図 S D06実測図……………59~60	第55図 S R04 5~8層 出土遺物実測図……………87
第27図 S D06出土遺物実測図(1)……………61	
第28図 S D06出土遺物実測図(2)……………62	
第29図 S D06出土遺物実測図(3)……………63	

第56図	S D01土層図	89
第57図	S D01実測図	89
第58図	S D12実測図	90
第59図	S D12出土遺物実測図	90
第60図	3 a層水田区画図	92
第61図	4 a層水田区画図	94
第62図	S R04 3～4層 出土遺物実測図(1)	97
第63図	S R04 3～4層 出土遺物実測図(2)	98
第64図	包含層出土遺物実測図(1)	99
第65図	包含層出土遺物実測図(2)	100
第66図	浴・松ノ木遺跡遺構変遷図(1)	103
第67図	浴・松ノ木遺跡遺構変遷図(2)	104
第68図	浴・松ノ木遺跡 S D06 出土土器器種構成	106
第69図	各層検出水田面積分布	112
第70図	第9 a層水田	114
第71図	第9 a層水田水流方向	114
第72図	第4 a層水田	116
第73図	第4 a層水田水流方向	117
第74図	第3 a層水田	117
第75図	第3 a層水田水流方向	118

挿 表 目 次

第1表	一般国道11号高松東道路埋蔵文化財調査事業工程表	1
第2表	整理作業工程表	7
第3表	遺跡分布図地名表	13~14
第4表	9 a層水田面積集計表	80
第5表	3 a層水田面積集計表	91
第6表	4 a層水田面積集計表	95~96
第7表	B類土器出現頻度一覧表	107
第8表	第9 a層水田平面比值指数表	114
第9表	第4 a層水田平面比值指数表	116
第10表	第3 a層水田平面比值指数表	118

挿 写 真 目 次

写真1	発掘作業風景	8
写真2	S X01遺物出土状況	45
写真3	S D06出土土器ヘラ記号	65

附 図 目 次

附図1	浴・松ノ木遺跡遺構図
附図2	浴・松ノ木遺跡3 a水田遺構図
附図3	浴・松ノ木遺跡4 a水田遺構図
附図4	浴・松ノ木遺跡9 a水田遺構図

図 版 目 次

卷頭 1 - 1	4 a 水田完掘状況(北部 西から)	図版11-2	S D07完掘状況 (北から)
	- 2 4 a 水田完掘状況(南部 西から)	図版12-1	S D09完掘状況 (南から)
卷頭 2 - 1	完掘状況(北部 西から)	- 2	S D10完掘状況 (北から)
	- 2 完掘状況(南部 東から)	- 3	S R03・04完掘状況 (東から)
卷頭 3	S R04襷状木製品出土状況		
卷頭 4	S D06出土土器	図版13-1	S R03完掘状況 (東から)
図版 1 - 1	調査前状況 (東から)	- 2	S R03南壁土層堆積状況
	- 2 調査終了状況 (東から)	図版14-1	S R04北部 完掘状況 (西から)
図版 2 - 1	S X01完掘状況 (東から)		
	- 2 S X01北壁土層堆積状況(1)	- 2	S R04南部 完掘状況 (西から)
図版 3 - 1	S X01北壁土層堆積状況(2)		
	- 2 S X01西壁土層堆積状況	図版15-1	S R04北壁土層堆積状況
図版 4 - 1	S X01西壁土層 水田畦畔	- 2	S R04北壁細部土層堆積状況
	- 2 S X01水田畦畔検出状況 (北から)	図版16-1	S R04杭列検出状況
		- 2	S R04 13層襷状木製品 出土状況
図版 5 - 1	S D02 (北部) I ~ IV期	図版17-1	S D11木樋出土状況
	- 2 S D02 (南部) I ~ IV期	- 2	S D11木樋出土状況細部
図版 6 - 1	S D02土層堆積状況(1)	図版18-1	9 a 層水田石組畦畔検出状況
	- 2 S D02土層堆積状況(2)	- 2	9 a 層水田石組畦畔検出状況 細部
図版 7	S D02遺物出土状況	図版19-1	9 a 層水田完掘状況 (西から)
図版 8 - 1	S D04北部 完掘状況 (南から)	- 2	9 a 層水田完掘状況細部
	- 2 S D04南部 完掘状況 (北から)	図版20-1	S D03北部完掘状況 (南から)
	- 3 S D06・07 完掘状況 (東から)	- 2	S D03南部完掘状況 (北から)
		- 3	S D03土層堆積状況
図版 9 - 1	S D06遺物出土状況	図版21-1	S D05北部完掘状況 (南から)
	- 2 S D06土層堆積状況	- 2	S D05北部完掘状況 (北から)
図版10	S D06遺物出土状況 (細部)	- 3	S D05土層堆積状況
図版11-1	S D06完掘状況 (北から)	図版22-1	S D01北部完掘状況 (南から)

- | | | | |
|--------|-------------------|--------|-----------------|
| 図版22-2 | S D01南部完掘状況 (北から) | 図版36-1 | S R04 13層出土 |
| -3 | S D01土層堆積状況 | | 襷状木製品 (表) |
| 図版23-1 | S D08完掘状況 (南から) | -2 | 同 (裏) |
| -2 | S D12完掘状況 (南から) | 図版37-1 | S D02 III期出土木製品 |
| -3 | 3 a層水田完掘状況 (東から) | -2 | S D02 IV期出土木製品 |
| 図版24-1 | 3 a層水田完掘状況 西部 | -3 | S R04 3~4層出土鉄先 |
| | (南から) | | |
| -2 | 3 a層水田完掘状況 東部 | | |
| | (南から) | | |
| 図版25-1 | 4 a層水田完掘状況 北半西部 | | |
| | (南から) | | |
| -2 | 4 a層水田完掘状況 北半東部 | | |
| | (南から) | | |
| 図版26-1 | 4 a層水田完掘状況 南半 | | |
| | (西から) | | |
| | 4 a層水田完掘状況 細部 | | |
| 図版27 | S X01出土土器 | | |
| 図版28 | S D02出土土器(1) | | |
| 図版29 | S D02出土土器(2) | | |
| 図版30 | S D06出土土器(1) | | |
| 図版31 | S D06出土土器(2) | | |
| 図版32-1 | S R04 11~13層 出土土器 | | |
| -2 | S R04 9・10層 出土土器 | | |
| -3 | S D11出土土器 | | |
| -4 | S D03出土土器 | | |
| 図版33-1 | S D04 5~8層 出土土器 | | |
| -2 | S D04 3~4層 出土土器 | | |
| 図版34-1 | S D12出土土器 | | |
| -2 | S X01出土石器 | | |
| -3 | S D02 III期出土石器 | | |
| 図版35-1 | S R04杭列出土杭 | | |
| -2 | S R04出土木製品 | | |

執筆分担表

	執筆担当					執筆担当		
	遺構	土器	石器	木器		遺構	土器	鉄器
第1章					第7節	山元	-	-
第1節	山本				1 SD01	山元	-	-
第2節	山本				2 SD08	山元	-	-
第2章					3 SD12	山元	-	-
第1節	山本				4 3 a層水田	中西	山元	山元
第2節	山本				5 4 a層水田	中西	山元	-
第3章					第4章			
第1節	山元				第1節	山元		
第2節	中西				第2節	山元		
第3節	遺構	土器	石器	木器	第3節	中西		
1 SX01	中西	山元	山元	-	第5章	山元		
第4節								
1 SD02	中西	山元	山元	中西				
2 SD04	山元	-	-	-				
3 SD06	山元	山元	-	-				
4 SD07	山元	山元	-	-				
5 SD09	山元	-	-	-				
6 SD10	山元	-	-	-				
7 SR03	中西	-	-	-				
8 SR04	中西	-	-	中西				
第5節								
1 SD11	山元	山元	-	-				
2 9 a層水田	中西	-	-	-				
3 SR04 9~10層	-	山元	-	-				
4 SR04 7層	-	山元	-	-				
第6節								
1 SD03	山元	山元	-	-				
2 SD05	山元	-	-	-				
3 SR04 5~8層	-	山元	-	-				

第 1 章

調査の経緯と経過

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

昭和53年の一般国道11号高松東道路の都市計画決定にともない、香川県都市計画審議会は、昭和62年2月2日、路線周辺の計画的な市街化および都市基盤整備をすすめるとともに、民間事業の活性化を目的として香川中央都市計画事業太田第2土地区画整理事業の施行を決定した。事業は太田、木太、林、多肥の4地区にまたがる約360haにおよび、この範囲に含まれる高松東道路約1.7km分の用地も区画整理事業の換地処理によって確保されることとなったため、この区間の東道路用地については高松市教育委員会が発掘調査を実施することで、昭和62年12月15日に四国地方建設局、香川県教育委員会、高松市の三者間で覚書が取り交わされた。

現地調査は平成元年夏の区画整理事業仮換地指定を受けて着手した。すなわち、先の昭和61年度の分布調査で遺物の散布が顕著であった浴・長池部分の発掘工事発注の準備を進めるとともに、浴・長池および浴・松ノ木部分の試掘調査を実施して遺跡の範囲ならびに性格を確定した。そして8月15日から平成2年3月20日で浴・長池遺跡の発掘調査を実施した。

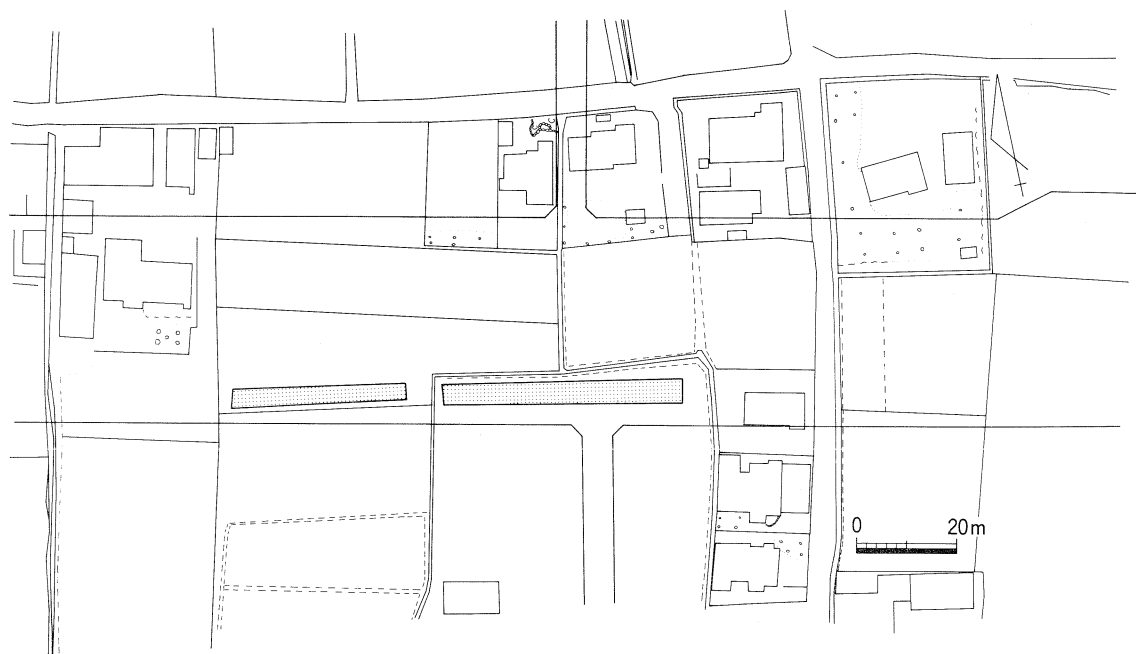
そして平成2年度以降は、前年度の試掘調査で遺跡の所在と範囲が確定しているものの発掘調査と、新たに用地が確保された部分の試掘調査を平行して実施し、平成4年9月末日をもって東道路予定地すべての発掘調査を終了した。

整理作業は、現地での発掘調査が進行している平成3年度後半から分類基礎整理に着手し、発掘調査が終了した平成4年10月から本格的な作業にかかった。そして平成5年3月に第1冊目として浴・長池遺跡の報告書を刊行し、以降、平成7年度までの予定で順次実施中である。

年度	試掘調査	発掘調査	整理作業	報告書刊行
平成元	浴・長池、浴・松ノ木	浴・長池		
2	浴・長池Ⅱ 井手東Ⅰ、Ⅱ、居石	浴・松ノ木 浴・長池Ⅱ		
3	蛙股	井手東Ⅰ、Ⅱ 居石、蛙股	浴・長池	
4		蛙股	浴・松ノ木	浴・長池
5			浴・長池Ⅱ 井手東Ⅰ、Ⅱ	浴・松ノ木 浴・長池Ⅱ（予定）
6			居石、蛙股	井手東Ⅰ、Ⅱ（予定）
7				居石、蛙股（予定）

第1表 一般国道11号高松東道路埋蔵文化財調査事業工程表

第2節 調査の経過



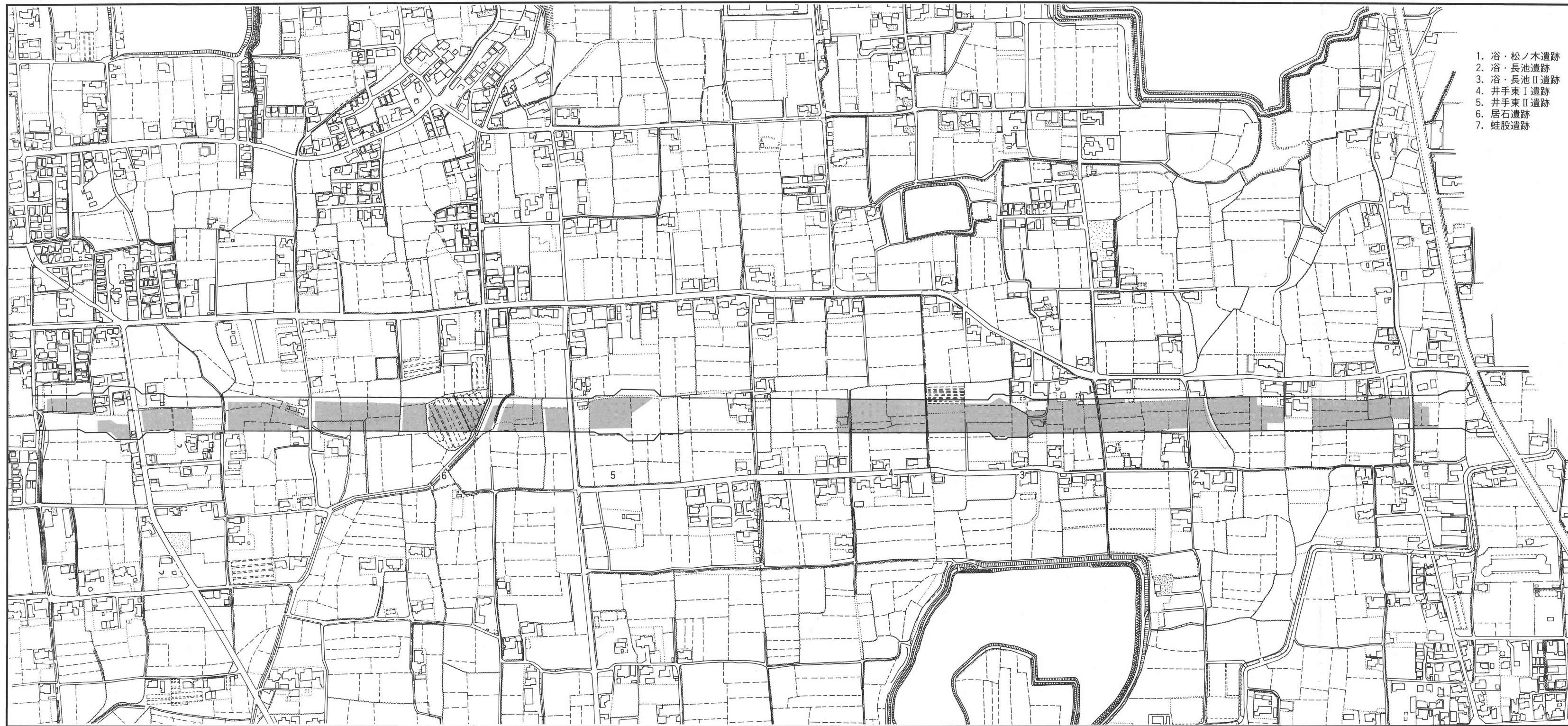
第1図 試掘トレンチ設定図

先述のとおり、浴・松ノ木遺跡の試掘調査は平成元年度の太田第2土地区画整理事業仮換地指定を受けて始められた。

8月の月上旬に浴・長池遺跡の一部を含めた範囲にバックホーによる試掘トレンチを掘削し、土層観察および遺物の採集によって遺跡の有無を確認した。試掘トレンチは道路用地の南または北の用地境に沿って東西に長く、計5本を設定した。トレンチ幅は3.5～4.5m、総延長は約150mで実掘面積は約550㎡である。一部試掘実施期間中に立ち入りができなかった箇所のうち、浴・長池遺跡の西半は試掘調査を経ないままに本調査に突入することとなったが、浴・松ノ木遺跡の東側、旧空港線から200mまでの範囲では、浴・長池遺跡の工事仮設道路敷設の掘削を利用して確認作業を行い遺跡範囲を確定した。

試掘調査の結果、浴・松ノ木遺跡西半から浴・長池遺跡東半にかけては東西幅約150mの旧河道を確認し、河床部の数カ所の落ち込み（旧流路）からは弥生時代中期から後期にかけての土器片が出土している。旧河道を埋積する土層中には古墳時代から近世にかけての数面の水田層も確認できた。旧河道兩岸の微高地上にはめだった遺構はみられなかったが、弥生・古墳時代を通じての土器片の散布は多く、集落遺跡等の存在が予想された。

以上の結果を受けての発掘調査は、翌平成2年6月5日から10月17日にかけて工事請負によっ



1. 浴・松ノ木遺跡
2. 浴・長池遺跡
3. 浴・長池Ⅱ遺跡
4. 井手東Ⅰ遺跡
5. 井手東Ⅱ遺跡
6. 居石遺跡
7. 蛙股遺跡

第2図 高松東道路線内遺跡調査位置図 (高松市教育委員会調査分)

て行い、佐伯建設工業株式会社に発注した。調査の結果、事前の予想を越えた多くの成果を納めることができ、木製品保存処理、プラント・オパール分析、木質遺物樹種鑑定等必要と判断された処置については、調査終了直後から整理作業期間にわたって順次計画的に発注した。

発掘作業の経過については以下に調査日誌抄を掲げる。

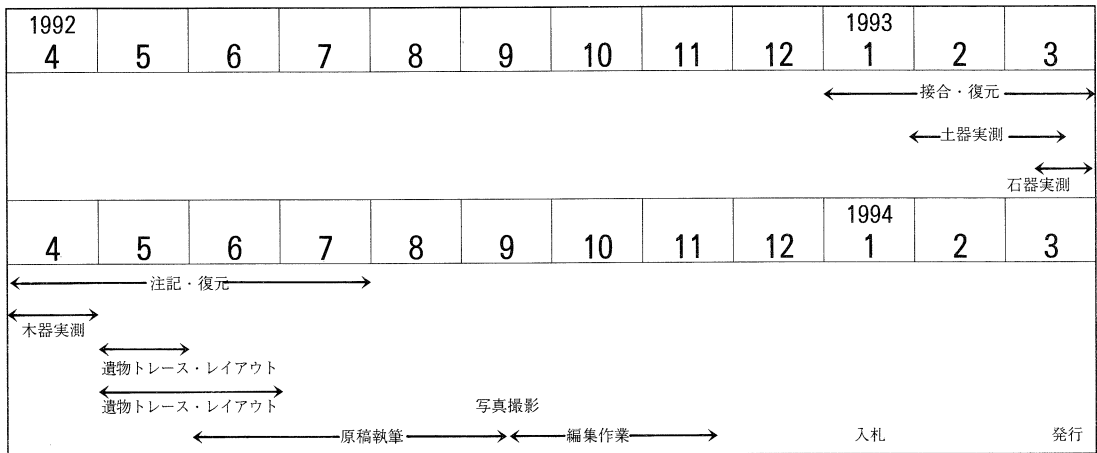
《調査日誌抄》

- | | | | |
|---------|---|------|--|
| 2. 6.20 | 本日より作業員の就労開始。調査区北西隅よりトレンチの掘削開始。 | 12 | 盆休み、(~16) |
| 7. 2 | 雨天により作業中止。(~3) | 20 | S R04 掘り下げ継続中 7層以下を掘り下げ中。 |
| 5 | 重機による機械掘削開始。 | 22 | 台風襲来のため現場作業中止。 |
| 9 | S R03 3 a層上面水田検出中。 | 27 | S R04 10層以下を掘り下げ中。西肩付近に杭列検出。 |
| 18 | S R03 3 a層上面水田検出終了。微高地部分の遺構検出開始。立命館大学 高橋学氏来高。発掘調査現場指導 (~20) | 29 | S R04 13層から櫛状木製品出土。9 a層に伴う両肩の石列等を清掃し、明日の航空測量に備える。 |
| 21 | 3 a層上面水田層畦畔削りだし。平行して畦畔平面実測。(s=1/50) | 22 | 2区(南部)4 a層上面水田完掘状写真撮影。2区(市道東)S X01洪水砂層掘り下げ中。 |
| 23 | 3 a層上面水田完掘。 | 30 | S R03、04完掘状況航空測量。S D02Ⅲ期完掘状況写真撮影。 |
| 24 | 3 a層上面水田完掘状況写真撮影。 | 31 | S R04 北壁、南壁土層実測終了。S R04内木製品及び杭列検出状況図(S=1/10)作成。1、2区(南部)4 a層上面水田畦畔検出中。 |
| 25 | 4 a層上面水田検出開始。微高地上遺構掘り下げ中。 | 9. 4 | 1区(南部)4 a層上面水田完掘。2区S D02Ⅳ期掘り下げ中。2区(南部)4 a層上面水田検出中。 |
| 28 | 2区4 a層上面水田畦畔検出終了。1区4 a層上面水田検出中。 | 5 | 2区S R04南壁土層写真撮影。プラントオパール分析用試料採集。S D02最下層遺物出土状況写真撮影、同遺物出土状況図作成。(S=1/20) |
| 8. 1 | 1区4 a層上面水田検出終了。畦畔削りだし終了。 | | |
| 8. 6 | 1区4 a層上面水田畦畔削りだし。航空測量のための準備。 | | |
| 7 | 1区、2区航空測量。4 a層上面水田完掘状況写真撮影。 | | |
| 8 | S R04 4 b層以下掘り下げ。 | | |
| 11 | 2区(市道東)調査区東へ20m延長。 | | |

- 9.10 2区(南部)SR04 4a層上面水田検出中。2区(市道東)遺構検出終了、SD06掘り下げ開始。
- 12 1区(南部)4a層上面水田畦畔削りだし。2区(南部)SD03完掘。2区(市道東)SD06遺物出土状況写真撮影。
- 14 2区(市道東)SD06遺物取り上げ。1、2区(南部)4a層上面水田畦畔削りだし。航空測量準備。
- 15 航空測量実施。
- 17 雨天のため現場作業中止。(～18)
- 19 台風襲来のため現場作業中止。
(～20)
- 21 調査区南部完掘状況写真撮影。
- 26 2区(南部)SR04 4b層以下掘り下げ中。
- 10.1 1、2区(南部)9a層上面水田検出中。
- 3 2区(市道東)SX01弥生時代前期水田畦畔検出中。
- 5 9a層上面水田畦畔削りだし終了。同完掘状況写真撮影。SD02Ⅲ期完掘。
- 6 SX01黒色シルト上面にて畦畔の平面検出できず。
- 8 雨天のため現場作業中止。
- 9 9～10層掘り下げ中(5c末～6c初の須恵器出土)9a層掘り込み溝(SD11)から木樋出土。
- 10.10 SR04 11層以下掘り下げ中。SD11木樋検出状況写真撮影及び出土状況図作成。(S=1/10)
- 12 2区(市道東)SX01黒色シルト(土壌層)除去終了。完掘状況写真撮影。
- 15 2区(市道東)西壁土層断面図終了。2区(南部)SD02Ⅳ期遺物出土状況写真、出土状況図終了。SX01南東部水田畦畔検出、削りだし。
- 16 航空測量。2区(南部)微高地上遺構及びSR03、04完掘状況写真撮影。
- 17 2区(南部)調査区内の土層実測及び分層。
- 19 SD11木樋口取り上げ。
- 23 2区(市道東)、(南部)分析用土壌サンプリング。
- 24 2区(南部)土層図終了。2区(市道東)土層図終了。本日にて浴・松ノ木遺跡の現場における作業を終了する。

第3節 整理作業の経過

整理作業は、浴・長池遺跡の整理作業が終了した平成4年の12月から開始した。整理作業は、調査担当者を中心として、整理補助員6名の援助を受けて実施した。経過については別表に示した通りである。基礎的な整理作業は平成4年度中に実施したが年度末に整理プレハブを林町から市内円座町に移動し、年度末および年度始めに整理作業が一時中断したことにより詰め作業は平成5年度に実施した。



第2表 整理作業工程表

なお、発掘調査および整理作業の関係者は次のとおりである。

発掘調査（平成2年度）

教育長	三 木 義 夫		
教育部長	多 田 孜		
教育部次長	増 田 昌 三		
文化振興課長	多 田 恒 男		
文化振興課長補佐	亀 井 俊		
文化財係長	藤 井 雄 三		
文化財係主事	山 本 英 之		
	川 畑 聰		
文化財係事務員	山 元 敏 裕		
太田第2土地区画整理事務所主事	小 坂 伸 夫		
	為 定 典 夫		
文化振興課非常勤嘱託	中 西 克 也	金 森 澄 子	
	岡 田 信 子	井 口 敬 三	
	玉 田 和 子	宮 内 秀 樹	

整理作業（平成4・5年度）

教育長

三木 義夫（H4.9～）

文化部長

山口 寮 弼（～H4.10）

文化部次長

増田 昌三（～H4.9）

上里 文 磨（H4.10～）

文化振興課長

上里 文 磨（～H4.9）

文化振興課長補佐

宮内 秀起（H5.12～）

文化財係長

多田 恒男

文化財係主事

藤田 容三

藤井 雄三

山本 英之

山元 敏裕

太田第2土地区画整理事務所主事

為定 典夫（～H5.4）

小田 薫（H5.5～）

文化振興課非常勤嘱託

中西 克也（～H5.3）

岡田 信子

竹林 弘子

井口 夫美子

大川 玲子

吉本 みどり

出石 真理子

佐々木 由美子（H3.4～H5.7）



写真1 2区（市道東）発掘作業風景

第 2 章

地理的環境・歷史的環境

第1節 地理的環境

高松市は、四国の北東部、香川県のほぼ中央部に位置する。瀬戸大橋架橋前はJR連絡船、国道フェリー等で本州と連結し、四国の表玄関の役割を果たしたが、架橋後も中央省庁の出先や大手企業の地方支店が多く集中し人口33万人余りを擁する、四国の中枢管理機能を担う地方都市として発展している。

瀬戸内海沿岸に東西に連なる香川県の平野部は、一般に讃岐平野として総称されるが、実際は東から長尾平野、高松平野、丸亀平野、三豊平野といった地域単位の小平野に細分でき、いずれも南部の阿讃山脈に源を発する中小河川によって形成された扇状地である。このうち高松平野は、北を瀬戸内海、東を立石山系、南を阿讃山脈、西を五色台山塊に限られた総面積約19km²、丸亀平野に続く規模をもち、大部分が高松市の行政区域に含まれる。

平野部には屋島、石清尾山塊を始め台形やお椀を伏せたような山があちこちにみられる。これらは花崗岩を基盤として上部に讃岐岩質安山岩をかぶるために、浸食から取り残された結果形成されたメサ、またはビュートと呼ばれる丘陵で、讃岐ののどかな田園風景をよく象徴している。

平野の形成は、その多くが塩江町に源を発する香東川によってなされ、春日川以東の部分のみが春日川、新川といった小河川の影響下になるが、扇状地の発達は見られない。現在の香東川は寛永年間、西島八兵衛の治水事業によるもので、本来は高松市街地背後の石清尾山塊の東を迂回して東側に広く氾濫していたことが知られており、現在の御坊川はその最末期の川筋にあたる。また、往時の旧河道は、自然の凹地の下手を堰止めて形成されたため池にもその名残をとどめており、浴・松ノ木遺跡の周辺では南から分ヶ池、下池、長池、大池、ガラ池（消滅）とつながる香東川の旧河道が復原できる。

香川は瀬戸内式気候に属し、年間1,000mm前後と全国屈指の少雨地帯で、農業用水確保のために多くのため池が築造され、県別のため池保有数では兵庫県、奈良県に次いでいる。香川用水通水まではこれらのため池単位に水掛や水利組合が組織され、きびしい水利慣行を残していた。

一方、近世以降では、微高地上に四周に堤防を巡らせ、その四周の全部または一部が条里の阡陌に沿うような皿池がみられるようになるが、その一方で三谷三郎池、神内池などの、開析谷を堰止めた大規模なため池も多く築造される。

今回高松東道路の横断によって一連の調査を実施した太田、林地区は、地形的には扇状地の末端部にあたり、丘陵裾部を伏流した地下水が自噴井として地上に湧き出す“出水”と呼ばれる泉が散在する。そして県下のため池灌漑に代わって、これらを単位とした水掛や水利慣行が見られ、周辺の遺跡調査でも弥生時代以来の埋没出水がいくつか確認されている。

第2節 歴史的環境

高松平野および周辺丘陵部では、旧石器時代以降の遺跡が数多く知られており、とりわけ平野部では矢継ぎ早の大規模開発の事前調査により遺跡数が飛躍的に増大しつつある。しかし、これらを面的に分析して地域の歴史を体系的に組み立てる作業は、遺跡の多くがいまだ正式な調査報告書の刊行を見ていない現段階では不十分であるといわざるを得ないが、弥生時代、古墳時代といった限られた時期については、水系または地域を単位として遺跡の時期的な変遷を追う作業が試みられている⁽¹⁾。本書ではそれとの重複を避け、本調査が実施された太田・林地区の最近の知見を中心として高松平野の歴史環境を概観することにする。

旧石器時代、高松平野とその周辺部では久米池南遺跡（新田町）⁽²⁾と雨山南遺跡（三谷町）⁽³⁾、中間西井坪遺跡（中間町）⁽⁴⁾等で知られている。前二者はいずれも表採または後世の堆積の混入にとどまるが、中間西井坪遺跡ではA T火山灰上層から舟底形石器と小型のナイフ形石器を主体としたブロックが確認されている。

これに続く縄文時代では、大池遺跡（木太町）⁽⁵⁾で草創期の有舌尖頭器2点の採集が報告されているほか、平野縁辺部では三谷三郎池C遺跡（三谷町・後期）⁽⁶⁾、下司遺跡（西植田町・前期）⁽⁷⁾、前田東町中村遺跡（前田東町・後期）⁽⁸⁾、佐料遺跡（鬼無町・後期）⁽⁹⁾等が知られている。また、井手東I遺跡（伏石町）⁽¹⁰⁾では現地表下約70cmでアカホヤ火山灰の堆積層があり、縄文中期の平野の形成過程を窺うことができる資料となった。晩期の遺跡は、近年の平野部の発掘調査による充実が著しく、林・坊城遺跡（六条町）⁽¹¹⁾、浴・松ノ木遺跡（林町）⁽¹²⁾、浴・長池遺跡（林町）⁽¹³⁾、浴・長池II遺跡（伏石町）⁽¹⁴⁾、井手東I遺跡、井手東II遺跡（伏石町）⁽¹⁵⁾、居石遺跡（伏石町）⁽¹⁶⁾、上天神遺跡（三条町）⁽¹⁷⁾が新たに確認された。これらのうち、晩期でも前半に属する居石遺跡と井手東I遺跡、上天神遺跡以外は、同一土層中に弥生時代前期初頭の土器と混在して出土するものが多く、両時期が縄文から弥生時代への過渡期として密接に連携していることが改めてうかがえる。

弥生時代前期になると、平野部では縄文晩期から連続する前記の遺跡に加えて天満・宮西遺跡（松縄町）⁽¹⁸⁾、空港跡地遺跡（林町）⁽¹⁹⁾、大池遺跡（木太町）、松縄下所遺跡（松縄町）⁽²⁰⁾等が新たに登場してくる。このうち浴・長池遺跡、浴・長池II遺跡ではこの時期から自然堤防上および後背湿地に整った小区画の水田が営まれており、早い時期から稲作文化が受け入れられていたことが知られるほか、天満・宮西遺跡では数棟の円形住宅を囲む直径約300mと推定される周溝が検出されている。一方、周辺丘陵部では、比高30m足らずの独立低丘陵上に諏訪神社遺跡（東山崎町）⁽²¹⁾、光専寺山遺跡（池田町）⁽²²⁾等が確認されているが、断片的な遺物の出土のみで遺跡の全容は明らかでない。



第3図 主要遺跡分布図 (1 : 60,000)

第3表 遺跡分布図地名表

1 西島遺跡	34 片山池窯跡	67 犬の馬場古墳
2 弾正原古遺跡	35 坂田廃寺	68 矢野面古墳
3 横立山経塚古墳	36 高松城東ノ丸跡	69 三谷三郎池C遺跡
4 横立山東麓古墳群	37 紺屋町遺跡	70 三谷三郎池西岸窯跡
5 住吉神社西古墳	38 天満・宮西遺跡	71 石舟池古墳群
6 勝賀廃寺	39 白山神社古墳	72 三谷石舟古墳
7 是竹薬師遺跡	40 松縄下所遺跡	73 光専寺山遺跡（古墳）
8 かしが谷2号墳	41 キモンドー遺跡	74 三谷通谷遺跡
9 佐料遺跡	42 大池遺跡	75 浜北古墳群
10 今岡古墳	43 弘福寺領関係遺跡発掘地	76 屋島寺境内遺跡
11 平木古墳群	44 上天神遺跡	77 中筋古墳
12 鬼無大塚古墳	45 太田下須川遺跡	78 金刀比羅神社古墳群
13 古宮古墳	46 蛙股遺跡	79 東山地古墳
14 相作牛塚古墳	47 居石遺跡	80 長尾古墳群
15 御厩大塚古墳	48 井手東Ⅱ遺跡	81 すべり山遺跡（大空遺跡）
16 伽藍山遺跡	49 井手東Ⅰ遺跡	82 南谷遺跡
17 中間西井坪遺跡	50 浴・長池Ⅱ遺跡	83 山下廃寺
18 正箱薬王寺遺跡	51 浴・長池遺跡	84 山下古墳
19 本堯寺北古墳	52 浴・松ノ木遺跡	85 岡山古墳群
20 下ノ山遺跡（銅銚出土地）	53 林・坊城遺跡	86 久本古墳
21 石清尾山9号墳	54 六条・上所遺跡	87 諏訪神社墳丘墓
22 北大塚古墳	55 東山崎・水田遺跡	88 諏訪神社古墳
23 鏡塚古墳	56 凹原遺跡	89 久米山遺跡群
24 石舟塚古墳	57 空港跡地遺跡	90 久米池南遺跡
25 稻荷山北端古墳	58 拝師廃寺	91 川添浄水場遺跡
26 稻荷山姫塚古墳	59 多肥廃寺	92 高松市茶臼山古墳
27 猫塚古墳	60 田村神社	93 北山古墳群
28 摺鉢谷遺跡	61 船岡古墳	94 瀧本神社古墳
29 姫塚古墳	62 雨山南遺跡	95 宝寿寺跡（前田廃寺）
30 鶴尾神社4号墳	63 平石上2号墳	96 潮満塚古墳

- | | | |
|------------|-----------|------------|
| 31 浄願寺山古墳群 | 64 高野丸山古墳 | 97 前田東中村遺跡 |
| 32 南山浦古墳群 | 65 高野廢寺 | 98 西尾天神社古墳 |
| 33 がめ塚古墳 | 66 小日山1号墳 | |

続く弥生中期前半では、先の弥生前期からつながっていく浴・長池遺跡、浴・長池Ⅱ、井手東Ⅰ遺跡、凹原遺跡（多肥下町）⁽²³⁾がみられるにすぎない。このうち、浴・長池遺跡では4棟の竪穴住居、6棟の掘立柱建物跡、2基の周溝墓遺跡に加えて大量の河川投棄土器群が出土し、凹原遺跡でも石器製作工房と推定できる竪穴住居1棟を確認するが、そのほかでは大規模な集落を想定させるような状況にはなく、平野全体からみれば質量ともに希薄な時期である。

中期後半も遺跡数としては中期前半に引き続いて希薄で、平野部では浴・長池遺跡、上天神遺跡、空港跡地遺跡が知られるのみである。しかし、一方周辺部では前田東中村遺跡、久米池南遺跡、中山田遺跡（池田町）⁽²⁴⁾といった丘陵上または丘陵裾部に新たな遺跡の出現または復活がみられる。

弥生時代後期になると、遺跡の状況は一変する。天満・宮西遺跡、上天神遺跡、凹原遺跡、空港跡地遺跡のような10数棟の住居跡と大量の廃棄土器を伴う集落がほぼ地区単位に1箇所づつほどの割合で営まれ、そのほかにも平野部山間部を問わずに遺跡数が一気に増加するのである。前述の遺跡の他に代表的なものとしては、平野部では太田下・須川遺跡（太田下町）⁽²⁵⁾、蛙股遺跡（伏石町・太田下町）⁽²⁵⁾、居石遺跡、井手東Ⅰ遺跡、井手東Ⅱ遺跡、浴・長池遺跡、浴・長池Ⅱ遺跡、林・坊城遺跡、六条・上所遺跡（六条町）⁽²⁶⁾、松縄下所遺跡、キモンドー遺跡（伏石町）⁽²⁸⁾等が、周辺丘陵では中間・西井坪遺跡、前田東・中村遺跡、すべり山遺跡（大空遺跡－高松町）⁽²⁹⁾、葛谷遺跡（東植田町）⁽³⁰⁾、竹元遺跡（東植田町）⁽³¹⁾、久米池南遺跡、久米山遺跡群（東山崎町）⁽³²⁾等が知られている。これら弥生時代後期から終末にかけての遺跡の中には、古墳時代の初頭まで残ると思われるものも一部にはあるが、総体的には弥生時代の終末とともに集落も途絶し、その後、古墳時代の集落して認められるものは、中期後半頃の太田下・須川遺跡はじめ数例に限られる。

その一方、古墳の造営は盛んで、発生期と考えられる諏訪神社墳丘墓（東山崎町）⁽³³⁾、鶴尾神社4号墳（西春日町）⁽³⁴⁾を皮切りに、石清尾山塊では猫塚（峰山町）⁽³⁵⁾、石舟塚（峰山町）⁽³⁶⁾等の積石塚からなる石清尾山古墳群⁽³⁷⁾、三谷地区では小日山1・2号墳⁽³⁸⁾、前田地区では高松市茶臼山古墳⁽³⁹⁾、下笠居地区では横立山経塚古墳（中山町）⁽⁴⁰⁾等が築造され、その後ほぼ古墳時代全期間を通じて地域単位で断続的に展開している。

石清尾山古墳群では頂上部の尾根筋を中心とした前期の積石塚の築造が途絶えて100年以上の断絶を経た後、南山浦古墳群（西春日町）⁽⁴¹⁾、浄願寺山古墳群（飯田町・西春日町）⁽⁴²⁾等の盛土の後期群集墳の爆発的な盛行をみるし、三谷地区では小日山1・2号墳に続いて、割竹形石棺を出土し全長88mの前方後円墳である三谷石舟古墳（中期？）⁽⁴³⁾、直径約42mを測り周濠を巡らす円墳の高野丸山古墳（川島本町・中期）⁽⁴⁴⁾が、そして後期には平石上2号墳⁽⁴⁵⁾、矢野面古墳⁽⁴⁶⁾、犬の馬場古墳⁽⁴⁷⁾、石舟池古墳群⁽⁴⁸⁾といった古墳群につながってゆく。前田地区でも同様に

高松市茶臼山古墳につづき、前期から中期にかけての茶臼山古墳群（東山崎町）⁽⁴⁹⁾、諏訪神社古墳（東山崎町）⁽⁵⁰⁾、後期の久本古墳（新田町）⁽⁵¹⁾、小山古墳（新田町）⁽⁵²⁾、山下古墳（新田町）⁽⁵³⁾、瀧本神社古墳⁽⁵⁴⁾、後期群集墳の岡山古墳群（新田町）⁽⁵⁵⁾、長尾古墳群（高松町）⁽⁵⁶⁾といった古墳が引き続いて築造されている。

また、鬼無地区では前期末から中期初頭とみられるかしが谷2号墳（鬼無町佐料）⁽⁵⁷⁾をはじめとして、組合せ式の土師質陶棺を出した中期の前方後円墳の今岡古墳（鬼無町佐藤）⁽⁵⁸⁾、巨石積みの横穴式石室を有する古宮古墳（鬼無町山口）⁽⁵⁹⁾、平木1号墳（鬼無町山口）⁽⁶⁰⁾等の神高池古墳群へと続いている。さらに距離的にはややはなれるが、鬼無地区より南の中間町では今岡古墳と同様な土師質陶棺の焼成坑が検出されており、西山崎町の本堯寺北古墳⁽⁶¹⁾でも埴輪円筒棺の出土が伝えられていることから本津川を介して物資の交通が想像できる。

屋島地区でも長崎の鼻の、瀬戸内海を見渡す丘陵上に位置する長崎ノ鼻古墳（屋島西町・中期？）⁽⁶²⁾をはじめ浜北古墳群（屋島西町）⁽⁶³⁾、中筋古墳群（屋島西町）⁽⁶⁴⁾、金比羅神社古墳群（屋島中町）⁽⁶⁵⁾、東山地古墳（屋島中町）⁽⁶⁶⁾等が知られる。未調査で時期の確定を見ないものも含まれるが、平野周辺部の単位地域よりもなお閉鎖性の強いであろう島しょ部の古墳群という点で、また生産基盤となる耕作地をもたないという点においても注目すべき地域である。

これらの他に、周辺で前後につながる古墳がみられず、時期的にも立地の上からも独立した様相を示すものに木太町の白山神社古墳⁽⁶⁷⁾がある。竪穴式石室を主体部とする円墳で、5世紀前半頃の築造と推定されている。古墳は標高約2mに立地し、当時の海岸線と推定されていた標高5mラインよりも低位にあるため、古墳時代の高松平野の地形環境に再考を促すという面でも注目される遺跡である。

古代では、条里遺構と古代寺院跡が注目される。

香川県の海岸平野部は、全国的にみて条里地割が現在の地表によく残っているところとして知られている。中でも高松平野では近年の研究の成果によってさらに、山田・香川両郡の直線郡界線と、これに平野南縁部で直行する南海道が条里方格地割の基準となっていること、方格地割が南海道の施工と同時かまたはそれ以降に設定されたため現在の復原条里の中でも南海道部分が幅約10mの余剰帯として帯状に読み取れること、○条×里△坪といった条里呼称法は方格地割の設定から遅れて757年から763年までの間に整備されたこと等が明らかになった。これらには、弘福寺領讃岐国山田郡田図をはじめ弘福寺関係文書等の文献方面からの研究に負うところが大きい⁽⁷⁰⁾が、埋蔵文化財の立場でも条里分布の推定を補強するかたちで条里遺構を確認している。浴・長池Ⅱ遺跡では、山田・香川の郡界線にあたる部分に約6mの間隔を置いて平行する2本の溝状遺構を検出しているほか、浴・長池遺跡、浴・松ノ木遺跡、井手東Ⅰ遺跡、蛙股遺跡、上天神遺跡、凹原遺跡、松縄下所遺跡等で条里坪界線にあたると思われる遺構を検

出している。遺構の多くは平安時代から鎌倉時代の遺物を含み、一般に条里の施行期とされる奈良時代とはかなりの時期の隔りがあるが、蛙股遺跡、松縄下所遺跡のように奈良時代を中心とした遺物の出土をみた遺跡もあり、条里地割の施行時期と存続期間を解明できるデータが揃いつつある。

古代寺院跡では宝寿寺跡（前田廃寺—前田東町）⁽⁶⁹⁾、山下廃寺（新田町）⁽⁷⁰⁾、下司廃寺（東植田町）⁽⁷¹⁾、高野廃寺（川島本町）⁽⁷²⁾、拝師廃寺（上林町）⁽⁷³⁾、坂田廃寺（西春日町）⁽⁷⁴⁾、多肥廃寺（多肥上町）⁽⁷⁵⁾、勝賀廃寺（香西町）⁽⁷⁶⁾等が平野部を中心に知られている。正式の発掘調査を経たデータがないため、寺域、伽藍等の全容がわかるものはないが、現在でも礎石や遺物の散布が見られる。なかでも下司廃寺の川原寺式複弁八葉蓮華文軒丸瓦や三尊像埴片、坂田廃寺の金銅製釈迦誕生仏が注目され、白鳳から奈良時代に畿内と深い関係を持っていたことが想像できる。

中近世以降では、東道路関連の浴・長池遺跡、浴・松ノ木遺跡、弘福寺領讃岐国山田郡田図北地区比定地（木太町・林町）⁽⁶⁸⁾等で、旧河道の埋没後の凹地に中世の小規模な区画の水田層が出土しており、その後現在に至るまで連続して水田層の堆積が見られることから、この時期に現在の地形環境がほぼ形作られていたことがうかがえる。また東山崎・水田遺跡（東山崎町）⁽⁷⁷⁾では春日川の氾濫による洪水砂層上に営まれた集落跡や耕土層が発掘され豊富な木製品が発見されているほか、現高松市美術館の紺屋町遺跡（紺屋町）⁽⁷⁸⁾でも近世の陶磁器や木簡（荷札木片）が出土し、玉藻町香川県民ホールの高松城東ノ丸跡（玉藻町）⁽⁷⁹⁾でも寛永年間の東ノ丸造営以降の石垣や建物礎石の遺構が出土し、往時の城下町の一端を窺うことができる。

参考文献

- (1) 丹羽佑一 「讃岐国弘福寺領の調査 第2章第2節」 高松市教育委員会 1992
「一般国道11号線高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第一冊 浴・長池遺跡 第2章第2節」高松市教育委員会 1993
- (2) 「久米池南遺跡発掘調査報告書」 高松市教育委員会 1989
- (3) 藤井雄三『高松市雨山南遺跡発見の国府型ナイフ形石器』「香川考古」創刊号 香川考古刊行会 1993
- (4) 「香川県埋蔵文化財調査年報」平成2年度 香川県教育委員会 1991
- (5) 「弘福寺領讃岐国山田郡田図北地域発掘調査概報Ⅰ」 高松市教育委員会 1988
浜田重人『高松市木太町大池遺跡表採の有舌尖頭器』「香川考古」第2号 香川考古刊行会 1994
- (6) 丹羽佑一 「香川県史1 原始・古代 第3節」 香川県 1989

- (7) 丹羽佑一 「香川県史1 原始・古代 第3節」 香川県 1989
- (8) 「香川県埋蔵文化財調査年報」平成3年度 香川県教育委員会 1992
「国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報」平成3年度 香川県教育委員会他 1992
- (9) 採集資料による。高松市教育委員会にて保管
- (10) 「香川県埋蔵文化財調査年報」平成3年度 香川県教育委員会 1992
山元敏裕 「讃岐国弘福寺領の調査 第2章第3節」 高松市教育委員会 1993
- (11) 「高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第2冊 林・坊城遺跡」 香川県教育委員会他 1993
- (12) 「香川県埋蔵文化財調査年報」平成2年度 香川県教育委員会 1991
山本英之「讃岐国弘福寺領の調査 第2章第3節」 高松市教育委員会 1992
- (13) 「一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1冊 浴・長池遺跡」 高松市教育委員会他 1993
- (14) 山元敏裕「讃岐国弘福寺領の調査 第2章第3節」 高松市教育委員会 1992
- (15) 中西克也「讃岐国弘福寺領の調査 第2章第3節」 高松市教育委員会 1992
- (16) 山元敏裕「讃岐国弘福寺領の調査 第2章第3節」 高松市教育委員会 1992
- (17) 「香川県埋蔵文化財調査年報」昭和59年度～昭和62年度 香川県教育委員会 1988
- (18) 「香川県埋蔵文化財調査年報」平成元年度 香川県教育委員会 1990
川畑 聡「讃岐国弘福寺領の調査 第2章第3節」 高松市教育委員会 1992
- (19) 「空港跡地遺跡発掘調査概報」平成3年度 香川県教育委員会他 1992
「空港跡地遺跡発掘調査概報」平成4年度 香川県教育委員会他 1993
- (20) 山本英之「讃岐国弘福寺領の調査 第2章第3節」 高松市教育委員会 1992
- (21) 「香川県埋蔵文化財調査年報」平成2年度 香川県教育委員会 1991
- (22) 「新編香川叢書 考古編」香川県教育委員会 昭和58年
「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告V 大浦浜遺跡 第6章第3節」香川県教育委員会他 1988
- (23) 「香川県埋蔵文化財調査年報」平成2年度 香川県教育委員会 1991
川畑 聡「讃岐国弘福寺領の調査 第2章第3節」 高松市教育委員会 1992
- (24) 「新編香川叢書 考古編」香川県教育委員会 昭和58年
- (25) 「香川県埋蔵文化財調査年報」平成元年度 香川県教育委員会 1990
「香川県埋蔵文化財調査年報」平成2年度 香川県教育委員会 1991
- (26) 「香川県埋蔵文化財調査年報」平成4年度 香川県教育委員会 1993

- (27) 「香川県埋蔵文化財調査年報」昭和63年度 香川県教育委員会 1989
- (28) 平成5年8～11月で発掘調査を実施し、旧河道中に弥生後期の遺物包含層を確認した。
- (29) 竺林 徳「高松市高松町すべり山出土弥生式遺物報告書」 1955
「新編香川叢書 考古編」 香川県教育委員会 昭和58年
- (30) 「香川県埋蔵文化財調査年報」昭和58年 香川県教育委員会 1984
「新編香川叢書 考古編」 香川県教育委員会 昭和58年
- (31) 「新編香川叢書 考古編」 香川県教育委員会 昭和58年
「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ下川津遺跡 第5章第10節」香川県教育委員会他 1990
- (32) 「香川県埋蔵文化財調査年報」平成3年度 香川県教育委員会 1992
- (33) 「香川県埋蔵文化財調査年報」平成2年度 香川県教育委員会 1991
- (34) 「鶴尾神社4号墳調査報告書」 高松市教育委員会 1983
- (35) 「讃岐高松石清尾山石塚の研究」京都帝国大学文学部考古学研究報告第12冊 1933
- (36) 「讃岐高松石清尾山石塚の研究」京都帝国大学文学部考古学研究報告第12冊 1933
- (37) 「高松市石清尾山古墳群緊急調査概報（第1次）」高松市教育委員会 1971
「高松市石清尾山古墳群緊急調査概報（第2次）」高松市教育委員会 1972
「石清尾山塊古墳群調査報告」高松市教育委員会 1973
- (38) 「三谷石船古墳測量調査報告書」 高松工芸高校郷土史研究会 1992
- (39) 「高松市茶臼山古墳緊急発掘調査概報」香川県教育委員会 1970
「新編香川叢書 考古編」 香川県教育委員会 昭和58年
- (40) 「香川県埋蔵文化財調査年報」昭和54年度 香川県教育委員会 1980
「新編香川叢書 考古編」 香川県教育委員会 昭和58年
- (41) 「南山浦古墳群調査報告書」高松市教育委員会 1985
- (42) 「高松市石清尾山古墳群緊急調査概報（第1次）」高松市教育委員会 1971
「高松市石清尾山古墳群緊急調査概報（第2次）」高松市教育委員会 1972
「石清尾山塊古墳群調査報告」高松市教育委員会 1973
- (43) 「三谷石船古墳測量調査報告書」高松工芸高校郷土史研究会 1992
- (44) 「三谷石船古墳測量調査報告書」高松工芸高校郷土史研究会 1992
「高松の古代文化」高松市立図書館 昭和63年
- (45) 「三谷石船古墳測量調査報告書」高松工芸高校郷土史研究会 1992
- (46) 「三谷石船古墳測量調査報告書」高松工芸高校郷土史研究会 1992
- (47) 「三谷郷土史」三谷郷土史編集委員会 1988

- (48) 「香川県埋蔵文化財調査年報」平成元年度 香川県教育委員会 1990
「香川県埋蔵文化財調査年報」平成2年度 香川県教育委員会 1991
「香川県埋蔵文化財調査年報」平成3年度 香川県教育委員会 1992
「高松市内埋蔵文化財試掘調査概報」平成3年度、4年度 高松市教育委員会 1993
- (49) 「久米池南遺跡発掘調査報告書」 高松市教育委員会 1989
- (50) 「香川県埋蔵文化財調査年報」平成2年度 香川県教育委員会 1991
- (51) 松本敏三『久本古墳・横穴式石室の一例』「教育香川」 香川県教育委員会 1977
「新編香川叢書 考古編」 香川県教育委員会 昭和58年
- (52) 木田郡史編纂部「木田郡誌」 木田郡教育部会 1940
「古高松郷土誌」古高松郷土誌編集委員会 1977
- (53) 「山下古墳調査報告書」香川県教育委員会 1980
- (54) 木田郡誌編纂部「木田郡誌」 木田郡教育部会 1940
「高松の古代文化」高松市図書館 昭和63年
- (55) 「古高松郷土誌」古高松郷土誌編集委員会 1977
- (57) 「かしが谷2号墳・3号墳発掘調査報告書」高松市教育委員会 1986
- (58) 「復刻版史跡名勝天然記念物調査報告（上巻）」香川県文化財保護協会 昭和50年
森下浩行他『高松市鬼無町今岡古墳とその組合式陶棺』「香川考古」創刊号 香川考古刊行会
- (59) 丹羽佑一『古宮権現神社古墳発掘調査速報』「勝賀城保存会だより」勝賀城保存会 1985
- (60) 「平木1号墳試掘調査報告書」高松市教育委員会 1990
香川大学教育学部歴史研究室『鬼無町平木古墳群』「文化高松」第6号 高松市文化協会 1984
- (61) 上原準一『特殊なる形式の甕棺を発見したる讃岐国円座村山崎の古墳について』「考古学雑誌」第6号・第11号 1921
- (62) 木田郡誌編纂部「木田郡誌」木田郡教育部会 1940
森下浩行他『高松市長崎鼻古墳の測量調査報告』「香川考古」第2号 香川考古刊行会 1994
- (63) 「古高松郷土史」古高松郷土誌編集委員会 1977
- (64) 「古高松郷土史」古高松郷土誌編集委員会 1977
- (65) 「古高松郷土史」古高松郷土誌編集委員会 1977
- (66) 平成4年3月の市道山手線確認調査の際に新たに発見された。
- (67) 「高松の古代文化」高松市立図書館 昭和63年

- (68) 「弘福寺領讃岐国山田郡田岡比定地域発掘調査概報」Ⅰ～Ⅳ 高松市教育委員会 1988
～1990・1992
「讃岐国弘福寺領の調査～弘福寺領讃岐国山田郡田岡調査報告書～」高松市教育委員会
1992
- (69) 木田郡史編纂部「木田郡誌」木田郡教育部会 1940
「高松の古代文化」高松市立図書館 昭和63年
- (70) 「古高松郷土史」古高松郷土誌編集委員会 1977
安藤文良『讃岐古瓦図録』『文化財協会報』特別号8 香川県文化財保護協会 昭和42年
- (71) 「新編香川叢書 考古編」香川県教育委員会 昭和58年
大平要『下司廃寺出土の埴仏片について』『瀬戸内海歴史民俗資料館だより』創刊号
1975
- (72) 安藤文良『讃岐古瓦図録』『文化財協会報』特別号8 香川県文化財保護協会 昭和42年
「高松の古代文化」高松市立図書館 昭和63年
- (73) 「高松の古代文化」高松市立図書館 昭和63年
- (74) 「復刻版史跡名勝天然記念物調査報告(上巻)」香川県文化財保護協会 昭和50年
「新編香川叢書 考古編」香川県教育委員会 昭和58年
- (75) 「多肥郷土史 後編」多肥郷土史編集委員会 1981
「高松の古代文化」高松市立図書館 昭和63年
- (76) 「高松の古代文化」高松市立図書館 昭和63年
- (77) 「高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第1冊 東山崎・水田遺跡」香川県
教育委員会他 1992
- (78) 「高松城東ノ丸発掘調査報告書」香川県教育委員会 1987
山本英之『1988年出土の木簡 香川・紺屋町遺跡』『木簡研究』第11号 木簡学会 1989
- (79) 「高松城東ノ丸跡発掘調査報告書」香川県教育委員会 1987

第 3 章

発掘調査の成果

第1節 調査区の設定

平成2年度の浴・松ノ木遺跡の調査区の設定にあたっては平成元年の8月上旬に行った試掘調査および同じく平成元年に調査を行った浴・長池遺跡の調査結果をもとに設定した。調査対象地は浴・長池遺跡の東端から県道15号線（旧高松空港線）までであり、本市教育委員会が調査を行った東道路関係遺跡の東端にあたる。浴・松ノ木遺跡の調査区は、試掘調査の成果をもとに調査対象地中央を南北に走る市道から西側全域と、市道の東側を若干含めた東西約140m、南北約40mの範囲を調査地に設定した。

調査にあたっては、西側調査区では試掘調査の結果旧河道の存在が確認されており、調査によって生じる掘削土の調査区処理ができない可能性があることから、掘削土の運搬用の仮設道を確認することにより、市道より西側では幅員のセンターで北半と南半にわけて調査を行い、さらにそれを中央にある南北の水路を境に西半を1区、東半を2区とした。また市道東の調査区は南北幅が狭いうえ、試掘調査等の状況より微高地であることが推定されることより、調査区を細分せず2区（市道東）とそれぞれ呼称し調査を行った。

今回の調査において設定した調査区は、北側調査区で断面で確認したのみで平面で確認できなかった遺構を、南側の調査区で確認できる利点を生んだが、逆に2区北側のSR04では試掘調査で確認した以上の掘削深度となり、また北側に未退去家屋が存在していたこともあり、南北に幅の狭い調査区となった。

実際の調査はまず、市道より西側の1、2区北半から調査を行い、北半が終了した時点で仮設道を北側に移し南側の調査を行った。作業の進行は別表に示したとおりである。

調査杭は、掘削工事測量用に10mおきに設定した測量杭を利用し、必要に応じて調査杭の増設を行った。

第2節 遺跡の概要と層序

1 遺構の概要（第 図）

本調査区は浴・長池遺跡に東接する位置にあり、その全長は155m、幅40mである。現地表面は、ほぼ平坦で標高10.40m前後である。

本調査区の旧地形は、調査の結果により北西隅と中央部には自然旧河道が北東方向に流れ、その間には中州状の微高地となり、旧河道の東側は微高地となっていることが判明した。なお、本報告書の旧河道に関しては、浴・長池遺跡の続きを使用している。1993年に刊行された『一般国道11号線高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第一冊浴・長池遺跡』を参照されたい。調査区東側の微高地は縄文時代中期以降に堆積した黄灰色シルト層（従来、高松平野での発掘調査では地山とされていた）であり、帯状の凹地（S X01）には畦畔状高まりが数カ所見られる土層が検出された。その所属時期は直上及び上面の洪水砂層より出土した土器により縄文時代晩期～弥生時代前期前半と考えられる。

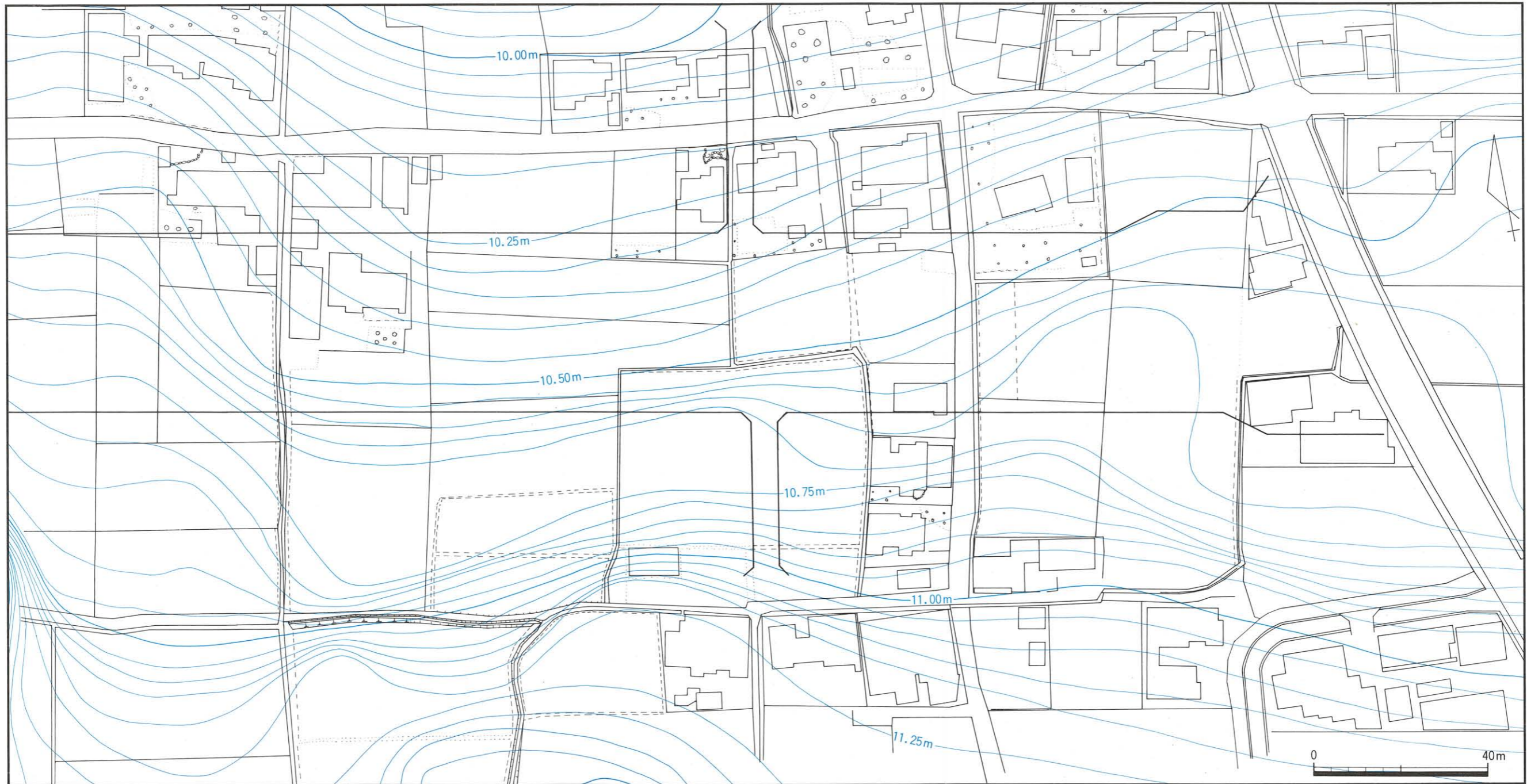
北西隅に検出された旧河道（S R03）は、浴・長池遺跡のS R01の東端の河筋と同一であり河床より若干の弥生土器が出土した。中央部の旧河道（S R04）は幅約57.5m、深さ約3.5mを測り、東岸近くが河床の最深部となり急傾斜に立ち上がっている。河床には洪水砂層が厚く堆積しており、多量の弥生時代後期の土器や樗状木製品を含む植物遺体が出土した。

これらの旧河道は時代を経るにしたがい埋没していき、水田が営まれるようになり生産域となってくる。古墳時代には木樋を伴うS D11が南北方向に検出され、その直上を覆っている第9 a層は石垣畦畔・盛土畦畔により区画された水田となる。さらに13世紀頃になると、旧河道はほぼ埋没し若干の凹地となり、その部分に第3 a・4 a層の2面の水田が検出された。旧河道に挟まれた微高地の上に於いても土層観察によりこれら2面の耕作土が確認されており、広範囲に水田が広がっていたと考えられる。しかし、微高地上は後世の削平によって畦畔等は消失してしまい、埋没旧河道の凹地のみ水田区画が残存したのである。

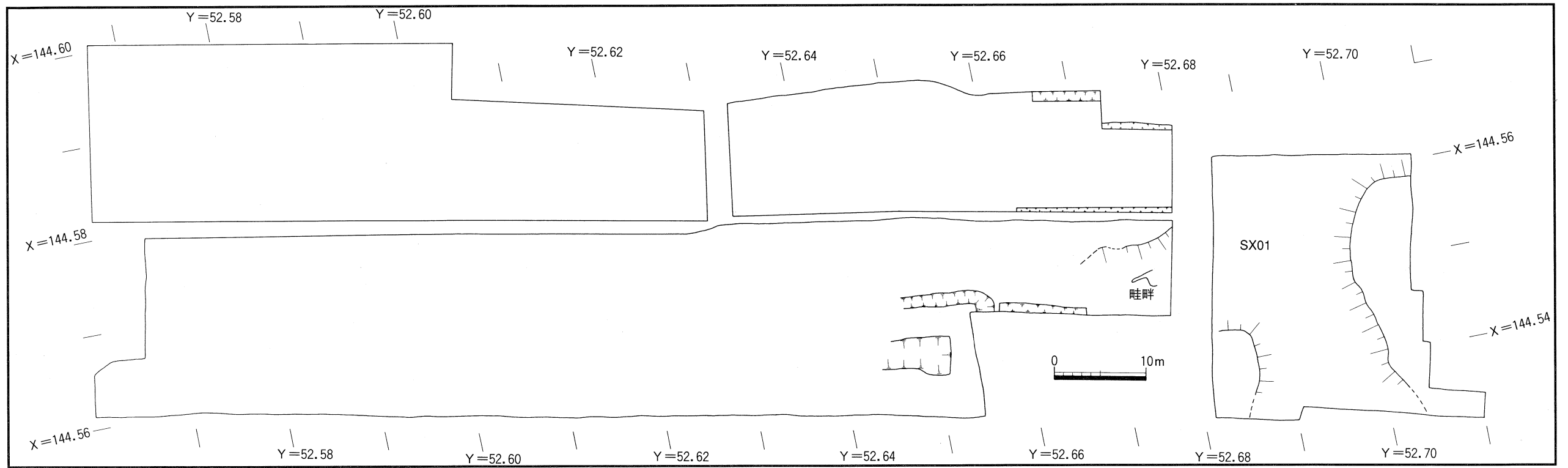
S R04の東側の微高地には、弥生時代中期から近世にかけての溝が南北方向に検出されている。これらの溝の大部分は灌漑用水と考えられる。S D02は弥生時代中期から6世紀末、7世紀前半までの長時間にわたって溝として使用されている。現地表面の条里プランと同一方向の溝が数本ある。

近世に至ると条里型水田が調査区全域に検出されている。

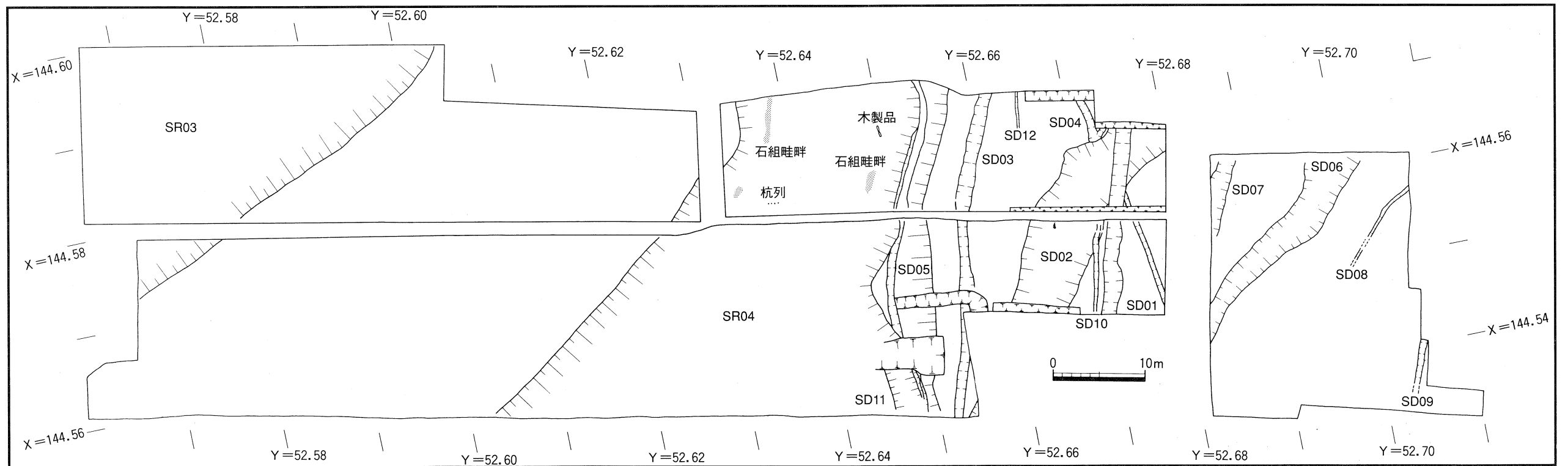
本遺跡の特徴としては、縄文時代晩期・弥生時代前期後半から近世までの11面以上の水田と溝のみが検出されており、生産域としての性格を有することである。面的に調査された古墳時代後半と中世前半の水田が小区画水田であることは注目される。



第4図 調査区設定図



第5図 遺構配置図(1)



第6図 遺構配置図(2)

2 層序（第7～11図）

調査行程の都合により調査区中央に東西方向の土層観察用ベルトを設定した。市道東側の調査区は北壁に於いて土層観察を行った。遺構の土層に関しては個々の遺構毎に説明することとし、ここでは調査区全域にわたる基本層序について詳述する。

土層は、内容物・粒子の大きさ・堆積状態・色調などにより次のように3類に分類される。表面に植物が繁茂したり人間の耕作が行われるなどにより土壌化し表土層が形成されたa層、土壌化が及ばず当初の堆積構造がそのまま残っているb層、堆積構造は洪水時の状況を維持しているc層である。なお、色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』（1967年）を基準とする。

第1層 現水田耕作土出ある。調査に先立つ重機による排土作業により、その大部分は搬出され、床土であるb層のみ部分的に見られる。

第2層 水田面である。旧河道（SR03・04）の埋没によるわずかな低地に於いては堆積層が厚くなっており、2ないし3層に細分することができる。a層は灰白色シルト質極細砂であり、下層のb層は褐鉄鉱の集積が見られる。条里型水田である。出土遺物は近世の染付け陶磁器である。

第3層 水田層である。a層は褐色灰色シルト質極細砂、b層はにぶい褐色シルト質極細砂で褐鉄鉱の集積が見られる。調査区東側を除き全域で検出された。ほぼ水平堆積であるが、旧河道の埋没による低地ではやや低くなっており、盛土畦畔に区画された小区画水田が検出された。旧河道にはさまれた中州状微高地では近世の削平を受けたため畦畔の検出は不可能であった。a層は5～10cmの厚さで、上面の標高は10.15m前後である。遺物は古代末～中世前半の時期であり、本水田の時期は中世前半（13世紀前半）に比定される。

第4層 水田層である。褐鉄鉱の集積が明瞭であり、a b層に分けられる。a層は褐灰色シルト質極細砂、b層は灰褐色シルト質極細砂である。調査区東側を除き全域で検出され、旧河道の埋没過程による低地部では低くなっており盛土畦畔に区画された小区画水田が検出され、旧河道の間の微高地上ではやや高くなっている。このためその部分では第3層水田による削平の影響で畦畔等はすでに消失していた。層厚は旧河道部で厚くなっており約20cmである。出土遺物は上層の第3層とほぼ同時期に比定される。

第5層 水田層である。旧河道（SR04）の埋没による低地のみ検出された。a層は褐灰色シルト質極細砂、b層は褐鉄鉱の集積する灰褐色シルト質極細砂であり。上面は標高9.85m前後である。畦畔状高まりが数カ所検出された。出土遺物は少なく時期決定できないが上下層の時期から考えると古代末～中世初に比定される。

第6層 水田層である。旧河道（SR04）の埋没による低地のみ検出された。a層は褐灰色

シルト質極細砂、b層はわずかに褐鉄鉱の沈積する褐灰色シルト質極細砂である。部分的に存在しており、旧河道西肩部ではa層のみ、低地最深部にかけてはb層のみ検出された。上面の標高は9.65～70mであり、いくつか畦畔状高まりが検出された。層厚は10cm未満である。出土遺物より古代末から中世初に該当する。

第7層 SR04の埋没過程にある低地の最深部において検出された。第6、8層を切るように堆積する。a層は黒褐色シルト質極細砂であり土壌化は不明瞭である。b層は褐灰色・灰白色シルト質極細砂である。

第8層 水田層である。SR04の埋没過程の低地にのみ堆積が確認された。a層は黒褐色シルト質極細砂、b層は灰黄褐色シルト質極細砂で褐鉄鉱の集積が見られる。上面の標高は9.60m前後である。層厚は約10～15cmである。

第9層 石組畦畔・盛土畦畔を有する水田層である。SR04の埋没過程の低地にのみ検出された。a層は黒褐色シルト質極細砂であり、中～細砂を部分的に含むa'層と細分される。b層は中～細砂を含む暗灰黄色シルト質細砂であり、褐鉄鉱の集積が顕著である。上面の標高は9.45m前後で、層厚は約40cm調査区北側では石組畦畔で検出され、南側では盛土畦畔で区画された小区画水田である。出土遺物は須恵器、土師器がほとんどであり、その時期は古墳時代中期末～後期初（5c末～6c初）に比定される。

第10層 SR04の埋没過程の低地にのみ検出された層である。土壌化したa層は黄灰色シルト質極細砂、b層は黄灰色シルト質細砂である。b層は部分的に堆積している。

第11層 SR04の河川最深部に厚く堆積する洪水砂層（C層）である。灰オリーブ色中～細砂であり、ラミナー上堆積を呈し、最も厚い部分で60cmを測る。砂粒の大きさの違いにより2つに分けられる。弥生時代後期の土器、櫛状木製品を含む植物遺体が多量に出土した。

第12層 SR04の河床最深部においてレンズ状堆積をなす。上層は灰色シルト質極細砂、下層は灰白色シルト質極細砂である。

第13層 SR04の河床最深部にレンズ状堆積を呈する。上下2層に分かれ、黒色シルト質細砂と暗褐色シルト質細砂である。植物遺体を多く含む。

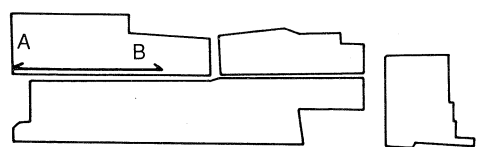
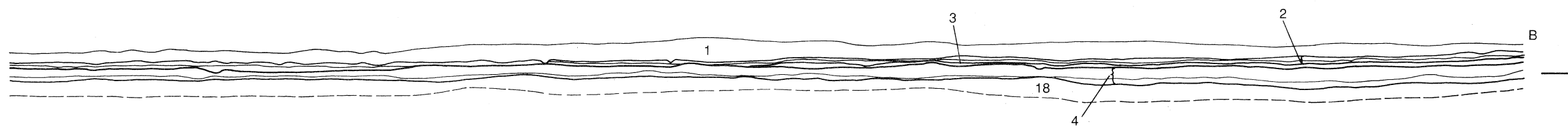
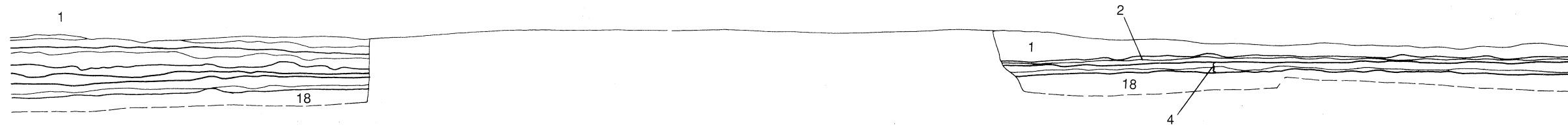
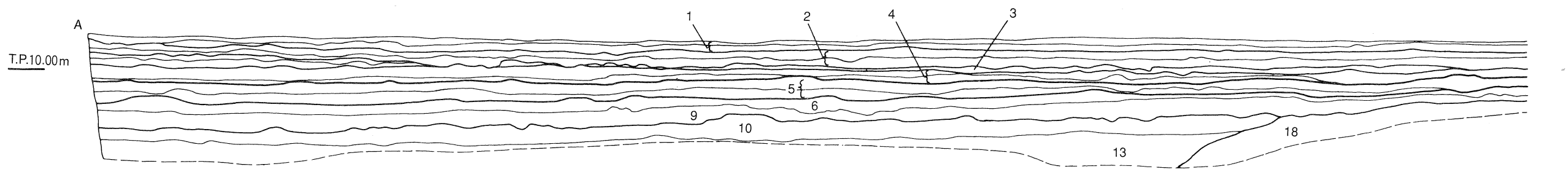
第14層 SR04の河床直上に堆積する灰色中～細砂である。

第15層 調査区東端のSX01に堆積する洪水砂層である。褐色を呈し、3層に分けられる。弥生時代前期前半に比定される土器が出土した。

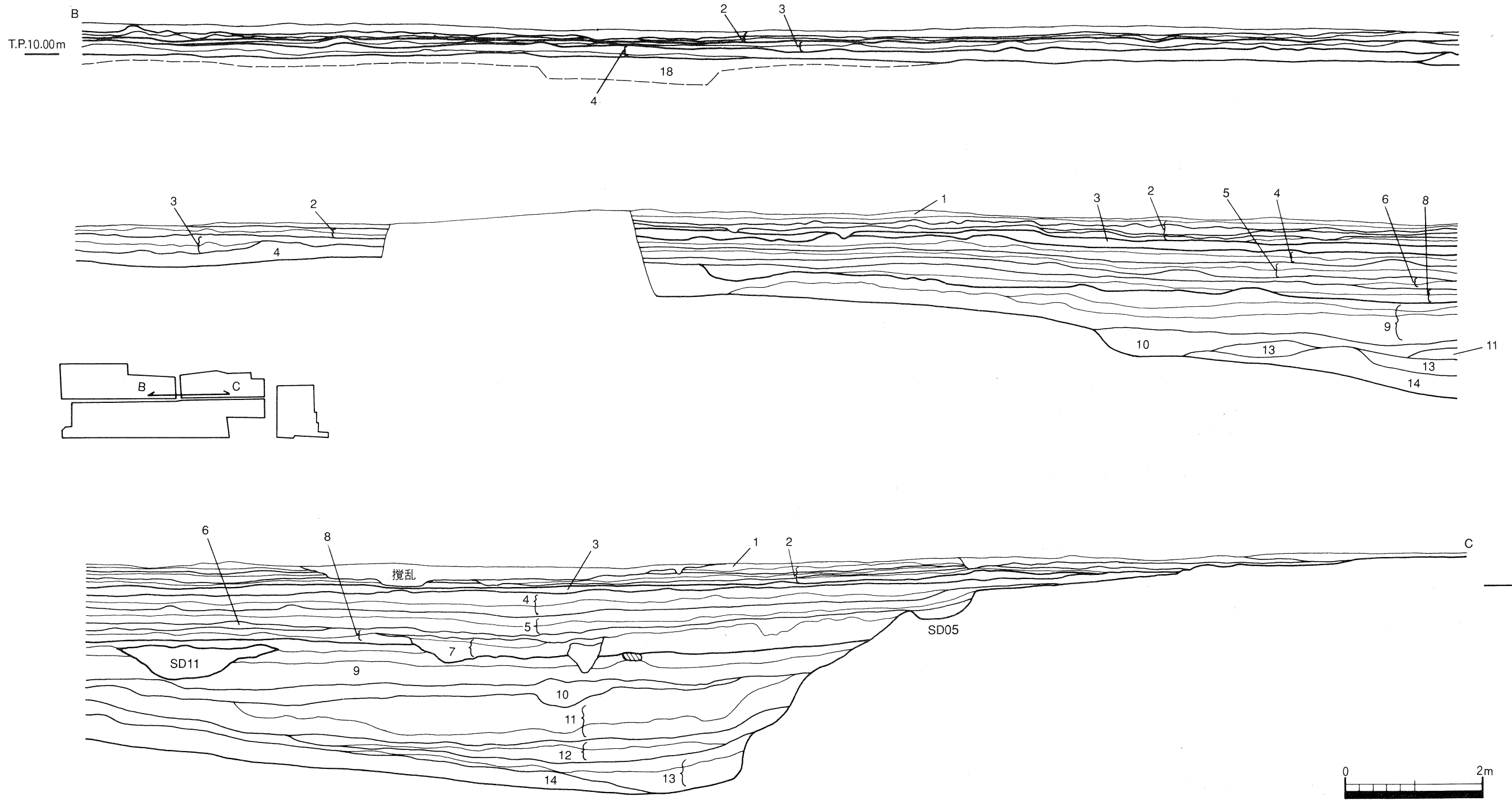
第16層 SX01に堆積する第17層を覆う黄灰色・黒褐色シルト質極細砂である。

第17層 SX01の底面に堆積する黒褐色シルト質極細砂である。畦畔状の高まりが数カ所検出され水田面の可能性が高い。直上より縄文時代晩期末から弥生時代前期前半の土器が出土。

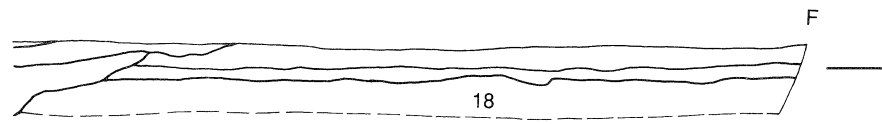
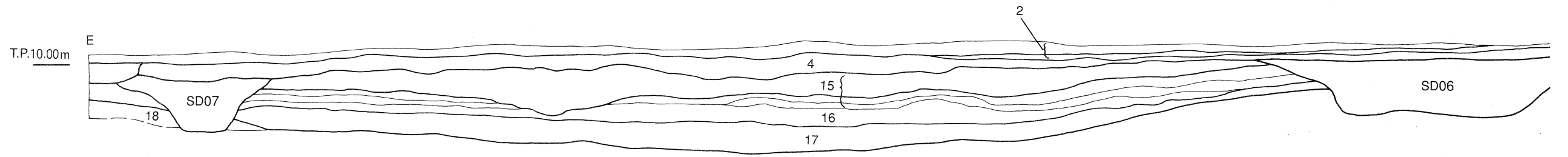
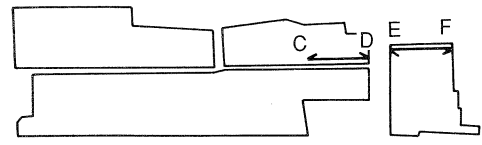
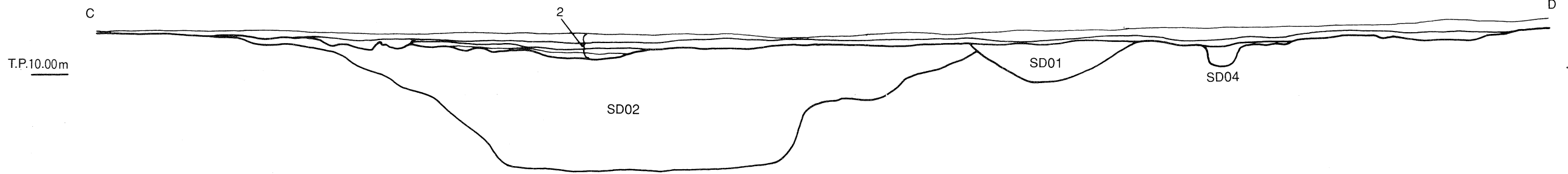
第18層 東側微高地のベースの黄褐色極細砂質シルトである。



第7図 土層図(1)

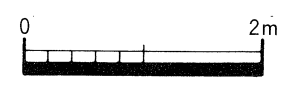
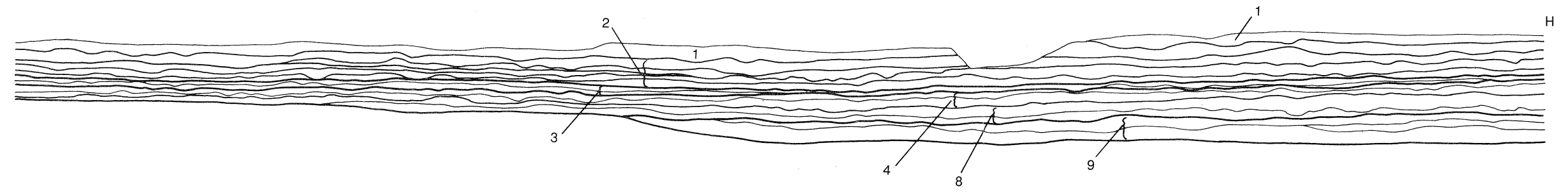
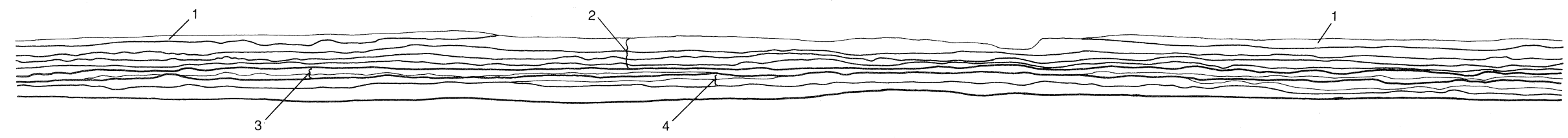
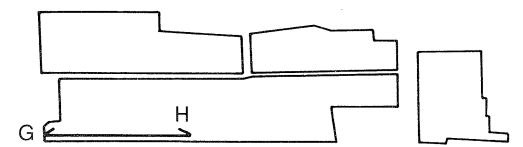
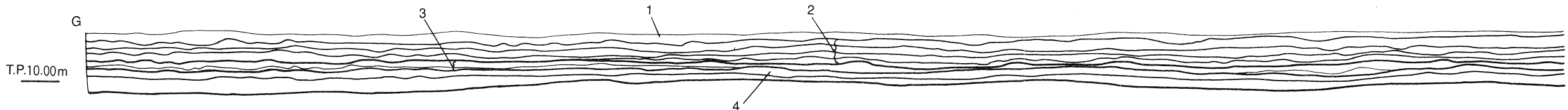


第8図 土層図(2)

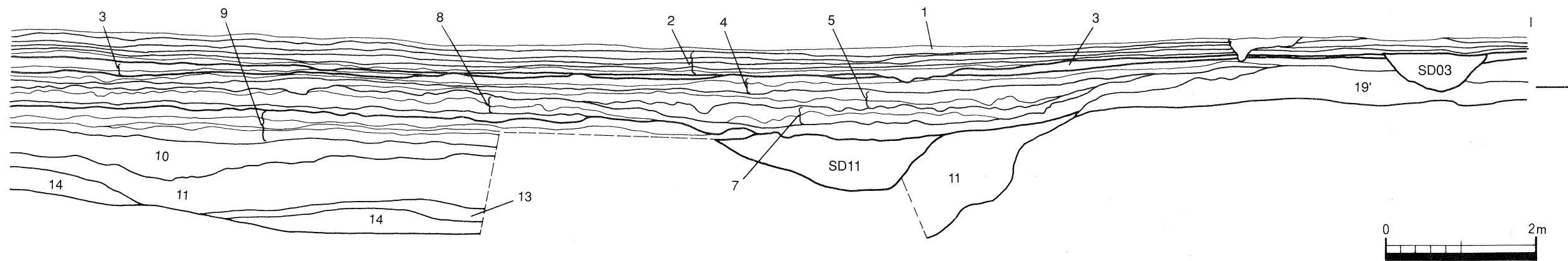
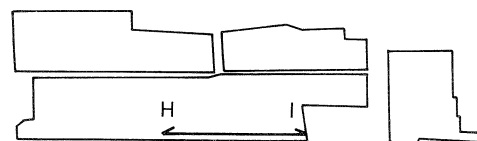
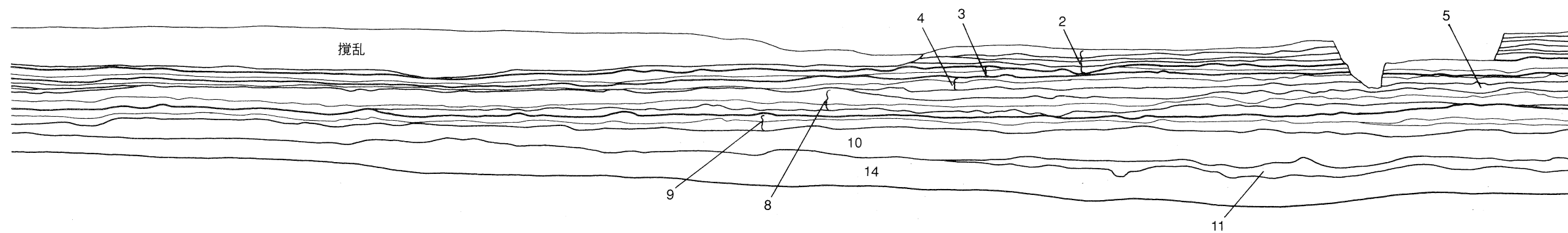
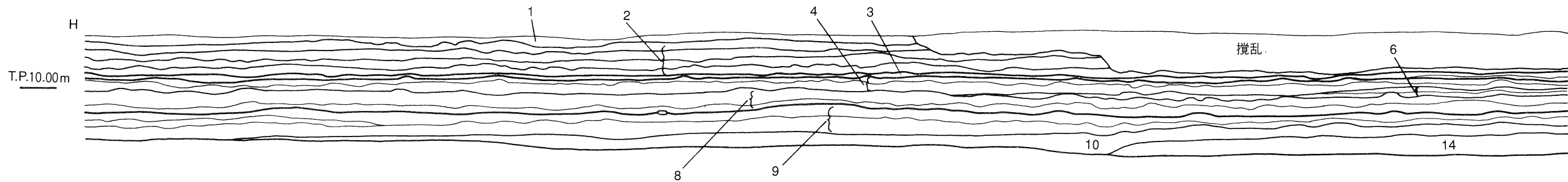


- | | | | | |
|-------|---------------------------------|--|------|-----------------------------|
| 1 a | 現水田耕作土 | | 9 a | 黒褐色シルト質極細砂 (7.5YR3/1) |
| 2 a.b | 灰白色シルト質極細砂 | | b | 暗灰黄色シルト質細砂 (2.5Y5/2) |
| 3 a | 褐灰色シルト質極細砂 (7.5YR6/1) | | 10 a | 黄灰色シルト質極細砂 (2.5Y5/1) |
| b | にぶい褐色 // (7.5YR6/3) | | b | 黄灰色シルト質細砂 (2.5Y6/1) |
| 4 a | 褐灰色シルト質極細砂 (7.5YR5/1) | | 11 | 灰オリーブ色細~中砂 (5Y6/2) |
| b | 灰褐色 // (7.5YR6/2) | | 12 a | 灰色シルト質極細砂 (5Y4/1) |
| 5 a | 褐灰色シルト質極細砂 (7.5YR4/1) | | b | 灰白色 // (7.5Y7/1) |
| b | 灰褐色 // (7.5YR6/2) | | 13 a | 黒色シルト質極細砂 (10YR2/1) |
| 6 a | 褐灰色シルト質極細砂 (10YR4/1) | | b | 暗褐色 // (10YR3/4) |
| b | // (10YR5/1) | | 14 | 灰色 細~中砂, 礫 (7.5Y6/1) |
| 7 a | 黒褐色シルト質極細砂 (10YR3/1) | | 15 | 褐色+黄灰色 細砂 (10YR4/4+2.5Y4/1) |
| b | 褐灰色+灰白色シルト質細砂 (10YR6/1+10YR8/1) | | 16 | 黒褐色シルト質極細砂 (2.5Y3/1) |
| 8 a | 黒褐色シルト質極細砂 (10YR3/2) | | 17 | 黒褐色シルト (7.5YR2/1) |
| b | 灰黄褐色 // (10YR4/2) | | 18 | ベース |

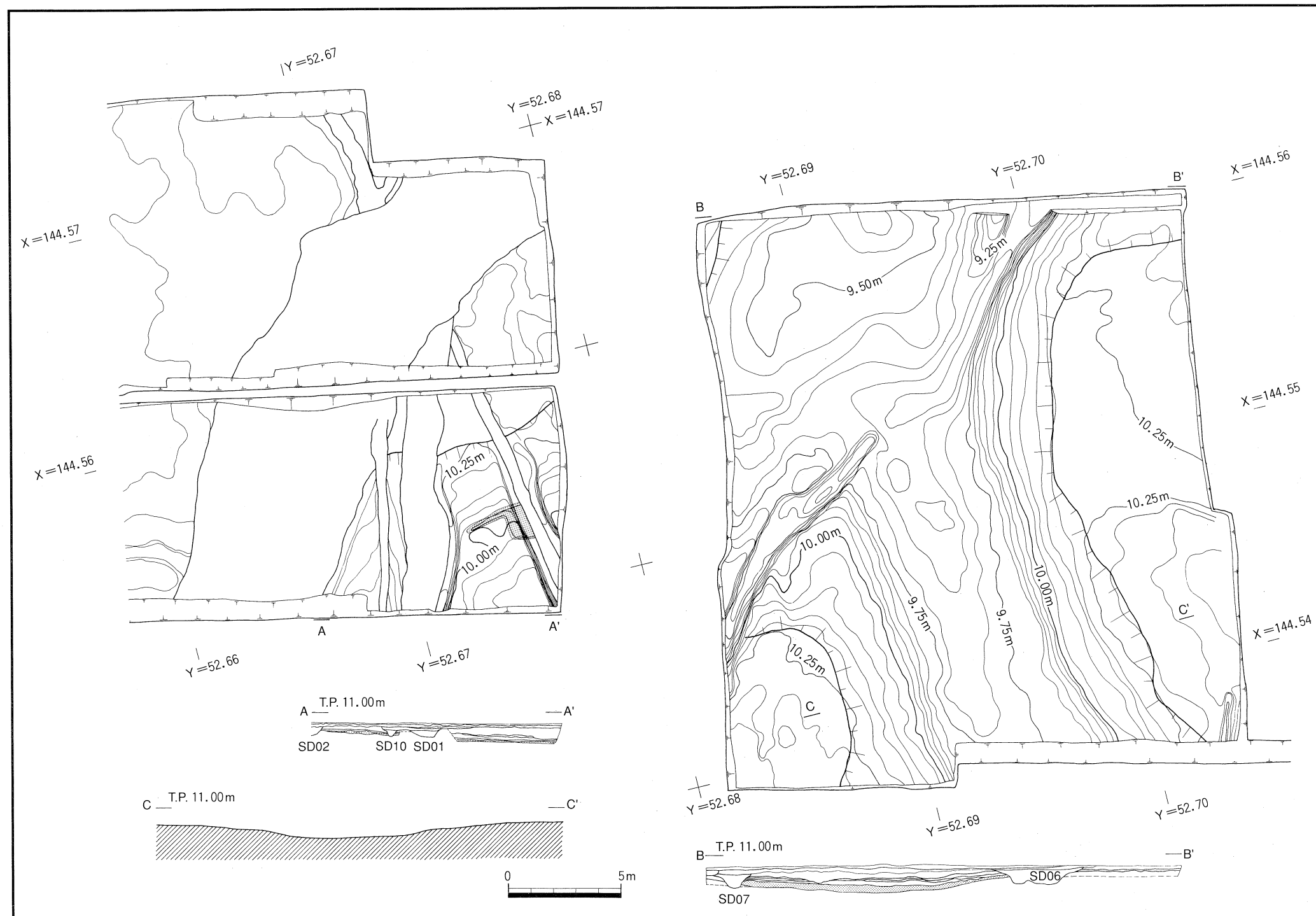
第9図 土層図(3)



第10図 土層図(4)



第11図 土層図(5)



第12图 SX01实测图

第3節 弥生時代前期以前の遺構と遺物

1 S X 01 (第12図)

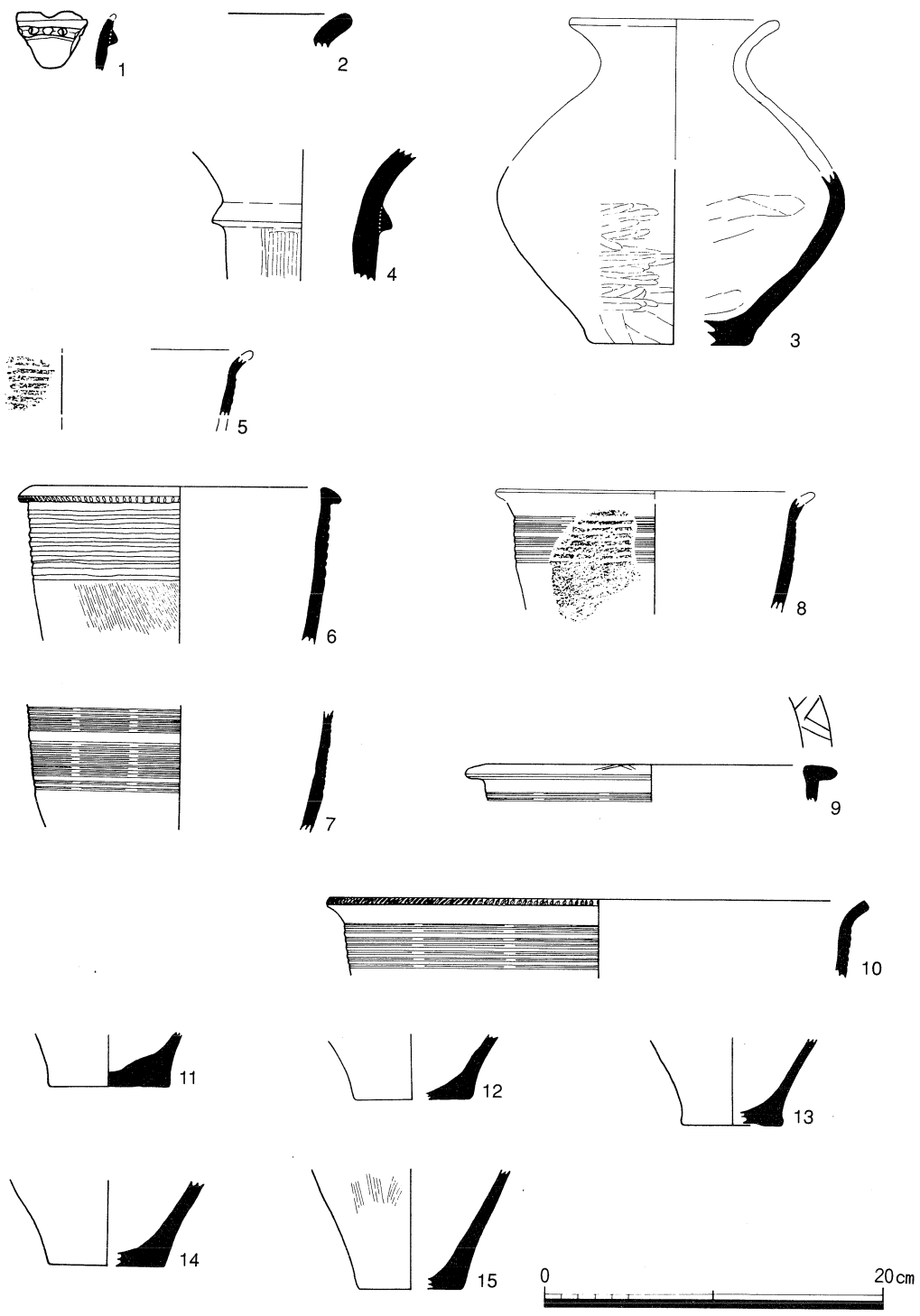
調査区の東側で検出された微高地上の帯状低地である。検出面は微高地のベースである第18層黄褐色極細砂質シルトである。帯状低地は自然地形であるが、その底面に堆積する黒褐色極細砂質シルトに畦畔状高まりが検出され水田面と考えられるために遺構とする。

S X 01は、南北方向と北東－南西方向の低地が調査区ほぼ中央で合流している。南北方向の低地は幅約13.6m、深さ0.6mを測り、底面はほぼ平坦であるが北側になるにしたがい深くなっている。東西の両肩は底面からやや上がった部分にわずかな段を有しゆるやかに立ち上がっている。北東－南西方向の低地は幅約15.5m、深さ約0.85mであり、北端部が最も深くなる。南端部はS D 01・02・04・10によってその大部分が切られている。第12図において北東－南西方向に等高線が密になっているのはS D 06である。

S X 01の埋土は5層である。上部に洪水層と考えられる褐色細砂が厚くレンズ状に堆積し、その下に黒褐色細砂、土壌層の黄灰色シルト質極細砂、黒褐色シルト質極細砂、最下層に黒褐色シルト質極細砂が堆積している。最下層の黒褐色シルト質極細砂は最大30cmの厚さであり、土層観察により畦畔状高まりが検出され、水田面であると考えられる。畦畔状高まりは、道路の東側の調査区において北壁に4カ所、西壁に2、3カ所検出された。さらに道路西側では南壁に2カ所検出された。ただし面的に検出することができたのは、S D 01とS D 04の間だけである。検出された畦畔状高まりは、細長くL字状を呈している。高さは約3cmである。等高線に沿うように設けられているが、一部の検出のため水田区画は不明である。

S X 01からの出土遺物は非常にわずかであるが、水田面と考えられる黒褐色シルト質極細砂中より刻目突帯文を有する縄文時代晩期に比定される深鉢の破片が出土し、その上面を覆っている洪水層の褐色細砂より弥生時代前期後半の甕・壺が出土した。このことにより、水田面の時期は縄文時代晩期から弥生時代前期後半と考えられる。

この水田面は、微高地上のわずかな帯状の低地に存在しその上面を洪水砂層によって被覆されている。さらにその時期が弥生時代前期以前に比定されている。同様な条件を持つ水田面は、西接する浴・長池遺跡2・4区の西岸微高地上に検出されている。しかし、水田の区画に関して、浴・長池遺跡の水田は、盛り土畦畔によって整然とした長方形の区画されているのに対し、本遺跡では畦畔の一部のみ検出されただけあり区画は不明となっている。したがって、この層が水田であるという確実な根拠に乏しく、プラントオパールや花粉分析等の自然科学的な分析に基づいて検討する必要がある。ただし、本報告書では一応水田面として記載する。



第13图 SX01出土遺物実測図(1)

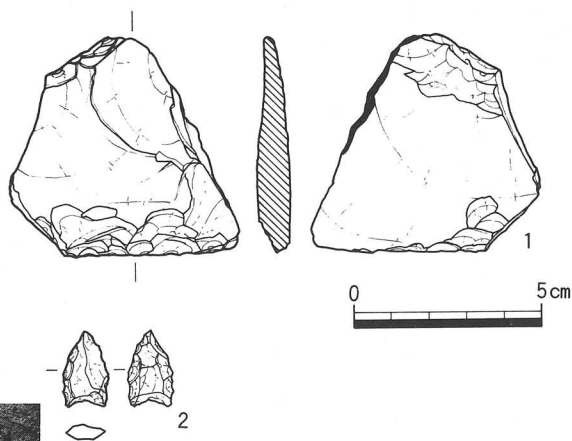
SX01出土土器（第13図）

SX01から出土した土器は、(1)を除いてSX01の土壤層を覆っている洪水砂層である褐色細砂中より出土した。

図示できたものは、縄文土器1点とその他は弥生土器である。いずれの土器も細片が多く口径のしっかりしたものは少ない。(1)は一部口縁を欠損する突帯文をもつ深鉢である。(2～4)は壺である。(2、3)は広口壺である。(2)は口縁部片であり、(3)は胴部以上を欠損するが、底部のしっかりとした胴部の大きく張る破片である。(4)は頸部の長い広口壺である。口縁部、頸部下半を欠損して全様は不明であるが、頸部中央に張り付け突帯を一条巡らせる。厚手の作りの壺である。(5～10)は甕である。如意状口縁をもつ(5、8、10)と逆L字状口縁をもつ(6、9)に分かれる。いずれの土器も胴部上半に多条のヘラ描沈線文をもつ。また(9)の口縁部端面に山形文がみられる。(11～15)は甕の底部である。いずれの底部も底径の小さな平底から直線的に胴部に向って立ち上がるものである。これらの所属時期は、(1)を除き甕の胴部に多条のヘラ描きの枕線文をもち、平底の底部も小さくなっていることより弥生時代前期末の時期と考えられる。

SX01出土石器（第14図）

(1)はスクレイパーである。石材はサヌカイトである。両側縁部は裁断面を残すもので、明確な調整がみられるのは上縁部及び下縁部のみである。下縁部は両面からの調整により鋭利な刃部をつくる。(2)は凹基式の石鏃である。



第14図 SX01出土遺物実測図(2)

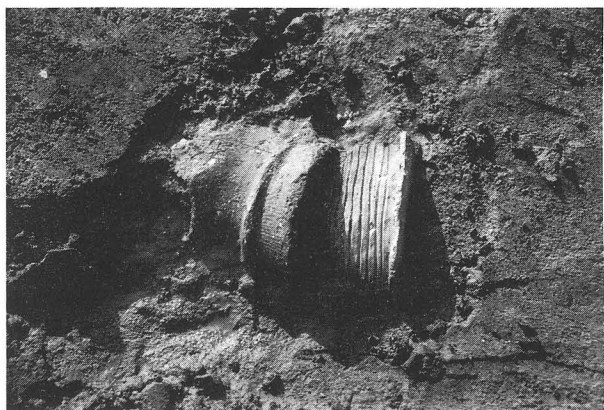


写真2 SX01遺物出土状況

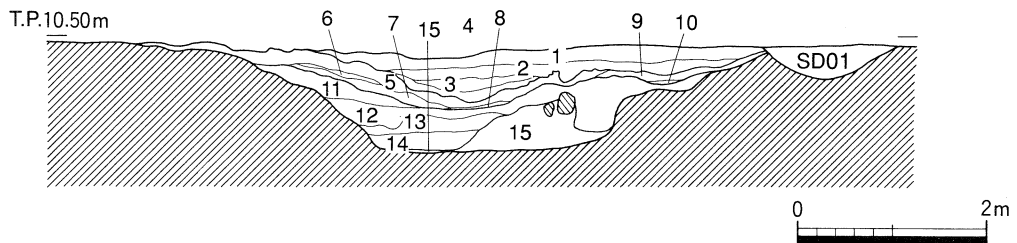
第4節 弥生時代中・後期の遺構と遺物

1 SD02 (第15、16図)

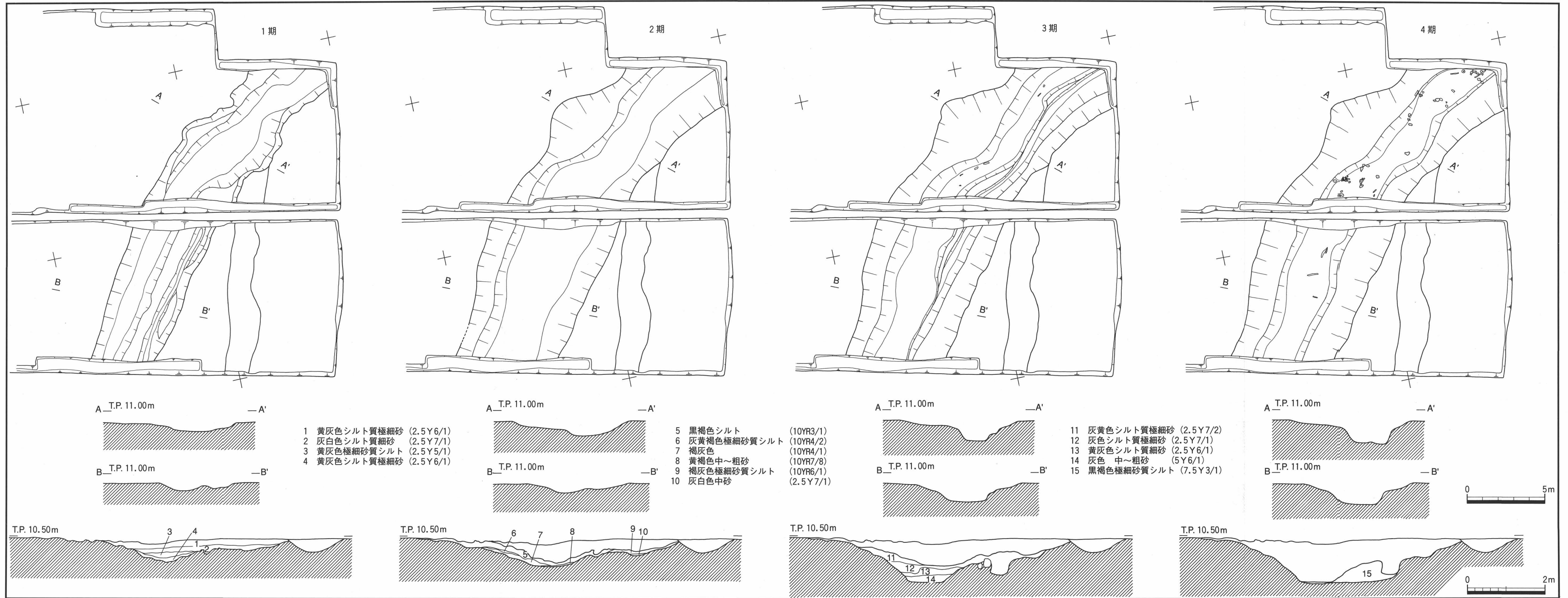
調査区の東側において検出された。調査に先立って行われた溝中央部の土層観察により、I～IV期に分層されることが判明したため、それに基づいて各期ごとに調査が実施された。出土土器の時期により、I期は6世紀末から7世紀前半、II期は6世紀末頃、III期は5世紀末、IV期は弥生時代後期後半～末の時期の溝であると判明した。このように、長期間にわたって埋没と再掘削をくりかえしながら同じ位置で溝として使用されていたのである。時期別に遺構を記述すると本報告書の方針とは異なるが、I～IV期の溝をSD02として本節で一括して記載することとする。以下、各期ごとに説明する。

I期 南西から北東に流走する溝であり、その幅は3.90～4.90m、深さ0.5～6mを測る。溝の北端近くは北流するSD01によって切られている。埋土は4層で、上から黄灰色シルト質細砂、灰白色シルト質細砂、黄灰色極細砂シルト、黄灰色シルト質極細砂である。底面の標高は、南端で9.90m、北端9.71mであり、北方向に次第に深くなっており、水は北へ流れていたと考えられる。底面は凹凸が著しく、北側の底面は広くなり立ち上がりに段を有する。南側では、底面の最深部が細くなり西側に片寄っており、東側は一段高くなり細い溝状落ち込みが中央部まで北流している。これに関しては、一つの溝でありながら別の流れをする水路内水路である、あるいは調査区の南では別の溝であるのがこの地点で合流するという2つの考え方ができる。

II期 溝の方向はI期と同様であるが、規模が大きくなっている。幅は6.20～7.65m、深さ0.6～9mを測る。底面の標高は南端9.65m、北端9.25mであり北になるにしたがい低くなっており水は北流していたと考えられる。埋土は5層であり、黒褐色シルト、褐灰色極細砂質シルト、灰黄褐色極細砂質シルト、褐灰色極細砂質シルト黄褐色中～細砂である。底面は広くほぼ平



第15図 SD02土層図



第16図 SD02実測図

坦である。溝の西肩は底面から立ち上がり段を有し、さらに緩やかな傾斜で広がっている。出土遺物はほとんどなかった。

Ⅲ期 溝の規模、平面形はほぼⅡ期と同様であり、その幅は6.20～7.70m、深さ1.15～1.30mを測る。期の溝より深くなっている。底面の標高は、南端9.32m、北端では9.02mであり、水は北流していたと考えられる。埋土は4層あり、褐灰色極細砂質シルト、灰色シルト質極細砂、黄灰色シルト質細砂、灰色中～粗砂である。底面の幅はやや狭くなり、東側は一段高くなり、別の溝が北流している。中央部では、この溝の西肩部に補強する目的で小児頭大の石4個が置かれていた。この小溝は北になるにしたがい底面の標高が高くなっている。北壁ではその形態は不明瞭である。この溝は分水のための水路内水路であると考えられ、南側の調査区域外において、堰等の施設があると想定させる。水路内水路には石の上に厚く堆積している灰色シルト質極細砂が充填していた。本流の底面直上には中～粗砂が厚く堆積しており、多量の水が流れていたと考えられる。この砂層中より多量の土器や加工痕のある木製品を含む植物遺体が出土した。

Ⅳ期 溝の規模、平面形はⅢ期の溝とほぼ同様であるが、深さが1.30～1.50mを測りさらに深くなっている。底面の標高は、南端9.15m、北端8.82mであり、水は北流すると考えられる。埋土は期の水路内水路の西岸を形成していた黒褐色極砂質シルトと粗砂である。底面は広く平坦であり、底面からの立ち上がりは急斜面であり上部はゆるやかとなっている。最下層の粗砂は土器、木製品を含む植物遺体が多く出土した。

S D02 I期出土土器（第17図）

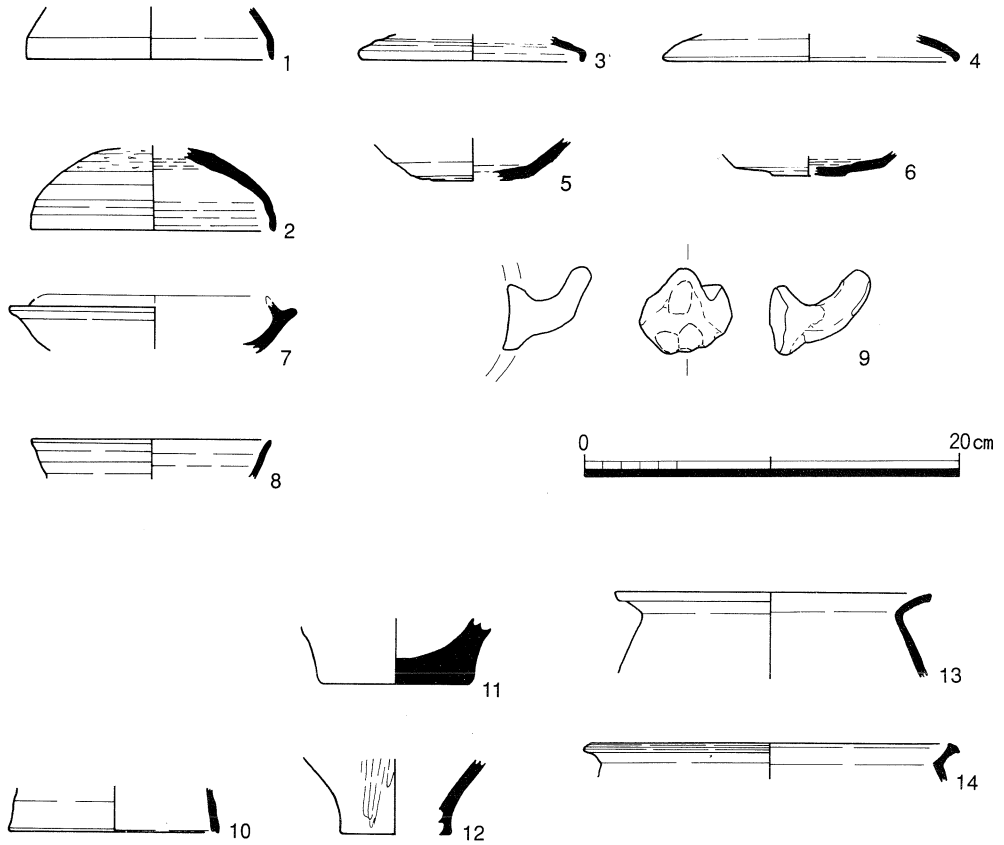
（1～4）は杯蓋である。いずれも小片であるが（1、2）は天井部が高く、（3、4）は天井部が低く、端部が屈曲する。（5～8）は杯身である。（8）は高台のつく杯身となると考えられる。

S D02 Ⅲ期出土土器（第17図）

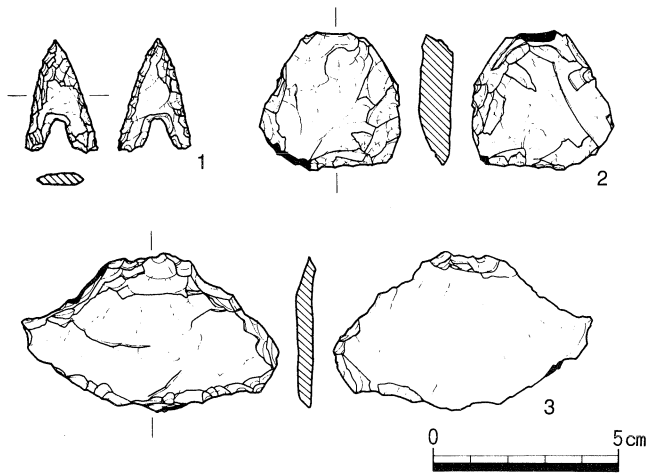
（10）は杯蓋片である。小片であるため、全様は不明であるが、天井部が高くなり天井部と口縁部の屈曲部に稜をもつものと思われるもので口縁部端部内面が凹む。（11～14）は弥生土器である。（11、12）は甕の底部である。（13、14）は甕の口縁部である。（14）は口縁端部には凹線が2条巡る。

S D02 Ⅲ期出土石器（第18図）

（1）は凹基式の石鏃である。抉りは深く、鏃身の調整は両面から丁寧に行われている。（2）は下辺部に若干の調整を行う石器である。（3）は薄い素材を利用したスクレイパーであ



第17図 SD02出土遺物実測図(1)



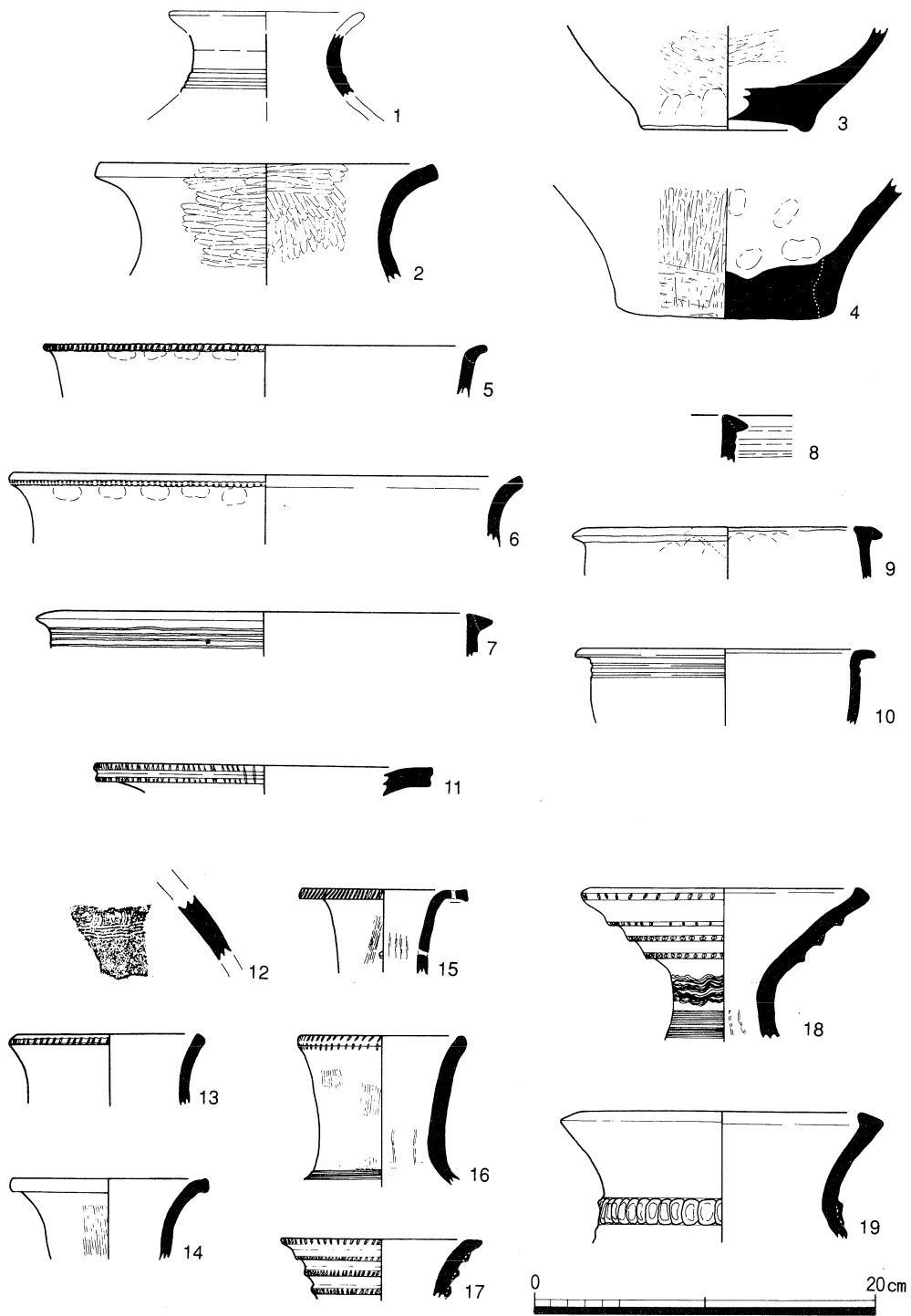
第18図 SD02出土遺物実測図(2)

る。下辺部は大剥離面を利用し片面からの調整で刃部をつくる。

SD02 IV期出土土器
(第19~21図)

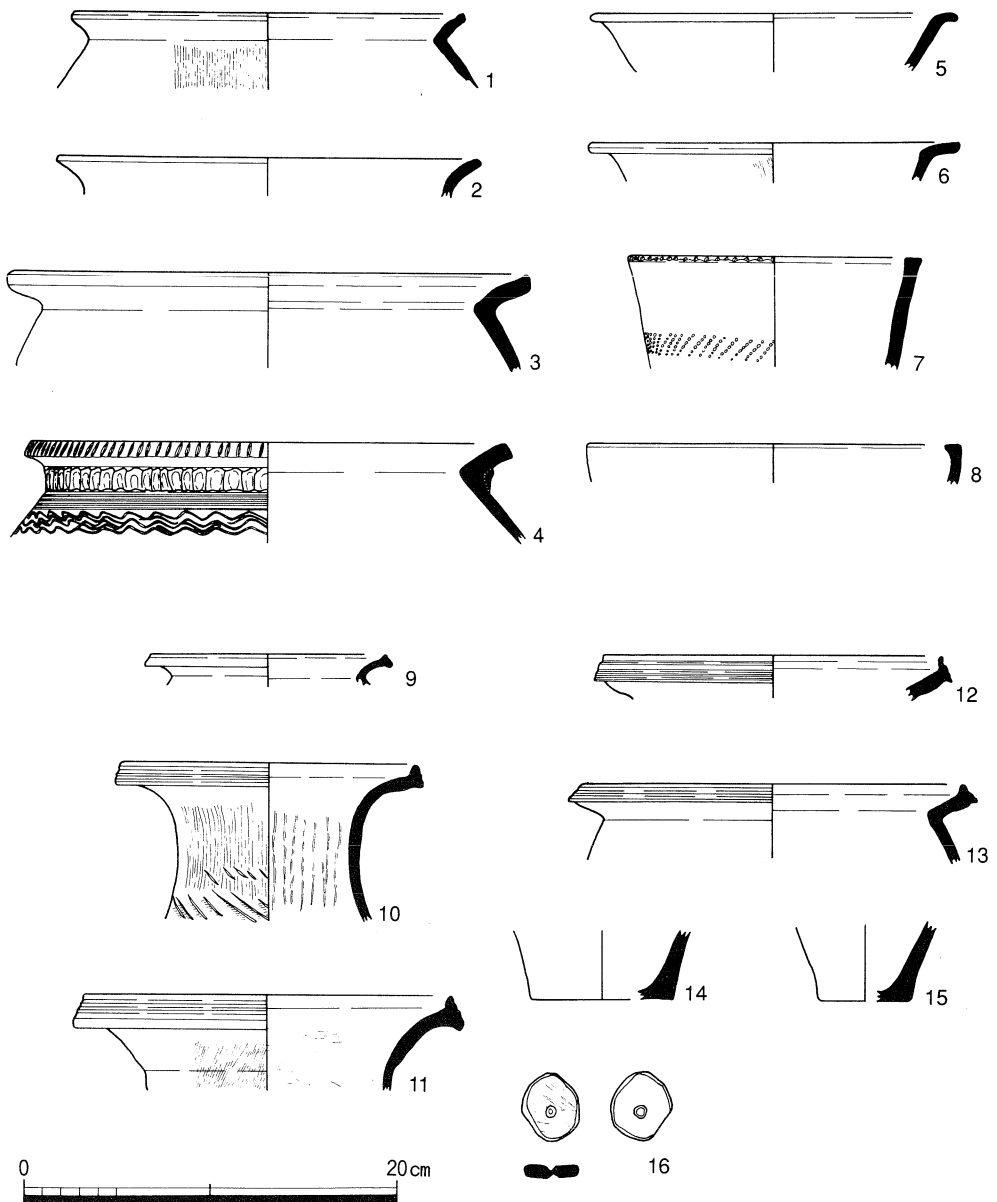
SD02 IV期からは、前期末~後期後半の土器が混在して出土している。量的には時期ごとにほぼ同量出土している。

(1~10)は前期末と考えられる一群である。(1~4)は壺である。(1、2)は広口壺



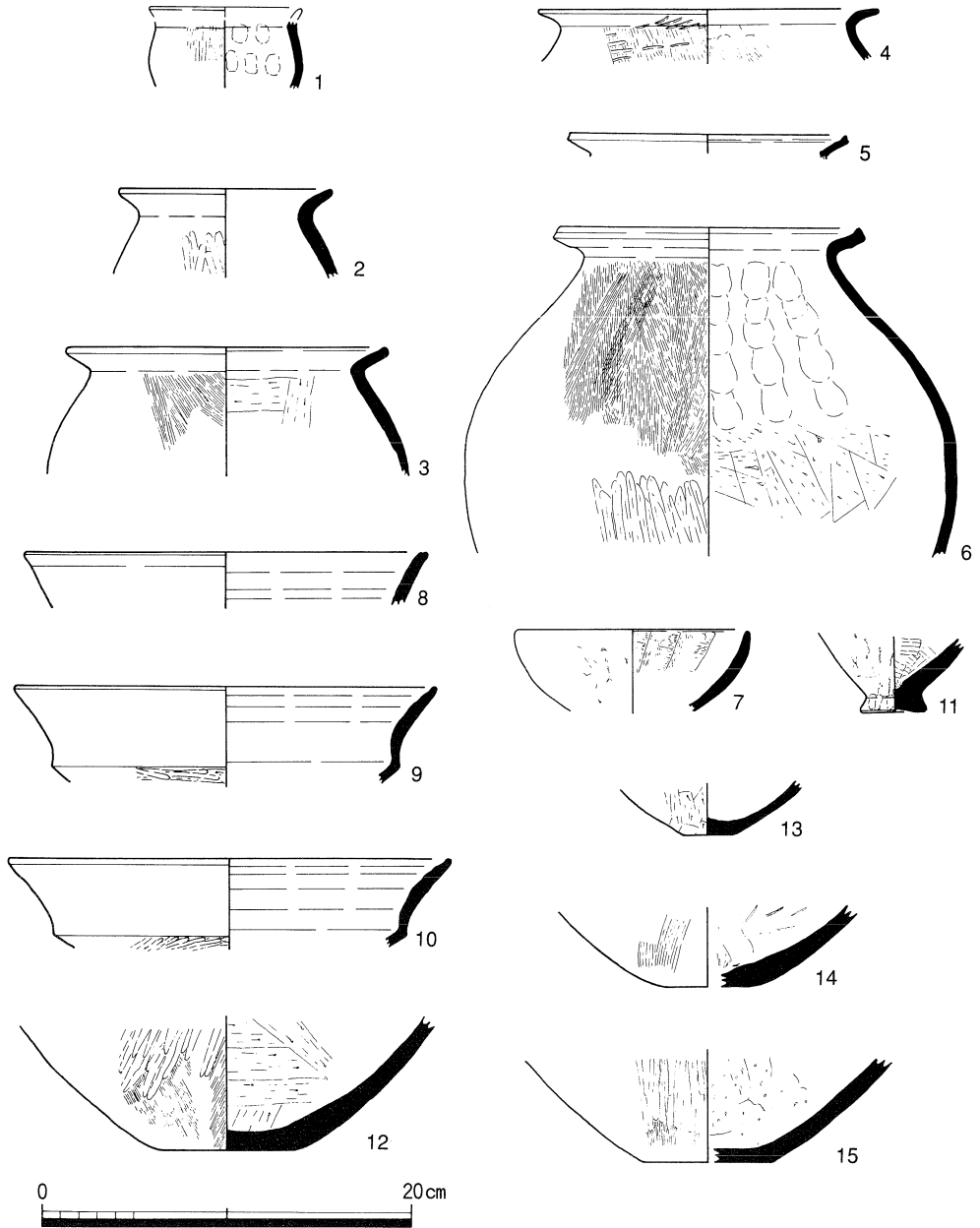
第19图 SD02出土遺物実測図(3)

の頸部および口縁部片である。(1)は頸部に3条の沈線が現存し、(2)は無文である。(3、4)は底部片である。(3)はあげ底、(4)はしっかりした平底である。(5~10)は甕である。(5、6)は如意状口縁をもつもので、端部に刻目を施す。(7~10)は逆L字状口縁をもつもので、(7~9)は断面三角形の貼りつけ口縁である。(9)以外はヘラ描き沈線文を施す。



第20図 SD02出土遺物実測図(4)

第19図(11~19)と第20図(1~8)は中期前半と考えられる一群である。(11~19)は壺で、すべて広口壺である。(11)は口縁端部に沈線を一条巡らせる。(12)は体部片である。外面に変形の櫛描文を施す。(13、16)はやや外方に開き端部で屈曲する口縁部をもち、端部に



第21図 SD02出土遺物実測図(5)

刻目文を施す。(14、15)はやや外方に開き端部で屈曲する口縁部を持ち、(15)には端部に刻目文を施す。(17、18)は外面に3条の刻み目突帯文を巡らし(18)には頸部に櫛描文を施す。(19)は(18)の端部同様内側に屈曲する形態をもち、頸部に押圧突帯文を1条を巡らせる。(1~6)は甕である。「く」の字状に屈曲する口縁をもつものと(1~4)と斜方向に広がり屈曲して水平に開く口縁をもつ小形のもの(5、6)に分かれる。(4)には口縁端部から頸部にかけて櫛描文等を巡らし、装飾性豊かな土器である。(7)はバケツ状を呈する鉢である。(8)は椀形の杯部をもつ高杯である。

第20図(9~15)は中期後半と考えられる一群である。(9~11)は壺である。(9)は短頸の壺で口縁端部が肥厚する。(10、11)は大きく外反する口縁をもつ広口壺である。いずれも破片も肥厚させた端部外面に凹線文を3条巡らせる。また(10)には頸部にヘラ状工具による押圧文が二段にわたって施されている。(12、13)は甕である。「く」の字状に屈曲する口縁部をもち、肥厚させた端部外面に凹線文を巡らす。(14、15)は甕の底部である。いずれも平底である。(16)は土器片を利用した紡錘車である。未製品であるらしく中央部の孔は貫通していない。

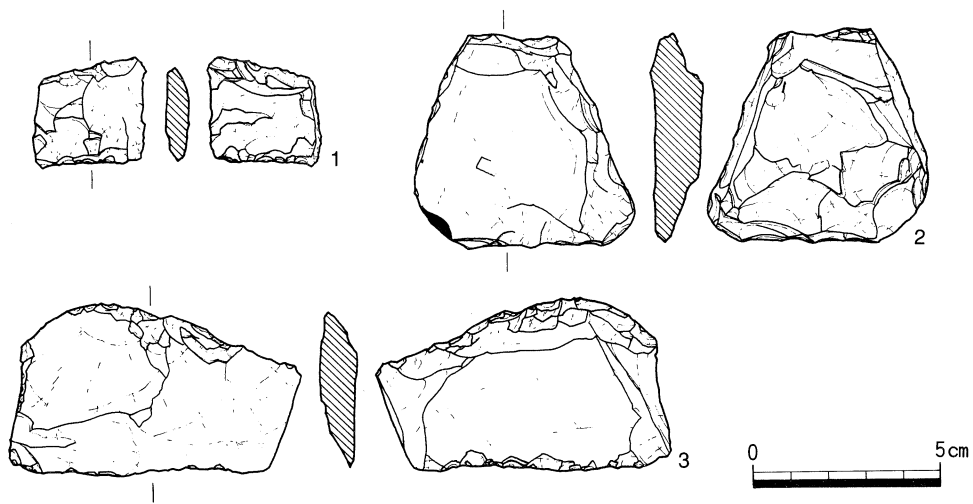
第21図(1~15)は後期後半と考えられる一群である。(1~6)は甕である。(1~4)の口縁部からゆるやかに下がり胴部があまり張らないものと(5、6)のように口縁部の割に胴部が大きく張るものに分かれ、色調によっても前者は白色系、後者は茶褐色系にわけられる。後者はこの時期高松平野に多くみられるタイプである。(7)は椀形の鉢である。内面に簾状ハケを施す。(8~10)は高杯である。いずれも杯部のみの出土で、皿状の杯部から屈曲して大きく外反する口縁部をもち、内面には凹線状の凹みを数状巡らせる。(11)は製塩土器と考えられ、底径の小さな脚部である。(12~15)は壺の底部である。(13)をのぞき大型の壺底部と考えられ、底部は一応平底を呈しているが、角が丸くなりはじめているものもみられる。

S D02 IV期出土石器(第22図)

(1)は左側側縁部に裁断面をもつもので、下辺部および上辺部に調整を施す。右側縁部は鋭利である。(2)は両側縁部に裁断面をもつスクレイパーである。上辺部および下辺部は大きな調整を行なうのみで、こまかな調整はみられない。(3)もスクレイパーである。両側縁部は裁断面を残す。下辺部は片面からの調整で刃部をつくる。上辺部は両面からの調整により背部をつくる。

S D02 出土木製品(第23、24図)

1~5はⅢ期、6~13はⅣ期の溝より出土した。



第22図 SD02出土遺物実測図(6)

1は斜目板材であり、又鋏と考えられる。現存長22.3cm、幅4.5cm、厚0.9cmを測る。先端部は尖らしており、側面はていねいな面取りが施されている。

2は斜目板材である。現存長は18.3cm、現存幅4.5cm、厚1.3cmである。

(3)は柂目の板材である。現存長は19.1cm、現存幅2.4cm、厚0.9cmを測る。一面のみ残存する側面は面取りが施されている。柄穴を有する。

(4)は割材で、現存長22.4cm、幅4.7cm、厚2.5cmを測る。断面は三角形を呈す。

(5)は半截材で、乾燥による割れが著しい。現存長は13.5cm、幅5.4cmを測る。枝払い加工が施される。

(6)は先端加工された丸木である。現存長は38.5cm、径4.2×3.6cmである。先端部の加工は全方向から明瞭に施されている。先端が土圧により潰れており、杭であると考えられる。

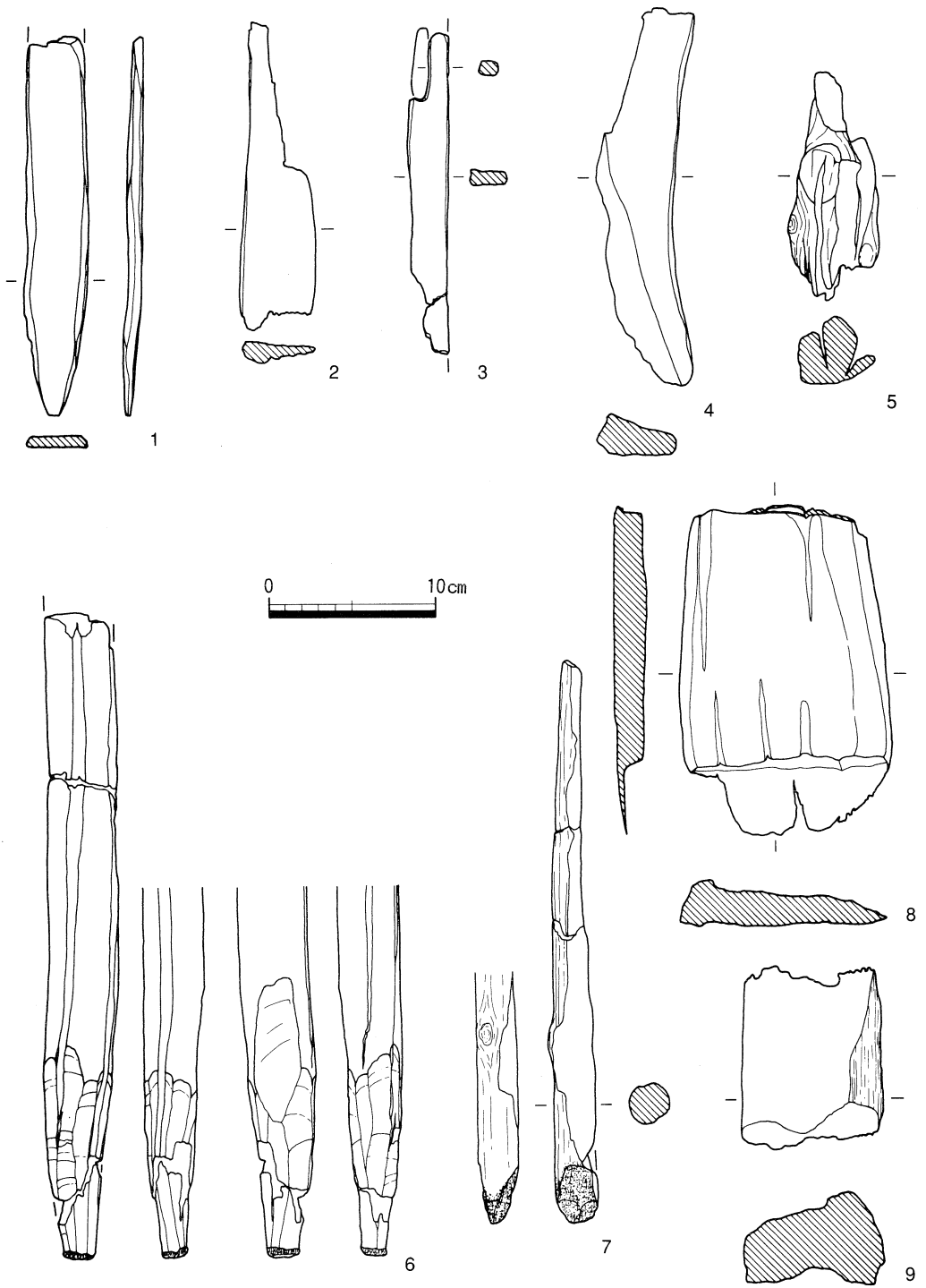
(7)は先端加工の丸木である。現存長は33.5cm、径2.4cmである。先端部は2方向から加工され、その部分は焼かれている。樹皮を残存する。

(8)は加工された板目板材である。現存長19.6cm、幅12.4cm、厚2.75cmを測る。両端にほぼ垂直方向の加工が施され、掘り込まれている。

(9)は芯持ちの割材である。現存長10.9cm、幅7.4cm、厚5.5cmを測る。

(10)は芯持ちの割材であり、片面には明瞭な加工、もう一面には不明瞭な加工が施されている。全長25cm、幅9cm、厚6cmである。不明瞭な加工のある両端部は焼かれている。鋏(?)の未製品の可能性がある。

(11)は芯持ちの割材であり、現存長37.6cm、幅7cm、厚4.7cmを測る。木の表面側を焼いている。



第23图 SD02出土遺物実測図(7)

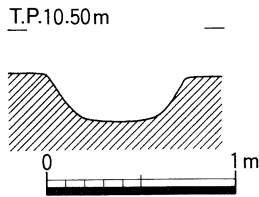


第24図 SD02出土遺物実測図(8)

(12) は板目の板材である。現存長50.2cm、現存幅4.5cm、厚6cmを測る。

(13) は板目割材であり、現存長76.3cm、幅6cm、厚3cmである。断面は台形を呈す。

2 SD04



第25図 SD04エレベーション図

SD01の東側、市道のすぐ西側で検出した溝である。SD02に切られ一部断絶し、北側で分流する。溝の方位はN-10-Wである。検出長は一部断絶するが23.5cm、溝幅0.5~0.85m、深さ0.24mである。溝幅は南側に比べ北側が広い。断面形状はU字状を呈する。溝の埋土は単一層で黒褐色シルト質極細砂である。出土遺物はないがSD02に切られ一部が断絶していることにより、SD02より以前の弥生時代後期以前の時期

が考えられる。

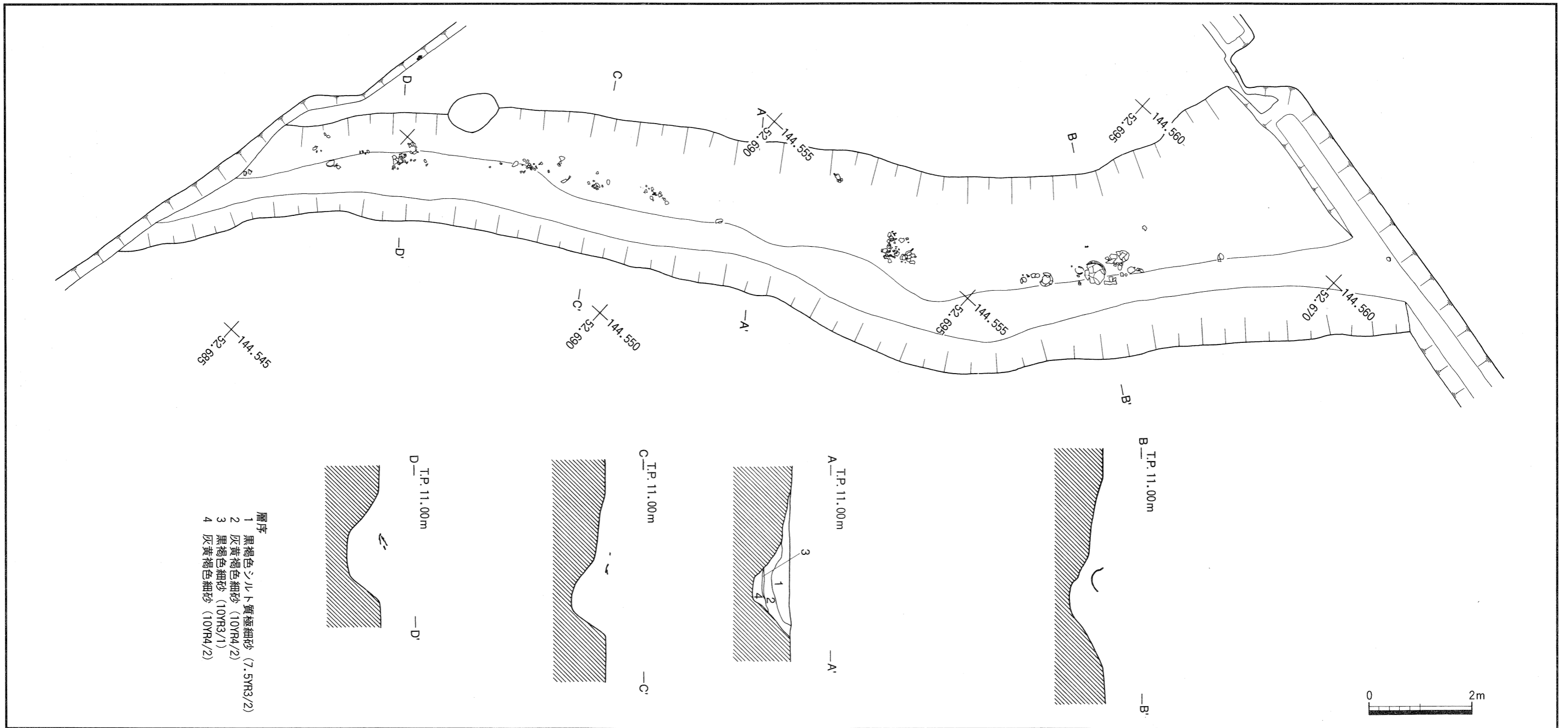
3 SD06 (第26図)

2区(市道東)調査区の北西で検出した溝で、後述するSD07の東側に位置する。溝の方位は南からN-38°-E、N-55°-E、N-36°50'-Eであり、南西から北東に向かって蛇行しながら流れていたようである。検出長は25m、溝幅1.65~4.85m、深さ0.5~0.8mである。南側に比べ北側が幅広くなっている。断面形状は上場が広い割に下場が狭いV字状を呈する。溝の埋土は4層に分層でき、上から1層 黒褐色シルト質極細砂、2層 灰褐色細砂、3層 黒褐色細砂、4層 灰黄褐色細砂である。出土遺物は土器のみで、土器の出土状況からすれば溝の機能が停止し、埋没がほぼ終了した段階で一括投棄されたものと考えられる。出土土器からすれば弥生時代後期後半から後期末の時期が考えられる。

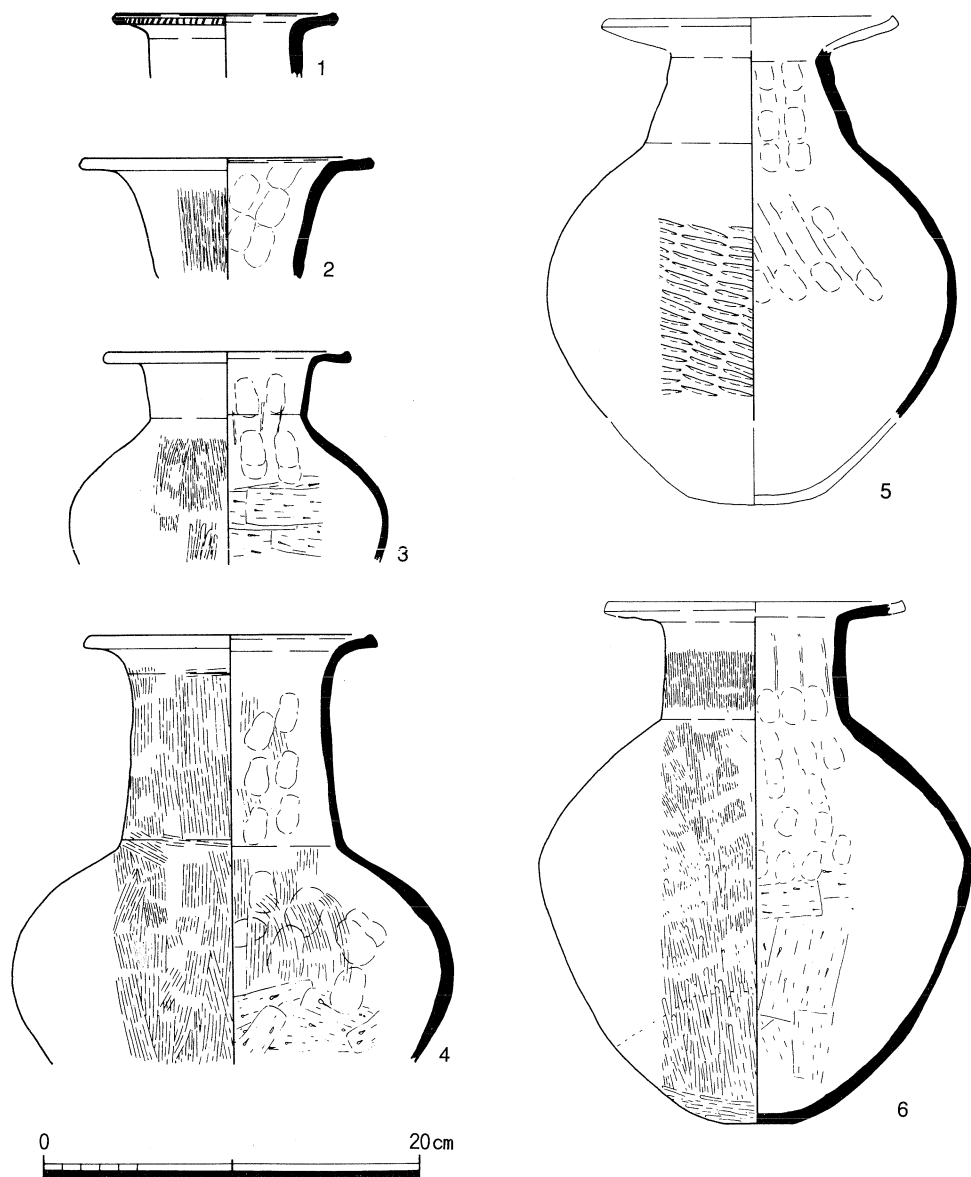
出土土器(第27図~第31図)

(第27図1~6)は壺である。(4)以外は短頸の広口壺である。頸部が直立す(1、6)もの、外傾するもの(2、3)、内傾するもの(5)に分けられ、屈曲して水平に広がり、口縁端部をつまみ上げるのはいずれも同じである。調整等も大半は同様の調整を施すが、(5)の大部外面にタタキがみられ(5)の色調のみ白色系である。また底部については(6)をみる限り、ほぼ丸底になっている。長頸壺である。頸が長い以外は形態及び調整等に変化はない。

(第28図)は甕である。(5)を除き口頸の割りに胴部が大きく張るものが多くみられ、頸部は鋭く「く」の字状に屈曲し、口縁端部をつまみあげて肥厚させる。底部は、しっかりとした平底を持つものと(4、8、9)、底部の角がとれて丸底に近くなる(6、10)ものもみられる。調整は内面上半部に顕著に残る指頭圧痕、下半のヘラケズリ、外面上半ハケ、下半ヘラ



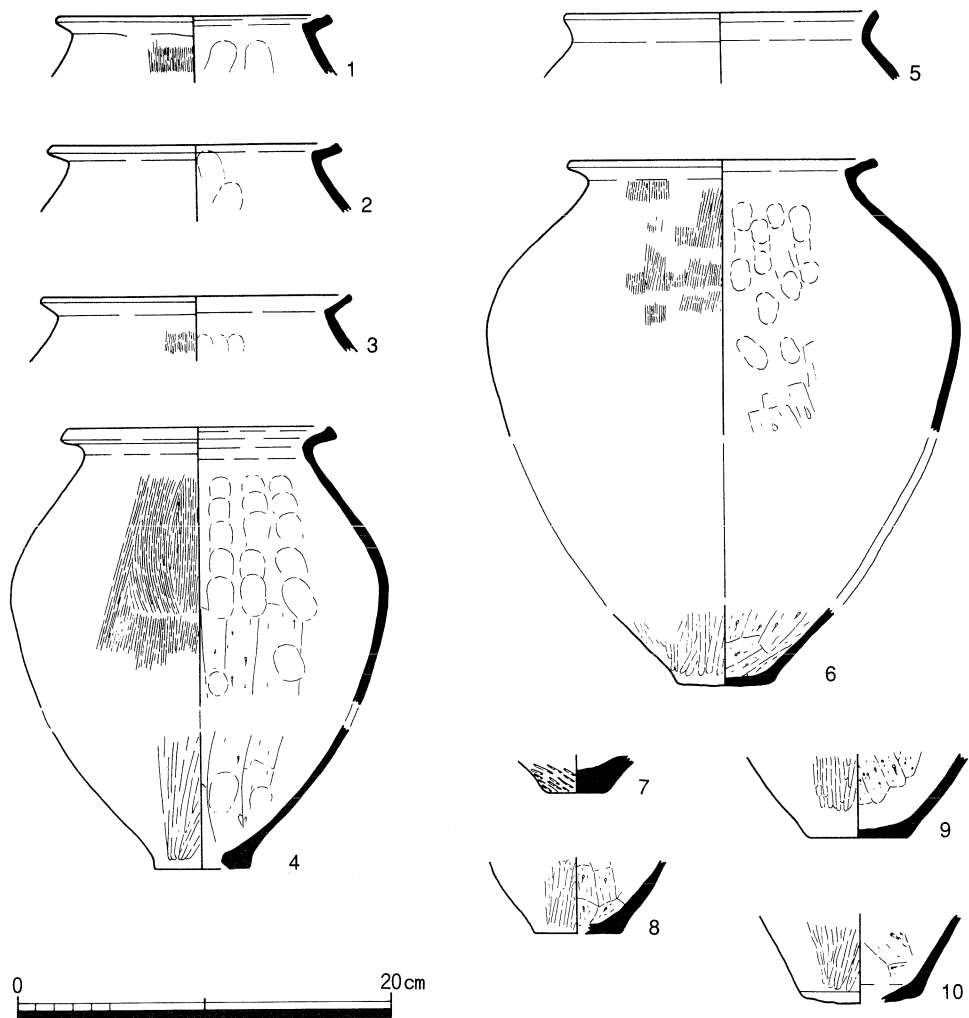
第26図 SD06実測図



第27図 SD06出土遺物実測図(1)

ミガキを施し、色調は茶褐色を呈し、胎土中に角閃石を多量に含むのが特徴である。

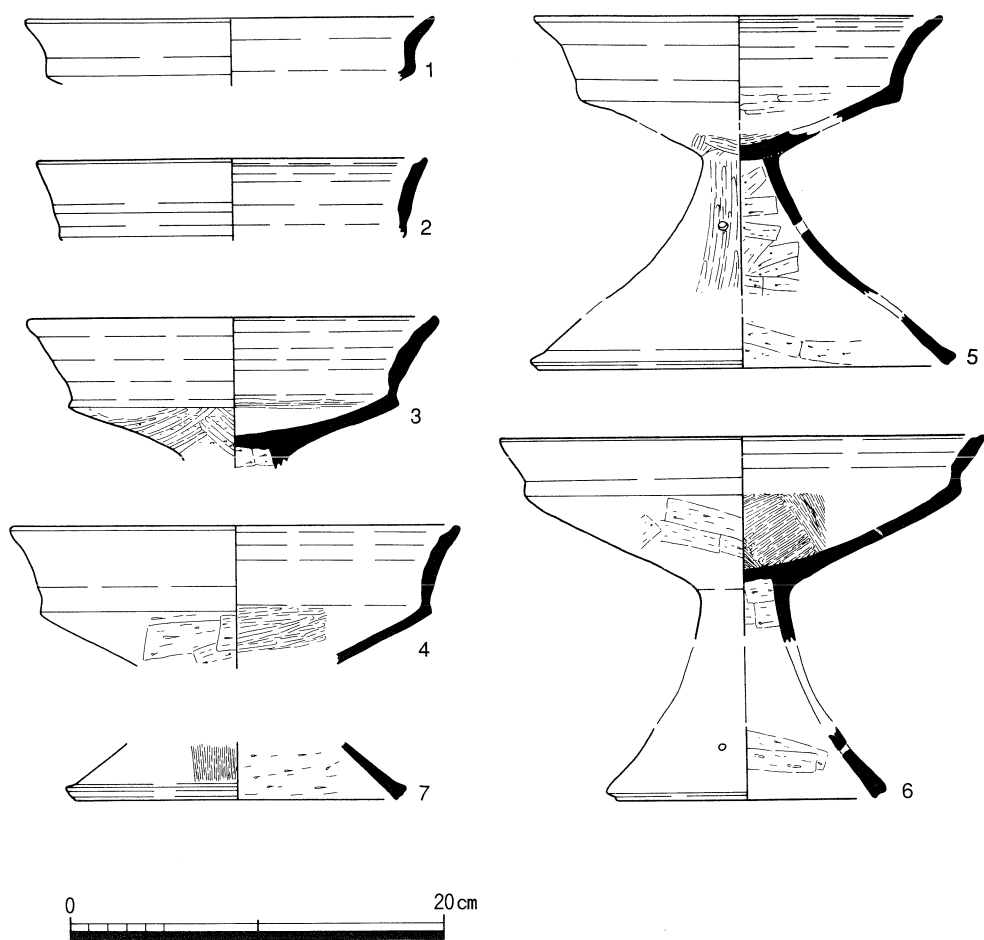
(第29図1～7)は高杯である。形態的には杯部は、皿状の受部から屈曲し直立して外反するもの(1、6)と皿状の受部から屈曲し外反する(2～5)ものに分かれる。後者は口縁部内面に凹線状の窪みを数条巡らせるのに対し、前者は、端部に凹線条の窪み1条巡らせるのにすぎない。調整は杯部内面に格子状の丁寧なヘラミガキを施し、外面下半にもヘラケズリの後格子状に粗いヘラミガキを施す。脚部は(5)のように大きくひろくものと、(6)のように



第28図 SD06出土遺物実測図(2)

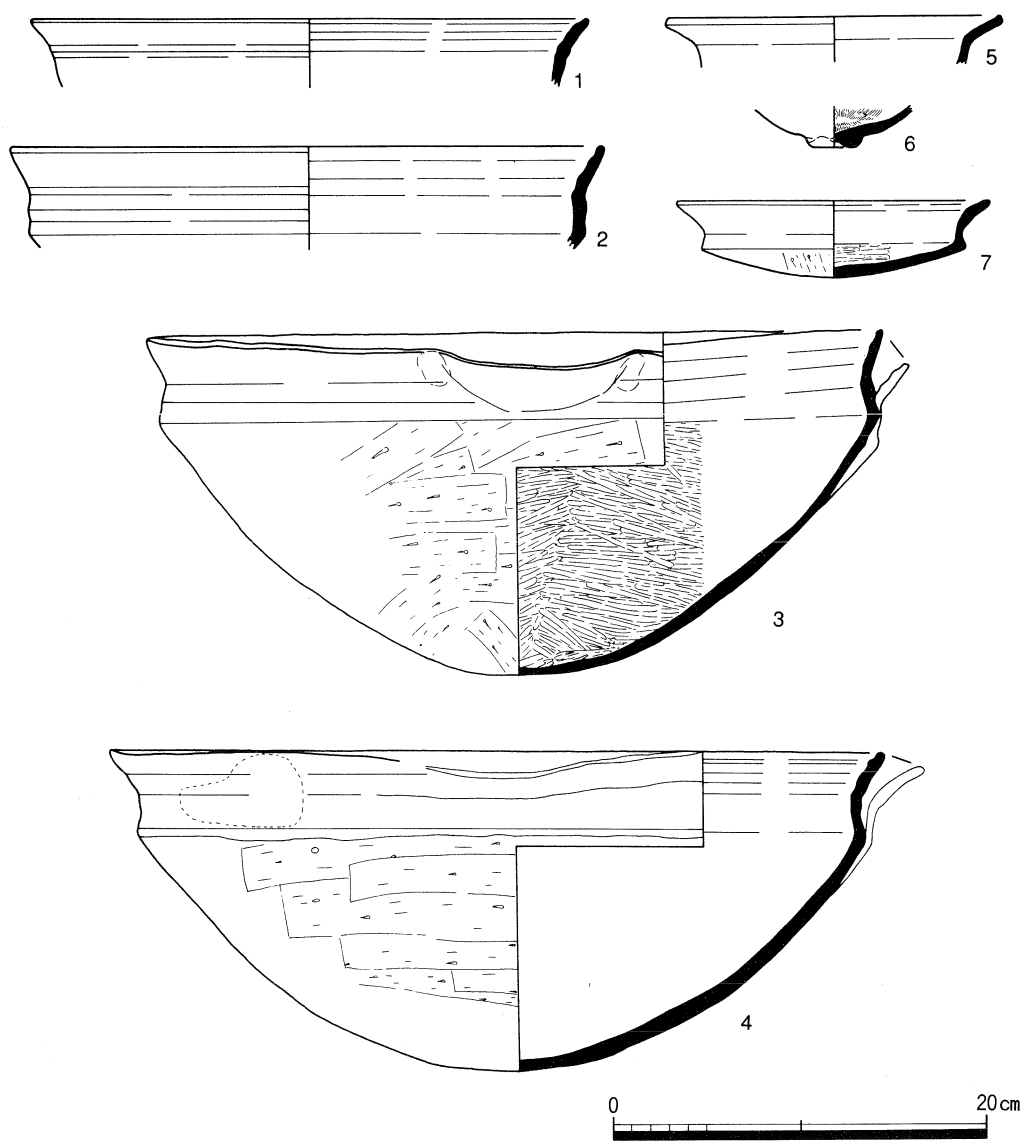
あまり開かないものがある。調整は外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリを施す。脚部には円孔もみられる。

(第30図1~7)は鉢である。(1~4)の大型の鉢と(5、6、7)の小型の鉢に分かれる。大型の鉢は、高杯の杯部を大きくして器高を深くした形態を示し、片口になるものと考えられる。口縁内面に擬凹線が数状巡り、内面ヘラミガキ、外面ヘラケズリの調整等も高杯と変わる点は見られない。(7)は大型の鉢の小型のもので高杯の脚部を取り除いた形態をする。(5)は口縁部が短く外反するもので、底部は欠損しているものの平底の底部になると考えられ、(6)は口縁部を欠損するもののボール状を呈するものと考えられる。



第29図 SD06出土遺物実測図(3)

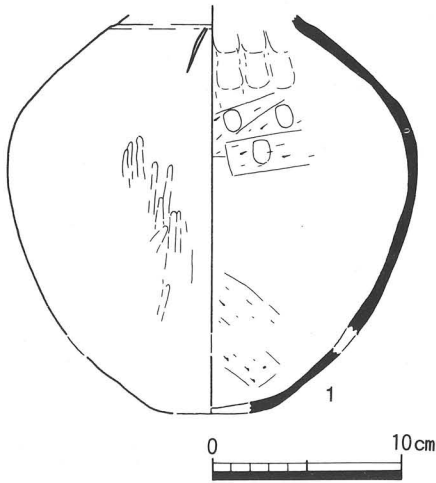
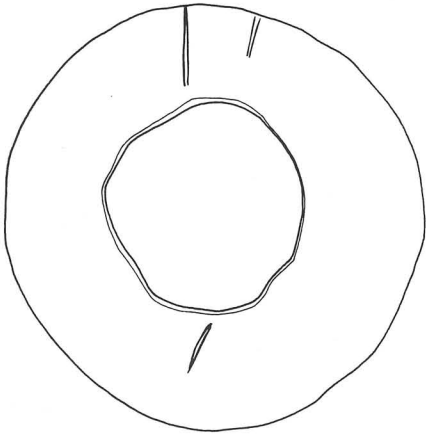
(第31図1)は肩部に線刻が認められるもので、口縁部を欠損するものの壺であると考えられる。全体に球形に近く肩の張りも弱く底部は丸底に近い調整は外面下半にヘラミガキ、内面上半ユビナデ、下半ヘラケズリを施す。肩部の線刻は2条を1単位として上からみれば2単位の線が180°の間隔をおいて向かい合うかたちになる。土器にはそれ以外の線刻はみられず線刻自体何を表したものなのか不明である。浴・松ノ木遺跡では、これ以外の線刻をもつ土器は確認されていない。



第30図 SD06出土遺物実測図(4)



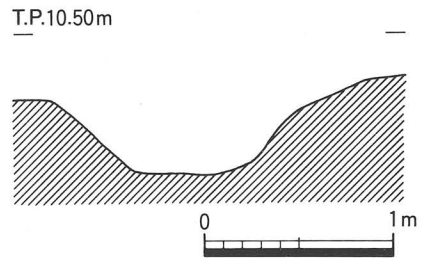
写真3 SD06出土土器ヘラ記号



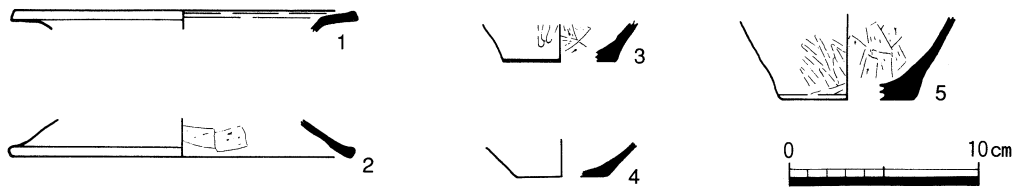
第31図 SD06出土遺物実測図(5)

4 SD07 (第32図)

2区(市道東)調査区北西隅で検出した溝である。遺構の大半は市道下へにげる。溝の方向からすれば市道下でSD06と接続している可能性がある。溝の方位はN-26°50'-Eである。検出長は8m、溝幅1.7m、深さ0.54mである断面形状は逆台形状を呈する。溝の埋土は2層に分層でき、上層は黒褐色シルト質極細砂、下層は黒色粘性シルトである。遺物は若干の土器が出土しており、これらの土器より弥生時代後期後半頃の時期が考えられる。



第32図 SD07エレベーション図



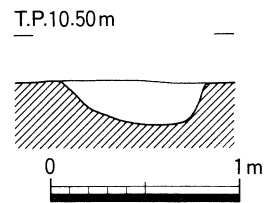
第33図 SD07出土遺物実測図

・出土土器（第33図）

(1)は広口壺である。口縁部のみ出土であるが、頸部から外傾し口縁部で水平に屈曲し、端部をつまみあげる形態のものである。(2)は高杯の脚部である。大きく「ハ」の字状に開き、端部が肥厚する。(3～5)は甕の底部でありいずれも平底である。内面のヘラケズリによって器壁は薄く仕上げている。

5 SD09（第34図）

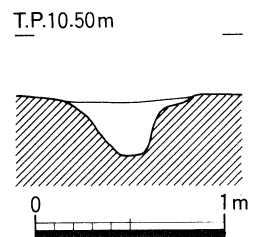
2区（市道東）調査区南東隅で検出した溝である。遺構の大半は調査区外ににげる。溝の方位はN-20°-Eである。検出長4.8m、溝幅0.6～0.7、深さ0.19mである。断面形状はU字形を呈する。溝の埋土は単一層で黄灰色シルト質極細砂である。出土遺物はないが埋土等より弥生時代と考えられる。



第34図 SD09土層図

6 SD10（第35図）

SD01の東側で検出した溝で、SD02に切られる。溝の方位はN-14°-Eであり現在の地割りに合う。検出長は8.5mあり南は調査区外にのび北側はSD02に切られているため不明である。溝幅は0.3～0.75m、深さ0.1～0.3m測る。断面形状はU字状を呈する。溝の埋土は単一層で黒褐色シルト質極細砂である。出土遺物はないがSD02に切られていることにより弥生時代後期以前の時期が考えられる。



第35図 SD10土層図

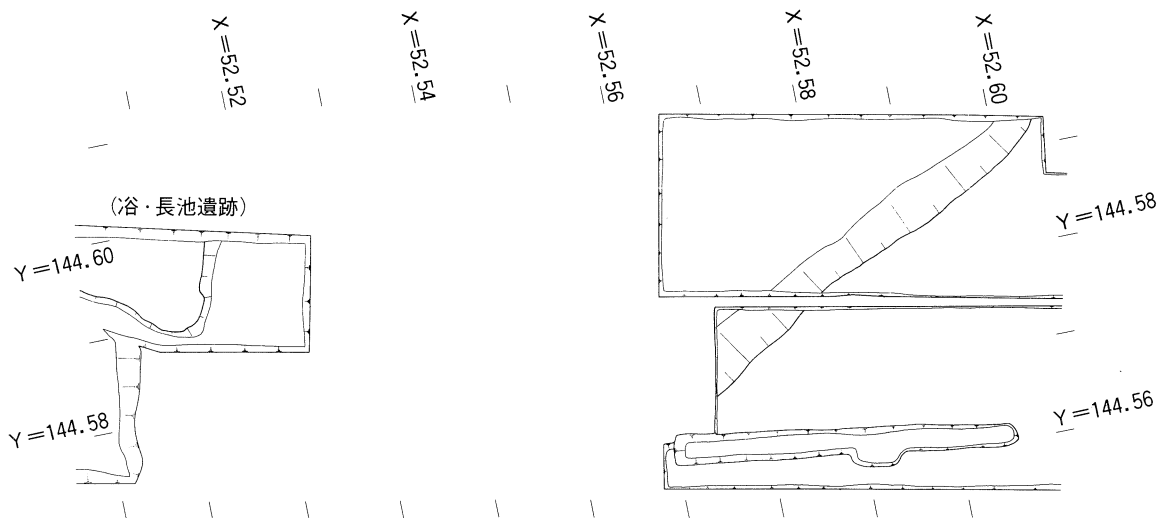
7 SR03（第36図）

調査区北西隅において検出された旧河道である。南西-北東方向に流走しており、本調査では東岸のみの検出であり全体は不明である。検出できた最大幅24.7m確認面からの深さは約1mである。SR03西接する浴・長池遺跡において検出された旧河道（SR01）の3カ所の主

流路のうちの東側の河筋と同一である。浴・長池遺跡では西岸の一部のみ検出されている。推定されるSR03の幅は約50mである。

埋土は黒褐色極細砂質シルトであり、基盤は砂礫層となっている。河床は凹凸が著しく、特に一段低くなった部分が東側に見られる。底面は北になるにしたがい深くなっている。

出土遺物は非常に少なく、河床近くより若干の弥生時代中・後期の土器が出土した。SR03の埋没は当該期に始まり、中世前半の段階でほぼ埋没が終了しており、12世紀末から13世紀初めと考えられる3層・4層の条里型水田が検出され、以後現在に至までの水田が続いている。

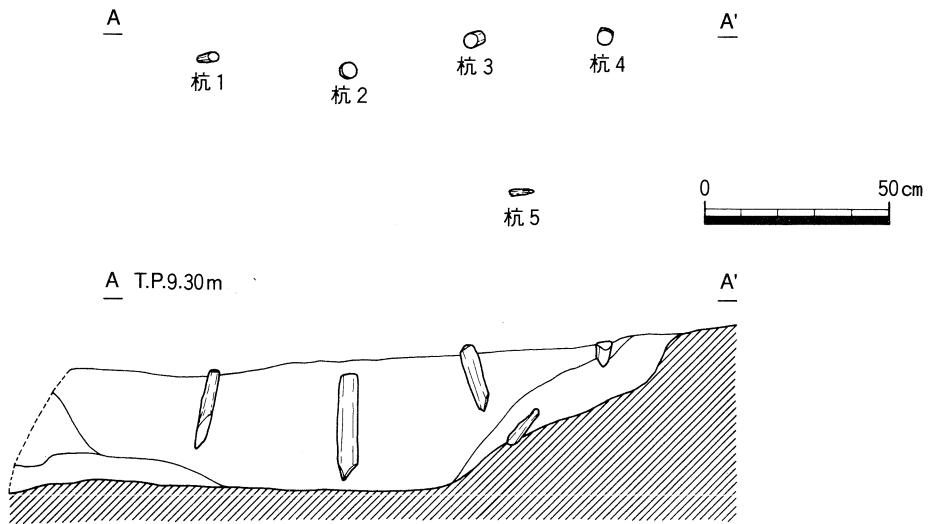


第36図 SR03平面図

8 SR04 (附図1)

調査区のほぼ中央において検出された南北流する自然旧河道である。北端での幅は約23.5m、南端では約57.5m測り、南側が幅広くなっている。最深部は確認面より約3.5m下である。基盤は砂礫層である。西岸は中央やや北側で北東方向から北方向に曲がり、非常に緩やかな傾斜で下がっている。特に南側で著しい。北側では段を有し、若干落ち込んでいる。河床は凹凸が激しく、東側が一段と深くなっている。標高は南から北になるにしたがい低くなっている。水は北流していたと考えられる。東岸は、最深部から急角度で立ち上がり、上方では緩やかに広がっている。段の上部はSD05によって切られている。

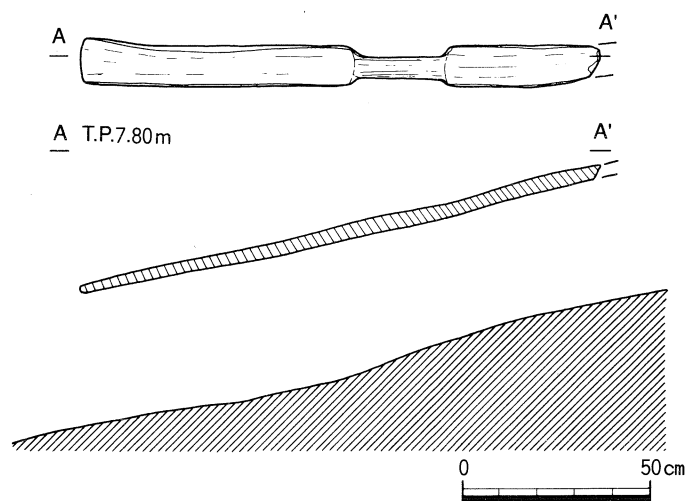
埋土は、後述する12世紀の水田である3a・4b層より下に10層見られる。それらを大別すると灰オリーブ色細～中砂である第11層を境にして上下2層に分層可能である。上層は灰褐色・黒褐色・黄灰色シルト質極細砂であり、それぞれ土壌層と鉄やマンガンの集積の見られる非土壌層に分かれ一すなわち水田である。特に5・6・9層には畦畔状の高まりが検出されている。第9層水田は古墳時代に比定されている。一方、下位は最深部を中心にレンズ状堆積した土層であり最下位は細～中砂・礫層である。



第37図 SR04内杭列実測図

S R04の西岸ほぼ中央部において、旧河道に直交するように打ち込まれた杭列が検出された。杭列は急に落ち込む段の上場を西端にして東方に向かって5本の杭が並んでいる。杭1～4はほぼ34cm間隔で一列に打ち込まれ、約40cm北側に1本（杭5）がある。杭はほぼ垂直に打ち込まれ、その先端部は基盤層の砂礫層まで達してなく、河床の最深部がある程度の土の堆積された時期に打ち込まれたと考えられる。杭の頭部が欠損しているため打ち込み面や明確な時期を明らかにすることは不可能である。

河床の最深部にかけての第11層砂層以下において、弥生時代後期の土器片、植物遺体が多量に出土した。土器片は器種としては壺・甕・高杯であり、最深部のほぼ全域で出土し、あまりローリングを受けていない。植物遺体は、河床よりかなり浮いた状態で北側に集中して出土した。櫛状木製品を含む木製品と自然木がある。

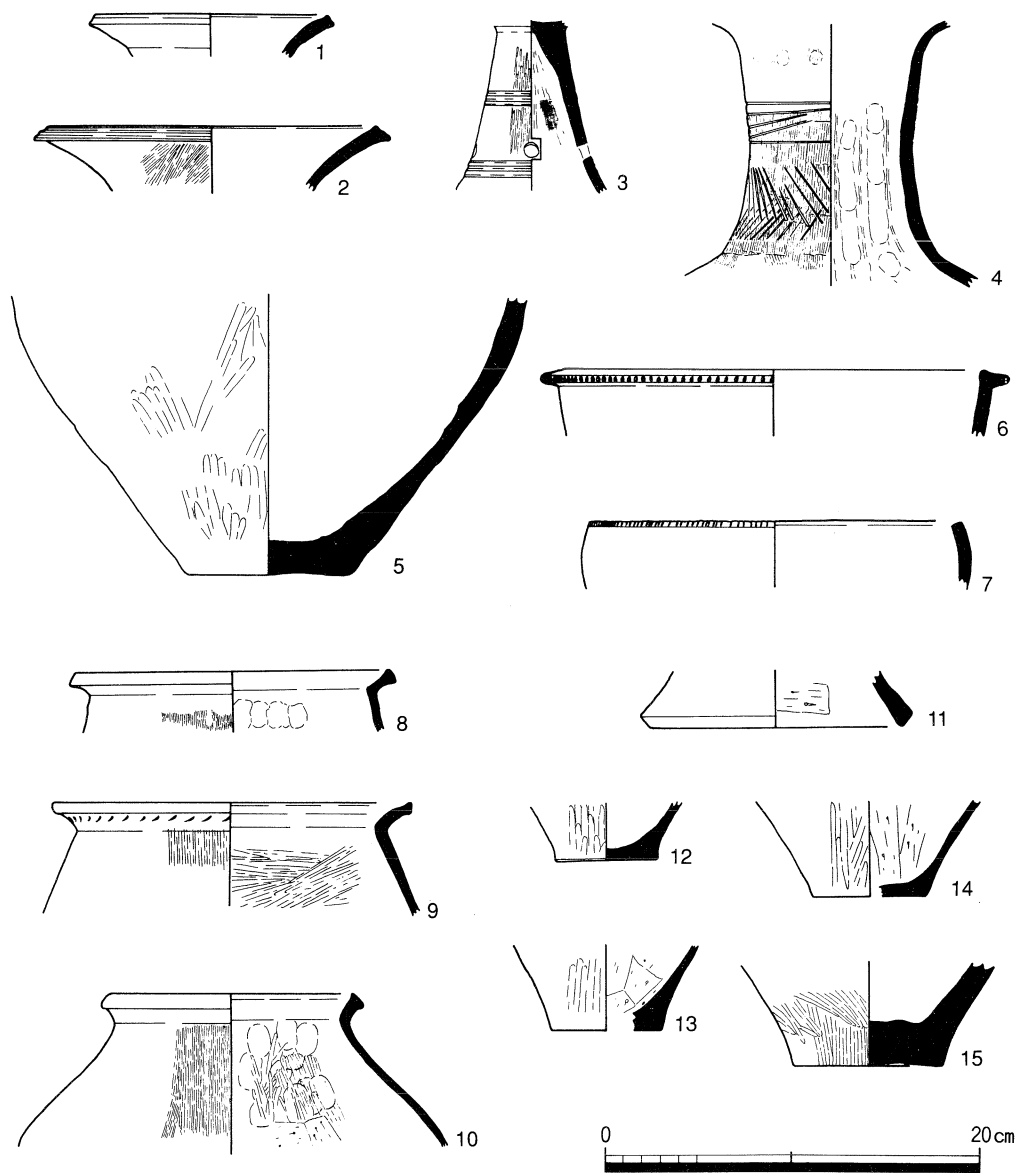


第38図 SR04櫛状木製品出土状態実測図

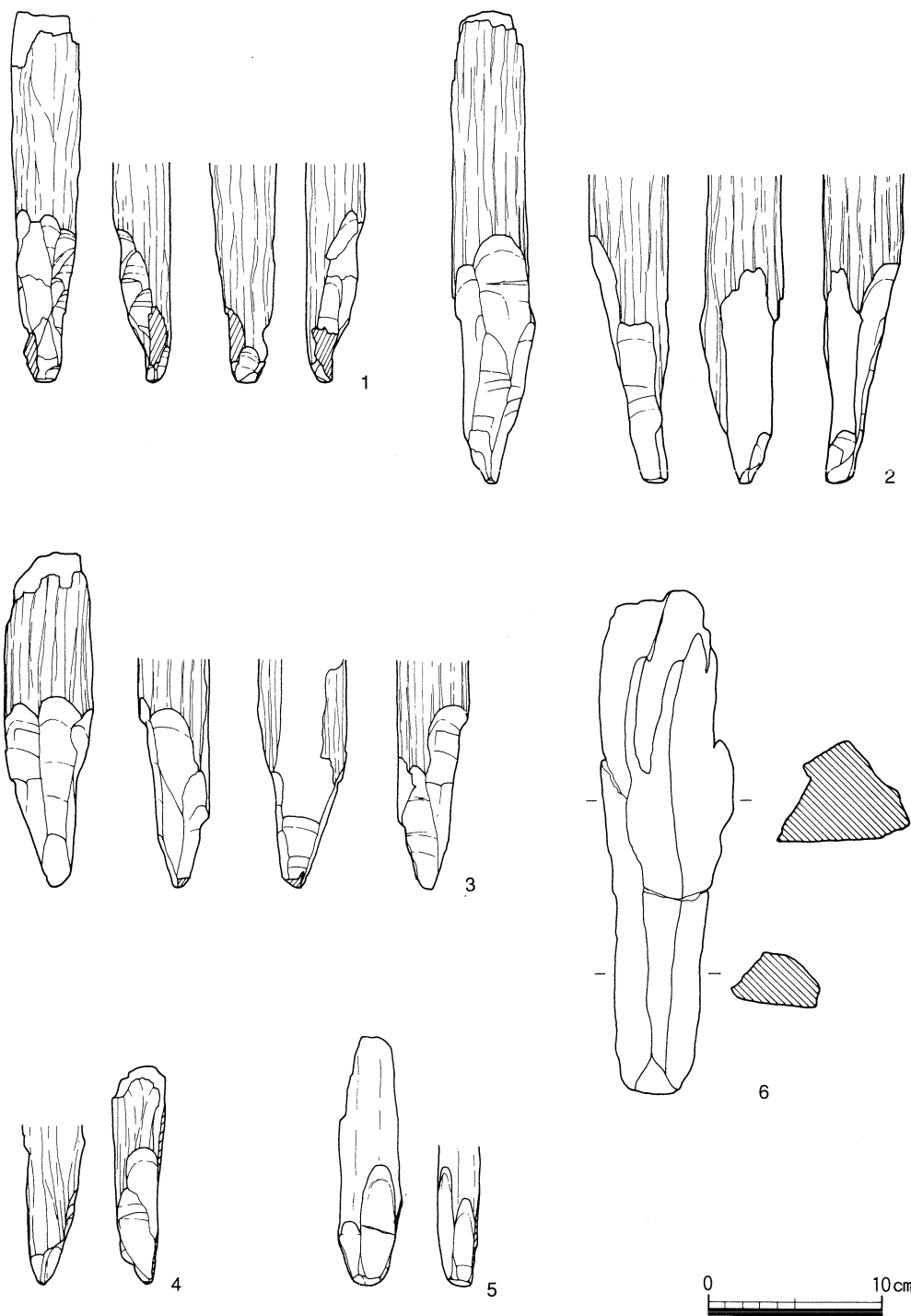
S R04は前述したように弥生

時代後期から埋没が始まり、次第に浅くなるにしたがい水田化されている。特に第5・6・9層は明確な水田となっている。その後、12世紀の段階でも周囲と比較すると若干の低地であり、第3・4層水田の畦畔区画が明瞭に残存している。最終的に完全に埋没し平坦になるのは中世末～近世にかけての時期である。

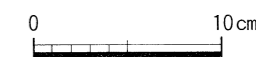
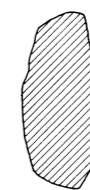
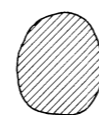
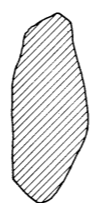
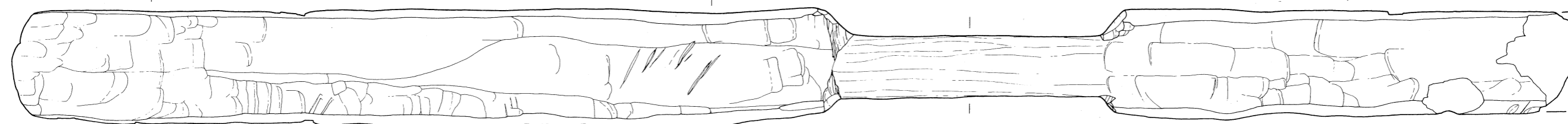
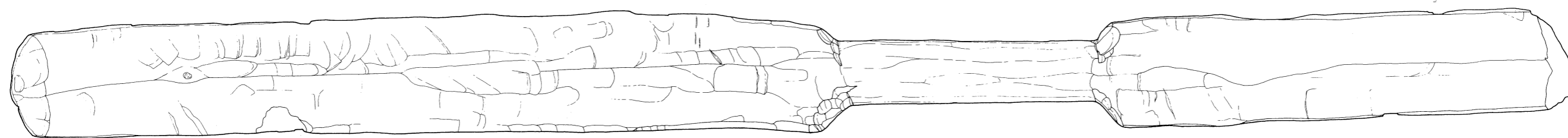
S R04 11～13層出土土器



第39図 SR04出土遺物実測図(1)



第40图 SR04出土遺物実測図(2)



第41图 SR04出土遺物実測図(3)

11層出土土器（第39図1～4）

（1、2）は広口壺である。（1）は口縁端部が若干肥厚する。（2）は端部を上下に拡張し、外面に凹線文を2条巡らせる。（4）は長頸の広口壺である。口縁部および胴部以下を欠損する。直立した頸部から水平に屈曲し、大きく開く口縁部をものものと考えられる。頸部外面にヘラ描沈線文、ヘラ条工具による綾杉文を巡らせる。内面にはナデによる指頭圧痕が顕著に残る。（3）は高杯の脚柱状部である。杯部および脚端部を欠損する。外面上半部および下半部にヘラ描き沈線文を3条つつ巡らせる。下半部沈線文より上に円孔を4孔穿つ。胎土の精良な土器で、備前地域からの搬入品かも知れない。

13層出土土器（第39図5～15）

（5）は壺の底部である。しっかりとした平底をもち、器壁が厚く胎土中に砂粒を多く含む。（6）は甕の口縁部である。逆L字状の口縁をもち胴部は張らずにすぼまる。口縁端部に刻目文を施す。（7）は鉢である。器高が深くなる形態である。口縁端部外面に刻目文を施す。（8、10）は甕である。「く」の字状に屈曲し口縁端部を肥厚させるもので、（8、9）は胴部があまり張らないのに対して、（10）は胴部中央で大きく張る形態をする。（11）は高杯の脚部である（12～15）は底部である。いずれも平底である。（12～14）は甕の底部で、（15）は壺の底部であろう。

木製品（第40～43図）

（1）は丸木であり、上部を欠損し、現存長21cm、径3.4cmを測る。先端部は明瞭な加工が4方向から施されている。3方向から大きく加工され、1方向からは小さな加工である。樹皮は残存する。

（2）は丸木で上部を欠損する。現存長は26.5cm、径は4.5cmを測る。先端部は明瞭な加工が3方向から施され、大きな加工が1方向、小さな加工が2方向である。先端部は平、樹皮を残存。

（3）は丸木で先端部近くのみ残存している。現存長は19cm、径は5.1cmを測る。先端部は6方向からの明瞭な加工が施され、そのうち1方向のみ小さな加工面となっている。樹皮を残存。

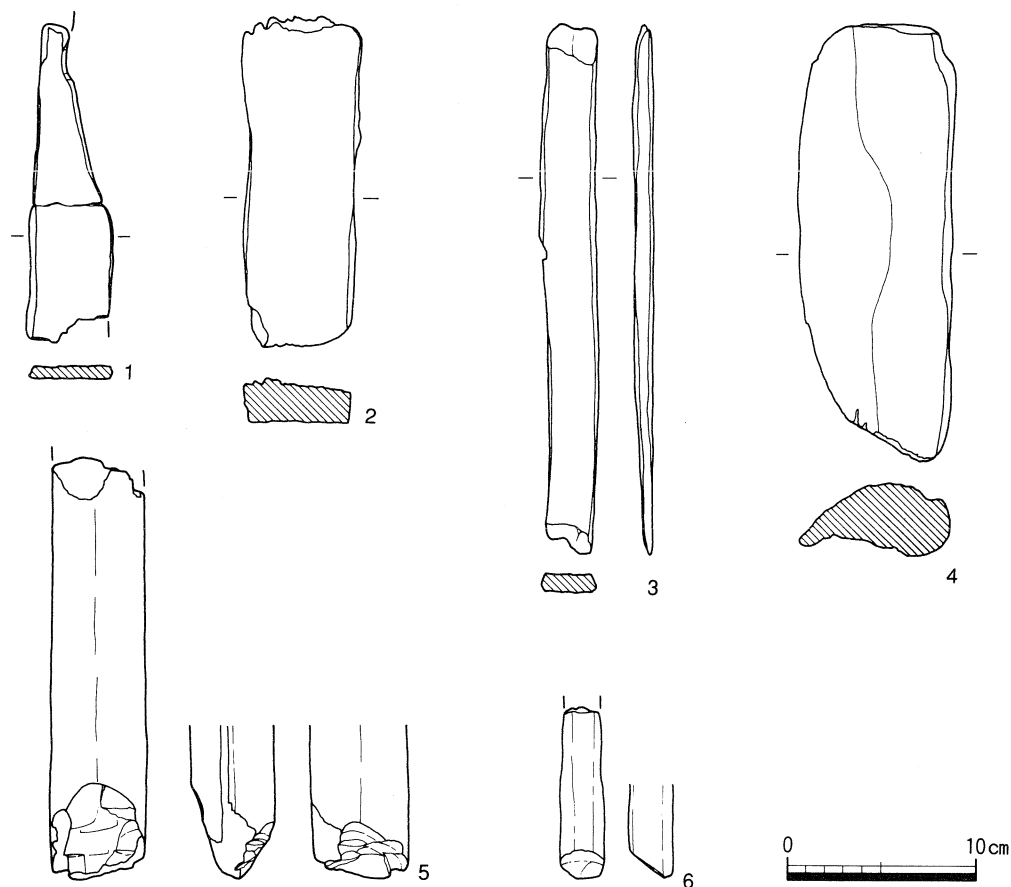
（4）は丸木で先端近くのみ残存している。現存長は12.3cm、径3.5cmを測る。先端部の加工は大きな加工1方向、小さな加工1方向の2方向から施されている。先端は尖っている。樹皮を残存する。

（5）は丸木であるが、1面を欠損する。先端部近くのみを残存し、現存長14cm、径3.5cmを測る。先端部は3方向より加工が施され、さらに先端は細やかな加工面により平らになっている。

（6）は杭列の1本であるが、出土地点は不明。現存長28.9cm、最大径7.7cm、厚さ2.8～6.7cm

を測る。木取りはミカン割りであり、明瞭な加工は見られない。

(1)は櫛状木製品である。一端を欠損するので現存長は140.4cmであるが、推定すると170cm前後になる。中央部は円筒形をなし、長さ22.5cm、径5×4.5cmを測る。ていねいな加工が施され表面がなめらかになっている。水掻部は長さ72、厚さ3.5を測り、断面は扁平である。先端部は2方向からの加工によりしだいに薄くなっている。水掻部は両面とも加工痕が部分的に残っており、中央にわずかな稜線が見られる。中央の握部と水掻部の側面方向から細かな加工が施され、段を有している。本遺物は他に類例がないため、正確な使用目的は不明であるが、その

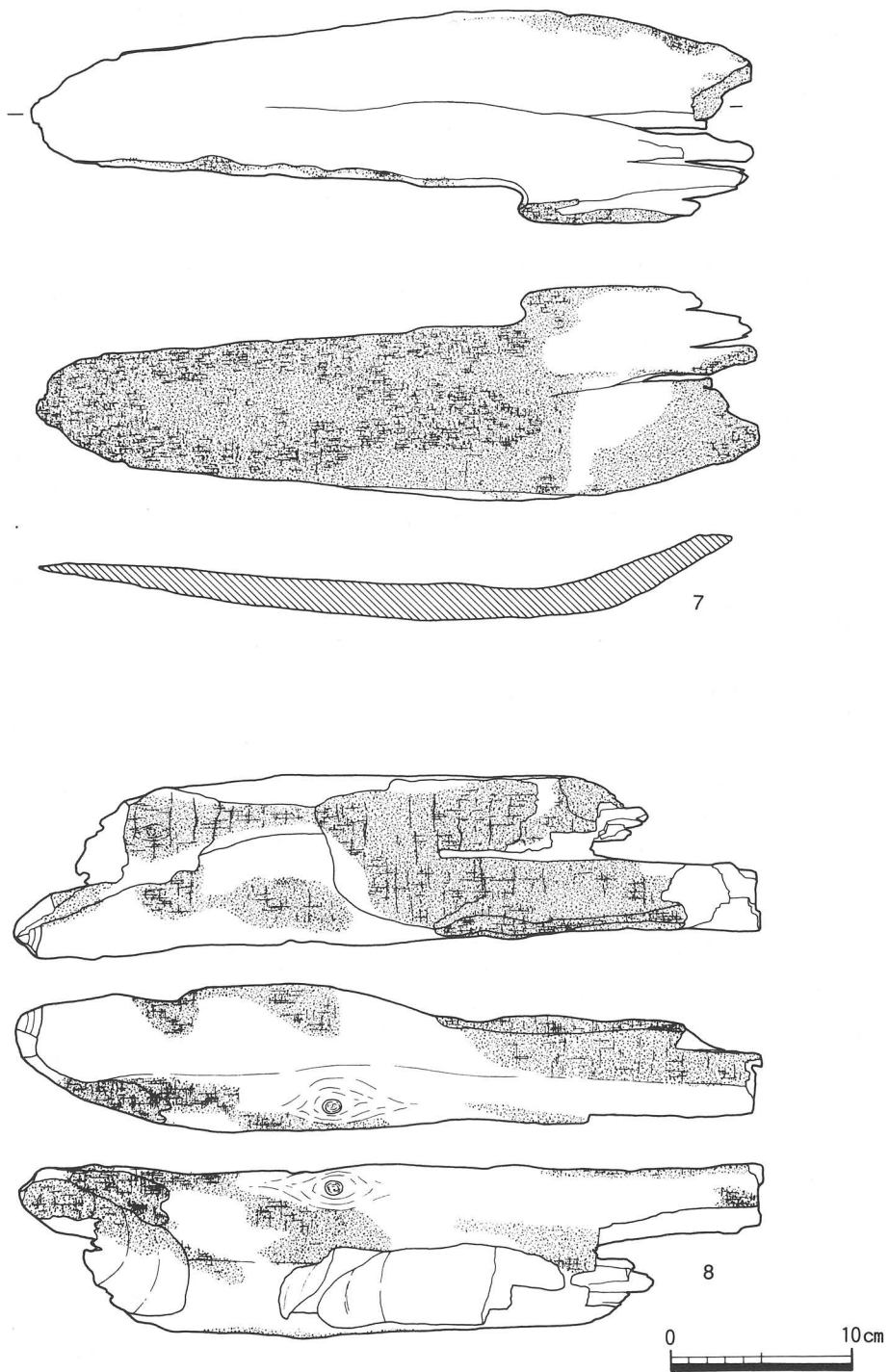


第42図 SR04出土遺物実測図(4)

形状が1人乗りカヌーの櫛ににていることにより、櫛状木製品と名付けた。

(1)は柁目の板材である。現存長は16.9cm、現存幅4.4cm、厚0.7cmである。端部に向かってしだいに細くなり、くびれ部を作っている。全体が残存していないため用途は不明であるが機織具の一種である可能性が考えられる。

(2)は柁目板材であり、現存長17.6cm、幅6.3cm、厚2.3cmを測る。



第43図 SR04出土遺物実測図(5)

(3)は板目の板材である。全長28.2cm、幅6.3cm、厚1cmを測る。両端は1方向からの加工により尖っている。両側面に面取りが見られる。

(4)は板目の板材であるが、面取りは行われていない。全長23.1cm、幅8cm、厚4.9cmである。

(5)先端部加工の丸木である。一端を欠損し、現存長22、径5を測る。加工は2方向から行われ、細かいが明瞭な加工である。先端は尖っている。

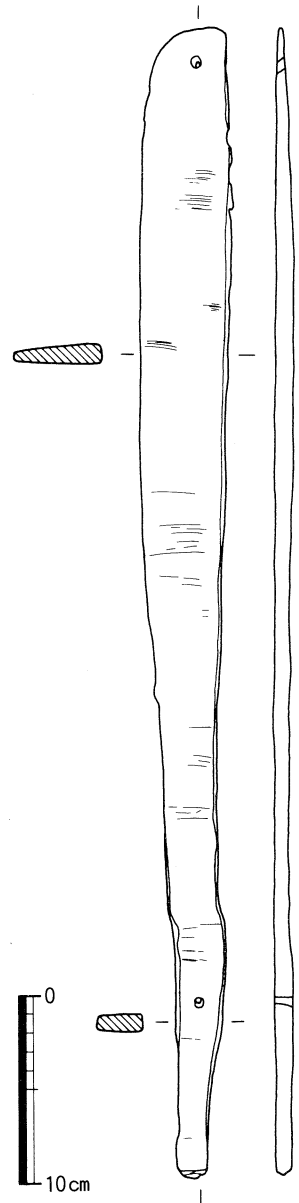
(6)は先端部加工の丸木であり、現存長9.1cm、径2.3cmを測る。先端部の加工は1方向からのみ行われる。

(7)は内湾する板材で、木取りは板目である。全長40cm、幅11.6cm、厚2cmを測る。片面のほぼ全面にわたって焼かれている。加工痕は見られない。

(8)は加工痕のある丸木である。現存長40.5cm、径9cmを測る。部分的に焼かれている。先端部は2方向から大きく加工され、側面の加工は不明瞭だが大きな加工痕である。

試掘トレンチ出土遺物 (第44図)

試掘トレンチの東端の底面より弥生時代後期の土器片とともに出土した。調査の結果、SR04より出土したことが確認された。刃形木製品と考えられ、全長は61.1cm、刃部の幅4.6cm、厚1.5～1.1cm、基部の幅2.4cm、厚1cmを測る。

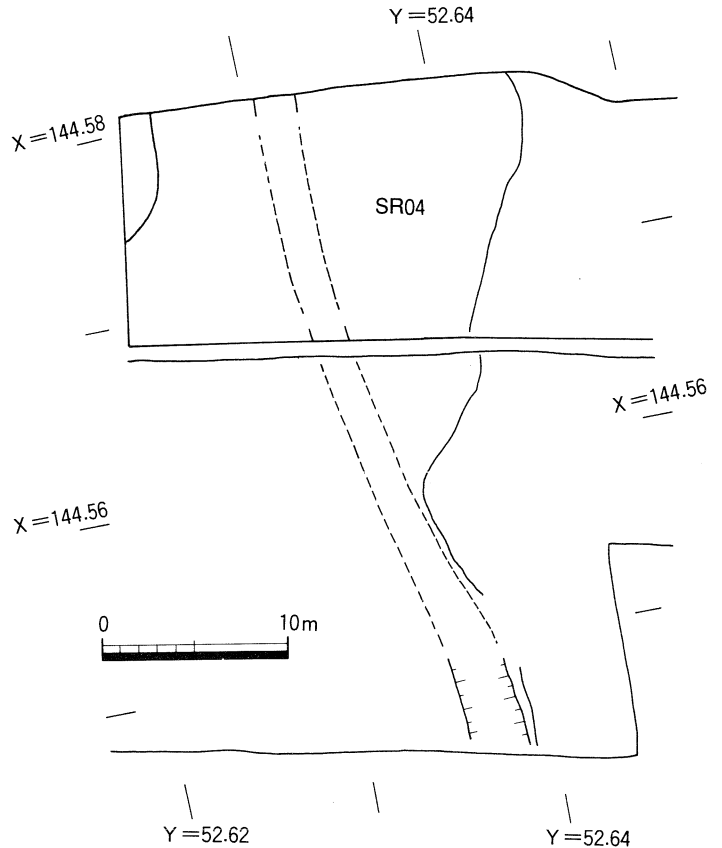


第44図 試掘トレンチ
出土木製品実測図

第5節

1 SD11 (第45図)

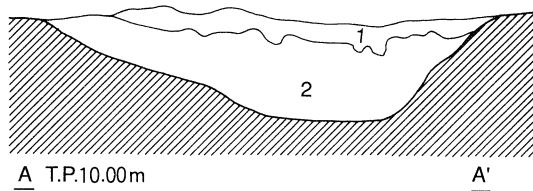
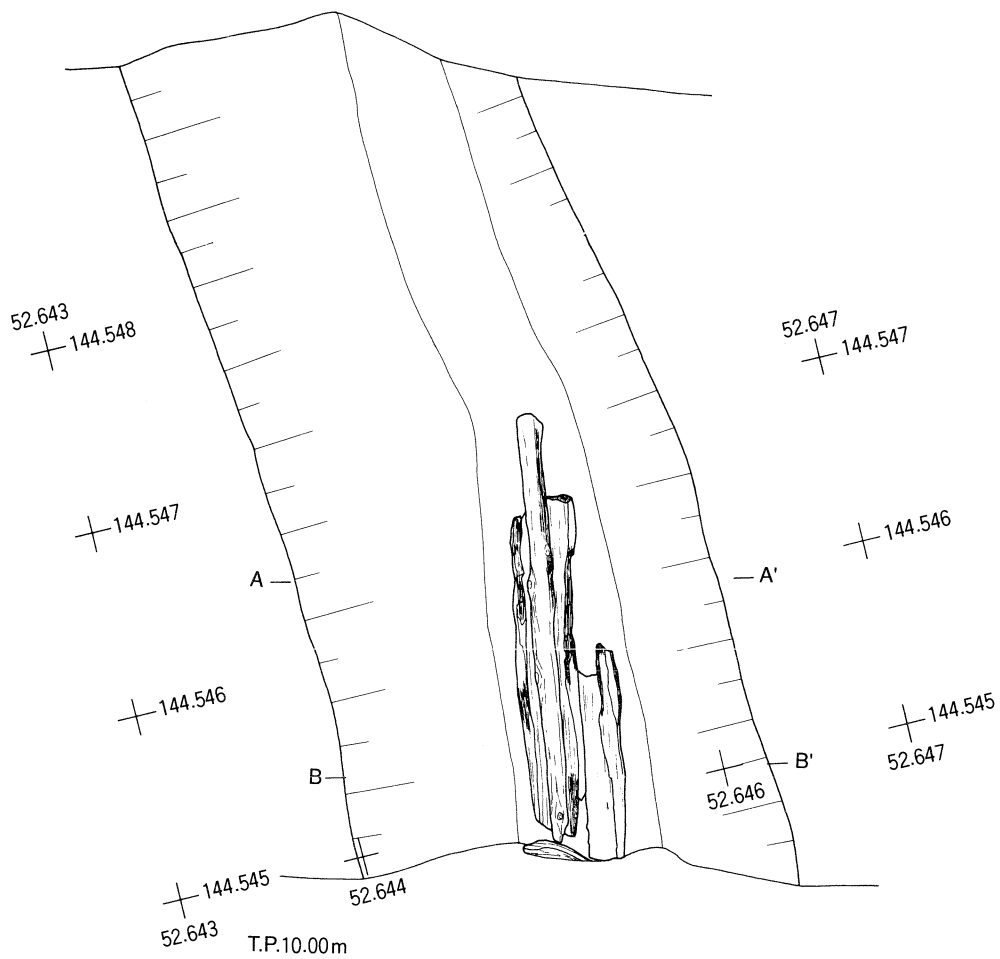
SR04 9 a'層上面で検出した溝である。調査工程の関係から試掘トレンチより南側でのみ平面プランを確認した溝である。北側での土層断面の観察から溝の方位は、N-4°50'-Wでありほぼ真北にむかって流れる。検出長は4.5m、幅2.2m、深さ0.5~0.6cmである。断面形状は逆台形を呈する。地層は上下2層に分層できラミナ状堆積をしていた。上層は黒褐色シルト質極細砂、灰黄褐色シルト質極細砂、下層は黒褐色シルト質極細砂である。出土遺物は木樋2点、弥生土器等が出土している。出土遺物の内、木樋2点は溝底に重なるように検出され、内1点は調査区際まで壁面に入っていた。木樋には焼け焦げた跡が数カ所認められることにより不要になり、溝内に廃棄したものと考えられる。SD11の廃絶時期は溝内から出土した土器は弥生時代後期末の土器があるが、SD11の掘り込み面である9層からは5c末~6c初頭と考えられる須恵器が出土し9a層と9a'層の区別が付きにくいことより9a層上面水田との時期差はないものと考えられ5c末~6c初頭の時期には廃絶しているものと考えられる。



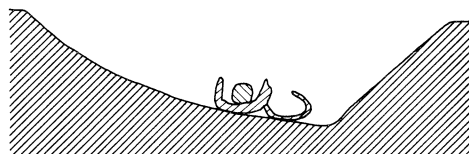
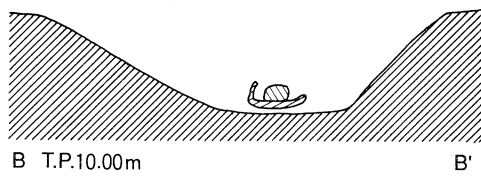
第45図 SD11平面図(推定)

SD11 出土土器(第47図)

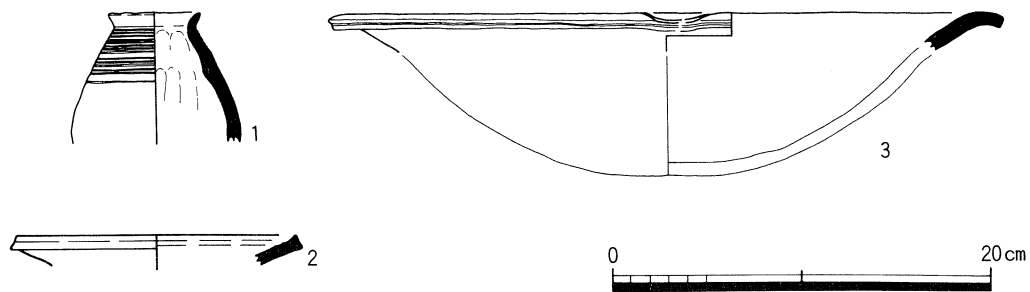
(1)は短頸壺である。短く屈曲する口縁部をもち、やや胴部が張る。頸部から胴部上半にかけて楡描き沈線文を15条巡らせる。(2)は広口壺である。口縁端部を上下に拡張させる。(3)は大型鉢の口縁部である。口縁部は、緩やかに立ち上がり下方に垂れ下る形態を示す。口縁部には若干の凹がみられることより片口がつくものと考えられる。口縁部の破片ではある



- 層序
- 1 黒褐色シルト質極細砂 (7.5Y6/1)
 - 2 灰黄褐色シルト質極細砂 (10YR3/2)



第46図 SD11木樋実測図



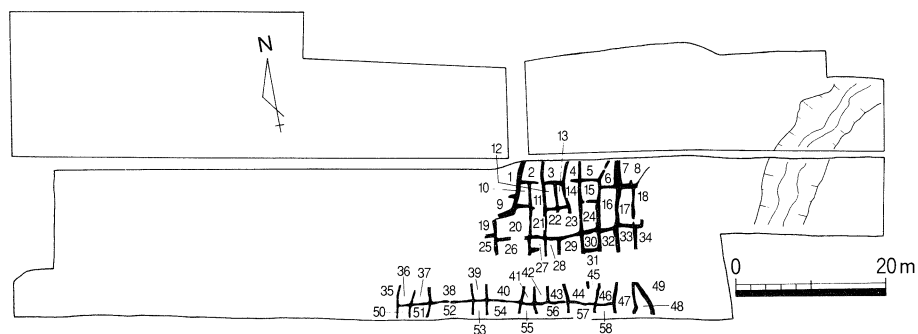
第47図 SD11出土遺物実測図

が器高はあまり深くないものと考えられる。

2 9a層水田（第48図）

本水田は調査区中央から北東方向に流走するSR04の埋没してできた低地だけに検出された。面的調査では北側の水田を検出することはできなかったが、中央と北壁の土層観察によれば9a層の存在が確認され、畦畔状高まりも検出されている。本水田の東・西側は微高地となっており、水田の耕作土はなく、狭い範囲の水田である。

調査区南側で検出された水田は、盛土畦畔により区画された小区画水田であり、検出総数は58面である。しかし、南端に掘削された試掘トレンチにより水田が消滅しており本来はもう少し多い数であったであろう。水田は前述したように旧河道の低地に存在しており、その地形の影響を受けている。水田の区画は一部乱れている部分もあるが全体としては東西と南北方向に畦畔を設けた方格の区画を呈している。南北方向の畦畔はやや東に傾いており、その角度はN-9-Eである。水田一筆の平面形は南北に長辺をもつ長方形が大部分であるが、一部に水田15・30のように正方形を呈するものも見られる。南北方向、すなわち長辺の長さは2.10~6.70mを測り、短辺は0.87~2.40mである。最大面積は水田20の14.10㎡、最小面積は水田13の2.60㎡で



第48図 9a層水田

番号	面積 ^{m²}	標高 ^m	比高差	長辺×短辺 ^m	番号	面積 ^{m²}	標高 ^m	比高差	長辺×短辺 ^m
1	—	9.61	—	—	33	(5.90)	9.65	△7	2.05× —
2	(6.00)	9.55	△3	— ×2.20	34	—	9.70	—	—
3	(7.30)	9.55	△1	— ×2.60	35	—	9.66	—	—
4	(3.75)	9.57	△0.5	— ×1.82	36	(4.60)	9.66	△1	— ×1.82
5	(7.00)	9.57	△0.5	— ×2.30	37	(4.40)	9.68	△1	— ×2.05
6	(3.00)	9.59	△2.5	— ×1.90	38	(11.50)	9.69	△4	5.56× —
7	(4.25)	9.61	△0	— ×1.00	39	(3.50)	9.74	△1.5	— ×1.72
8	(4.50)	9.66	△2	—	40	(8.50)	9.74	△0.5	4.70× —
9	—	9.61	—	—	41	(2.40)	9.74	△0.5	— ×1.30
10	4.60	9.59	3.5	2.77×1.32	42	(3.60)	9.72	△1.5	— ×1.50
11	5.00	9.57	2	3.06×1.68	43	(4.60)	9.71	△3	— ×2.23
12	4.00	9.57	5	3.15×1.31	44	(7.40)	9.71	△3	— ×2.90
13	2.60	9.58	4.5	3.00×0.87	45	(3.20)	9.71	△6	1.31× —
14	※9.25	9.58	2	6.70×1.24	46	(5.25)	9.74	△4	— ×2.04
15	6.10	9.59	2.5	2.40×2.40	47	(8.25)	9.74	△4	— ×2.37
16	10.25	9.61	6.5	5.20×2.06	48	(4.75)	9.79	△2	—
17	8.30	9.63	8	4.80×1.78	49	—	9.82	△4	—
18	※5.40	9.65	△7.5	4.80×0.98	50	(2.30)	9.65	△6	— ×1.55
19	—	9.60	—	—	51	(3.90)	9.66	△2	— ×2.52
20	14.10	9.60	7.5	4.55×2.70	52	(9.30)	9.69	△1.5	5.70× —
21	5.20	9.61	5.5	3.47×1.65	53	(2.50)	9.72	△3	— ×1.60
22	※4.50	9.61	5	3.53×1.40	54	(6.25)	9.72	△1.5	4.00× —
23	※6.00	9.60	4	3.60×0.82	55	(1.50)	9.73	△0.5	— ×2.00
24	6.50	9.59	4.5	3.50×1.92	56	(4.60)	9.72	△3	4.15× —
25	—	9.61	—	—	57	(3.30)	9.74	—	3.35× —
26	(8.10)	9.61	△0	— ×4.15	58	(2.10)	9.76	—	— ×2.40
27	(3.10)	9.62	△2	— ×1.92	最小面積 2.6 ^{m²} 最大面積 14.1 ^{m²} 平均面積 6.46 ^{m²} 最高標高 9.82 ^m (水田番号 49) 最低標高 9.55 ^m (水田番号 2)				
28	(3.25)	9.63	△3	— ×1.56					
29	(6.25)	9.62	△5	— ×2.92					
30	4.10	9.63	2	2.10×2.00					
31	(0.40)	9.65	—	— ×1.95					
32	(6.50)	9.63	△5.5	— ×2.10					

() 検出された面積 ※推定面積 長辺は水の流れに沿った方向とする

第4表 9a層水田面積集計表



第49図 SR04 9a層水田石組畦畔実測図

ある。4 m²台の面積をもつ水田が最も多い。水田のレベルは南から北に徐々に低くなっており、さらに水田域の中央部に向かってやや低くなっている。最高標高は水田49の9.82m、最低標高は水田2・3の9.55mであり、最も低い水田2・3を中心として同心円状に水田が高くなっている。南端と北端での比高差は20mにつき27cmである。一筆の水田内での比高差は最大8cmであるが、多くの水田は2～5cmの範囲である。畦畔は幅20～30cmであり、水田面の高さは1～5cmであるが1～2cmを測る畦畔がほとんどである。水口は10カ所検出され、その大部分は水田の短辺、すなわち東西方向の畦畔に設けられている。これにより、水田への配水方法としては、水口によるものと畦畔越しの掛け流しが併用されていたと考えられる。

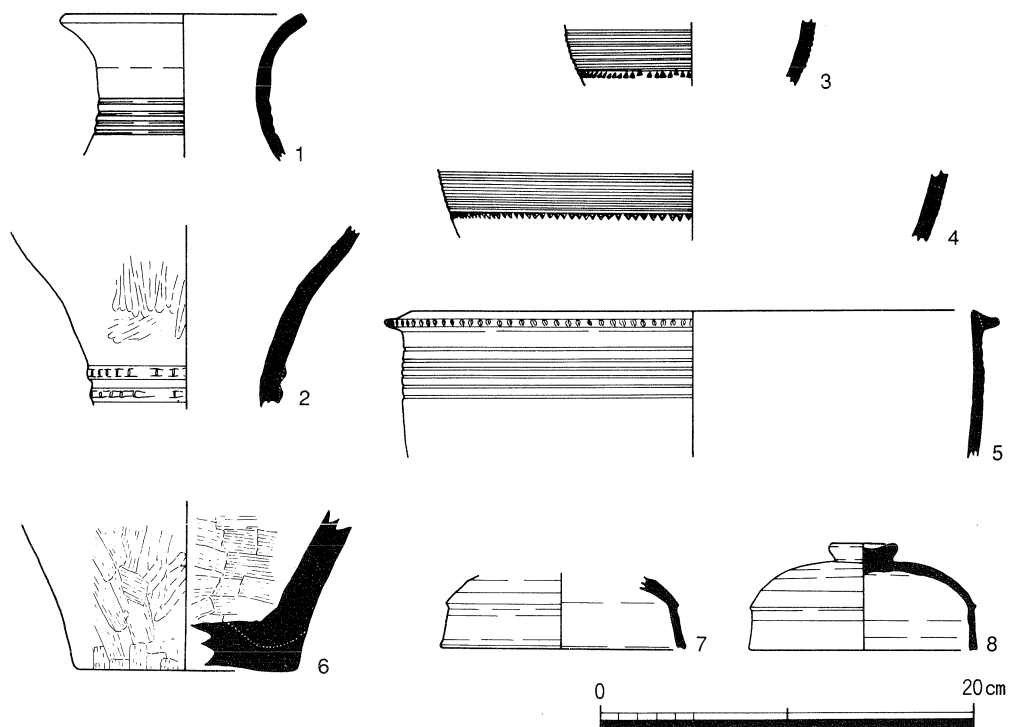
北側の調査区では時間的制約により水田の面的検出はできなかったが、それに伴う二列の石組畦畔が検出された。その方向は北北東であり、挙台から人頭大の石により構成された3カ所の集石である。西側の石組畦畔は2カ所の集石があり、その南側は長さ1.60m、幅0.80mを測り、北側の調査区域外までのびており、検出できた長さは5.75m、幅0.55mである。東側の畦畔の長さ2.60m、幅0.70mを測る。集石のレベルは、西側の南端9.55m、北側で9.40m、東側の集石は9.20mである。2列の石組み畦畔の間隔は約11.5mである。

水田の耕作土は黒褐色シルト質極細砂であり、下層の非土壌層は暗灰黄色シルト質細砂であり、褐鉄鉱、マンガンの集積は不明瞭である。SR04の埋没による低地に存在し、地下水の影響を受けやすいという立地条件やb層の堆積状態から判断すると、この9a層水田は、半湿田的性格を有する水田と考えられる。

出土遺物に基づき、本水田の時期は古墳時代後期初頭（5世紀末～6世紀初）と考えられる。

SR04 9～10層出土土器（第50図1～6）

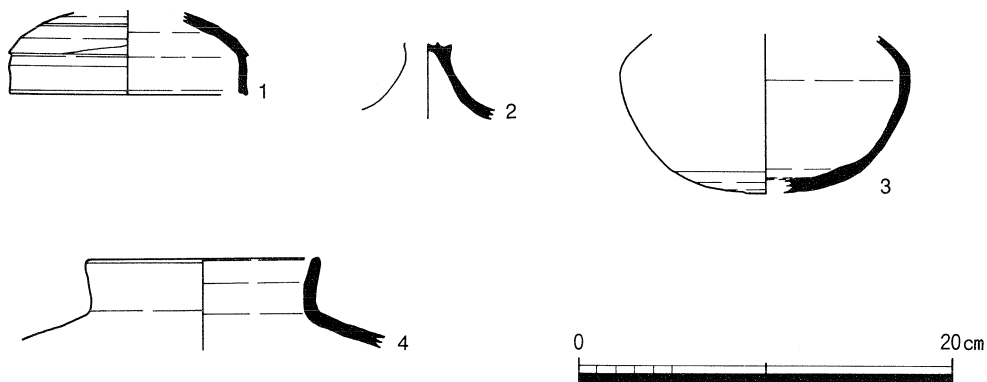
（1、2）は広口壺である。いずれの土器に頸部に文様を巡らせる。（1）はヘラ描き沈線文を4条、（2）は刻目突帯文を2条巡らせる。（3～5）は甕の口縁部である。（3、4）は口縁部を欠損し不明であるが、逆L字状の口縁になるものと思われる。（3、4）は胴部外面ヘラ描沈線文数条、三角形の刺突文を巡らせる。（5）は口縁端部に刻目文、胴部外面にヘラ描沈線文を6条巡らせる。（6）は壺の底部である。器壁は厚いが、胎土中に砂粒を多く含むもろい。（7）は杯蓋である。やや内傾する体部をもち、天井部は高い。天井部から体部への屈曲は鋭く明瞭な稜をもち、口縁部内面に明瞭な稜をもつ。（8）は高杯の杯蓋と考えられる。直立する体部をもち、天井部は高い。体部から天井部への屈曲は鋭く明瞭な稜をもつ。天井部にはつまみがつき、口縁端部内面には明瞭な段をもつ。（7、8）とも胎土は精良で、焼成も良好である。



第50図 SR04 9～10層出土遺物実測図

3 SR04 7層出土土器 (第51図)

(1) は杯蓋である。直立する体部をもち、天井部は高くつくられている。天井部と体部との屈曲は明瞭で鋭い稜をもち、口縁部内面には明瞭な段をもつ。(2) は高杯の脚部である。口縁部および脚端部を欠損する。器高は低く、大きく開く形態をもつ。焼成はあまりよくない。



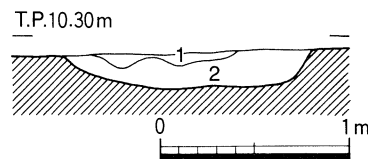
第51図 SR04 7層出土遺物実測図

(3) は壺の体部である。胴部は張るが稜はもたず、底部は丸底である。底部外面にヘラ削りを残す。(4) は甕である。直立気味に立ちあがる口縁をもち、頸部から胴部は屈曲して大きく開き、胴部が張るものと考えられる。調整は内外面ともヨコナデを施し、タタキ等はみられない。

第6節 古代の遺構と遺物

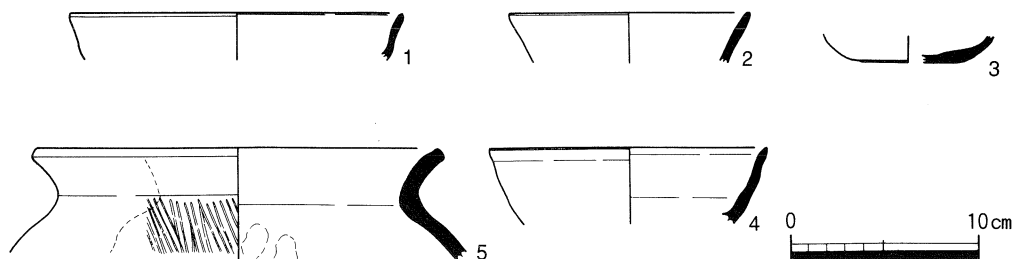
1 SD03 (第52図)

SR04東岸において検出した溝である。同じくSR04東岸において検出したSD05と併走して流れる。溝の方位は南側でN-13° 50' - E、北側でN-24° - Eとなり北側で東に振る。検出長は34m、溝幅1~1.7m、深さ0.17~0.35mを測り南側に比べ北側が深くなる。断面形状はU字形を呈する。



第52図 SD03土層図

土層は2層に分層でき、1層は暗黄褐色シルト質極細砂（細砂を多く含む）、2層も暗黄褐色シルト質極細砂（細砂がラミナ状）である。遺物は若干の土師器、須恵器が出土している。



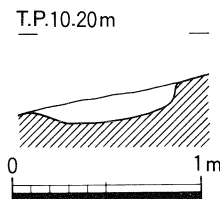
第53図 SD03出土遺物実測図

出土土器 (第53図)

(1)は土師器の皿である。小片であるが直線的に立ちあがる形態である。(2、4)は杯身である。(2)はやや外反しながら立ちあがる形態をもち、(4)は内湾しながら立ちあがる体部をもち口縁端部で外反する。(3)は須恵器の小型壺の底であろうか。(5)は土師器の瓶の口縁である。「く」の字状に屈曲する頸部をもち口縁部は外反する。胴部上半に粗いハケメが観察できる。

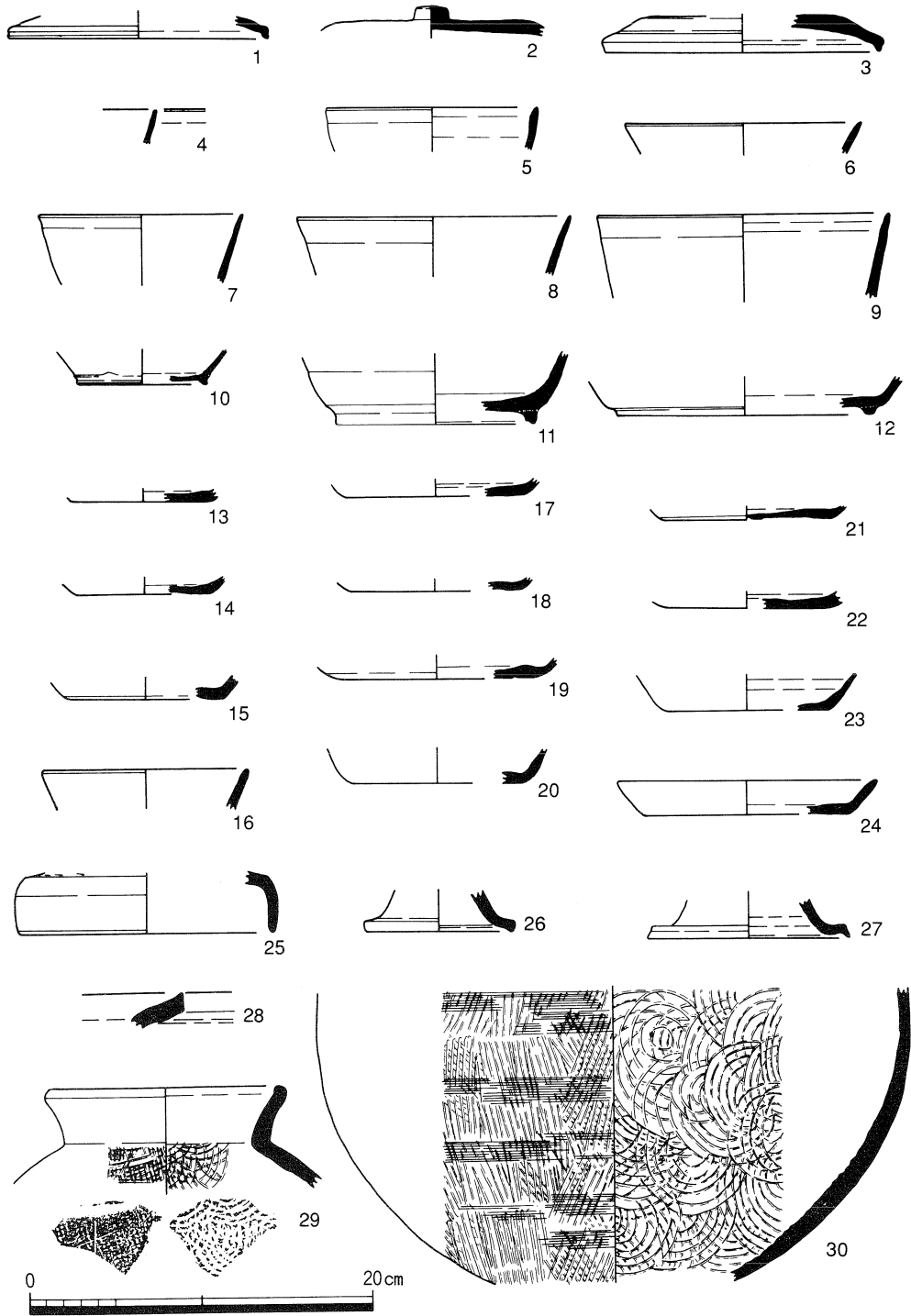
2 SD05 (第54図)

SD04の東肩口で検出した溝で、前述したSD03の西側で併走する。溝の方位は南側でN-8° 50' で、北側はN-25° - Eとなり北端でN-10° - Wとなる。検出長は26mで途中不明瞭な部分がある。溝幅は0.3~1mで北側に比べ南側が幅広い。深さは0.1~0.13mを測る。溝の断面形状はU字形を呈する。土層は単一層で灰褐色シルト質極細砂（粘性が強い）である。出土遺物はないが検出面、埋土より奈良時



第54図 SD05土層図

代頃と考えられる。



第55図 SR04 5~8層出土遺物実測図

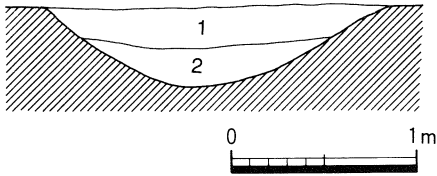
3 SR04 5～8層出土土器（第55図）

(1～3)は杯蓋である。(2)は宝珠のつまみをもち、(1、3)は口縁端部の内側への折り返しがきついものである。(4～12)は杯身である。全様のわかるものはない。口縁部のみでみれば、口径のわりに器高の深い(12)のものや、口径も大きく器高も深い(17)もみられる。高台部でみると、外側にふんばる(10)、高台内側に段をもつもの(11)、逆台形のしっかりしたもの(12)などがあり、まとまりはない。これは時期差によるものと考えられる。(13～16)は杯である。破片ばかりであるが底径8cm程度、口径12cm、器高3～4cm程度の法量をもつものと考えられ、(16)には火襷がみられる。(17～24)は皿である。全様がわかるものは(24)のみで、他は小片が多い。(19～24)をのぞき底径が10cm、器高が2～3cm、口径は13～14cm程度になるものと考えられる。(24)は他のものに比べ底径および口径が一回り大きい。(25)は短頸壺の蓋と考えられるもので、天井部からほぼ90°屈曲して口縁部にむかう形態である。天井部にヘラ削りが認められる。(26・27)は高杯の脚部である(26)に比べ(27)がシャープなつくりである。(28)は土師器の甕の口縁ぶある。端部はつまみあげている。(29)は甕の口縁である。「く」の字状に屈曲し、あまり外傾せずに立ち上がる口縁部で、端部が玉縁状に丸くなる。胴部上半頸部近くに「×」印のヘラ記号がみられる。焼成はやや軟質である。(30)は甕の胴部片である。外面は格子タタキ、内面は同心円のタタキを施すもので、これについても焼成はやや軟質である。これらの土器は時的には7c後半から9c後半のものまで出土しているが、9c後半頃のものが多く占めていることより、ここで新しい時期を採用し9c後半頃と考えたい。

第7節 中・近世の遺構と遺物

1 SD01 (第56・57図)

T.P.10.50m

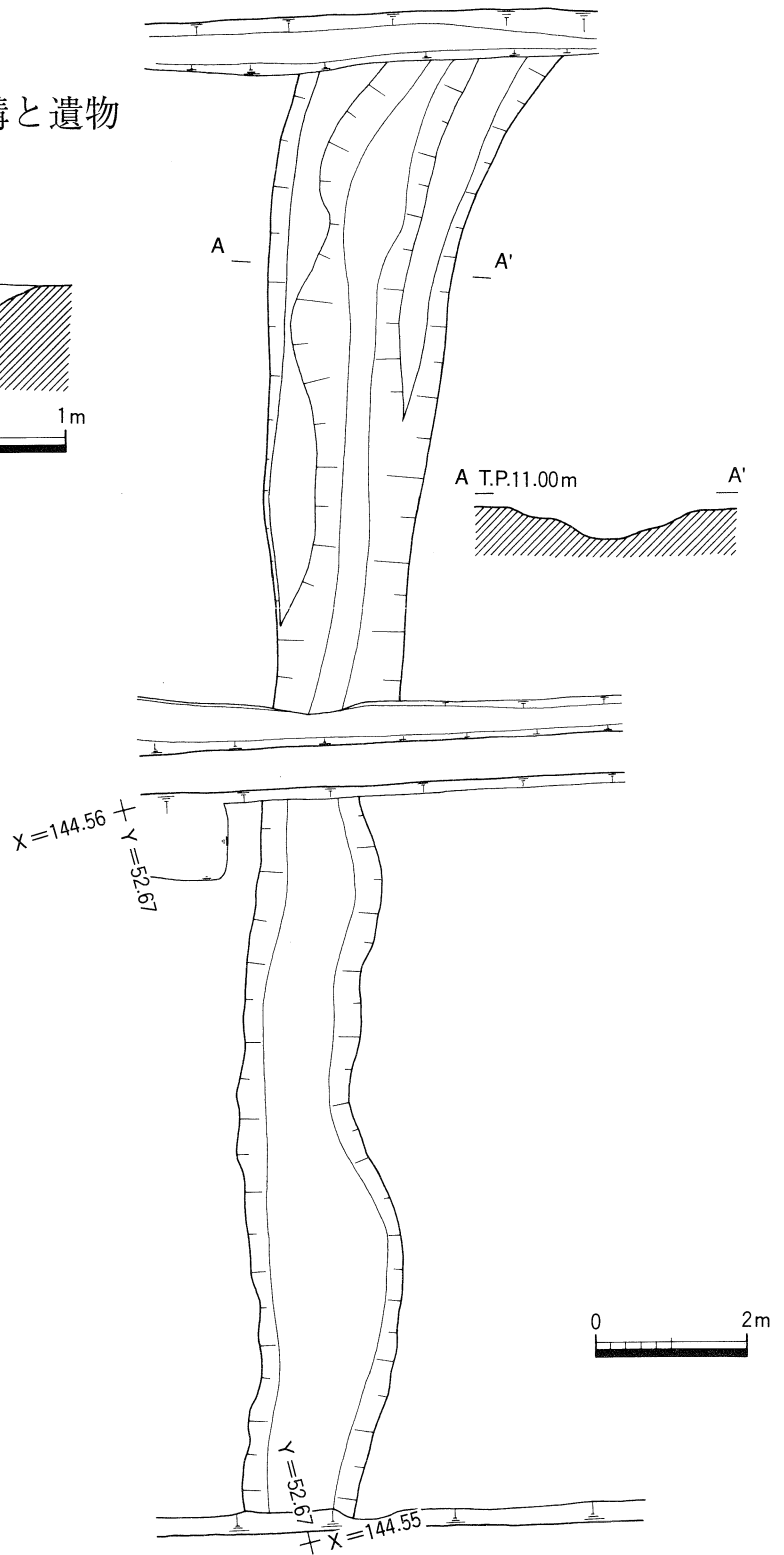


第56図 SD01土層図

2区東端、市道西側で検出した溝である。溝の方位は南側で $N-16^{\circ}-E$ 、北端で東へ振る為 $N-23^{\circ}50'-E$ となる。現在の地割方向に合う南北溝である。総延長19m余りを検出した。溝幅は1.7~2.8mで北側へいくほど幅広くなる。深さは0.26~0.37mである。断面形状はU字状を呈する。土層は上下2層に分層でき、上から褐色シルト質極細砂、灰色細砂である。出土遺物はないが埋土等から考えれば中世前半頃と考えられる。

2 SD08

2区(市道東)の調査区北東隅で検出した溝である。溝の方位は $N-43^{\circ}30'-E$ から $N-61^{\circ}50'-E$ である。検出長8m、溝幅0.35m、深さ0.03mである。断面形状はU字状を呈す



第57図 SD01実測図

る。溝の埋土単一層で白灰色細砂である。出土遺物はないが埋土等から考えれば中世以降の時期が考えられる。

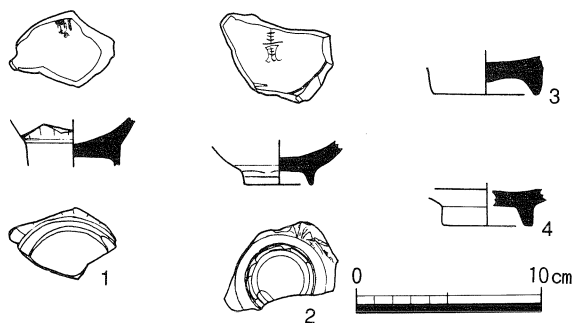
3 SD12 (第58図)

SD03の東側で検出した溝である。溝の方向は南側N-8°-E、北側でN-14°50'-Eであり、大きくみれば現在の地割りに合う溝である。調査区北端から4m弱を検出した。溝幅は0.25m、深さ0.1mを測る。断面形状はU字状を呈する。溝中央部1m強の範囲内に拳大の円礫を溝内に充填させている。他の部分では円礫が確認できなかったことより、水の浄化を行うために円礫をいれたものと考えられる。円礫中から出土した染付磁器から考えて18世紀後半以降の時期が考えられる。

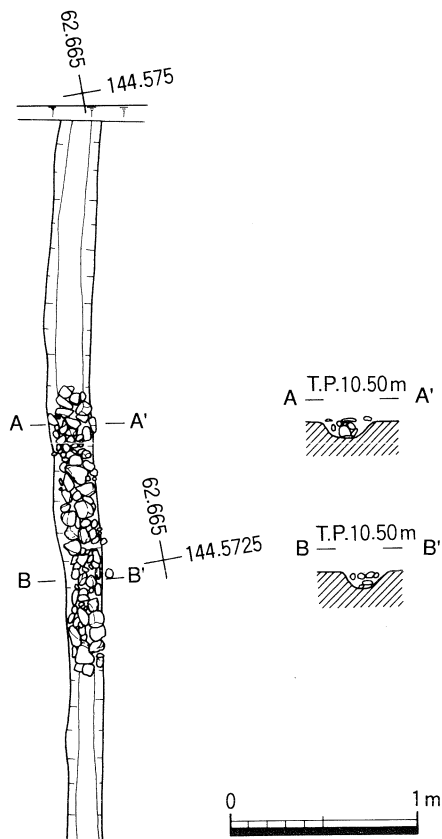
SD12 出土土器 (第59図1~4)

(1、2)は染付の碗である。(1)は広東碗と考えられるものであるが、口縁部および高台を欠損しているため全様は不明である。外面に格子の文様、内面見込み「壽」を崩した文様が描かれている。(2)は厚い素地をもつ丸碗である。外面に草文?および圏線を描き、内面には「壽」の崩した字の文様がみられる。

(3)は青磁の碗である。高台部分は高い高台を有しヘラ削りにより成形する。内面見込みに沈線が一条巡る。高台外面に釉が多く付着する。(4)は唐津系の青緑釉の皿と考えられる。底部は削りだし高台で、内面見込みは蛇の目釉剥ぎを行なう。高台外面は無釉である。



第59図 SD12出土遺物実測図



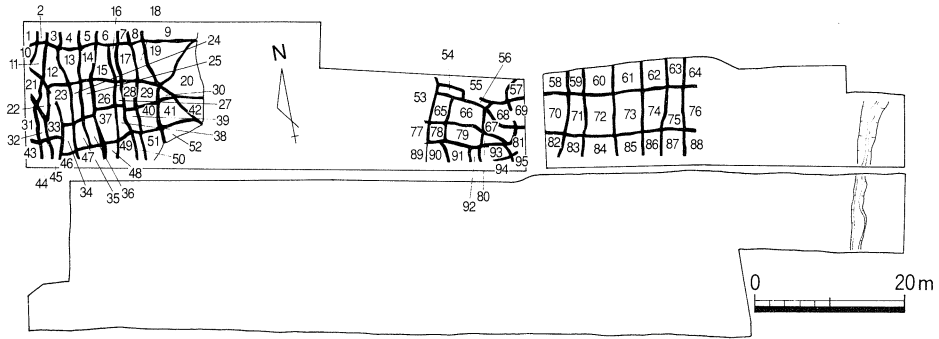
第58図 SD12実測図

4 3a層水田 (第60図)

本水田は、調査区北西隅と中央部において検出された。位置は直下の4a層とほぼ同時期であり、SR03・SR04の埋没がほぼ終わったが周囲と比較すると若干の低地となっている部分に水田が検出された。第節層序に既述したが畦畔による区画された

番号	面積 ^{m²}	標高 m	比高差	長辺×短辺 m	番号	面積 ^{m²}	標高 m	比高差	長辺×短辺 m
1	(0.90)	9.95	△2	—	54	2.90	9.95	1.5	3.42×1.00
2	(1.20)	9.93	△3	— ×1.04	55	(19.25)	9.93	△1.5	9.36× —
3	(2.26)	9.94	△1.5	— ×1.56	56	2.75	9.94	1.5	3.40×0.63
4	(4.50)	9.94	△1	— ×2.10	57	(3.90)	9.96	△2	—
5	(3.30)	9.95	△2	— ×2.08	58	(8.25)	9.96	△4.5	—
6	(4.10)	9.93	△3	— ×2.68	59	(5.00)	9.96	△3.5	— ×1.90
7	(1.10)	9.90	△1	— ×1.05	60	(12.75)	9.98	△7	— ×3.70
8	(2.10)	9.89	△1.5	— ×1.55	61	(13.10)	10.03	△8	— ×3.60
9	(7.30)	9.89	△3	7.35× —	62	(10.90)	10.05	△0	— ×3.12
10	(0.90)	9.96	—	—	63	(7.90)	10.06	△1	— ×2.10
11	4.50	9.96	2	3.75×1.20	64	(6.10)	10.05	△2	—
12	9.76	9.96	2	4.80×1.85	65	7.20	9.96	2	3.54×2.08
13	8.75	9.95	1.5	4.14×2.02	66	12.20	9.98	4	2.93×4.46
14	6.00	9.96	2.5	4.26×1.60	67	7.30	9.98	5	4.25×1.38
15	8.10	9.94	2	4.25×2.00	68	6.25	9.96	5.5	2.70×2.53
16	2.30	9.93	3.5	4.58×0.60	69	(6.60)	9.97	△6	3.40× —
17	8.90	9.92	5.5	4.63×2.10	70	(14.10)	9.99	△3	4.92× —
18	6.50	9.92	5	4.90×1.30	71	10.10	10.00	4.5	5.25×2.20
19	18.60	9.90	4.5	7.00×6.40×5.70	72	17.70	10.00	5	5.18×3.48
20	(20.50)	9.90	△7	7.50×7.15×5.88	73	18.20	10.04	4.5	5.22×3.58
21	(3.80)	9.96	△1	2.60× —	74	14.00	10.04	2	5.18×2.77
22	3.25	9.98	5	3.20×1.00	75	11.75	10.05	2	5.20×2.00
23	8.10	9.98	3.5	5.00×1.65	76	(8.50)	10.07	△0.5	5.46× —
24	4.30	9.96	1	4.70×1.08	77	—	9.98	—	2.55× —
25	6.00	9.96	2	4.35×1.37	78	4.40	9.97	4.5	2.26×2.11
26	8.50	9.96	4	3.44×2.50	79	10.30	10.00	2	4.78×2.12
27	1.70	9.95	1	2.78×1.00	80	2.20	10.00	0	3.10×3.08×1.42
28	4.80	9.95	3	3.30×1.35	81	(6.10)	10.01	△8.5	—
29	5.50	9.93	4	2.73×2.55	82	(6.10)	10.01	△6	—
30	1.70	9.93	1	1.95×1.92×1.50	83	(6.50)	10.03	△5	— ×2.60
31	(3.10)	10.00	△5	5.20× —	84	(10.50)	10.02	△5	— ×4.20
32	2.50	10.00	3.5	3.48×0.84	85	(8.00)	10.06	△3	— ×3.30
33	7.40	10.00	2	5.80×1.90	86	(7.50)	10.07	△2	— ×2.26
34	4.80	9.99	3.5	3.50×1.90	87	(10.10)	10.07	△2.5	— ×2.87
35	4.50	9.98	1	3.30×1.55	88	(3.25)	10.06	△6	—
36	4.90	9.95	0.5	3.60×1.40	89	—	10.06	△3.5	—
37	8.20	9.95	1	4.16×2.42	90	(5.30)	10.04	△5	— ×2.62
38	3.50	9.94	3	3.70×0.90	91	(6.20)	10.01	△6	— ×2.74
39	3.30	9.93	5	2.68×1.50	92	(1.80)	10.02	△6	— ×1.10
40	7.00	9.93	1.5	3.10×2.73	93	※5.60	10.03	7	1.87×3.70
41	10.30	9.92	3	3.20×3.20	94	—	10.05	—	—
42	(5.60)	9.90	△3	4.89×3.77×3.15	95	—	10.04	—	—
43	(1.40)	10.00	△3.5	—	最小面積 1.70 ^{m²} (水田番号27) 最大面積 18.60 ^{m²} (水田番号19) 平均面積 7.13 ^{m²} <東側> 最高標高 10.07 m (水田番号76, 86, 87) 最低標高 9.93 m (水田番号55) <西側> 最高標高 10.00 m (水田番号31, 32, 33, 43, 44) 最低標高 9.89 m (水田番号8, 9)				
44	(2.10)	10.00	△1.5	— ×1.18					
45	(2.50)	9.98	△3.5	— ×0.97					
46	(1.50)	9.99	—	— ×2.30					
47	(4.60)	9.96	△1	— ×3.24					
48	(2.80)	9.97	△3	— ×1.32					
49	(5.20)	9.94	△4	— ×2.25					
50	(2.80)	9.92	△3.5	— ×0.85					
51	(7.10)	9.93	△5	— ×2.52					
52	(7.00)	9.91	△2	5.20×1.50					
53	—	9.97	△2.5	—					

第5表 3a層水田面積集計表



第60図 3a層水田区画図

水田の検出されていないSR03とSR04に挟まれた部分は、土層観察によれば水田層の存在が確認されており、本来は水田面が広がっていたと考えられる。しかし、後世の耕作に伴う削平によって畦畔および耕作土上部は消失してしまったと想定できる。なお、南側の調査区は、時間的制約のために水田面の調査を実施することができなかった。

検出された水田の総数は95面であり、その内訳は西側の水田52面、東側の水田43面である。西側の水田は全体として南北・東西方向に畦畔が設けられ、水田の平面形は原則として長方形を呈している。しかし、畦畔の間隔・方位が不均等であり、方格区画が乱れている。特に、東西方向の畦畔に比べて南北方向の畦畔は不規則な部分が多くなっている。東西方向の畦畔はほぼ磁方位を示している。水田の最大面積は水田19の18.60 m^2 であり、最小は水田27.30の1.70 m^2 となっており、面積のバラツキが著しい。東側の水田区画は一部乱れているがほぼ南北・東西方向に畦畔が設けられており、整然とした方格区画である。南北方向の畦畔は北北東(N-10°-E)を示している。最大面積は水田73の18.20 m^2 、最小面積は水田56の2.75 m^2 であり、小面積の水田は少なく、ほぼ均等な面積の方格区画水田である。検出された東・西側の水田95面のうち一筆を完全に検出することができた水田の中で、最大面積は水田19の18.60 m^2 、最小面積は水田27・30の1.70 m^2 である。4 m^2 台と8 m^2 台の面積の水田が最も多い。

畦畔は、盛土畦畔であり、幅20~40cm、水田からの高さ1~3cmを測り、ほぼ均一である。区画の基準となるような畦畔は検出されなかった。

水田のレベルは東西の水田で異なっている。西側の水田は南西から北東になるにしたがい低くなっている。最高標高は、水田31・32・33・43・44であり10.00mを測り、最低標高は水田8・9の9.89mである。その比高差は15mにつき11cmである。一筆の水田内での最大比高差は5.5cmであるが、1~2cmの間の比高差をもつ水田が最も多く平均的である。東側の水田は、南東から北西に向かってしだいに低くなっている。最高標高は10.07mであり、水田76・86・87が最も高くなっている。最低標高は9.93mであり、水田55である。その比高差は約30mにつ

き14cmである。一筆の水田内での最大比高差は7cmであるが2cm前後の水田が最も多い。水口は全く検出されなかった。配水方法は畦畔越しの掛け流しであったと考えられる。本水田に伴う用水路は検出されなかったが、同時期であるS D01と何ら関係があったと考えられる。

水田の耕作土は褐灰色シルト質極細砂、下層の非土壌層はにぶい褐色シルト質極細砂であり、褐鉄鉱の集積が見られる。上面は近世の水田が堆積し、特にS R04の低地部分は数層多くの水田が堆積している。

本水田の立地条件や褐鉄鉱の有無により、本水田は乾田である可能性が高い。その区画はほぼ現地表地割りと同方向であり、条里制地割による大区画の内部を小区画に細分したものである。出土する遺物は、12世紀末～13世紀初に属するものであることから、本水田の時期もその時期であると考えられる。

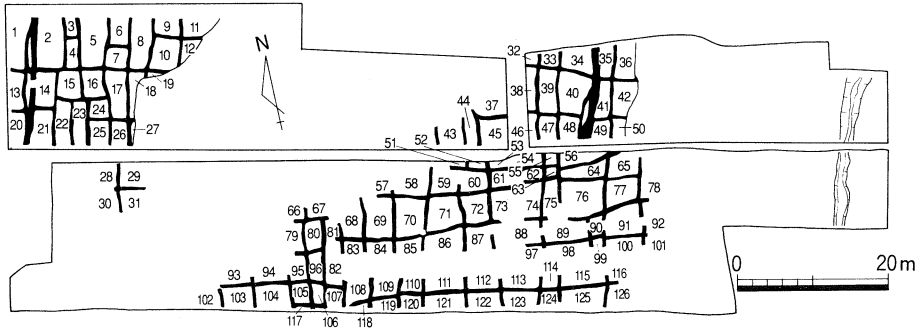
5 4 a 層水田 (第61図)

本水田は、調査区北西隅と中央部にある若干の低地において検出された。周辺の微地形を簡単に復原すると、水田のある低地はS R03・04の埋没によってできたものであり、二つの旧河道の間は砂礫層を基盤とする中州状の微高地となっている。一方、S R04の東側は、黄灰色シルトの微高地が広がっている。このような地形の中で、畦畔により区画された水田が検出されたのは低地のみであるが、第3章第2節層序で既述したように土層観察では中州状の微高地状にも4 a層が検出されており、水田がつながっていたであろう。しかし、上層の第3層水田の耕作に伴う削平により、その畦畔および耕作土上部は消失してしまった。

検出された水田は、中州状の微高地を挟んで東西2カ所に分かれているが、共に方格状地割の小区画水田である。水田の総数は西側31面、東側95面であり、合計すれば126面を数える。水田の区画は南北・東西方向の畦畔によって非常に整然とした方形を呈し、南北の畦畔は北北東(N-10°-E)に傾斜している。水田17・39を代表とする長方形の水田と水田7・24・71を代表とする方形の水田がある。長方形の水田は、長辺を南北方向にもっている。その長辺の長さは1.15～4.82mを測る。西側の水田の中で最大面積は水田14の15.10m²であり、最小面積は水田24の5.60m²である。東側の水田では、最大面積は水田76の28.40m²、最小面積は水田63の2.50m²である。一筆を完全に検出することができた水田の最大面積は水田76であり、一方最小面積は水田63である。面積はバラツキがあるが、7m²台の面積を測る水田が最も多い。

畦畔は盛土畦畔であり、幅30～40cm、水田面からの高さ1～4cmを測る。区画の基準となるような畦畔は抽出することができなかった。しかし、西端と東端に幅の広い畦畔が南北方向に検出された。他の畦畔と比較すると、高さは同じであるが幅は2～3倍である。

水田のレベルは大局的に南から北に次第に低くなっており、東側と西側の水田では若干レ



第61図 4a層水田区画図

ベルが異なっている。西側の水田の最大標高は、水田31の10.04 mであり、最低標高は水田6の9.77 mであり、ほぼ方位にしたがって低い水田となっている。一筆の水田内での標高差は最大6 cmであり、平均として2～3 cmである。東側の水田の最大標高は水田101であるが、この水田は検出面積が狭く不确实要素が多いため、除外することとする。次に標高の高い水田は100・116・126であり、標高は10.20 mを測る。最低標高は水田32の9.89 mである。最も低い水田32を中心として同心円状に高い水田が配置されている。南端と北端の標高差は約32 mにつき23 cm下がっている。一筆の水田内での比高差は、最大10 cmであるが2 cm前後の水田が最も多い。

配水方法は、全く水口が検出されていないため畦畔越しの掛け流しによると考えられる。本水田に伴う用水路は見つかっていないが、東側微高地にあるSD01がほぼ同時期でありこの溝と本水田は何らかの関連があると考えられる。

水田の耕作土は褐灰色シルト質極細砂、下層の非土壌層は褐色シルト質極細砂であり褐鉄鉱が集積している。上面は第3 a層の水田のb層により覆われている

本水田は、高い位置にあるという立地条件や褐鉄鉱の集積から考えると乾田の可能性が高い。現地表の地割とほぼ同方向の方格地割であり、条里制地割に基づく大区画の中の小区画水田であろう。

出土遺物に基づき、本水田の時期は中世前半（12世紀末～13世紀初）に比定され、上層の3 a層水田もほぼ同時期である。

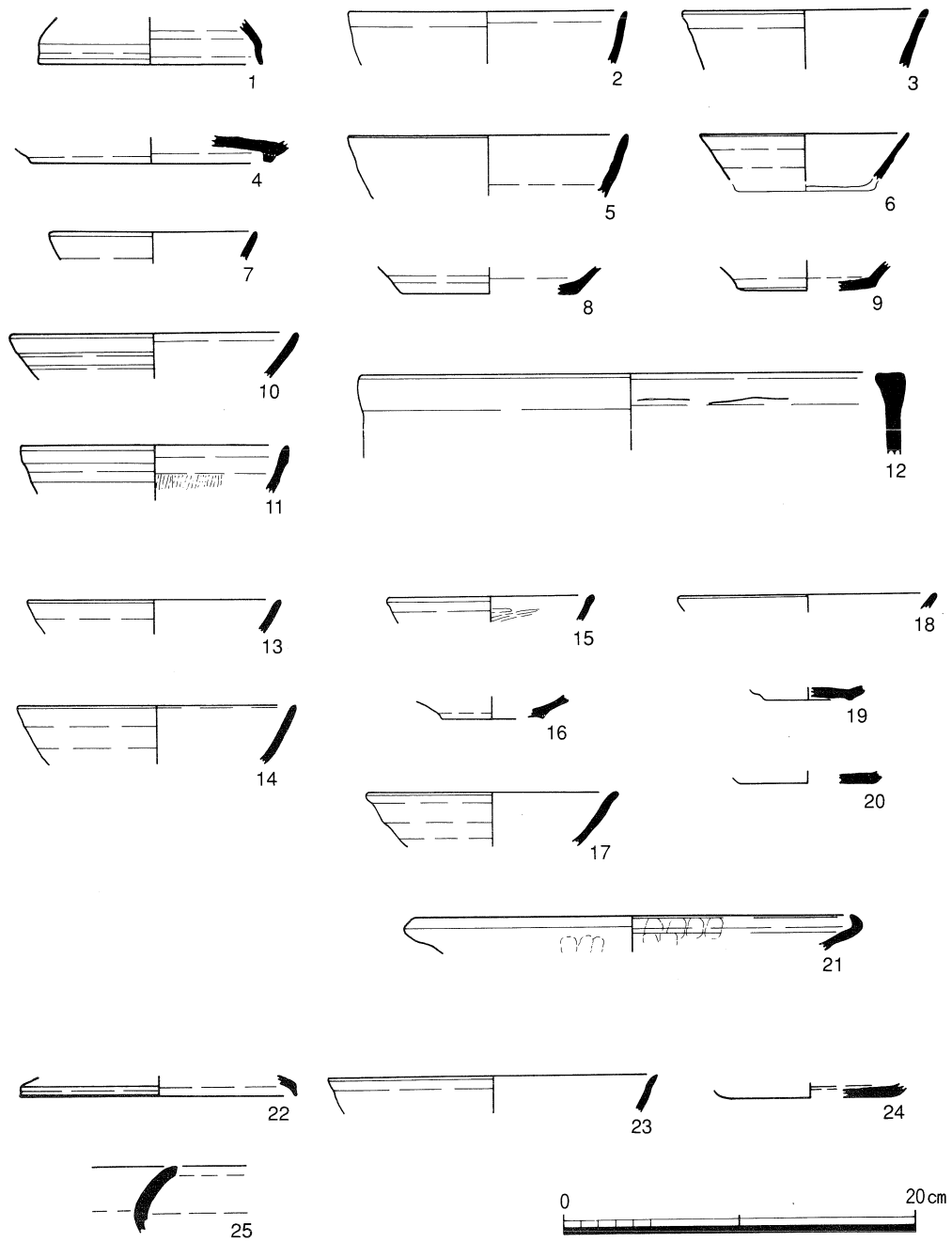
3 a b層出土土器（第62図）

4 a層水田を検出する段階で出土した土器である。これらの土器が4 a層水田の下限を示す。（1）は須恵器の杯蓋である。天井部から口縁部にかけて屈曲する稜はあまり明瞭ではなく、口縁端部は若干外側に開く。（2、4）は須恵器の杯身である。（2）は口縁部の破片で、やや内湾しながら立ちあがる体部をもち、端部はやや尖る。（4）は杯身の高台部分で、断面台形

番号	面積㎡	標高m	比高差	長辺×短辺m	番号	面積㎡	標高m	比高差	長辺×短辺m	番号	面積㎡	標高m	比高差	長辺×短辺m
1	(13.00)	9.80	△ 4	—	46	(3.40)	9.95	△ 0.3	—	91	19.40	10.16	10	5.06×4.06
2	(23.00)	9.80	△ 4	— ×3.70	47	(6.80)	9.93	△ 1	— ×2.35	92	—	10.12	0	4.17× —
3	(3.30)	9.78	△ 2	— ×1.50	48	(6.90)	9.94	△ 2	— ×2.84	93	—	10.14	—	—
4	6.75	9.82	2	3.78×1.45	49	(4.40)	9.97	1	2.47× —	94	(4.15)	10.13	—	4.60× —
5	(21.40)	9.79	△ 5	— ×3.37	50	(4.00)	9.96	△ 6	—	95	※ 8.14	10.12	2	3.54×2.30
6	(7.80)	9.77	△ 6	— ×2.31	51	(1.70)	10.08	—	—	96	6.25	10.11	2	3.80×1.75
7	6.90	9.82	6	2.70×2.65	52	(2.50)	10.05	—	— ×2.50	97	—	10.07	—	—
8	(15.90)	9.80	△11	— ×2.64	53	(3.65)	10.02	—	—	98	(4.30)	10.10	—	6.15× —
9	(7.50)	9.78	△ 1	— ×3.22	54	(5.20)	10.03	△ 2	—	99	(1.80)	10.12	—	— ×1.40
10	※14.50	9.81	6	4.24×3.40	55	(3.00)	10.05	△ 0	— ×1.69	100	(5.44)	10.20	—	5.18× —
11	(9.50)	9.81	△ 4	—	56	(7.80)	10.08	3	6.63× —	101	—	10.22	—	—
12	(4.60)	9.81	△ 5	—	57	—	10.06	—	—	102	—	10.15	—	—
13	(7.50)	9.86	△ 3	5.00× —	58	—	10.08	△ 2	— ×4.81	103	(11.10)	10.13	△ 2	— ×4.30
14	15.10	9.84	4	4.50×2.65	59	※12.40	10.10	2	3.70×3.30	104	(14.25)	10.13	△ 3	— ×4.82
15	11.00	9.84	5	3.66×3.25	60	※10.36	10.10	1	3.72×2.80	105	5.90	10.12	4	2.75×2.15
16	9.10	9.84	3	3.50×2.50	61	(5.70)	10.04	△ 3	— ×2.22	106	4.40	10.12	4	2.88×1.62
17	14.30	9.87	2	6.25×2.30	62	(3.80)	10.07	0	— ×1.57	107	(4.90)	10.16	△ 4	— ×2.05
18	(6.25)	9.89	1	6.04× —	63	2.50	10.08	2	1.55×1.36	108	(10.25)	10.12	△ 2	— ×3.20
19	(1.30)	9.85	—	—	64	9.30	10.11	5	6.45×1.74	109	(7.80)	10.09	△ 2	— ×3.50
20	(7.90)	9.89	△ 2	—	65	※12.50	10.07	8	4.24×3.02	110	(4.60)	10.12	△ 0	— ×3.07
21	(11.75)	9.84	△ 1	— ×2.70	66	—	10.12	—	—	111	(8.90)	10.10	6	5.45× —
22	(11.90)	9.86	△ 1	— ×2.15	67	—	10.12	—	—	112	(7.00)	10.12	△ 0	— ×4.25
23	(10.10)	9.84	△ 3	— ×1.75	68	—	10.09	△ 4	— ×2.90	113	(7.60)	10.10	△ 2	5.00× —
24	5.60	9.84	3	2.45×2.38	69	※20.80	10.06	1	5.50×3.90	114	(3.80)	10.13	△ 3	— ×2.25
25	(7.40)	9.86	△ 6	— ×2.50	70	21.10	10.05	2	5.10×4.08	115	(7.90)	10.17	8	6.26× —
26	(6.10)	9.87	△ 6	— ×2.10	71	20.25	10.06	3	4.85×4.40	116	—	10.20	—	—
27	(1.20)	9.88	△ 4	—	72	18.70	10.08	1	3.88×3.25	117	—	10.16	—	—
28	—	9.99	—	—	73	(10.10)	10.08	1	3.92× —	118	—	10.12	—	—
29	—	10.02	△ 3	—	74	(10.10)	10.06	1	4.70× —	119	(4.10)	10.09	—	— ×3.70
30	—	10.02	—	—	75	11.80	10.09	2	4.95×2.34	120	(4.30)	10.08	△ 3	— ×2.97
31	—	10.04	△ 1	—	76	28.40	10.13	6	5.92×4.82	121	(8.10)	10.11	9	5.66× —
32	(1.80)	9.89	—	—	77	14.10	10.12	5	4.48×3.11	122	(7.10)	10.12	△ 0	— ×4.40
33	(4.60)	9.89	△ 1	— ×2.40	78	—	10.11	—	—	123	(7.30)	10.14	△ 1	— ×4.67
34	(10.60)	9.87	△ 2	— ×4.10	79	—	10.13	0	3.90× —	124	(3.65)	10.12	5	2.50× —
35	(6.00)	9.92	△ 4	— ×1.82	80	8.20	10.12	2	3.90×2.26	125	(12.40)	10.19	10	6.00× —
36	(11.30)	9.96	△ 4	— ×2.58	81	※ 5.00	10.10	2	2.65×1.88	126	—	10.20	—	—
37	—	9.91	—	—	82	※13.80	10.13	5	6.00×2.30	最大面積 28.40㎡ (水田 76) 最小面積 2.50㎡ (水田 63) 平均面積 12.28㎡ 〈東側〉 最高標高 10.22m (水田101) 最低標高 9.89m (水田 32) 〈西側〉 最高標高 10.04m (水田 31) 最低標高 9.77m (水田 6)				
38	(6.10)	9.90	3	5.66× —	83	(4.00)	10.08	△ 2	— ×2.22					
39	13.20	9.90	5	5.70×2.20	84	(5.20)	10.06	△ 2	— ×3.58					
40	18.35	9.92	4	5.38×3.70	85	(5.50)	10.04	△ 2	— ×3.62					
41	7.10	9.93	3	5.50×1.60	86	(13.60)	10.06	△ 4	5.50× —					
42	(13.10)	9.95	1	4.58× —	87	(10.60)	10.10	△ 2	— ×3.43					
43	(13.30)	9.99	△ 4	— ×3.30	88	※21.30	10.06	3	6.64×3.18					
44	(12.90)	9.95	△ 4	— ×1.60	89	17.25	10.06	8	6.07×2.80					
45	(10.80)	9.92	△ 6	—	90	4.10	10.14	0	2.60×1.62					

第6表 4a層水田面積集計表

※推定面積 () 検出された面積 △以上 (未定)



第62図 SR04 3~4層出土遺物実測図(1)

の高台をもち、底部中央がややあがる。あまり器高は高くならないものと考えられる。(3、5)は土師器の杯である。体部は直線的に外側へのびる。口径は(3)が14cm、(5)は16cmである。器高は4cm程度になるものと考えられる。(6~9)は須恵器の杯である。ヘラ切りを行った底部から直線的にのびる体部をもち、口縁部付近に炭素が吸着した部分がある。底径は8cmのものと、10cmのものがある。口径12cmのものと、推定14~15cmのものがあり、器高は4cm程度になるものと考えられる。(10、11)は須恵器の椀である。内湾気味に立ちあがる体部をもつ。(11)のように板ナデによりハケ目がつくものもある。(12)は土師器の土鍋であろうか。

3層出土鉄器(第63図)

鋤先 大部分を欠損し、左側面部を残すみの破片であるが、U字形の鋤先になるものと考えられる。風呂部に固定される返りも一部分残存している。材質は鉄である。

3b層出土土器(第62図)

4a層水田を削り出す段階で出土した土器である。

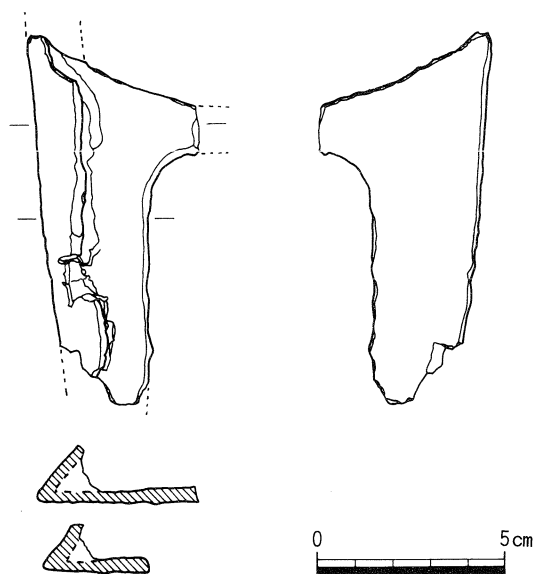
(13、14、18、19)は黑色土器の椀である。内湾気味に立ちあがる体部をもち、口縁部は丸く終わる。いずれも黑色土器のB類である。(19)は底部である。底径5cmのもので、高台の断面は半円形で高さは高くない。(15、16)は瓦器の椀である。(15)

は内湾気味に立ちあがる体部をもつもので口縁端部で外反する。(16)は底部である。底径は6cmで高台は断面三角形の形態をする。(17)は土師器の椀である。内湾気味に立ちあがる体部をもち、口縁端部で外反する。(20)は須恵器の皿である。底径は8cmで、底部はヘラ切りを行う。(21)は製塩土器と考えられるもので、外反した体部をもち、端部において内側に屈曲する。内外とも指頭圧痕が顕著である。

4a層出土土器(第62図)

4a層水田を掘り下げた段階で出土した土器である。

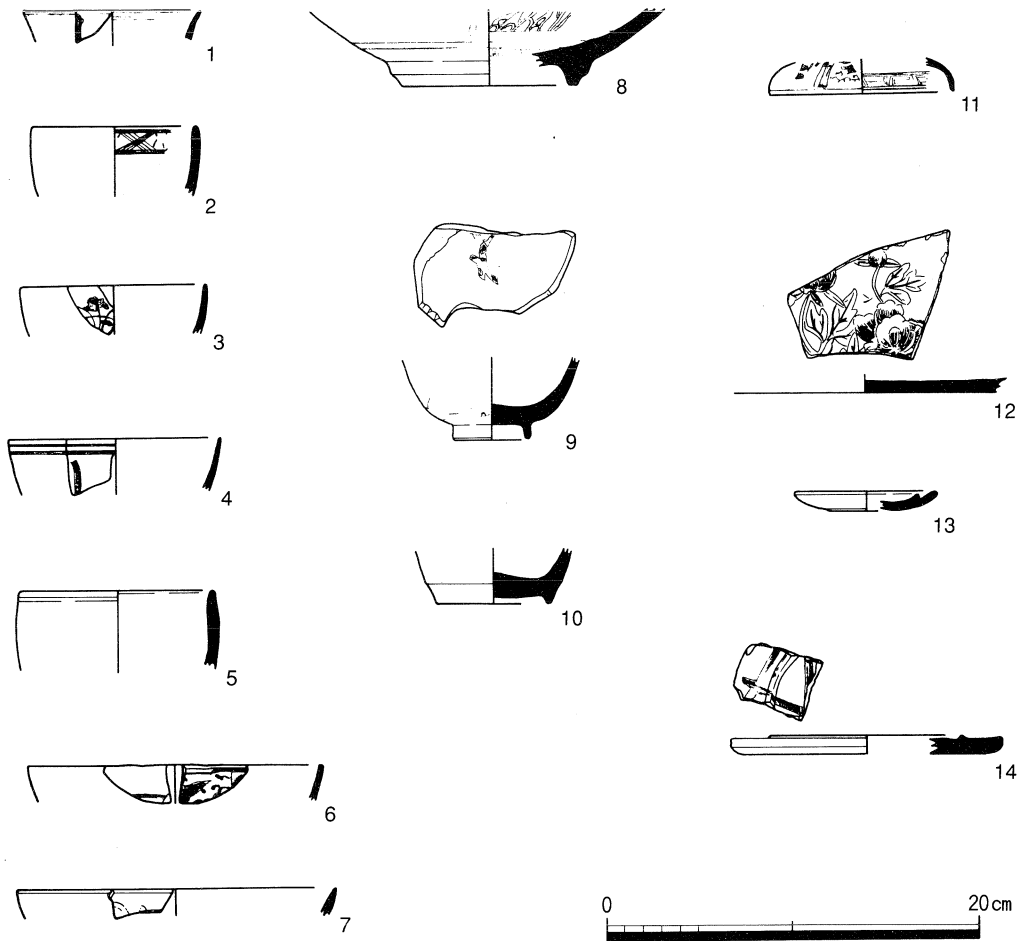
(22)は杯蓋である。天井部がら口縁部の屈曲は明確で、境に稜をもつ。(23)は土師器の椀である。内湾気味に立ちあがり、端部で外反する口縁をもつ。(24)は須恵器の皿である。底部はヘラ切りを行う。底径は10cmである。(25)は須恵器の甕の破片である。



第63図 SR04 3~4層出土遺物実測図(2)

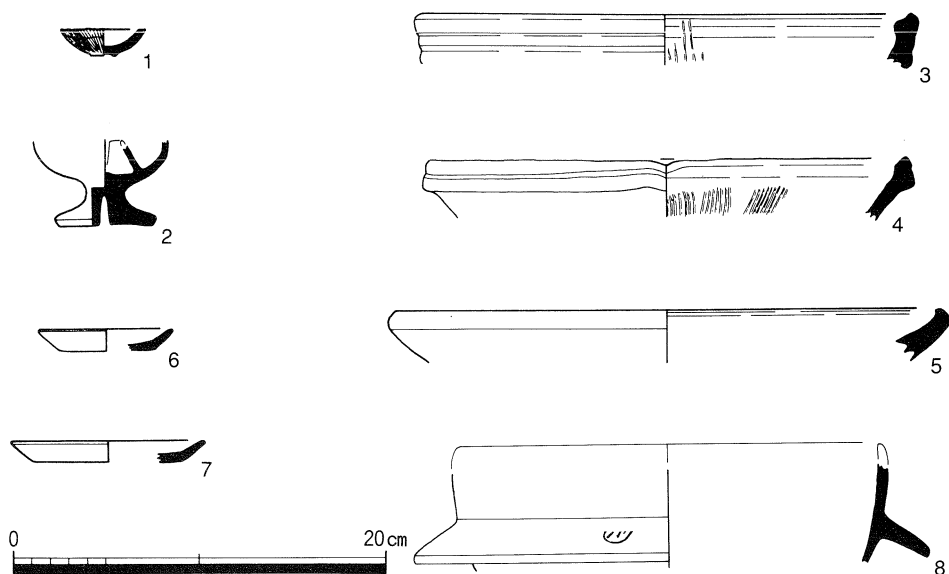
6 微高地上包含層出土土器（第64図、第65図）

(1~4)は碗である。(1)は口縁部が外に開く端反り碗である。(2)は直立気味に立ちあがる染付青磁の碗である。口縁部内面に四方襷文を描く。(3)は丸型碗である。外面に草花文を描く。(4)も丸型碗である。外面に圏線2条描く。(5)は直立気味に立ち上がる染付青磁の碗である。暗緑灰色の釉をかけ、外面には貫入が著しい。(6)は染付皿である。口縁部は若干輪花になる。内面に牡丹唐草文を描く。(7)は青磁の碗である。外面に縞蓮弁を描く、釉は緑灰色である。(8)は唐津の鉢である。見込みに蛇ノ目釉ハギ、胎土目積が確認できる。(9)は丸型の碗である。釉は畳付け以外は白色の釉をかける。(10)は染付の壺と考えられる。畳付け以外は釉がかかる。(11)は染付碗の蓋である。外面は唐草文他の文様を描き、



第64図 包含層出土遺物実測図(1)

内面は雷文帯を描く。(12)は陶器の盤と考えられる。見込みには牡丹の型が押されている。底部はヘラ削りを行う。(13)は陶器の灯明皿である。内面に突帯1条を巡らせる。内面はヨコナデ、外面はヘラ削りを行う。(14)は備前焼の蓋である。外面に火襷がみられる。(1)は白磁の紅皿である。外面は貝殻状の型押し成形である。(2)は陶器の燭台である。底部は回転糸きりを行う。(3、4)は備前焼の播鉢である。(3)は口縁端部の肥厚が大きく、外面の2条の凹線を巡らし、(4)は1条巡らせる。内面のカキ目は、(4)が7条1単位で間隔をあけて施す。(5)は陶器の盤である。厚い器壁をもち、口縁端部で内側に折り返す。(6、7)土師器の小皿である。(8)は瓦質の羽釜である。鏝は広く下方に下がる。鏝の内側にスタンプを押す。



第65図 包含層出土遺物実測図(2)

第 4 章

調査のまとめ

第1節 本遺跡における遺構の変遷について

浴・松ノ木遺跡では、弥生時代前期から近世にわたる遺構が微高地上や旧河道が埋没していく段階で構築されている。各遺構の詳細については、遺構の項で詳しく述べているためここではふれないが、同時期に属すると考えられる遺構を7期に分類し遺構の変遷をみてみたい。

I期（～弥生時代前期新段階）

本遺跡で明確な遺構が最初に確認できるのがこの時期である。調査区東端で確認したS X01は微高地上の凹みに形成されたもので、南西からの流れと、南からの流れが調査区内で合流し、北東方向に向かって、流れていくものと考えられる。このS X01の凹みには土壌層が形成され、部分的に畦畔が確認されている。同様の遺構は対岸の浴・長池遺跡の西岸微高地上において確認した不定形小区画水田および浴・長池Ⅱ遺跡でも同様の水田が確認されており同様の立地条件を示す。当該期の遺物を供伴していないため不明だが、S R04東岸の崖の状況からすればS R03・04についてもこの時期十分機能していたと考えられる。S X01が機能を失うのは、S X01を埋め尽くす数度の洪水砂層中に含まれる土器より、前期新段階の時期であると考えられ、S R04東岸の微高地はこの時点ではほぼ平坦になる。

Ⅱ期（弥生時代中期～後期後半）

浴・松ノ木遺跡で多数の遺構が構築される時期で、灌漑用と考えられる水路が掘削され平野部の開発が大規模におこなわれる時期と考えられる。前時期から機能しているS R03・04は弥生時代中期頃においても機能を続け新たにS R04から上流で分岐すると考えられるS D02が機能を開始する。S D02は下流域に存在すると考えられる水田に水を供給する灌漑用水路としての機能が考えられる。後期後半頃になるとS R03・04の埋没が進み、S R03、04の深さの半分近くが埋没しS R03、04が湿地化する。S D02についても埋没が進む。S D06、07についても、この時期に機能を終わる。微高地上で機能を継続するのはS D02のみである。

Ⅲ期（古墳時代中期末から後期初頭）

浴・松ノ木遺跡の調査区内での凹凸がなくなり平坦に近くなる。S R03、04については水分の多い状況が続いていると考えられ9 a層上面において小区画の水田が構築されている。調査区北側では石組畦畔も確認され、生産域として利用されていることが考えられる。この時期と考えられる灌漑用水路を確認していないことより各水田への水の供給はかけ流しによっておこなわれていたと考えられる。前時期から継続するS D02は埋没が進んでいるが機能していると考えられる。S R03内において同時期の水田を確認していないが、S R04と同様の埋没状況をしていることからすれば、同時期の水田が広がっていた可能性が高い。

Ⅳ期（奈良時代）

前時期から継続するSD02、新しく掘られるSD03、05がこの時期に機能していたと考えられる。SD03、05はSR04内につくられたであろう水田に水を供給するための灌漑用水路と考えられ、SD03、05は現在の高松平野の地割に合う溝である。

V期（12世紀後半）

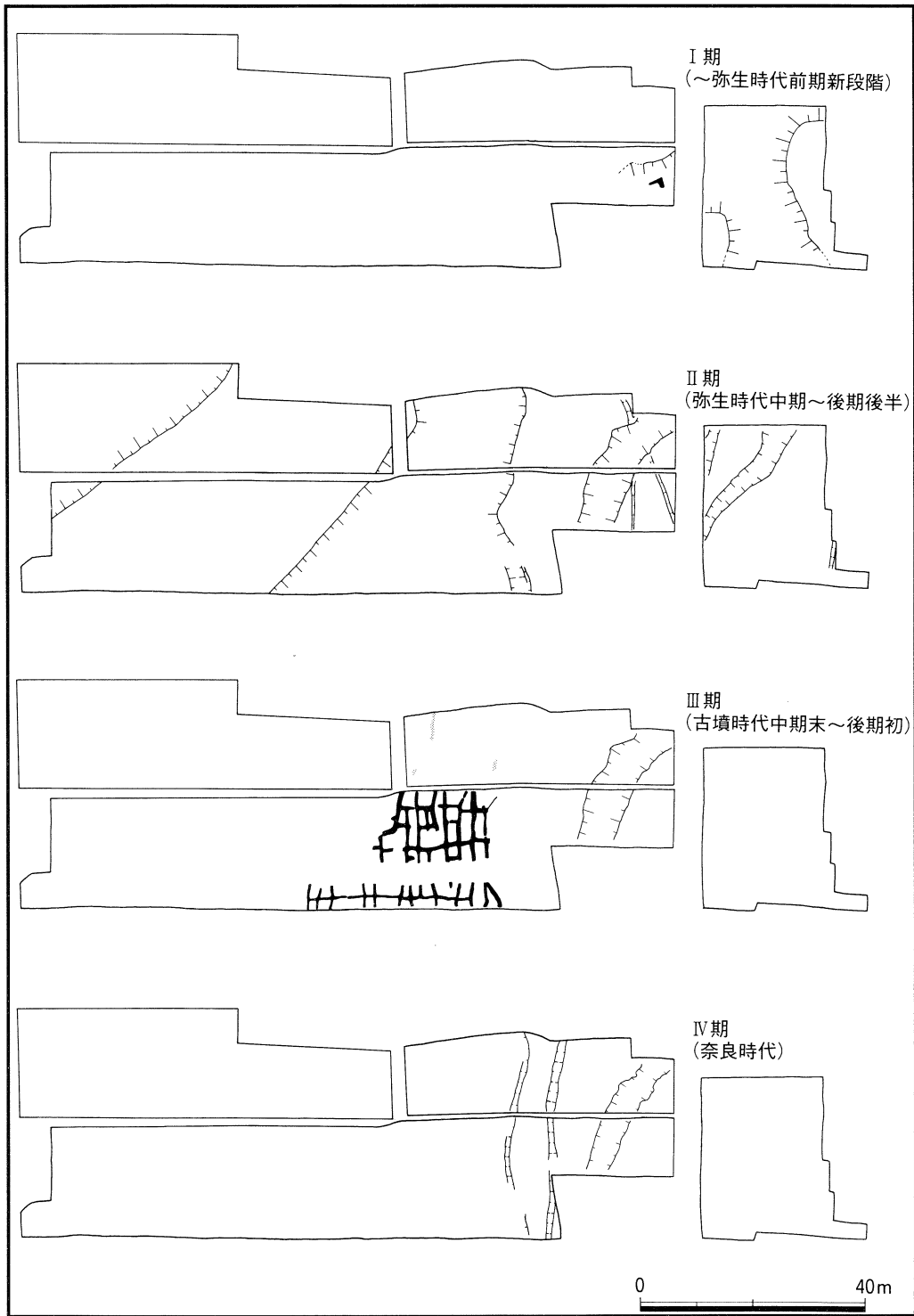
4 a層上面で確認した水田が、この時期のものである。水田内には小区画の水田が広がる。この時期の灌漑用水路と考えられるものはSD01のみである。

VI期（12世紀後半）

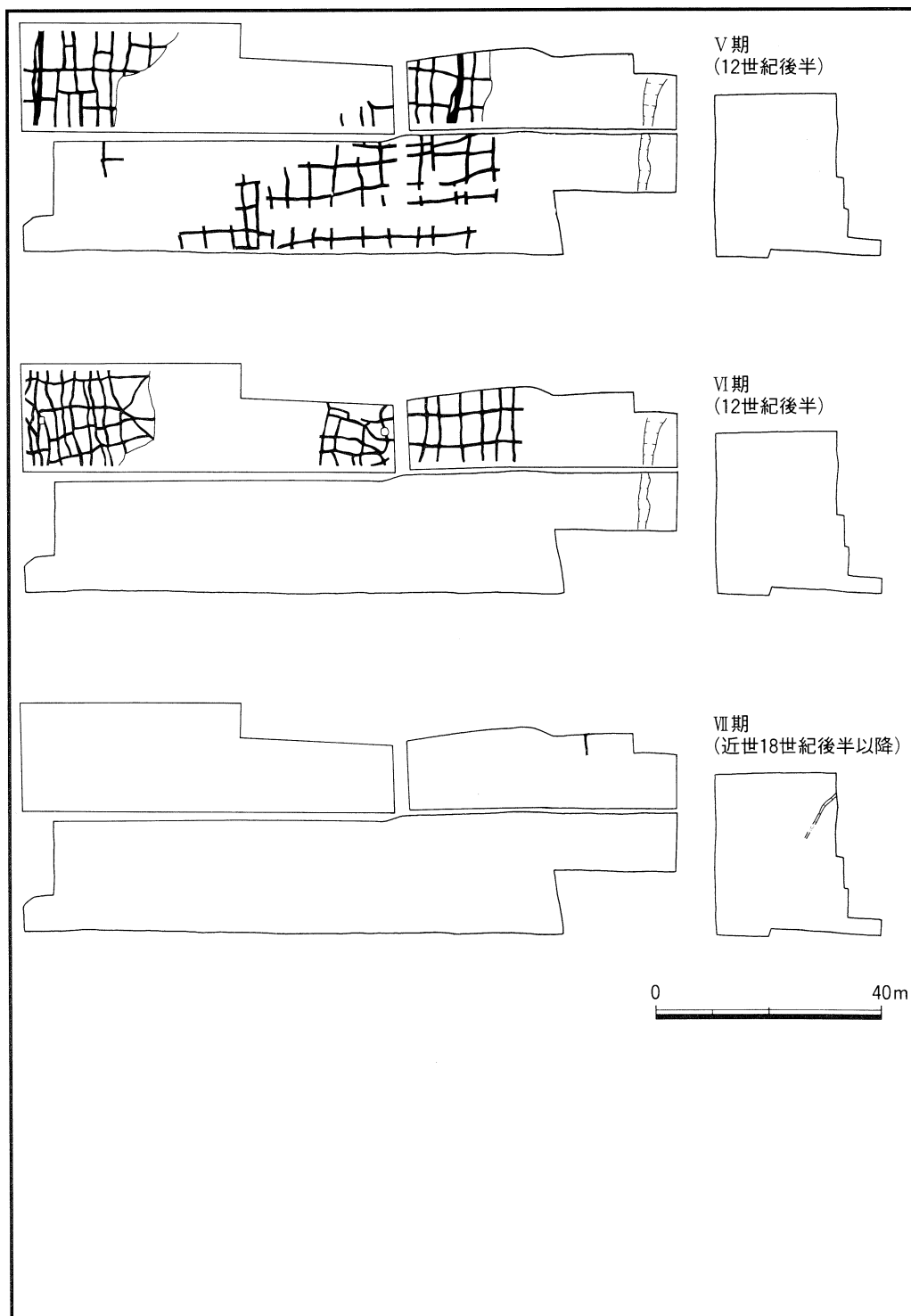
3 a層上面で確認した水田が、この時期のものである。V期のものともあまり時期差はないものと考えられる。

VII期（近世 18世紀後半）

ほぼこの時期にこの一帯は水田域となっており、遺構としては、ごみ穴と考えられる土坑数基とSD08、12を検出しているにすぎず、灌漑用水路も調査区内において検出していないことを考えると、現在の水路もしくはその場所が、この時期までさかのぼると考えられる。



第66図 浴・松ノ木遺跡遺構変遷図(1)



第67図 浴・松ノ木遺跡遺構変遷図(2)

第2節 出土土器について

(1) はじめに

浴・松ノ木遺跡からは遺物量が少ないものの比較的まとまって遺物を出土した遺構がある。ここではS D06出土土器についての傾向を考えてみたい。

S D06から出土した土器の器種構成は壺、甕、高杯、鉢であり、総コンテナ数10箱程度出土しており、浴・松ノ木遺跡の中ではもっとも多くの土器を出土している。これらの出土土器の大多数をしめるのが土器の色調が茶褐色を呈し、角閃石を多量に含むもので、近年「讃岐系土器」と呼ばれる土器群である。これらの土器群は搬入先である坂出市下川津遺跡での報告中、大久保徹也氏によって「下川津B類土器」と仮称され⁽¹⁾、下川津遺跡出土の土器群をはじめ県内出土の弥生時代後期から古墳時代前期前半の土器についての編年作業を行っている。その中で特徴のある「下川津B類土器」について細かな検討が加えられており、この土器群の出自を香東川東岸の高松平野中央部に産地推定を考えている。高松平野において大規模な発掘調査が進むにつれてこれらの土器群の状況が少なからず解りつつあるが、概報等の簡単な報告しかされておらず詳細は依然として不明な部分も多い⁽²⁾。

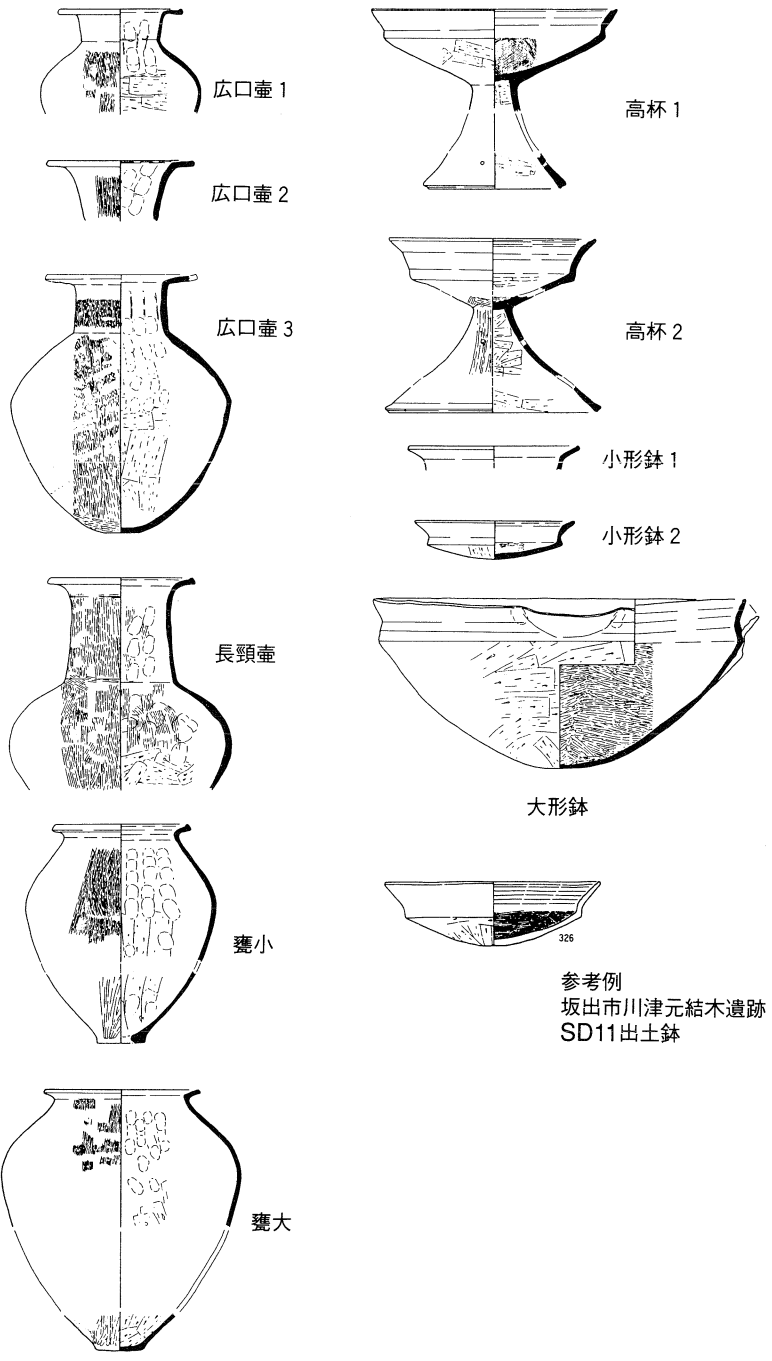
S D06は、遺構の項でも述べているとおりS D06がほぼ埋没した時点で投棄されており、ほぼ一時期の一括遺物と考えられる。ここでは再度S D06出土土器の器種構成及び形態の特徴を確認し搬入先での年代感を参考に時期限定を行いたい。そのうえで、これらの土器群の特徴について整理してみたい。

(2) 器種構成及び形態の特徴

壺 短頸広口壺3種、長頸壺1種がある。短頸壺は確認していない。短頸広口壺は頸部が外傾するものと内傾するもの、直立するものがあり、口縁部で屈曲し、外方に開き、口縁端部は上方につまみ上げる。胴部最大径は中央部より上にある。底部は、丸底に近くはなっているが平底を残す。調整は外面頸部から胴部上半にかけてハケ目、胴部下方はヘラ磨きを施す。内面頸部から胴部上半にかけて指ナデ、下半はヘラ削りを行う。

甕 「く」の字状に屈曲する口縁をもち、口縁端部を上方につまみ上げる。胴部は張り、胴部最大径が胴部の上半にある。底部は平底をもつが、やや角がとれて丸くなりかけているものもみられる。

高杯 皿状の杯部から屈曲し、直立気味にたちあがり外反する口縁をもつ。内面に強い横ナデによる凹線状の凹凸をもつものと、内面に凹線状の窪みをもたないものか端部に一条しかもたないものに分かれる。この口縁の違いは、脚部にもみられ、前者は大きく広がる脚部をもち、後者の脚部はあまり広がらずに直線的である。杯部には円盤充填をおこなう。調整は杯部内面



第68図 浴・松ノ木遺跡SD06出土土器器種構成

見込みに格子状の断続ヘラ磨きをおこなう。この調整は同様に杯部外面にもみられる。脚部は外面に縦方向のヘラ磨きをおこない、内面は杯部と接合部までヘラ削りをおこなう。

鉢 大型の鉢の完形と、小型の鉢の破片がある。大型の鉢は高杯の杯部を深くし口径を大きくした形態をもつ。調整は外面にヘラ削り、内面見込みに格子状の断続ヘラ磨きをおこなう。高杯の杯部と違うのは、口縁の一カ所に片口をもつことである。小型の鉢は破片であるが丸底に近い底部をもち、内湾しながら立ち上がる体部をもち、口縁部は丸く終わるものと口縁部近くで屈曲し終わるものの他に大型の鉢を小型にしたものもある。

(3) 浴・松ノ木遺跡における下川津B類土器の出現頻度について

第7表 B類土器出現頻度一覧(下川津遺跡報告書のデータに一部加筆及び改変)

遺跡名	所在地	遺構名	時期	総数	比率(%)
稲木 C	香川県善通寺市	竪穴住居-5	Ⅲ~Ⅳ	1223	21
下川津	香川県坂出市	土器溜り5	Ⅰ	4250	6
		SDⅡ22	Ⅱ	2046	6
		SDⅡ11	Ⅲ	924	4
		土器溜り4	Ⅰ	1208	5
		SHⅡ12	Ⅳ	1230	9
		SHⅡ20	Ⅴ	1028	1
		SHⅡ06	Ⅲ~Ⅳ	1249	13
		SHⅡ08	Ⅲ~Ⅳ	691	19
		SHⅡ01	Ⅱ	824	12
高屋	香川県坂出市	包含層	Ⅳ	1218	9
浴・松ノ木	香川県高松市	SD06	Ⅱ	779	78.2
大池	香川県高松市	採集資料	Ⅰ~Ⅴ	1245	54
竹元	香川県高松市	採集資料	Ⅱ~Ⅴ	605	34
南谷	香川県高松市	採集資料	~Ⅱ	253	25
森広	香川県大川郡	ⅢSH01	Ⅳ~Ⅴ	4023	6
石田	香川県大川郡	SD	Ⅲ~Ⅳ	3491	4
寺田	香川県大川郡	包含層	Ⅱ~Ⅳ	1084	2
黒谷川郡頭	徳島県板野郡	溝22	Ⅳ	126	13
川島	兵庫県揖保郡	20溝	Ⅴ	-	4

浴・松ノ木遺跡では、下川津遺跡においてB類土器と仮称された土器群が多く検出されている。先の下川津の報告書でも県内から出土するB類土器の出現頻度の統計により高松平野中央部に産地推定をおこなっている。別表に示したのは下川津遺跡において統計されたB類土器の出現頻度一覧表に浴・松ノ木遺跡を加えたものである。この中で高松平野の遺跡のみを取り出してみると春日川上流域に所在する竹元遺跡は34%、新川東岸に所在する南谷遺跡では25%であり、出現頻度は他の地域に比べ高いものの大池遺跡での出現頻度の54%に比べると差は歴然としている。浴・松ノ木遺跡と大池遺跡は直線距離で0.5kmと近接しており、香東川の旧河道

とも同じ流路の沿岸に当たる。浴・松ノ木遺跡のS D06から出土した弥生土器に対する下川津B類土器の出現頻度は実に78.2%で他を圧倒する頻度であり、大久保氏の指摘通りのデータが得られ高松平野中央部に出自を求める追証の一つとなる。

(4) S D06出土土器群の時期比定について

次にこれらの土器群の時期比定であるが、高松平野における土器編年は確立されておらず、これらの土器群の搬入先である坂出市下川津遺跡における土器編年を参考に時期比定をおこないたい。まず壺であるが、この壺の形態はⅡ式を最後にみられず、(5)を除く短頸広口壺に形態に似るものはⅠ式以外にはみられない。(6)は短頸広口壺についても胴部が球形になっているものの、底部は丸底にはならず平底を残していることから大きくはずれない。次に甕であるが、頸部から口縁部への屈曲は時期が下がるほど鋭角になり、口縁部が水平に近くなる。胴部については大きく張り、胴部下半も丸くなっていない。底部についても平底の底部の平坦面もしっかりとしている。高杯については、Ⅰ式のような口縁部内外面のヘラ磨き調整はみられない。口縁部の外反については、Ⅲ式以降ほどの外反はみられない。鉢についても口縁の外反は大きくない。小型の鉢については、底部は角がとれているが安定している。またⅢ式以降に出現すると考えられる小型丸底壺も確認できない。以上のような土器の特徴を検討した結果、一部新しい要素はみられるものの、下川津Ⅱ式頃に比定されるものと考えられる。

(5) 高松平野中央部産の土器の流通器種と在地消費器種

前述の下川津遺跡でのB類土器の搬入状況の統計からの器種構成からは広口壺大小二種、細頸壺、小型丸底壺、甕、高杯の存在が確認されておりこれが一般的であるらしい。これは搬入先の状況であり生産地の一つと考えてよい浴・松ノ木遺跡の器種構成とは若干状況が異なる。時期的な差、生産地の差かもしれないが、浴・松ノ木遺跡の状況を例にあげて検討してみたい。まず鉢は高杯の脚部を取り去った大型の鉢が必ず加わり、小型の鉢も若干ながら存在する。小型丸底壺については時代が下がらないと出現しない状況は理解できるが、細頸壺については、あまり当該地での検出がないことに加え、当遺跡からは破片さえも確認できない状況からすれば、特殊な土器ではないだろうか。また、搬入先へは生産地での使用とは違い、移動に適する土器群が主流を占める。その適した土器群がB類土器の搬入先での器種組成となり、搬入先へは移動に適している壺、甕、高杯などの小物が主流を占め、薄手で移動に向かない大型の鉢などは搬出されなかったのではないだろうか。この時期県内の遺跡では鉢型土器が増加する状況が見られるのに対して、現在の出土量からして鉢型土器は、ほとんど存在しないような状況である。

(6) 各器種における形態および調整方法の共通性について

最近の搬入地での検討などから甕型土器、壺型土器の制作方法および調整方法の共通性が指

摘されているが、高杯、大型の鉢型土器についても制作及び調整方法において共通点が多いというよりほとんど同じであることである。

ここで形態に特徴のある土器が一点ある。この土器は当初高杯の杯部と考えていたものであるが、この土器を細かく観察してみると、高杯の杯部に特徴的な円盤充填が認められないことである。当地域における高杯の製作技法として脚部と杯部を一体として制作するため、杯部の中央部に円盤を充填させるのが特徴的であり、上からはいねいなナデおよびヘラ磨きを施すが反対側は脚中央部が狭いためいねいなナデが施せなく、ヘラ状工具などで刺すようなヘラナデになる。杯部の断面を観察すると杯部の下部の厚さに比べ、円盤充填をした部分の厚さが薄いため破片となっても段ができ、接合痕も明確に観察ができるはずであるが、これに対してこの土器は底部が丸く作られているため、高杯のように脚部をつける必要のなかったことを証明するものである。この1点のみを例にして考えるのは危険であるが、県内においては、坂出市川津町の川津元結木遺跡SD11からも同様の土器が出土している⁽³⁾。川津元結木遺跡からは、これ以外同様のものは出土しない。この2点のみを例に挙げて可能性を指摘するのは問題も多いと思うが、高杯と大型の鉢の形態等の共通点からすれば高杯の杯部の形態を利用して小型の鉢を制作している可能性は十分考えられる。壺、甕における形態の特徴および製作技法の特徴の共通性には、鉢と高杯についてもいえることであり、従来から高杯の杯部と考えていた破片の中に小型の鉢の破片も含まれている可能性があり、今後破片に対して細かな観察が必要であろう。

(7) おわりに

角閃石を含み、茶褐色を呈し古い調整方法を残すこれらの土器は、土器が持つ特徴においてすぐ見分けがつきやすいため、東部瀬戸内地方の遺跡において数多く確認され、この土器についての検討も行われており、搬入先での器種構成が明確になっている。これらの出自と考えられている高松平野中央部の状況は少しずつわかりはじめた段階である。高松平野中央部に位置する当遺跡で出土した土器を検討した結果、判明した点を2、3述べてみたい。

1、搬入先の器種構成の一つである細頸壺が当遺跡で、存在しないことである。出土量が少ないことも要因するのであろうか、搬入先の出土遺構の性格を検討してみないとわからないが、特殊な用途が考えられる。

2、搬入先では存在しないが薄手で大型の片口鉢が存在する。製作技法等は高杯の杯部と同じである⁽⁴⁾。

3、小型の鉢の出土量の少ない点がある。先にも述べたが各器種間における製作技法等の共通性から考えれば、小型の鉢が高杯等の破片に含まれている可能性があり、資料等の増加を持って再度検討する必要がある。

4、当地域の土器は、土器製作における手法は一器種にとどまるのではなく、他の器種においても利用されており、言葉は適切ではないが相当パターン化されて土器製作が行われていたと考えられる。

以上当遺跡の遺物を整理している段階で、気のついた点を述べてみたが、出土土器についての事実誤認も多いと思われるが、今後の資料の増加を待って再度整理したいと考える。

- 注1)。 大久保徹也「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」
『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ 下川津遺跡』香川教育委員会、
(財)香川県埋蔵文化財調査センター、本州四国連絡橋公団1990.3
- 注2)。 『空港跡地遺跡発掘調査概報 平成3成度』香川県教育委員会、(財)香川県埋蔵文化財
調査センター1992.3
- 。 『空港跡地遺跡発掘調査概報 平成4成度』香川県教育委員会、(財)香川県埋蔵文化財
調査センター1993.3
 - 。 宮崎哲治『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第2冊 林・坊城遺跡』
香川県教育委員会、(財)香川県埋蔵文化財調査センター、建設省四国地方建設局 1993.11
 - 。 高松市教育委員会の調査では天満宮西遺跡、凹原遺跡で当該期の遺物がまとまって出
土している。『讃岐弘福寺領の調査—弘福寺領讃岐国山田郡田図調査報告書』高松市教
育委員会 1992.3
- 注3)。 片桐孝浩『中小河川大東川弘修工事（津ノ郷～弘光橋間）に伴う埋蔵文化財発掘調査
報告 川津元結木遺跡』香川県教育委員会、(財)香川県埋蔵文化財調査センター 1992.1
- 注4)。 天満宮西遺跡、井手東Ⅰ遺跡等でみられる。いずれも高松市教育委員会調査。

第3節 水田遺構について

高松平野では広範囲にわたって条里地割が明瞭に遺存しており、古くから歴史地理学・文献史学等による研究⁽¹⁾が行われ、郡・里・坪境線等の条里プランの復原が考えられてきた。特に、本遺跡の所在する一帯は、現存するわが国最古の田図である「弘福寺領讃岐国山田郡田図」の比定地であると考えられており、早くから水田として開拓され条里地割が施行されていた。

本調査における水田遺構は、不確定要素を有するが弥生時代前期の水田を初現とし、土層観察により現水田耕作土に至るまでに11面確認されている。そのうち、畦畔により区画された水田を面的に検出することができたのは、4面である。上層より第3層、第4層、第9層、第18層であり、その年代は出土土器によりおよそ次のとおりである。

第3 a 層 中世前半（12世紀末～13世紀初）

第4 a 層 中世前半（12世紀末～13世紀初）

第9 a 層 古墳時代後期初（5世紀末～6世紀初）

第18 a 層 縄文時代晩期～弥生時代前期後半

各水田の概要は、すでに第2章において詳細に説明しているが、水田の変遷—換言すれば土地利用の変遷—を明らかにするために再びその概要・特徴をまとめて述べることにする。

1 各水田の概略

a 第18 a 層水田（第12図）

本水田は調査区東側に広がる微高地上の帯状のわずかな低地（S X 01）にのみ検出された。土層観察では畦畔状高まりが数カ所で検出されたが、面的調査では一本のみの検出であった。第18 a 層は基盤である黄灰色極細砂質シルトの直上に堆積しており、土壌層は黒褐色シルト質極細砂である。しかし、水田面の区画は不明であり水田としての確固たる根拠を欠いている。今後プラント・オパールや花粉分析等の自然科学的分析を加えて検討しなければならない。

本層が水田であるかどうか現状では不明であるが、形成された時期や層中ならびに上層より出土した土器から考えると、縄文晩末期～弥生時代前期後半にかけてであることは確実である。

b 第9 a 層水田（第48図）

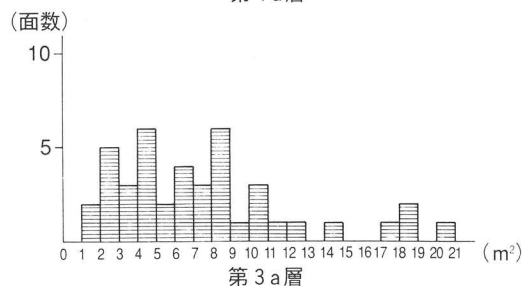
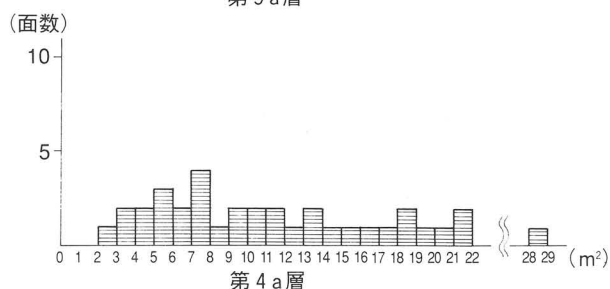
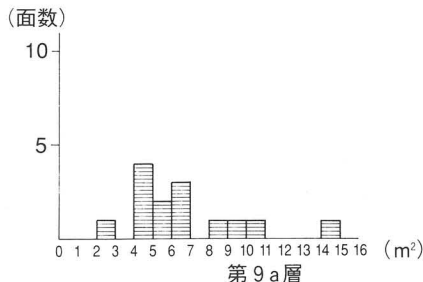
本水田は、S R 04の埋没過程の低地だけに検出された。調査区北側では石組畦畔だけの検出であるが、南側では南北東西方向の盛土畦畔による小区画水田が検出された。その総数は58面である。一筆の面積は2.60～14.10m²であり、4 m²台の水田が最も多い。水田面の高さは、南から北に徐々に低くなっており、9.55～9.82mを示している。水田の平面形は長方形を呈する。盛土畦畔は幅20～30cm、高さ1～2cmであり、東西の畦畔に11ヶ所の水口が設けられている。石組畦畔は、拳大から人頭大の石により構成されており、S R 04の両岸に沿うように東西二列

になっている。耕作土は黒褐色シルト質極細砂であり、b層には褐鉄鉱・マンガンの集積が不明瞭である。

本水田は、土地条件・堆積状態から判断すると半湿田の性格を有しており、出土土器の時期は5世紀末～6世紀初と考えられる。

c 第4 a層水田 (第61図)

本水田は、SR03・04の埋没がほぼ終わった段階に営まれていた水田であり、水田畦畔の検出はSR03・04の部分に限定されているが、中州状微高地にも土壌層が検出された。SR04より西側一帯に広がっていた。検出された水田は、南北と東西方向の盛土畦畔によって整然と区画された小区画水田である。水田の総数は126面であり、西側31面、東側95面である。平面形は長方形と正方形を呈する。面積は2.50～28.40㎡を測り広範囲にわたっており、7㎡台の面積をもつ水田が最も多くなっている。南北の畦畔はN-10°-Eを示している。西端と東端には幅広い畦畔が南北方向に設けられている。水田の高さは南から北方向に低くなり、9.77～10.20mを示している。水口は全く検出されておらず、畦畔越しの掛け流しと考えられる。耕作土は褐灰色シルト質極細砂である。b層には褐鉄鉱の集積が顕著である。



第69図 各層検出水田面積分布

本水田はその立地条件・堆積状態より乾田的性格をもち、条里型水田と考えられる。時期は出土土器より中世前半(12世紀末～13世紀初)に比定される。

d 第3 a層水田 (第60図)

本水田は、検出状況・所属時期・水田畦畔の方向・水田形態など、下層の第4 a層水田とほとんど同様であった。検出された水田の総数は95面であり、西側52面、東側43面である。西側の水田の一部に区画の乱れが見られるが、南北方向と東西方向の盛土畦畔により整然と方格に区画された小区画水田である。面積は1.70～18.60㎡の広範囲であり、4㎡～8㎡台の水田が多い。高さは南から北方向に低くなっており、9.89～10.07mである。

2 概 論

前節で面的に検出することができた水田の概略を記したが、前述したようにこの4面以外にも土層観察により水田面が確認されており、特に第9 a層水田と第4 a層水田との間に規則的な畦畔状高まりをもつ水田面が4面検出されている。これらの水田を含め、各水田について考察を加え全体としてその変遷を考えることとする。

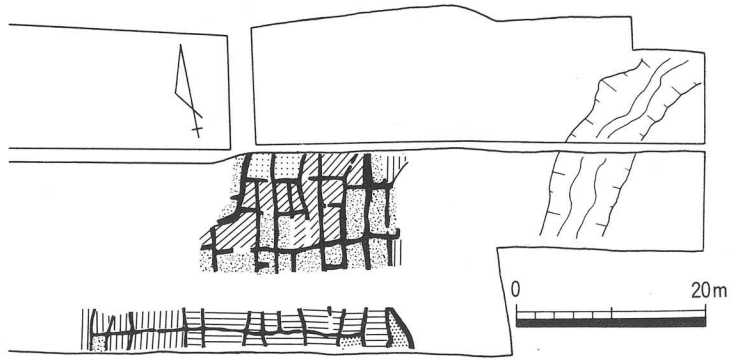
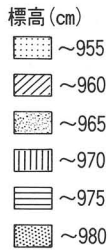
(1) 第18 a層水田は、縄文時代晩期～弥生時代前期後半に比定されている。縄文時代晩期後半には、北部九州ではすでに稲作文化が成立し、さらに西日本各地で稲が出現している。すなわち、日本列島における初期の農耕文化が出現した時期である。佐賀県唐津市の菜畑遺跡や福岡県福岡市の板付遺跡においては、畦畔や水路を伴う水田遺構と各種木製農具が出土しており、さらに近年いくつかの遺跡で木製農具の出土が報じられている⁽²⁾。このように、ほぼ完成した形で稲作文化が北部九州に伝わり、大きく展開していった。そして稲作は急速に東進してゆき、若狭湾と伊勢湾を結ぶ線より以西の西日本一帯に広まっていった。香川県では縄文時代晩期の水田遺構は検出されていないが、木製農具が高松市の林・坊城遺跡⁽³⁾と本遺跡に西接する浴・長池遺跡⁽⁴⁾より出土し、初期水田の存在を示唆している。弥生時代前期になると、水田遺構が浴・長池遺跡や坂出市の川津下樋遺跡⁽⁵⁾で検出され、志度町の鴨部・川田遺跡⁽⁶⁾では多量の木製農具が出土している。前二者の水田は畦畔により方格状に区画された小区画水田である。本遺跡では畦畔の検出がわずかであり、もし自然科学的分析の結果、水田であると確証されるならば、これらの水田とはやや異なる形態の水田となるであろう。しかし、本水田に関しては不確定要素が多いため、これ以上の言及はさける。

(2) 5世紀末～6世紀初に比定される9 a層水田は、ほぼ現地表の条里地割と同方向を示す南北、東西の畦畔により区画された小区画水田であり、その最大の特徴は、水田が自然地形に規制されて狭い旧河道部（SR04）のみに存在すること、直線的な畦畔を持つことである。このようは特徴は、直下の10 a層水田と本水田以降の8 a～5 a層水田にも同様にいえることである。

検出された水田の平面形は、長辺を南北方向に有する長方形と正方形の二形態があり、長方形が主流となっている。その面積は、4 m²台の水田がもっとも多く、第69図面積分布（第69図上段）をみると4～6 m²台の水田が大部分を占めている。すなわち、ほぼ均一の面積で画一的な水田開発が実施されている。畦畔に関しても、南北、東西両方向ともにほぼ直線的に畦畔が設けられており、規則的である。しかし、旧河道部の両岸の傾斜度が若干大きくなる部分では、畦畔が乱れている。このことは、水田の平面形、面積の乱れを意味している。

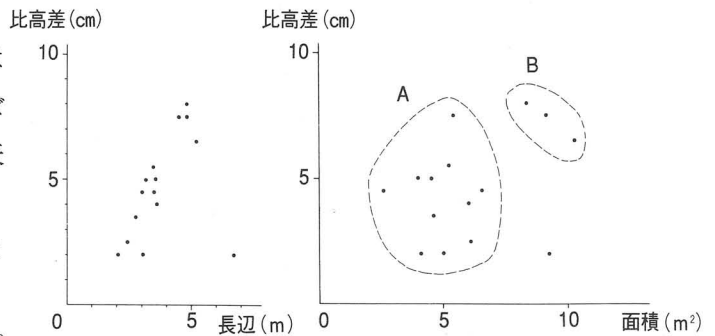
次に、水田の傾斜についてみよう、検出された水田全域のレベルを図示したのが第70図であり、第2章第5節においてその詳細は述べているので、ここではその概要のみを記す。大概と

しては、北から南になるにしたがい水田は高くなっており、水田2・3を中心に同心円状に高くなっている。さらに、ミクロな視点から一筆の水田内での傾斜をあらわしたのが表8



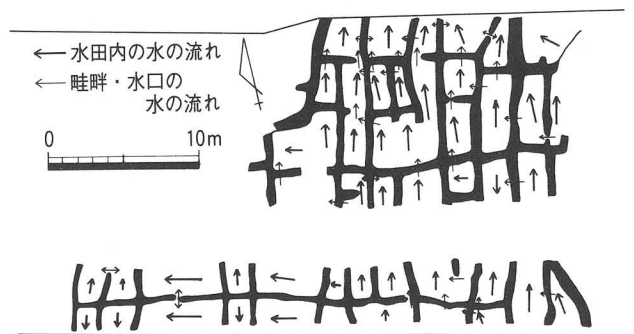
第70図 第9a層水田

である。左は比高差と長辺の関係、右は比高差と面積の関係を示しており、ほぼ同様なデータ結果となっている。この表をみると二つのグループに分類できる。Aグループは、水田16・17・18・20のように水田の規模が大きく比高差も大きくなっている。一方Bグループは面積5㎡前後で比高差は5cm以内を示し、規模・比高差ともに小さいグループである。すなわち、水田の規模と比高差は正比例しており、両グループの傾斜度がほぼ同様になるように設計されているのである。



第8表 第9a層水田平面比値指数表

傾斜度と大きく関係するが、配水について若干考えることとする。本水田には、11ヶ所の水口が検出され、東西方向に7ヶ所と南北方向に4ヶ所となっている。配水方法としては、水口と畦畔越しの掛け流しの二方法が併用されたと考えられる。第71図は、完掘した状態での水田上面と畦畔上の標高を基礎にして水の流れを想定したものである。一筆の水田内での水の流れは、南から北に向かうのが大部分である。しかし、水田38・52のように東西方向のものもあり、長辺方向に水が流れている。水口のある畦畔では、水は当然水口を通るであろう。問題となるのは畦畔掛け流しである。この場合、畦畔の中でもっとも低い部分から水が流



第71図 第9a層水田水流方向 (標高値を基にして推定)

れ込むものと考え、その部分を矢印で示した。全方向の水田に不規則的に水が流れるのではなく、北側、あるいは東西側の水田に流れるようになっていることがわかる。さらに、水田内の配水方向もその部分に向かっている。規則的な配水が行なわれていたであろう。これらの水田に水を供給する灌漑用水路は検出されていないため、水田体系としての全貌を解明することはできないが、S D02のⅡ期が同時期であり、何らかの関連を考えることができる。直下の第10 a層の水田では、北北西方向にS D11が流走している。S D11の南側では木樋が検出され、用水路として機能していたと考えられる。

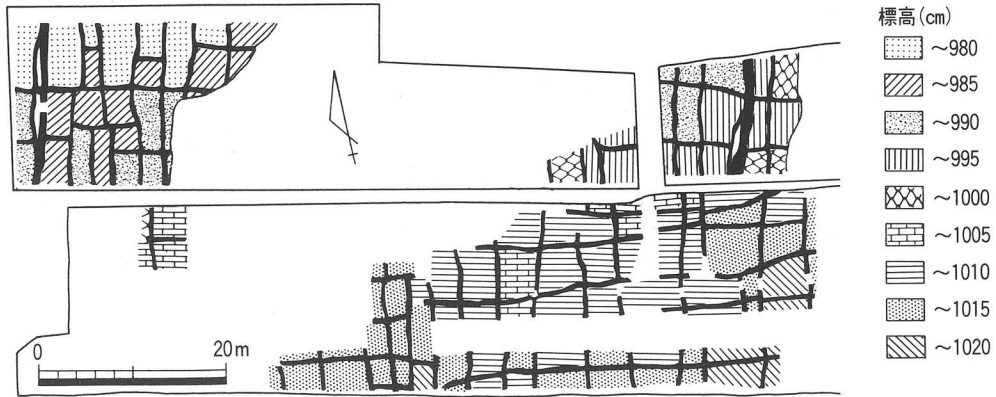
(3) S R03・04の旧河道がほぼ埋没し、わずかな低地となった12世紀末～13世紀初めに造営された4 a層水田は、S R04より西側に検出された方格状地割の小区画水田である。畦畔の方向は現地表の条里地割とほぼ同一である。

検出された水田の平面形は、長方形と正方形の二形態に分けられる。長方形の水田は南北方向に長辺をもつものと東西方向のものがあるが、前者の数が多くなっている。正方形の水田は最も数が少なく、面積も非常に狭い。すなわち南北方向に長辺をもつ水田が主流と考えられる。その面積は2㎡台から28㎡台に至る広範囲にわたっており、その面積分布もほぼ均等である。その中で最も数が多いのは7㎡台である。(第69図中段)

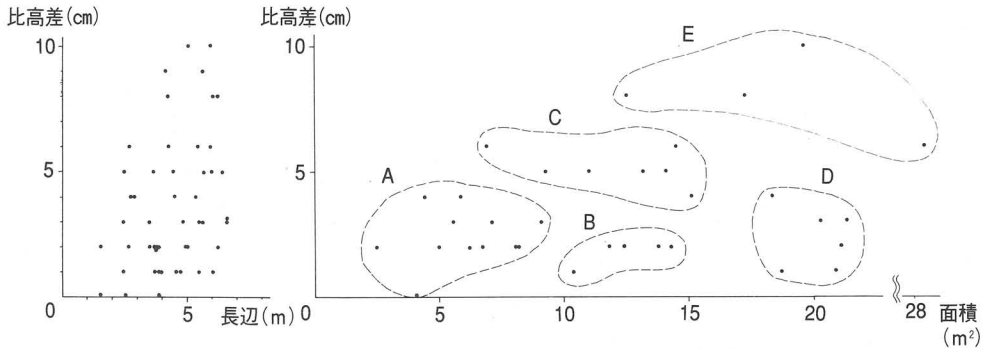
畦畔は前述したように南北・東西方向にほぼ直線的に設けられ、整然としている。しかし、南北方向の畦畔は、東西方向と比較すればより整っておりとぎれる部分がほとんどみられない。方格地割を設けるのに際し、南北方向の畦畔が先行され、その後に東西の畦畔を設けたと考えられる。検出された水田の西・東両端において、他の畦畔より幅の広い畦畔が南北方向に検出された。高さは他と同じだが、幅は1～1.8mを測る大畦畔である。東側の大畦畔は、水田56・64の標高の検討によれば南方に延びる可能性がある。二つの大畦畔の距離は約75mである。大畦畔は区画の基準であろう。

水田面の傾斜に関しては、9 a層水田と同じ過程で考えることにする。第72図は水田全域のレベルの変化を図化したもので、南から北に向かって次第に水田面が低くなっているのが明瞭である。一筆の水田の傾斜を表したのが表9である。長辺と比高差の関係では、比高差6cm以内の水田と8～10cmの水田に分類される。比高差の大きな水田は、水田89・91・121・125等の少数で南東隅に集中しており、東西に長辺をもつ水田である。面積と比高差に関しては、面積2～9㎡で比高差4cm以内のAグループ、10～15㎡で2cm以内のBグループ、7～15㎡で4～6cmのCグループ、18～21㎡で4cm以内のDグループ、12～20㎡で8～10cmのEグループに分けることができる。A～Dグループは比高差6cm以内であるが、Dグループは他と比べると面積が20㎡前後であり広がっている。Eグループだけが比高差が大きい。その分布状態をみると、水田全域にちらばっており、不規則に見られる。一筆の水田の傾斜度は、グループごとに

異なっており、不統一である。

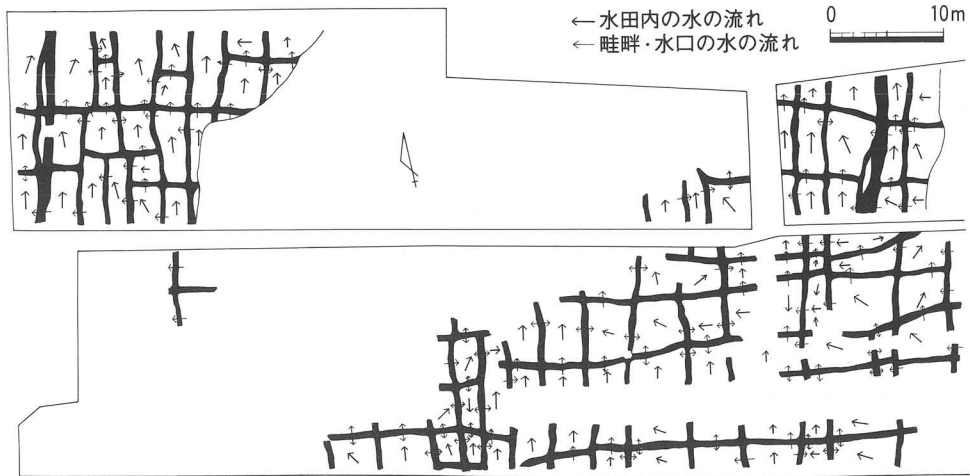


第72図 第4a層水田



第9表 第4a層水田平面比值指数表

本水田の畦畔には水口が全くなく、配水方法としては畦畔越しの掛け流しであったと考えられる。9 a 層水田と同様に標高を基にして水の流れを想定したのが第73図である。一筆の水田内の流水方向は、南から北に流れるのが大部分を占めている。しかし、南東隅付近には北西方向を示す水田が数面ある。それらは長辺を東西にもっている。すなわち、水は長辺方向に流れるようになっている。一方、畦畔越しの水の流れは、南側の水田から北側の水田に流れるのが大部分である。しかし、水田21~26のように西側の水田に向かって流れる水田が一部には存在している。一筆内の水の流れと畦畔越しの流れを総合的にみると、水田の傾斜方向と同様に南から北に流れており、一筆内での最も標高の低い部分の近くに畦畔越しの水が流れるように設定されていると考えられる。水田に伴う灌漑用水路は検出されておらず、水田としての体系全貌を解明することはできなかった。しかし、東側にあるSD01が本水田と同時期であり、何らかの関係があったと考えられる。



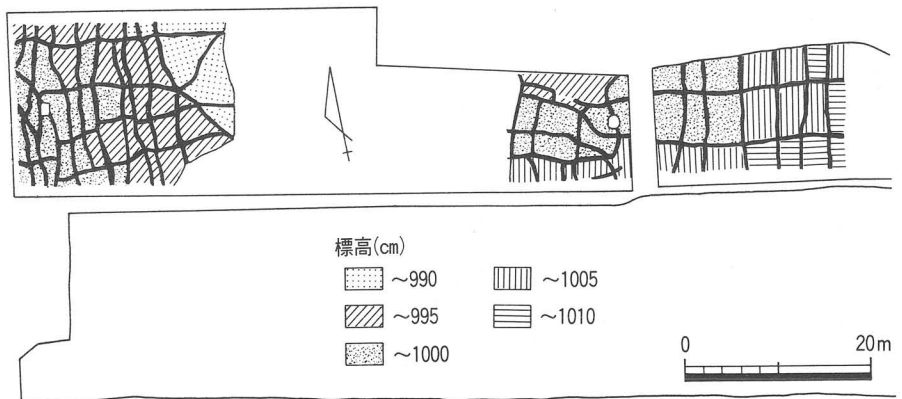
第73図 第4a層水田水流方向（標高値を基にして推定）

(4) 4a層水田の直上の3a層水田は、営まれた時期や検出範囲、水田形態などほぼ4a層水田と同様の盛土畦畔をもつ小区画水田である。

水田の区画は、西側において一部乱れている部分があるが、ほぼ方格状を呈している。水田の平面形は、大部分が長方形である。東西方向の短辺は、0.60~4.80mの範囲でありばらつきが著しい。南北方向の長辺は、2.7~5.8mを測り、4・5m台が最も多くなっており、ほぼ均等な間隔で畦畔が設置されている。その面積は、1㎡~20㎡台の範囲となっているが、4㎡台と8㎡台の面積をもつ水田が最も多く、10㎡以内の水田が大部分を占めている。

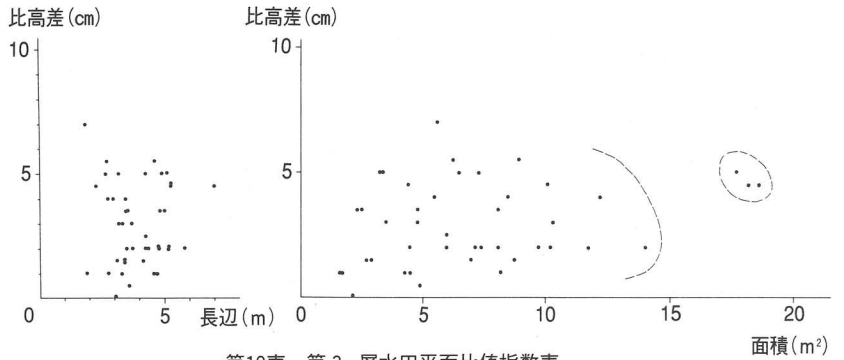
水田の傾斜に関しては、第74図、表10を基に考えることとする。水田全域の傾斜は第74図で示すように、西側の水田は南西から北東方向に下がっており、東側の水田は南東から北西に次第に低くなっていることが明らかである。

一筆の水田内の傾斜を示した表9では、大きく二分されている。その一つは水田19・72・73のように面積17~18㎡で比高差5cmを測



第74図 第3a層水田

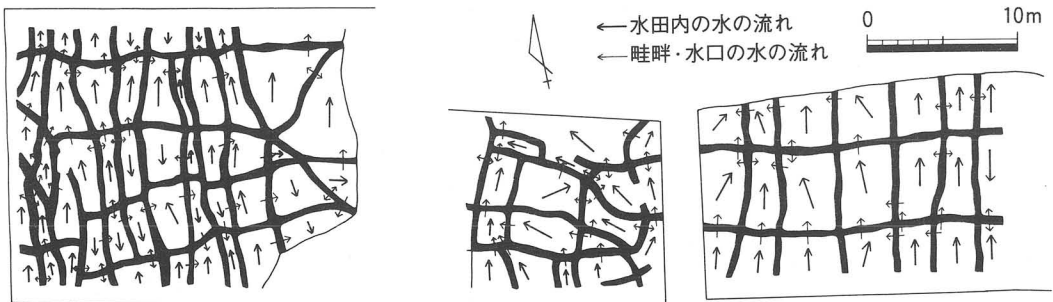
る水田であり、もう一つは面積 15m^2 未満で比高差 7cm 未満のもので大部分の水田が含まれている。後者は細かく見ると三分される。まず、面積が 5m^2 未満で比高差 5cm 未満であり、次に $6\sim 15\text{m}^2$ の



第10表 第3a層水田平面比値指数表

面積をもち比高差 3cm 未満の水田、 $6\sim 13\text{m}^2$ の面積で比高差 $3\sim 7\text{cm}$ の水田である。しかしながら、これらの水田は水田域全体に散在しており規則的になっていない。

本水田の配水方法は畦畔越しの掛け流しであり、他の水田と同様に標高を基に配水方向を想定したのが、第75図である。一筆の水田内での水の流れは、地形の傾斜に即して大部分の水田は南から北に流れるようになっていいる。しかし、水田 $24\cdot 25\cdot 35\cdot 36$ のように反対方向に流れ



第75図 第3a層水田水流方向 (標高値を基にして推定)

るものも一部ある。どちらにしても、長辺方向に水は流れる。畦畔越しの水は、東側の水田では南側の水田から北側の水田に配水されるようになっていいる。西側の水田は、南東隅の水田において、西側から東側の水田に流れるようになっていいるが、そのほかは南から北に流れていいる。水田に伴う灌漑用水は、4a層水田と同様に検出されておらず、水田としての全体像は不明である。しかし、SD01が同時期のものであり、何らかの関係があったであろう。

3 まとめ

これまでの4面の水田を中心に、その概略と細かい視点からの観察を述べてきたが、さらに若干の考察を加え、まとめとしたい。

本遺跡の水田は、4段階の変遷が考えられる。

- 一段階 18 a 層水田
- 二段階 9 a 層水田を中心とした前後の段階
- 三段階 4 a・3 a 層水田
- 四段階 近世～現代までの水田

一段階は、水田初現期であり、高松平野における水田の発生に関わる問題である。もし、水田と確認されれば最古の水田となる。

二段階は、古墳時代後期初頭（5世紀末～6世紀初）の水田であり、旧河道の埋没による低地という狭い範囲に存在している。この水田は、自然地形を巧みに活用し、かなり計画性のある小区画水田であり、弥生時代の小区画水田とほとんど本質的に同様である。香川県内では古墳時代の水田の検出例は今までに報告されておらず初めてである。近県においても、この時代の水田は検出例が少なく、対岸の岡山県と鳥取県の五例のみである。岡山県では岡山市中溝遺跡⁽⁷⁾、岡山市南方釜田遺跡⁽⁸⁾、岡山大学校内遺跡工学部情報工学科校舎予定地⁽⁹⁾で水田が検出されている。これらの水田も本遺跡の水田と同じく自然地形を活用した小区画水田である。しかし、南方釜田遺跡のH下層水田での一筆の面積が60～120m²であるのに対して、本遺跡では15m²未満であり、最も多いのは4m²台である。つまり、非常に規模の小さな水田であるという点に大きな違いがある。この違いの起因は何によって生じたのであろうか。八賀氏や高谷氏、都出氏をはじめとする多くの方が指摘しているように、田面湛水と水配分の効率のために縄文時代晩期の初期水田時より小区画水田が営まれていた。その小区画水田の規模は基盤となる地形の傾斜度に大きく関連しており、傾斜が急になると規模が小さくなっていく。本水田は、南方釜田遺跡の水田より急傾斜部に存在している可能性が考えられる。また、旧河道の埋没による微低地に営まれていた水田であり、水田直下の透水性の高い土壌に対する灌漑効率を高めるための水管理の必要性からより小さな小区画水田となったとも考えられる。

三段階は、中世前半（12世紀末～13世紀初）の水田であり、西接する浴・長池遺跡のSR01埋没による低地においても同時期の水田が検出され、広範囲にわたって営まれていた。水田の畦畔は正方位方格地割であり、条里地割と考えられる。高松平野の条里地割に関しては従来から歴史地理的手法によって研究されており、近年では1992年に刊行された『讃岐国弘福寺領の調査－弘福寺領讃岐国山田田図調査報告書』⁽¹⁰⁾において学際的研究が実施されている。さらに、一般国道11号線高松東道路建設に伴う一連の発掘調査において、条里地割の南北溝が検出されており、高松平野の条里地割は次第に明らかになってきた。それに基づき、本遺跡の東端近くに南北方向の坪界線が想定されており、実際に発掘調査でSD01が検出された。この溝は、3 a・4 a 層水田とほぼ同時期であり、何らかの関連があると考えられる。本水田と同時期の古代末～中世前半の水田としては、近県では岡山県の岡山大学構内遺跡男子寮予定地⁽¹¹⁾、南方釜

田遺跡と高松市の弘福寺領讃岐国山田郡田図比定地・浴・長池遺跡¹²が挙げられる。山田郡田図比定地では、13世紀頃の地表面において東西・南北の坪界線の溝が検出され、その内側に約10m間隔で溝があり、長方形の区画となっていた。一方、本水田は、一部に弥生時代の小区画水田と共通の基盤地形による区画の乱れがあるが、全体としては正方位で方格上の小区画地割となっている。このような水田は、従来より知られていた長方形、半折形とは異なった地割であり、中世の条里型水田と違った水田景観となっている。このような例は、岡山大学構内遺跡の6層・7層水田、南方釜田遺跡のG下層水田、浴・長池遺跡の5a・6a層水田においても検出されている。この中世の方格小区画水田が発生した要因について明確な答えはもっていない。しかし、根木氏による次の見解は一考に値する。「小区画が長方形地割の中をより細かく細分した結果と仮定してみれば、小さい区画に三単位、大きな区画でも二単位でほぼ長方形の区割り幅に対応することが注意される¹³。」さらに、その要因として「川床の低下に伴う水不足現象による可能性」を考えている。このような現象は、高松平野にもあてはまることである。高橋氏によれば、「古代末に生じた段丘化によって、段丘面上に当たる部分では地下水位の低下や既存の灌漑システムの機能が低下した¹⁴」のであり、香東川の川床の低下による水不足を原因として、より効率的に配水する必要が生じ、小区画の水田となったと考えられる。

四段階は、近世～現代までの条里型水田であり、河川の布状洪水堆積層と水田耕土が繰り返している。その水田は広範囲に広がっており、のどかな水田風景となっていた。しかし、現在では都市化の波が大きく影響し、急速にその様相を変えている。

弥生時代以来の水田形態に関しては、多くの論考があり、いろいろな分類がなされている。都出氏は、大区画内に小区画をもたないA類型と小区画を有するB型類に大別し、さらにB類型を三つの形に細分している¹⁵。工楽氏は、A～E類の5分類している¹⁶。また、阪田氏は、小区画水田をA～Fの6つの形態に分類している¹⁷。各氏の分類を本遺跡の二・三段階の水田に当てはめると次のようになる。二段階の水田は、都出氏のB類型の第一型、工楽氏のB類、阪田氏のC類である。この水田は、自然地形に沿う直線的な畦畔による方形区画の水田であり、一部に不整形な部分もある。本水田では、大畦畔は検出されなかったが、畦畔が東西南北を基本としており、阪田氏のCからDへの移行期と考えられる。また、他の遺跡と比較して水田の規模が非常に小さいことが特徴である。三段階の水田は、都出氏のB類型の第三型、工楽氏のD類、阪田氏のE類である。この型の特徴は条里制地割によって大区画が設定され、条里の一坪の内部が小区画に細分されることである。従来はこの小区画が長方形、半折形水田であると考えられていた。しかしながら、本水田の区画は非常に小さいものであり、上記の類型とは異なった性格をもつ区画である。この条里制地割の中の小区画水田が瀬戸内海沿岸東部のみの特異な例であるかどうかは、発掘例が少ないため明言することはできない。

ここ数年来、讃岐平野において水田跡の検出が増加しており、前述した高松東道路関係の遺跡の他に、空港跡地遺跡⁰⁸でも10世紀前後と12世紀前後の時期の異なる二面の水田が検出された。この水田は、幅約10mで、長さ約30mの区画と推定されている。時期は異なっているが、狭い讃岐平野において区画の違う条里型水田があるというのは興味のある事実である。今後、水田跡の検出例がさらに増加することにより、弥生時代から古代、さらに中世・近世に至る讃岐平野の水田様相の変遷、換言すれば土地利用の変遷を明らかにすることが可能となる。このことは、日本文化の琴線をなす稲作文化解明する手がかりとなるであろう。

註

- (1) 条里プランの復原に関する研究史は、『讃岐国弘福寺領の調査』において石上英一氏が詳細に述べている。また、金田章祐氏は『古代日本の景観』（吉川弘文館1992年）『微地形と中世村落』（吉川弘文館1993年）において最近の発掘調査の成果を基にして高松平野の条里プランの復原や土地利用の変遷について総合的に論究している。
- (2) 西谷 正 「朝鮮半島の道」『しにか』第四卷第八号 大修館書店 1993年
- (3) 香川県教育委員会・財香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局『林・坊城遺跡』 1993年
- (4) 高松市教育委員会・建設省四国地方建設局 『浴・長池遺跡』 1993年
- (5) 片桐孝浩 「川津下樋遺跡」『日本考古学協会年報43』 1992年
- (6) 香川県教育委員会・財香川県埋蔵文化財調査センター 「鴨部・川田遺跡」『国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成3年度』 1992年
- (7) 柳瀬昭彦 「中国・四国地方における稲作農耕の開始と展開」『シンポジウム日本における稲作農耕の起源と展開』 日本考古学協会編 学生社 1991年
- (8) 註(7)文献・根木 修 「水田造成の歴史」新版『古代の日本』第四卷中国・四国 角川書店 1992年・根木 修 「岡山市南方釜山遺跡における条里地割の変遷」『条里制研究』第5号 1989年
- (9) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 『岡山大学構内遺跡調査研究年報6』 1989年 7～9の遺跡の水田に関しては、京都大学東南アジア研究センターが1987年に刊行した『古代稲作農耕の学際的研究』にも収録されている。
- (10) 高松市教育委員会 『讃岐弘福寺領の調査』 1992年
- (11) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 『津島岡大遺跡 3』 1992年
- (12) 註(4)文献
- (13) 根木 修 「水田造成の歴史」新版『古代の日本』第四卷中国・四国 角川書店

1992年

- (14) 高橋 学 「高松平野の地形環境」 註(10) 文献
- (15) 都出比呂志 『日本農耕社会の成立過程』 岩波書店 1987年
- (16) 工楽善通 『水田の考古学』 東京大学出版会 1991年
- (17) 阪田育功 「大阪平野の条里遺構」『条里制研究』第4号 1988年
- (18) 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター 『空港跡地遺跡発掘調査概報
平成4年度』 1993年

第 4 章

調査のまとめ

お わ り に

一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財調査報告書の第2冊の編集がおわるにあたり、浴・松ノ木遺跡についてのまとめを行いたい。浴・松ノ木遺跡で検出した遺構の詳細は第3章及び第4章において詳しく述べており本文中を参照されたいが、この発掘調査で判明した本遺跡の特徴からは高松平野の開発過程を検証するうえで貴重な成果を上げることができた。本遺跡は生産に関する遺構を多く検出しており、集落の中でも住居域に付随する、どちらかといえば縁辺部を確認しているものと考えられる。調査位置にも恵まれたが、旧河道が機能を失い徐々に埋没していく段階での痕跡を時代を追って、時間的制約がありすべてを確認したわけではないが、確認できたことは大きな成果であった。特に旧河道が埋没していく段階で確認した水田遺構の検出は、西隣の浴・長池遺跡を含めて昭和62年度から始まった弘福寺領讃岐国山田郡田原の一連の調査による成果を十分に生かしたもので、県内では坂出市下川津遺跡を除けば、検出例が少なかった水田遺構の資料の増加を提供した。これらの水田遺構は高松平野の変遷を考えることのみならず、当時の環境を考えるうえにおいても貴重な資料を提供したことになる。この部分に関しては第3章の第3節において詳しく述べている。検出した遺構が自然河川および溝状遺構のみであったが、古代以前は氾濫を繰り返していた香東川の旧河道とその周辺において、自然と闘い農耕を行った当時の痕跡を検出したことによって、集落の中心部特に住居等の考察しかできなかった状況を一步外に向けて考えられるような資料を増加させた意義は大きい。また、微高地縁辺部において検出したSD02、06、07は高松平野においても同時期の遺跡の検出例の増加によって様相がわかってきた弥生時代後期後半から終末にかけての時期に掘削されたものと考えられる。中でも、SD02は出土遺物、土層堆積状況から長期の使用が考えられ、当遺跡周辺の微高地上における中心的な水路であった可能性があり、人口の増加にともなう多くの労働力をもって大規模な開発ができるようになった痕跡でもある。この時期に伴う水田遺構は残念ながらこの調査範囲からは検出できなかったが、近い将来確認できるものと考えられる。旧河道が埋没していく段階において古墳時代と考えられる木樋もSD11から廃棄された状況で検出し、地形の平坦化が進み弥生時代後期から始まった本格的な開発が古墳時代においても継続して行われている様相の一端を確認した。

これらの発掘調査の成果とは別に、自然科学的な分析では、大変お忙しいところ皇學館大學外山秀一氏にはプラント・オパール分析により当時の植生および土地条件の変化について分析していただいた。また金沢大学鈴木三男、森林総合研究所能城修一両氏には旧河道他から出土した木製品の樹種鑑定をしていただき、当時の木材利用の貴重な成果を得ることができた。詳

細については本文中を参照されたい。

限られた日数と限られた陣容においては最大の成果を上げられたと考えられる。このような状況で発掘調査及び報告書の刊行にこぎつけられたのは、周囲の協力がなければできないことである。一連の調査によって得られた成果は、現在も後続の報告書に向けて鋭意整理中であり、不備な点は後続の報告書の中で修正したいと考えている。

最後になりましたが、建設省四国地方建設局、同香川工事事務所、香川県教育委員会、財団法人香川県埋蔵文化財調査センター、高松市都市開発部太田第2区画整理事務所、弘福寺領讃岐国山田郡田岡調査委員会委員の方々、他大勢の方々に協力、助言をいただいた。記して謝意を申し上げます。

遺物觀察表

S X 0 1 出土土器

挿図 番号	図版 番号	器 種	法 量 (cm)	施文の特徴	成形及び調整方法	胎 土	色 調	焼成	備 考
第13図 - 1	図版27	縄文時代 深鉢	残存高3.1	胴部外面 刻目突帯文		1mm以下の 石英を多量 に含む	外 にぶ い黄褐 内 にぶ い赤褐	不良	
- 2	図版27	弥生土器 壺	残存高2.0		口縁部内外面 磨滅の為調整 不明	1mm以下の 石英を多量 に含む	内外 に ぶい黄橙 色	不良	
- 3	図版27	弥生土器 壺底部	底径9.9 残存高10.2		底部外面 ヘラミガキ 板ナデ 底部内面 板ナデ	1mm以下の 石英と角閃 石を多量に 含む	外 浅黄 内 にぶ い黄橙色	良	
- 4	図版27	弥生土器 壺	残存高7.8	頸部外面 貼付突帯文	頸部外面 ハケメ	3mm以下の 石英を多量 に含む	外 灰黄 内 明黄 褐	良	
- 5	図版27	弥生土器 甕	残存高3.5	胴部外面 ヘラ描沈線 6条		2mm以下の 石英を含む	外 にぶ い黄橙 内 灰白	良	
- 6	図版27	〃 〃	口径19.4 残存高9.3	口縁端部 刻目文 胴部外面 ヘラ描沈線 8条	口縁部内外面 ヨコナデ 胴部外面 ハケメ	1mm以下の 石英と角閃 石を少量含 む	外 灰褐 内 灰	良	
- 7	図版27	〃 〃	残存高7.1	胴部外面 櫛描直線文 10本1束	胴部内面 ナデ	2mm以下の 石英を多量 に含む	外 にぶ い褐 内 明褐 灰	良	胴部外面 黒斑
- 8	図版27	〃 〃	残存高6.7	胴部外面 櫛描直線文 7条	胴部内面 ナデ	2mm以下の 石英を多量 に含む	内外 灰 白	良	
- 9	図版27	〃 〃	口径22.2 残存高2.2	口縁端部 斜格子文 胴部外面 沈線2条 (現状)	口縁部外面 ヨコナデ	2mm以下の 石英を多量 に含む	内外 灰 白	良	
- 10	図版27	〃 〃	口径32.4 残存高4.5	口縁端部 刻目文 胴部外面 へ描直線文 7条	口縁部内外面 ヨコナデ	2mm以下の 石英を含む	外 にぶ い黄橙 内 灰白	良	
- 11	-	甕 底部	底径7.3 残存高3.2		磨滅の為調整不明	2mm以下の 石英を多量 に含む	外 橙 内 にぶ い橙	良	
- 12	-	〃	底径7.0 残存高3.7		底部外面 ヨコナデ 〃 内面 磨滅の為調整 不明	3mm以下の 石英を多量 に含む	外 橙 内 灰白	良	

挿図 番号	図版 番号	器 種	法 量 (cm)	施文の特徴	成形及び調整方法	胎 土	色 調	焼成	備 考
第13図 -13	—	弥生土器 甕底部	底径6.3 残存高5.0		磨減の為調整不明	3 mm以下の 石英を多量 に含む	外 明褐 内 褐灰	良	
-14	—	〃	底径7.0 残存高5.1		磨減の為調整不明	2～3 mmの 石英を多量 に含む	外 灰白 内 黒	良	
-15	—	〃	底径6.2 残存高7.0		底部外面 ハケメ	5 mm以下の 石英と角閃 石を多量に 含む	外 浅黄 内 褐灰	良	

S D 0 2 IV期出土土器

挿図 番号	図版 番号	器 種	法 量 (cm)	施文の特徴	成形及び調整方法	胎 土	色 調	焼成	備 考
第19図 -1	図版28	弥生土器 壺	残存高3.6	頸部外面 ヘラ描直線 文(現状3 条)		2 mm以下の 石英, 角閃 石を含む	内外 灰 黄褐	良	
-2	図版28	〃 〃	口径20.2 残存高6.9		口縁部内外面 ヘラミガキ ヨコナデ 頸部内外面 ヘラミガキ	2 mm以下の 石英, 角閃 石を少量含 む	内外 浅 黄	良	
-3	—	弥生土器 壺底部	底径10.2 残存高6.0		底部外面 ヘラミガキ 指頭圧痕 内面 ヘラミガキ	3 mm以下の 石英を多量 に含む	外 にお い黄 内 黒	良	
-4	—	〃 〃	底径13.0 残存高8.4		底部外面 ヘラミガキの 後ヘラケズリ 指頭圧痕 内面	2 mm以下の 石英, 角閃 石を含む	外 暗灰 内 灰黄	良	
-5	—	弥生土器 甕	口径26.2 残存高3.1	口縁端部 刻目文	口縁部外面 ナデ(指頭圧 痕) 内面 ヨコナデ	1 mm以下の 石英, 角閃 石を多量に 含む	外 灰黄 内 にお い黄橙	良好	
-6	図版28	〃 〃	口径30.4 残存高4.1	口縁端部 刻目文	口縁部外面 指ナデ ヨコナデ 内面 ヨコナデ	1 mm～2 mm の石英を多 量に含む	外 浅黄 内 にお い橙	良	
-7	図版28	〃 〃	口径27.0 残存高2.5	胴部外面 ヘラ描沈線 4条(現状)	口縁部内外面 ヨコナデ	1 mm以下の 石英を多量 に含む	内外 にお い黄橙	良	
-8	図版28	〃 〃	残存高2.7	胴部外面 ヘラ描沈線 2条(現状)	口縁部内外面 ヨコナデ	1 mm以下の 石英を多量 に含む	内外 灰 黄	良	

挿図 番号	図版 番号	器 種	法 量 (cm)	施文の特徴	成形及び調整方法	胎 土	色 調	焼成	備 考
第19図 - 9	図版28	弥生土器 甕	口径18.4 残存高3.0	口縁部内外面 指頭圧痕	口縁部内外面 ヨコナデ	2mm以下の 石英を多量 に含む	内外 灰 黄	良	
-10	図版28	〃 〃	口径17.8 残存高4.4	胴部外面 ヘラ描沈線 2条	口縁部内外面 ヨコナデ		外 浅黄橙 内 灰黄褐	良	
-11	-	弥生土器 壺	口径20.0 残存高1.7	口縁端部 刻目文 凹線1条	口縁部内外面 ヨコナデ		内外 に ぶい黄橙	良	
-12	図版28	〃 〃	残存高3.7	胴部外面 楯描による 扇形文 ヘラ描沈線 5条	胴部内面 ナデ		内外 灰 黄褐	良	
-13	-	〃 〃	口径11.6 残存高4.1	口縁端部 刻目文	口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の 石英を多量 に含む	内外 灰 黄褐	良	
-14	-	〃 〃	口径11.8 残存高4.7		口縁部内外面 ヨコナデ 頸部外面 ハケメ	1mm以下の 石英, 角閃 石を多量に 含む	内外 灰 黄褐	良	
-15	図版28	〃 〃	口径10.0 残存高4.8	口縁端部 刻目文 口縁部 円孔 2個1対 頸部 円孔 2個1対	口縁部内外面 ヨコナデ 頸部内面 シボリメ	1mm以下の 石英	外 灰黄 内 灰白	良	
-16	図版28	〃 〃	口径10.0 残存高8.6	口縁端部 刻目文 胴部外面 ヘラ描沈線 4条	口縁部内外面 ヨコナデ 頸部外面 ハケメ 内面 シボリメ ハケメ	1mm以下の 石英を多量 に含む	内外 灰 黄	良	
-17	-	〃 〃	口径12.0 残存高3.5	口縁端部 刻目文 口縁部外面 刻目突帯文 3条	口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の 石英を多量 に含む	外 にぶ い黄 内 黄褐	良	
-18	図版28	〃 〃	口径17.0 残存高8.6	口縁端部 刻目文 口縁部外面 刻目突帯文 3条 頸部外面 波状文9条 楯描直線文 9条	口縁部内外面 ヨコナデ 頸部内面 シボリメ	2mm以下の 石英, 角閃 石を多量に 含む	内外 暗 灰黄	良好	
-19	-	〃 〃	口径19.0 残存高7.3	頸部外面 指頭圧痕突 帯文	磨滅の為調整不明	1mm以下の 石英少量含 む	内外 明 赤褐	良	

挿図 番号	図版 番号	器 種	法 量 (cm)	施文の特徴	成形及び調整方法	胎 土	色 調	焼成	備 考
第20図 - 1	-	弥生土器 甕	口径21.4 残存高4.0		口部縁内外面 ヨコナデ 胴部外面 ハケメ 内面 ナデ	1mm以下の 石英、角閃 石を多量に 含む	外 にお い黄橙 内 灰黄 褐	良	
- 2	-	〃 〃	口径23.0 残存高2.0		口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の 石英、角閃 石を多量に 含む	内外 赤 褐	良	
- 3	-	〃 〃	口径28.2 残存高5.0		口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の 石英、角閃 石を多量に 含む	外 灰 内 黄灰	良	
- 4	-	〃 〃	口径26.4 残存高5.4	口縁端部 刻目文 頸部外面 押圧突帯文 胴部外面 櫛描直線文 5条 波状文4条 (現状)	口縁部内外面 ヨコナデ 胴部外面 わずかにハケ メが残る 〃 内面 ナデ	1mm以下の 石英、長石 を多量に含 む	外 灰白 内 にお い黄	〃	
- 5	-	弥生土器 鉢	口径19.8 残存高3.1		口縁部内外面 ヨコナデ	2mm以下の 石英を少量 含む	内外 灰 黄褐	〃	
- 6	図版29	〃 〃	口径20.0 残存高2.1		口縁部内外面 ヨコナデ 胴部外面 ハケメ	1mm以下の 石英を多量 に含む	外 明赤 内 にお い赤橙	〃	
- 7	-	〃 〃	口径15.8 残存高5.9	口縁端部 刻目文 胴部外面 列点文	口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の 石英、角閃 石を少量含 む	内外 赤 褐	良好	口縁部内 外面 黒斑
- 8	-	〃 〃	口径20.2 残存高2.1		口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の 石英、角閃 石を多量に 含む	内外 赤 褐	良	
- 9	-	弥生土器 壺	口径13.4 残存高1.7		口縁部内外面 ヨコナデ	〃	外 にお い黄橙 内 にお い黄	〃	
- 10	-	〃 〃	口径16.6 残存高8.3	口縁端部 凹線3条 頸部外面 ハケ原体に よる押圧文	口縁部内外面 ヨコナデ 頸部外面 ハケメ 〃 内面 シボリメ	〃	外 灰褐 内 灰黄 褐	〃	
- 11	-	〃 〃	口径22.2 残存高5.0	口縁端部 凹線4条	口縁部内外面 ヨコナデ 頸部内外面 ハケメ	〃	外 赤褐 内 暗赤 褐	〃	

挿図 番号	図版 番号	器 種	法 量 (cm)	施文の特徴	成形及び調整方法	胎 土	色 調	焼成	備 考
第20図 -12	-	弥生土器 甕	口径19.2 残存高1.3	口縁端部 凹線3条	口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の 石英を多量 に含む	内外 に ぶい黄橙	良好	
-13	-	〃 〃	口径22.0 残存高4.2	口縁端部 凹線2条	口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の 石英を多量 に含む	外 にぶ い橙 内 灰褐	良好	
-14	-	〃 甕底部	底径7.8 残存高3.7		底部内外面 ナデ	1mm以下の 石英, 角閃 石を多量に 含む	外 灰黄 内 黒	良	
-15	-	〃 〃	底径5.1 残存高4.1		底部内外面 ナデ	〃	内外 明赤褐	良	
-16	図版29	紡錘車	外径 縦3.7×横3.2 孔径 0.6×0.6		表面 ヘラミガキ	〃	内外 暗灰黄	良	土器片利用 未成品
第21図 -1	-	弥生土器 甕	残存高3.6		胴部外面 〃 内面 ハケメ 指ナデ (指頭 圧痕)	1mm以下の 砂粒少量含 む	内外 灰白	良好	
-2	-	〃 〃	口径11.7 残存高4.8		口縁部内外面 胴部外面 ヨコナデ ヘラミガキ	1mm以下の 石英, 角閃 石を含む	内外 暗灰黄	良	
-3	-	〃 〃	口径17.7 残存高6.8		口縁部内外面 胴部外面 〃 内面 ヨコナデ ハケメ ヘラケズリ	1mm以下の 石英, 角閃 石を多量に 含む	外 にぶ い黄橙 内 灰黄 褐	良好	
-4	-	〃 〃	口径18.7 残存高2.8		口縁部内外面 胴部外面 〃 内面 ヨコナデ ハケメ・タ タ キ ハケメ・指頭 圧痕	1mm以下の 石英, 角閃 石を含む	内外 灰黄	良好	
-5	-	〃 〃	口径15.4 残存高1.3		口縁部内外面 ヨコナデ	〃	外 暗灰 黄 内 黄褐	良好	
-6	図版29	〃 〃	口径17.1 残存高17.5		口縁部内外面 胴部外面 〃 内面 ヨコナデ ハケメ・ヘ ラ ミ ガ キ 指頭圧痕 ヘラケズリ	〃	外 黄褐 内 にぶ い黄	良好	体部外面 煤付着
-7	図版29	弥生土器 鉢	口径13.0 残存高4.3		胴部外面 〃 内面 指ナデ ハケメ・ナデ	〃	内外 赤灰	良好	

挿図 番号	図版 番号	器 種	法 量 (cm)	施文の特徴	成形及び調整方法	胎 土	色 調	焼成	備 考
第21図 - 8	-	弥生土器 高杯・杯	口径22.0 残存高3.0	口縁端部 擬凹線 1条 口縁部内面 〃 3条	口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の 石英, 角閃 石を含む	内外 に ぶい褐	良好	
- 9	-	〃 〃	口径23.3 残存高5.1	口縁部内面 擬凹線 3条	口縁部内外面 ヨコナデ 杯部外面 ヘラケズリの 後ヘラミガキ	〃	内外 黄 褐	良好	
-10	-	〃 〃	口径24.2 残存高4.7	口縁部内面 擬凹線 4条	口縁部内外面 ヨコナデ 杯部外面 ヘラミガキ	〃	内外 灰 黄褐	良好	
-11	図版29	弥生土器 製塩土器	底径3.7 残存高4.3		胴部外面 指ナデ 〃 内面 ハケナデ 底部外面 指ナデ (指頭 圧痕)	砂粒をほと んど含ま ない	内外 灰 灰白	良	
-12	-	弥生土器 壺底部	底径7.5 残存高7.2		胴部外面 ハケメの後ヘ ラミガキ 〃 内面 ヘラケズリ 底部外面 ヘラケズリ	1mm以下の 石英, 角閃 石を多量に 含む	外 にぶ い黄橙 内 にぶ い黄	良好	
-13	-	〃 〃	底径2.8 残存高2.8		胴部外面 ヘラケズリ 〃 内面 ナデ 底部外面 ヘラケズリ	1mm以下の 石英, 角閃 石を少量含 む	外 内 灰 灰白	良	
-14	-	〃 〃	底径4.7 残存高4.4		体部外面 ハケメ 〃 内面 板ナデ シボリメ	1mm以下の 石英, 角閃 石を含む	外 内 浅黄 灰白	良好	体部外面 黒斑
-15	-	〃 〃	底径7.0 残存高5.5		体部外面 ハケメ, ヘラ ミガキ 〃 内面 ヘラケズリ 底部外面 ヘラミガキ	1mm程度の 石英, 角閃 石を含む	外 内 灰 オ リーブ 灰	良	体部外面 から底部 に黒斑

SD02 III期 出土土器

挿図 番号	図版 番号	器 種	法 量 (cm)	施文の特徴	成形及び調整方法	胎 土	色 調	焼成	備 考
第17図 -10	-	須恵器 杯蓋	口径11.4 残存高2.4		口縁部外内面 ヨコナデ	精良	外 内 灰 灰白	良好	堅緻 反転復元
-11	-	弥生土器 底部	底径8.3 残存高3.5		磨滅の為調整不明	1mm~5mm の石英を多 量に含む	内外 明 黄褐	良	
-12	-	〃 〃	底径6.0 残存高4.0		底部外面 ヘラミガキ 〃 内面 ヨコナデ	3mm以下の 石英多量に 含む	外 内 褐 黒	良	

挿図 番号	図版 番号	器 種	法 量 (cm)	施文の特徴	成形及び調整方法	胎 土	色 調	焼成	備 考
第17図 -13	-	弥生土器 甕	口径17.0 残存高4.4		口縁部内外面 ヨコナデ	3mm以下の 石英を含む	外 褐灰 内 灰黄	良	
-14	-	〃 〃	口径20.2 残存高2.0	口縁端部 凹線2条	口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の 石英、角閃 石を含む	内外 暗灰黄	良	

SD02I期 出土土器

挿図 番号	図版 番号	器 種	法 量 (cm)	施文の特徴	成形及び調整方法	胎 土	色 調	焼成	備 考
第17図 -1	-	須恵器 杯蓋	口径13.4 残存高2.7		口縁部内外面 ヨコナデ	精良	内外 灰	良好	堅緻 反転復元
-2	図版29	〃 〃	口径13.2 残存高4.3		口縁部内外面 ヨコナデ 天井部外面 ヘラケズリ 〃 内面 ヨコナデ	1mm以下の 石英、角閃 石を含む	内外 灰 白	良好	〃 〃
-3	-	〃 〃	口径11.9 残存高1.3		口縁部内外面 ヨコナデ	精良	内外 灰 白	良好	〃 〃
-4	-	〃 〃	口径16.0 残存高1.4		口縁部内外面 ヨコナデ	〃	内外 灰 白	良好	反転復元
-5	-	須恵器 杯身	底部4.4 残存高2.2		底部外面 ヘラケズリ 〃 内面 ヨコナデ	〃	外 灰 内 灰白	良好	堅緻 反転復元
-6	-	〃 〃	底径7.8 残存高1.3		底部外面 ヘラケズリ 〃 内面 ヨコナデ	〃	内外 灰 白	良好	〃 〃
-7	図版29	〃 〃	口径15.6 残存高2.6		口縁部内外面 ヨコナデ	〃	内外 灰	良好	〃 〃
-8	-	〃 〃	口径13.0 残存高2.1		口縁部内外面 ヨコナデ	〃	外 灰 内 灰白	良好	〃 〃
-9	図版29	古墳時代 把手			内外面 指頭圧痕	1mm以下の 石英、角閃 石を多量に 含む	内外 灰 白	良	

SD06 出土土器

挿図 番号	図版 番号	器 種	法 量 (cm)	施文の特徴	成形及び調整方法	胎 土	色 調	焼成	備 考
第27図 -1	-	弥生土器 壺	口径12.0 残存高3.5	口縁端部 刻目文	口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の 石英を含む	内外 に ぶい黄橙	良好	
-2	-	〃 〃	口径15.8 残存高6.3		口縁部内外面 ヨコナデ 頸部外面 ハケメ 指頭圧痕 〃 内面	1mm以下の 石英, 角閃 石を多量に 含む	内外 に ぶい褐	良	
-3	図版30	〃 〃	口径13.3 残存高11.1		口縁部内外面 ヨコナデ 頸部内面 シボリメ・指 頭圧痕 胸部外面 ハケメ・ヘラ ミガキ ヘラケズリ 〃 内面	〃	外 にぶ い橙 内 褐	良	胴部外面 黒斑
-4	図版30	〃 〃	口径15.8 残存高22.4		口縁部内外面 ヨコナデ 頸部外面 ハケメ ハケメ, 指頭 圧痕 胸部外面 ハケメ ハケメ, ヘラ ケズリ, 指頭 圧痕 〃 内面	〃	内外 に ぶい黄褐	良	
-5	図版30	〃 〃	残存高19.4		頸部内面 指頭圧痕 胸部外面 タタキ 指ナデ 〃 内面	〃	外 にぶ い橙 内 明褐 灰	良	
-6	図版30	〃 〃	残存高27.6		口縁部内外面 ヨコナデ 頸部外面 ハケメ シボリメ 胸部外面 ハケメ, ヘラ ミガキ 指頭圧痕 ヘラミガキ ヘラケズリ 〃 内面 底部外面 〃 内面	〃	内外 明 赤褐	良	底部外面 黒斑
第28図 -1	-	弥生土器 甕	口径15.0 残存高3.2	口縁部内面 凹線2条	口縁部内外面 ヨコナデ 胸部外面 ハケメ 指ナデ (指頭圧痕) 〃 内面	1mm以下の 石英と角閃 石を多量に 含む	内外 に ぶい橙	良好	
-2	-	〃 〃	口径15.8 残存高3.6		口縁部内外面 ヨコナデ 胸部内面 指頭圧痕	〃	内外 に ぶい褐	良	
-3		〃 〃	口径16.8 残存高3.0		口縁部内外面 ヨコナデ 胸部外面 ハケメ 指頭圧痕 〃 内面	〃	内外 褐	良	

挿図 番号	図版 番号	器 種	法 量 (cm)	施文の特徴	成形及び調整方法	胎 土	色 調	焼成	備 考
第28図 - 4	図版31	弥生土器 甕	口径14.6 底径5.2 器高23.5		口縁部内外面 ヨコナデ 胴部外面 ハケメ ヅ 内面 指ナデの後ヘ ラケズリ 底部外面 ヅ 内面 ヘラミガキ 指ナデの後ヘ ラケズリ	1mm以下の 石英と角閃 石を多量に 含む	外 にぶ い褐 内 褐	良好	
- 5	-	ヅ ヅ	口径17.0 残存高3.7		磨滅の為調整不明	2mm以下の 石英を多量 に含む	外 灰黄 内 灰白	良	
- 6	図版31	ヅ ヅ	口径15.8 底径4.5 器高26.9		口縁部内外面 ヨコナデ 胴部外面 ハケメ ヅ 内面 指頭圧痕 底部外面 ヘラミガキ ヅ 内面 指ナデの後ヘ ラケズリ	1mm以下の 石英、角閃 石を多量に 含む	内外 褐	良	
- 7	-	ヅ 甕底部	底径3.0 残存高2.0		底部外面 タタキ	1mm以下の 石英を少量 含む	外 灰白 内 浅黄 橙	良	
- 8	-	ヅ ヅ	底径4.2 残存高3.8		底部外面 ヘラミガキ ヅ 内面 ヘラケズリ	1mm以下の 石英、角閃 石を多量に 含む	外 灰黄 内 にぶ い黄橙	良	
- 9	-	ヅ ヅ	底径4.8 残存高4.4		底部外面 ヘラミガキ ヅ 内面 ヘラケズリ	2mm以下の 石英、角閃 石を多量に 含む	外 黒 内 にぶ い黄	良	
- 10	-	ヅ ヅ	底径5.8 残存高4.7		底部外面 ヘラミガキ ヅ 内面 ヘラケズリ	1mm以下の 石英、角閃 石を含む	外 にぶ い赤褐 内 にぶ い橙	良好	
第29図 - 1	-	弥生土器 高杯	口径22.0 残存高3.4		内外面 ヨコナデ	1mm以下の 石英、角閃 石を含む	内外 明 赤褐	良	
- 2	-	ヅ ヅ	口径21.0 残存高4.2	杯部内面 擬凹線 3条	内外面 ヨコナデ	1mm以下の 石英、角閃 石を含む	内外 に ぶい褐	良	
- 3	-	ヅ ヅ	口径22.2 残存高7.9	杯部内面 擬凹線 5条	口縁部内外面 ヨコナデ 杯部外面 ヘラケズリの 後ヘラミガキ ヅ 内面 ヘラミガキ 脚部内面 ヘラケズリ	3mm以下の 石英、角閃 石を多量に 含む	外 にぶ い褐 内 にぶ い黄橙	良好	

挿図 番号	図版 番号	器 種	法 量 (cm)	施文の特徴	成形及び調整方法	胎 土	色 調	焼成	備 考
第28図 - 4	-	弥生土器 高杯	口径24.2 残存高7.4	杯部内面 擬凹線 3条	口縁部内外面 ヨコナデ 杯部外面 ヘラケズリ 内面 ヘラミガキ	3mm以下の 石英, 角閃 石を多量に 含む	外 明赤 褐 内 にぶ い赤褐	良	
- 5	図版31	〃 〃	口径22.0 底径22.0 器高18.4	杯部内面 擬凹線 3条 脚部 円孔 3個	口縁部内外面 ヨコナデ 杯部外面 ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ 脚部外面 ヘラミガキ 内面 ヘラケズリ	1mm以下の 石英, 角閃 石を多量に 含む	外 にぶ い黄橙 内 にぶ い橙	良	
- 6	図版31	〃 〃	口径26.0 底径14.0 器高19.0	杯部内面 擬凹線 2条 脚部 円孔	口縁部内外面 ヨコナデ 杯部外面 ヘラケズリ 内面 ヘラミガキ 脚部内面 ヘラケズリ	〃	外 明褐 内 にぶ い褐	良	
- 7	-	〃 高杯脚部	底径18.4 残存高3.0	脚端部 凹線 2条	脚部外面 ハケメ 内面 ヘラケズリ	1mm以下の 石英, 角閃 石を含む	内外 に ぶい褐	良	
第30図 - 1	-	弥生土器 鉢	口径30.0 残存高3.6	口縁部内面 擬凹線 4条	口縁部内外面 ヨコナデ	〃	内外 に ぶい褐	良好	
- 2	-	〃 〃	口径32.0 残存高5.4	口縁部内面 擬凹線 3条	口縁部内外面 ヨコナデ	〃	内外 橙	良	
- 3	図版31	〃 〃	口径39.6 器高17.9	口縁部内面 擬凹線 3条	口縁部内外面 ヨコナデ 胴部外面 ヘラケズリ 内面 ヘラミガキ	2mm以下の 石英, 角閃 石を多量に 含む	外 明赤 褐 内 にぶ い橙	良好	
- 4	図版31	〃 〃	口径41.6 器高16.9	口縁部内面 擬凹線 3条	口縁部内外面 ヨコナデ 胴部外面 ヘラケズリの 後粗いナデ	〃	内外 に ぶい橙	良好	
- 5	-	〃 〃	口径18.3 残存高2.6		口縁部内外面 ヨコナデ	〃	内外 に ぶい褐	良	
- 6	図版30	弥生土器 鉢底部	底径3.0 残存高2.1		底部外面 ナデ 内面 ハケメ	〃	外 にぶ い赤褐 内 明褐	良好	
- 7	-	弥生土器 鉢	口径17.0 残存高4.1	杯部内面 擬凹線 1条	口縁部内外面 ヨコナデ 杯部外面 ヘラケズリ 内面 ハケメ・ヘラ ミガキ	3mm以下の 石英, 角閃 石を含む	外 橙 内 明赤 褐	良	
第31図 - 1	図版30	弥生土器 壺	底径6.0 残存高21.2		胴部外面 ヘラミガキ 内面 ヘラケズリ 指頭圧痕	1mm以下の 石英, 角閃 石を含む	内外 に ぶい橙	良	頸部外面 にヘラ記 号

S D 0 7 出土土器

挿図 番号	図版 番号	器 種	法 量 (cm)	施文の特徴	成形及び調整方法	胎 土	色 調	焼成	備 考
第33図 - 1	-	弥生土器 壺	口径18.4 残存高1.0		口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以上の 石英を多量 に含む	内外 に ぶい黄橙	良	
- 2	-	弥生土器 高杯脚部	底径18.4 残存高1.9		脚部内外面 ヨコナデ 脚部内面 ヘラケズリ	1mm以下の 石英, 角閃 石を含む	内外 橙	良	
- 3	-	弥生土器 甕底部	底径6.0 残存高2.0		底部外面 ヘラミガキ 内面 ヘラケズリ	1mm以下の 石英, 角閃 石を多量に 含む	外 灰褐 内 にぶ い褐	良	
- 4	-	〃 〃	底径4.8 残存高1.8		磨減の為調整不明	1mm以下の 石英, 角閃 石を含む	外 赤褐 内 にぶ い褐	不良	
- 5	-	〃 〃	底径7.0 残存高4.3		底部外面 ヘラミガキ ヨコナデ 内面 ヘラケズリ	〃	内外 に ぶい褐	良	底部外面 煤付着

S R 0 4 11~13層 出土土器

挿図 番号	図版 番号	器 種	法 量 (cm)	施文の特徴	成形及び調整方法	胎 土	色 調	焼成	備 考
第39図 - 1	-	弥生土器 壺	口径13.2 残存高2.2		口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の 石英を含む	内外 浅 黄橙	良	
- 2	-	〃 〃	口径19.2 残存高3.4	口縁端部 凹線2条	口縁部内外面 ヨコナデ 口縁部外面 ハケメ	1mm以下の 石英, 角閃 石を含む	内外 橙	良好	
- 3	図版32	〃 高杯脚部	残存高9.1	脚部外面中央部 凹線3条 下部 凹線3条 円孔4個	脚部外面 内面 ハケメ シボリメ 布で押さえた 痕有	1mm以下の 石英, 角閃 石を多量に 含む	外 灰黄 内 にぶ い黄褐	良好	
- 4	図版32	〃 壺	残存高13.9	頸部外面 斜格子文 沈線5条	頸部外面 内面 指ナデ ハケメ 指ナデ シボリメ	〃 〃	外 にぶ い黄褐 内 褐	良好	
- 5	-	〃 壺底部	底径9.0 残存高14.5		底部外面 ヘラミガキ 内面 磨減の為調整 不明	2mm以下の 石英を多量 に含む	内外 灰 白	不良	
- 6	-	〃 甕	口径25.0 残存高3.5	口縁端部 刻目文	口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の 石英, 角閃 石を含む	内外 灰 黄褐	良	

挿図 番号	図版 番号	器 種	法 量 (cm)	施文の特徴	成形及び調整方法	胎 土	色 調	焼成	備 考
第39図 - 7	-	弥生土器 鉢	口径20.0 残存高3.6	口縁端部 刻目文	口縁部内外面 ヨコナデ	2mm以下の 石英, 角閃 石を含む	内外 灰	良好	
- 8	-	〃 甕	口径17.5 残存高3.3		口縁部内外面 ヨコナデ 胴部外面 ハケメ 内面 指頭圧痕	1mm以下の 石英, 角閃 石を含む	内外 に ぶい黄褐	良好	
- 9	-	〃 〃	口径19.4 残存高5.9	口縁端部 刻目文	口縁部内外面 ヨコナデ 胴部外面 ハケメ 〃 内面 ヘラミガキ	〃	外 灰褐 内 黒褐	良好	
-10	-	〃 〃	口径14.2 残存高8.2		口縁部内外面 ヨコナデ 胴部外面 ハケメ 〃 内面 ヘラミガキ 指頭圧痕 ヘラケズリ	1mm以下の 石英, 角閃 石を少量含 む	内外 灰 黄褐	良好	
-11	-	〃 高杯脚部	底径14.6 残存高3.0		底部外面 ナデ 〃 内面 ヘラケズリ	1~2mm程 度の石英, 角閃石を多 量に含む	内外 赤 褐	良	
-12	-	〃 甕底部	底径5.6 残存高3.0		底部外面 ヘラミガキ 〃 内面 ヨコナデ	2mm以下の 石英, 角閃 石を多量に 含む	内外 灰 白	良	底部に黒 斑
-13	-	〃 〃	底径6.0 残存高4.5		底部外面 ヘラミガキ 〃 内面 ヘラケズリ ナデ	〃	外 灰黄 内 黄灰	良好	
-14	-	〃 〃	底径6.0 残存高5.0		底部外面 ヘラミガキ 〃 内面 ヘラケズリ	2mm以下の 石英, 角閃 石を含む	外 にぶ い黄褐 内 褐	良好	
-15	-	〃 〃	底径8.0 残存高5.4		底部外面 ハケメ, ヘラ ミガキ 〃 内面 ナデ	5mm以下の 石英を多量 に含む	外 褐灰 内 灰白		

S D 1 1 出土土器

挿図 番号	図版 番号	器 種	法 量 (cm)	施文の特徴	成形及び調整方法	胎 土	色 調	焼成	備 考
第47図 - 1	図版32	弥生土器 壺	口径5.0 残存高6.8	胴部外面 櫛描直線文 15条	口縁部内外面 ヨコナデ 胴部内面 指頭圧痕	1~2mm程 度の石英を 多量に含む	外 にぶ い橙 内 淡橙	良	
- 2	-	〃 〃	口径15.6 残存高1.6	口縁端部 擬凹線 1条 口縁櫛内面 〃 2条	口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の 石英, 角閃 石を多量に 含む	内外 暗 灰黄	良好	

挿図 番号	図版 番号	器 種	法 量 (cm)	施文の特徴	成形及び調整方法	胎 土	色 調	焼成	備 考
第47図 - 3	-	弥生土器 鉢	口径36.0 残存高2.0	口縁端部 沈線1条	口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の 石英, 角閃 石を多量に 含む	外 灰白 内 淡黄	良	

S R 0 4 9 ~ 10層 出土土器

挿図 番号	図版 番号	器 種	法 量 (cm)	施文の特徴	成形及び調整方法	胎 土	色 調	焼成	備 考
第50図 - 1	-	弥生土器 壺	口径13.2 残存高7.8	頸部外面 ヘラ描沈線 4条	口縁部外内面 ヨコナデ	1mm以下の 石英, 角閃 石を含む	外 にぶ い黄褐 内 浅黄	良好	
- 2	-	〃 〃	残存高9.4	頸部外面 刻目突帯文	頸部外面 ヘラミガキ	1mm以下の 石英, 角閃 石を多量に 含む	外 にぶ い黄橙 内 灰白	良	
- 3	-	〃 甕	残存高3.3	胴部外面 楯描直線文 刺突文		1mm以下の 石英を少量 含む	内外 灰 白	良好	
- 4	-	〃 〃	残存高3.6	胴部外面 刺突文 楯描直線文		〃	内外 灰 白	良	
- 5	-	〃 〃	口径33.2 残存高7.8	口縁端部 刻目文 胴部外面 ヘラ描直線 文	内外面 磨滅のため調 整不明	2mm以下石 英, 角閃石 を含む	内外 浅 黄	良	
- 6	-	〃 甕底部	底径12.2 残存高8.5		底部外面 ヘラミガキの 後ハケメ 〃 内面 ハケメ	1mm ~ 3mm の石英, 角 閃石を多量 に含む	外 にぶ い黄 内 浅黄	良	
- 7	-	須恵器 杯蓋	口径13.2 残存高3.8		口縁部内外面 ヨコナデ 天井部外面 ヘラケズリ 〃 内面 ヨコナデ	精良	外 黄灰 内 灰白	良好	堅緻 反転復元
- 8	図版32	〃 高杯蓋	口径12.4 残存高5.6		口縁部内外面 ヨコナデ 天井部外面 ヘラケズリ 〃 内面 ヨコナデ	〃	外 灰白 内 灰	良好	堅緻 反転復元

S R 0 4 7層 出土土器

挿図 番号	図版 番号	器 種	法 量 (cm)	施文の特徴	成形及び調整方法	胎 土	色 調	焼成	備 考
第51図 - 1	-	須恵器 杯蓋	口径12.8 残存高4.4		口縁部内外面 ヨコナデ 天井部外面 ヘラケズリ	精良	内外 灰	良好	堅緻 反転復元

挿図 番号	図版 番号	器 種	法 量 (cm)	施文の特徴	成形及び調整方法	胎 土	色 調	焼成	備 考
第51図 - 2	—	須恵器 高杯脚部	残存高3.9		磨減の為調整不明		内外 灰	不良	反転復元
- 3	—	〃 鉢	底径5.4 残存高8.5		内外面 ヘラケズリ	精良	内外 灰 白	良好	自然釉付 着 堅緻 反転復元
- 4	—	〃 〃	口径12.6 残存高4.8		口縁部内外面 ヨコナデ 胴部内面 ヨコナデ	〃	内外 灰 白	良好	自然釉付 着 堅緻 反転復元

S R 0 3 出土土器

挿図 番号	図版 番号	器 種	法 量 (cm)	施文の特徴	成形及び調整方法	胎 土	色 調	焼成	備 考
第53図 - 1	図版32	土師器 皿	口径18.2 残存高2.5		口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の 石英, 角閃 石少量含む	外 橙 内 にぶ い橙	良	
- 2	図版32	須恵器 杯身	口径13.0 残存高2.7		口縁部内外面 ヨコナデ	精良	内外 灰	良好	堅緻 反転復元
- 3	図版32	〃 壺底部	底径6.0 残存高1.5		底部外面 ヘラ切りの後 ヨコナデ 〃 内面 ヨコナデ	〃	内外 灰 白	良好	〃
- 4	図版32	〃 杯身	口径15.0 残存高4.0		口縁部内外面 ヨコナデ	〃	内外 青 灰	良好	〃
- 5	図版32	土師器 甕	口径22.3 残存高5.9		口縁部内外面 ヨコナデ 胴部外面 粗いハケメ 指頭圧痕 〃 内面	2mm以下の 石英, 長石, 金雲母, 角 閃石を多量 に含む	外 褐 内 明褐	良	

S R 0 4 5～8層 出土土器

挿図 番号	図版 番号	器 種	法 量 (cm)	施文の特徴	成形及び調整方法	胎 土	色 調	焼成	備 考
第55図 - 1	図版33	須恵器 杯蓋	口径15.2 残存高1.3		内外面 ナデ	精良	内外 灰	良好	堅緻 反転復元
- 2	図版33	〃 〃	残存高1.7		内外面 ナデ	〃	内外 灰	不良	反転復元

挿図 番号	図版 番号	器 種	法 量 (cm)	施文の特徴	成形及び調整方法	胎 土	色 調	焼成	備 考
第55図 - 3	図版33	須恵器 杯蓋	口径16.6 残存高2.2		内外面 ナデ	精良	内外 灰 白	良好	堅緻 反転復元
- 4	-	〃 杯身	残存高2.0		内外面 ヨコナデ	〃	内外 灰	良好	堅緻
- 5	-	〃 〃	口径12.4 残存高2.5		口縁部内外面 ヨコナデ	〃	内外 灰	良好	堅緻 反転復元
- 6	図版33	〃 〃	口径14.0 残存高1.8		口縁部内外面 ヨコナデ	〃	内外 灰 白	良	反転復元
- 7	図版33	〃 〃	口径12.0 残存高4.0		口縁部内外面 ヨコナデ	〃	内外 灰 白	良好	堅緻 反転復元
- 8	図版33	〃 〃	口径16.0 残存高3.4		口縁部内外面 ヨコナデ	〃	内外 灰 白	良好	〃 〃
- 9	図版33	〃 〃	口径17.2 残存高4.8		口縁部内外面 ヨコナデ	〃	外 灰 内 灰白	良好	〃 〃
-10	図版33	〃 〃	底径7.8 残存高2.0		内外面 ナデ 底部外面 ヘラ切りの後 高台付	〃	内外 灰	良好	〃 〃
-11	図版33	〃 〃	底径11.8 残存高4.1		内外面 ナデ 底部外面 ヘラ切りの後 高台付	〃	内外 灰 白	良好	〃 〃
-12	図版33	〃 〃	底径15.2 残存高2.2		内外面 ナデ 底部外面 ヘラ切りの後 高台付	〃	内外 灰	良好	〃 〃
-13	-	須恵器 杯	底径8.4 残存高0.7		底部外面 ヘラケズリ ヘラ切り ナデ 〃 内面	〃	内外 灰	良	反復復元
-14	-	〃 皿	底径10.4 残存高1.0		内外面 ナデ 底部外面 ヘラ切り	〃	外 灰白 内 浅黄	良	〃

挿図 番号	図版 番号	器 種	法 量 (cm)	施文の特徴	成形及び調整方法	胎 土	色 調	焼成	備 考
第55図 -15	—	須恵器 皿	底径10.0 残存高0.8		内外面 底部外面 ナデ ヘラ切り	精良	内外 灰 白	良好	堅緻 反転復元
-16	—	〃 杯	底径8.0 残存高1.0		内外面 底部外面 ナデ ヘラ切り	〃	内外 灰	良好	堅緻 反転復元 内面に火 襷
-17	—	〃 皿	底径10.0 残存高0.7		底部外面 〃 内面 ヘラ切り ナデ	〃	内外 灰 白	良	反転復元
-18	—	〃 〃	底径10.0 残存高1.0		内外面 底部外面 ナデ ヘラ切り	〃	内外 灰 白	良	反転復元
-19	—	〃 杯	底径9.2 残存高1.4		内外面 底部外面 ナデ ヘラ切り	〃	内外 灰 白	良好	堅緻 反転復元
-20	—	〃 皿	底径11.8 残存高1.2		内外面 底部外面 ナデ ヘラ切り	〃	内外 灰 白	良好	〃 〃
-21	—	〃 〃	底径10.0 残存高2.2		内外面 底部外面 ナデ ヘラ切り	〃	内外 灰 白	良	反転復元
-22	—	〃 杯	口径12.2 残存高2.3		口縁部内外面 ヨコナデ	〃	内外 灰	良好	堅緻 反転復元 外面に火 襷
-23	—	〃 皿	底径10.0 残存高2.0		内外面 底部外面 ナデ ヘラ切り	〃	内外 灰 白	良	反転復元
-24	—	〃 〃	口径15.4 底径12.0 器高2.0		口縁部内外面 ヨコナデ 底部外面 ヘラ切り	〃	内外 灰 白	良	反転復元 内面に黒 斑
-25	図版33	〃 短頸壺蓋	口径15.0 残存高3.5		口縁部内外面 ヨコナデ 天井部外面 ヘラケズリ	〃	外 灰 内 灰白	良好	堅緻 反転復元
-26	図版33	〃 高杯脚部	底径8.8 残存高2.4		内外面 ナデ	〃	内外 灰	良	反転復元

挿図 番号	図版 番号	器 種	法 量 (cm)	施文の特徴	成形及び調整方法	胎 土	色 調	焼成	備 考
第55図 -27	図版33	須恵器 高杯脚部	底径12.0 残存高2.3		内外面 ヨコナデ	精良	内外 灰 白	良好	堅緻 反転復元
-26	図版33	土師器 甕	残存高2.1		口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の 石英、長石 を含む	外 灰黄 内 黄灰	良	
-29	図版33	須恵器 甕	口径14.2 残存高5.8		口縁部内外面 ヨコナデ 胴部内外面 タタキ	精良	内外 黄 灰	良	反転復元 胴部外面 ヘラ記号
-30	-	〃 〃	残存高16.7		胴部外面 タタキ カキメ タタキ 〃 内面	〃	内外 灰 白	良好	堅緻 反転復元

SD12 出土土器

挿図 番号	図版 番号	器 種	法 量 (cm)	施文の特徴	成形及び調整方法	胎 土	色 調	焼成	備 考
第59図 -1	図版34	染付 広東碗	残存高2.5	外面 格子文 見込内面 壽のくずし た文様		密	素地 濁 灰白 淡灰 釉 青 青須 青	良好	呉須の発 色が良い
-2	図版34	染付碗	底径3.8 残存高2.3	外面 草文? 内面 圈線3条 見込 壽のくずし た文様 圈線1条		〃	素地 濁 灰白 淡灰 釉 青 青須 青	良好	呉須の発 色が良い
-3	図版34	青磁碗	底径5.8 残存高2.1	見込内面 沈線1条		〃	素地 濁 灰白 明緑 釉 灰	良好	高台外面 に釉が多 く付着し ている
-4	図版34	唐津系 青緑釉皿	底径4.9 残存高1.9	見込内面 蛇ノ目釉ハ ギ	底部 削りだし高台	〃	素地 灰 白釉 灰白	良好	高台外面 無釉

SR04 3～4層 出土土器

挿図 番号	図版 番号	器 種	法 量 (cm)	施文の特徴	成形及び調整方法	胎 土	色 調	焼成	備 考
第62図 -1	図版33	須恵器 杯蓋	口径13.0 残存高2.5		口縁部内外面 ヨコナデ	精良	内外 灰 白	良	反転復元
-2	図版33	〃 杯身	口径16.0 残存高3.0		口縁部内外面 ヨコナデ	〃	内外 灰	良好	堅緻 反転復元

挿図 番号	図版 番号	器 種	法 量 (cm)	施文の特徴	成形及び調整方法	胎 土	色 調	焼成	備 考
第62図 - 3	図版33	土師器 杯身	口径14.0 残存高3.3		口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の 石英を多量 に含む	内外 浅 黄橙	良	
- 4	図版33	須恵器 杯身	底径11.9 残存高1.6		底部外面 ヘラケズリの 後ナデ 高台付	精良	内外 灰	良好	堅緻 反転復元
- 5	図版33	土師器 椀	口径16.1 残存高3.5		口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の 石英を多量 に含む	内外 浅 黄橙	良	
- 6	図版33	須恵器 杯	口径12.0 残存高2.6		口縁部内外面 ヨコナデ	精良	外 灰 内 灰白	良好	口縁部内 面に火罨 堅緻 反転復元
- 7	図版33	〃 〃	口径12.0 残存高1.6		口縁部内外面 ヨコナデ	〃	内外 灰	良好	堅緻 反転復元
- 8	図版33	〃 〃	底径10.0 残存高1.6		内外面 底部外面 ナデ ヘラ切り	〃	内外 灰 白	不良	反転復元
- 9	図版33	〃 〃	底径8.0 残存高1.6		底部外面 ヘラ切りの後 ナデ ナデ 〃 内面	〃	内外 灰 白	良	反転復元
-10	図版33	〃 椀	口径16.6 残存高2.5		口縁部内外面 ヨコナデ	〃	内外 灰 白	良好	堅緻 反転復元
-11	図版33	〃 〃	口径15.4 残存高2.7		口縁部内外面 ヨコナデ 〃 内面 ハケメ	〃	内外 灰 白	良	反転復元
-12	図版33	土師器 鍋	口径31.6 残存高4.7		口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の 石英、長石、 角閃石、金 雲母を多量 に含む	外 にお い橙 内 橙	良	
-13	図版33	黒色土器 椀	口径14.7 残存高1.9		口縁部内外面 ヨコナデ 〃 外面 ナデ	1mm以下の 微砂粒を含 む	内外 黒 灰	良好	内外面に 炭素吸着
-14	図版33	〃 〃	口径16.1 残存高3.3		口縁部内外面 ヨコナデ 〃 外面 ナデ	1mm以下の 砂粒を含む	内外 黒 灰	良好	内外面に 炭素吸着

挿図 番号	図版 番号	器 種	法 量 (cm)	施文の特徴	成形及び調整方法	胎 土	色 調	焼成	備 考
第62図 -15	図版33	瓦器 椀	口径11.8 残存高1.5		口縁部内外面 ヨコナデ 〃 外面 ナデ 〃 内面 まばらなヘラ ミガキ	精良	内外 黒 灰	良好	内外面に 炭素吸着
-16	図版33	〃 椀底部	底径5.8 残存高1.3		口縁部内外面 ナデ	微砂粒を多 量に含む	内外 黒 灰	良好	
-17	図版33	土師器 椀	口径14.6 残存高3.0		口縁部内外面 ヨコナデ	1mm大の石 粒を若干含 む	内外 灰 橙	良好	磨耗が顕 著である
-18	図版33	黒色土器 椀	口径14.8 残存高0.9		口縁部内外面 ヨコナデ	微砂粒を多 量に含む	内外 黒	良	
-19	図版33	黒色土器 椀	底径5.1 残存高0.8		底部内外面 ナデ	1mm以下の 石英を多量 に含む	内外 に ぶい黄橙		
-20	図版33	須恵器 杯	底径7.8 残存高0.7		底部外面 ヘラケズリ 〃 内面 ヨコナデ	精良	内外 灰	良好	堅緻 反転復元 底部外面 に火襷
-21	図版33	製塩土器	口径26.4 残存高2.0		口縁部内外面 ヨコナデ 指頭圧痕	1mm以下の 石英を多量 に含む	内外 灰 黄褐	良好	
-22	-	須恵器 杯身	口径16.0 残存高1.2		口縁部内外面 ヨコナデ	精良	外 灰 内 灰白	良好	堅緻 反転復元
-23	-	土師器 椀	口径19.0 残存高2.1		口縁部内外面 ヨコナデ		内外 灰 白	良	
-24	-	須恵器 皿	底径10.0 残存高0.8		底部外面 ヘラケズリ 〃 内面 ナデ	精良	内外 灰	良好	堅緻 反転復元
-25	-	須恵器 甕	残存高3.8		口縁部内外面 ヨコナデ 〃		内外 灰	良	反転復元

包含層 出土土器

挿図 番号	図版 番号	器 種	法 量 (cm)	施文の特徴	成形及び調整方法	胎 土	色 調	焼成	備 考
第64図 - 1	-	染付 端反り碗	口径9.6 残存高1.6	口縁部外面 圏線1条 〃 内面 圏線2条		密	素地 淡灰 白 淡青白 呉須 青灰	良好	呉須の発 色が良い
- 2	-	染付 青磁碗	口径9.0 残存高3.7	口縁部内面 四方襷文		〃	素地 淡灰白 釉外 淡緑 〃内 淡青灰 呉須 淡青灰	〃	〃
- 3	-	肥前系磁 器 染付碗	口径10.2 残存高2.6	外面 草花文		〃	素地 淡灰 白 淡青白 呉須 青灰	〃	〃
- 4	-	肥前系磁 器 染付碗	口径11.6 残存高2.9	外面 圏線2条		〃	素地 淡灰 白 淡青白 呉須 青灰	〃	呉須の発 色が悪い
- 5	-	染付 青磁碗	口径10.7 残存高4.2			〃	素地 濁灰 釉 暗緑灰	〃	
- 6	-	染付 皿	口径16.0 残存高2.0	内面 牡丹唐草文		〃	素地 淡灰 白 淡青白 呉須 青	〃	呉須の発 色が良い
- 7	-	青磁碗	口径17.2 残存高1.5	外面 縞連弁		〃	素地 淡灰 白 緑灰	〃	
- 8	-	唐津 鉢	底径9.4 残存高4.0	見込 蛇ノ目釉ハ ギ	内面 ハケメ	〃	素地 赤灰 釉 灰オリー ブ	〃	高台砂目 積
- 9	-	染付 碗	底径4.2 残存高4.3			〃	素地 淡灰 白 白 呉須 藍	〃	呉須の発 色が悪い
- 10	-	染付 壺	底径6.2 残存高2.9			〃	素地 淡灰 白 淡灰白	〃	
- 11	-	染付 碗蓋	口径10.0 残存高1.8	外面 唐草文 内面 雷文		〃	素地 淡灰 白 淡青白 呉須 青	〃	呉須の発 色が悪い

挿図 番号	図版 番号	器 種	法 量 (cm)	施文の特徴	成形及び調整方法	胎 土	色 調	焼成	備 考
第64図 -12	—	陶器 盤	残存高0.7	見込 牡丹の型押	底部外面 ヘラケズリ	密	内外 に ぶい赤褐	良好	
-13	—	陶器 灯明皿	底径4.0 器高1.0	内面 突帯1条	外面 ヘラケズリ 内面 ヨコナデ	〃	外 赤褐 内 暗赤 褐	〃	
-14	—	備前焼 蓋			内外面 ヨコナデ	〃	外 灰 内 灰白	〃	外面 火 襷
第65図 -1	—	染付白磁 紅皿	口径5.6 底径1.4 器高1.4	外面 貝の型押し 成形	口縁部内面 ヘラケズリ	精良	内外 青 白	〃	内面に釉
-2	—	陶器 燭台	底径5.1 残存高4.5		内外面 ヨコナデ 底部 回転糸切り	〃	内外 灰 褐	〃	脚部外面 に釉
-3	—	備前 摺鉢	口径27 残存高2.8	口縁部外面 凹線2条	口縁部内外面 ヨコナデ 〃 内面 かき目	〃	外 褐灰 内 灰褐	〃	
-4	—	〃 〃	口径26.2 残存高3.4		口縁部内外面 ヨコナデ 〃 内面 かき目	〃	内外 赤 褐	〃	
-5	—	陶器 盤	口径30.2 残存高2.7		口縁部内外面 ヨコナデ	〃	外 明赤 内 ぶ い赤褐	〃	
-6	—	土師器 皿	口径7.4 器高1.2		内外面 ナデ 底部 ヘラ切り	角閃石を少 量含む	外 明黄 内 浅黄 褐	〃	
-7	—	〃 〃	口径10.6 器高1.1		内外面 ナデ	〃	外 浅黄 内 灰白 橙	〃	
-8	—	近世瓦質 土器 土釜	残存高5.3		内外面 ヨコナデ	長石、角閃 石、金雲母 を含む	外 黄灰 内 黒	〃	外面にス ス附着

遺物観察表（石器）

S X 0 1

挿図 番号	図版 番号	器 種	現存長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	材 質	特 徴
第14図 - 1	図版34	スクレイパー	6.0	5.7	0.9		サヌカイト	完形。上縁部及び下縁部に加工痕がみられる。両側縁部には加工痕はみられない。下縁部は両面からの打ち欠きにより鋭利な刃部をつくる。
- 2	-	石鏃	2.0	1.2	0.4		サヌカイト	完形。凹基式である。基部の扱りは鋭くない。両側縁部の調整は両面からの打ち欠きにより鋭利である。両面とも平坦面を残す。

S D 0 2 Ⅲ期

挿図 番号	図版 番号	器 種	現存長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	材 質	特 徴
第18図 - 1	図版34	石鏃	3.0	2.0	0.3		サヌカイト	完形。凹基式である。基部の扱りは鋭く入り込む。両側縁部の調整は両面からの打ち欠きにより丁寧に施されており鋭利である。やや風化が進む。
- 2	-	スクレイパー	3.8	3.7	0.8		サヌカイト	完形。下縁部のみに若干の調整がみられる以外は、いずれの部分も截断面を残す。
- 3	-	スクレイパー	6.9	4.2	0.4		サヌカイト	完形。薄い素材を使用し、調整は片面からの打ち欠きにより、ほとんどを成形する。いずれの部分も鋭利であり、下縁部は使用によるものと思われる磨耗もみられる。

S D 0 2 Ⅳ期

挿図 番号	図版 番号	器 種	現存長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	材 質	特 徴
第22図 - 1	-	スクレイパー	3.0	2.8	0.7		サヌカイト	完形。上縁部及び下縁部に明確な調整がみられ、左側縁部は截断面を残す。
- 2	-	スクレイパー	6.0	5.7	1.4		サヌカイト	完形。両側縁部に截断面を残すもので、上縁部及び下縁部の調整は粗い。厚い素材を使用。未成品？
- 3	-	スクレイパー	7.8	4.6	1.0		サヌカイト	完形。両側縁部は截断面を残す。上縁部及び下縁部は片面からの打ち欠きにより調整する。上縁部には敲打による背潰しが若干認められる。

附 章
分 析 結 果

第2節 高松市浴・松ノ木および浴・長池遺跡出土の木製品の樹種

能 城 修 一（森林総合研究所木材利用部）

鈴 木 三 男（金沢大学教養部生物学教室）

香川県高松市佐古町の浴・松ノ木および浴・長池遺跡から出土した木製品の樹種を報告する。これらの遺跡は讃岐平野東部を東西に横切る国道11号線高松東道路の建設にともなって発掘された。そこでは、縄文時代晩期～弥生時代前期、および弥生時代中期～後期の河川が見いだされ、その中から木製品が出土した。高松東道路の延長上にある高松市井手東Ⅰ遺跡でも、木製品が大量に出土しており、両遺跡のサンプリングおよび同定結果の整理を並行してしおこなったため、同定方法および樹種の記載は井手東Ⅰ遺跡の報告の際にあわせて行う。

結 果

浴・長池および浴・松ノ木遺跡の木製品45点中には、11分類群が見いだされた（表1）。全体としては、3分の1をクヌギ節が占め、ヒノキ、コナラ節、モミ属、アカガシ亜属、ヤマグワと続く。ヒノキやモミ属、およびコナラ属のクヌギ節・コナラ節・アカガシ亜属が多い点は、針葉樹と広葉樹の比率が異なるものの、古墳時代から古代を中心とする坂出市下川津遺跡の木製品の樹種と共通しており（能城・鈴木、1990）、時代は異なっているものの周辺の森林の組成が類似していたことが想定される。

鋤鍬では、アカガシ亜属が2点で、西日本の典型的な樹種選択を示す（島地・伊東、1988）。板ではヒノキをはじめとする針葉樹が多く、割材および杭ではクヌギ節が多い。また柱材および丸木でもクヌギ節およびコナラ節が多く、これらは周辺に普通に生育していたことが想定される。

引用文献

- 能城修一・鈴木三男．1990．香川県埋蔵文化財調査センター編「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ 下川津遺跡」，553-567．香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公団．
- 島地 謙・伊東隆夫．1988．日本の遺跡出土木製品総覧．viii+296pp．雄山閣，東京．

表1. 高松市浴・松ノ木および浴長池遺跡から出土した木製品の樹種

樹種名	鋤 鋤		桁目板		板目板		斜め板	割材		杭	柱材			その他	丸木	総数
	中後	後	中後	後	中後	後	後	晩～前	後	後	晩～前	後	不明	中後	後	
カヤ			1													1
モミ属				1		1			1			1				4
ヒノキ				1	1	3	3									8
ヤナギ属									1							1
スタジイ										1					1	2
コナラ属 アカガシ亜属	1	1					1									3
コナラ属 クヌギ節				1		1		2	3	3	1		1		2	14
コナラ属 コナラ節						1				1		1	1		3	7
コウゾ										1						1
ヤマグワ								1				1		1		3
タブノキ															1	1
総数	1	1	1	3	1	7	3	3	5	6	1	3	2	1	7	45

中後：弥生時代中期～後期，後：弥生時代後期，晩～前：縄文晩期～弥生前期

付表. 高松市浴・松ノ木および浴長池遺跡出土木製品一覧表

標本番号	樹種名	製品名	木取り等	遺構	時期	遺跡名
K T A K - 73	コナラ属アカガシ亜属	鋏?	柁目	S R 01	弥生中～後期	浴・長池
K T A K - 218	ヤマグワ	作業台?	木塊	S R 01	弥生中～後期	浴・長池
K T A K - 219	コナラ属クヌギ節	みかん割板	みかん割	4c 砂層中	弥生後期	浴・長池
K T A K - 220	コナラ属コナラ節	柱材	丸木皮付き	4c 砂層中	弥生後期	浴・長池
K T A K - 221	コナラ属クヌギ節	丸木		S R 02	弥生後期	浴・長池
K T A K - 222	コナラ属コナラ節	丸木		S R 02	弥生後期	浴・長池
K T A K - 223	コナラ属クヌギ節	丸木		S R 02	弥生後期	浴・長池
K T A K - 224	コナラ属コナラ節	丸木		S R 02	弥生後期	浴・長池
K T A K - 225	コナラ属コナラ節	丸木		S R 02	弥生後期	浴・長池
K T A K - 226	タブノキ	丸木		S R 02	弥生後期	浴・長池
K T A K - 227	コナラ属コナラ節	板目板	板目	S R 02	弥生後期	浴・長池
K T A K - 229	ヒノキ	板目板	先端偏平板目割材	S R 01	弥生中～後期	浴・長池
K T A K - 230	カヤ	柁目板	柁目	S R 01	弥生中～後期	浴・長池
K T A K - 231	ヒノキ	斜め板	斜目	S D 2 区	弥生後期	浴・松ノ木
K T A K - 232	コナラ属コナラ節	柱材?	丸木皮付き	不明	不明	浴・長池
K T A K - 233	コナラ属クヌギ節	柁目板	柁目	不明	弥生後期	浴・松ノ木
K T A K - 234	コナラ属クヌギ節	割材		S R 02	縄文晩期～弥生前期	浴・長池
K T A K - 235	スダジイ	丸木		S R 04	弥生後期	浴・松ノ木
K T A K - 236	コナラ属コナラ節	杭	丸木皮付き	S R 04	弥生後期	浴・松ノ木
K T A K - 237	スダジイ	杭	丸木皮付き	S R 04	弥生後期	浴・松ノ木
K T A K - 238	コナラ属クヌギ節	杭	丸木皮付き	S R 04	弥生後期	浴・松ノ木
K T A K - 239	コナラ属クヌギ節	杭	丸木皮付き	S R 04	弥生後期	浴・松ノ木
K T A K - 240	コナラ属クヌギ節	杭	みかん割	S R 04	弥生後期	浴・松ノ木
K T A K - 241	コナラ属クヌギ節	柱材	みかん割	試掘	不明	浴・長池
K T A K - 242	ヤマグワ	割材		S R 02	縄文晩期～弥生前期	浴・長池
K T A K - 243	コナラ属アカガシ亜属	鋏	柁目	S R 02	弥生後期	浴・長池
K T A K - 244	コナラ属クヌギ節	柱材	割材	S R 02	縄文晩期～弥生前期	浴・長池
K T A K - 245	コナラ属クヌギ節	みかん割材	みかん割	S R 02	縄文晩期～弥生前期	浴・長池
K T A K - 246	コナラ属クヌギ節	みかん割薄板	みかん割	4c 砂層中?	弥生後期	浴・長池
K T A K - 247	コナラ属クヌギ節	みかん割厚板	みかん割	4c 砂層中?	弥生後期	浴・長池
K T A K - 248	コナラ属クヌギ節	板目厚板	板目割板	S D 02	弥生後期	浴・松ノ木
K T A K - 249	モミ属	板目細板	板目	S D 02	弥生後期	浴・松ノ木
K T A K - 250	ヒノキ	板目板	板目	S D 02	弥生後期	浴・松ノ木
K T A K - 251	モミ属	柱材	芯持ち丸木	S D 02	弥生後期	浴・松ノ木
K T A K - 252	ヤマグワ	柱材	丸太材	2 区	弥生後期	浴・松ノ木
K T A K - 253	コナラ属アカガシ亜属	板目薄板	板目	S R 04	弥生後期	浴・松ノ木
K T A K - 254	モミ属	割材	板目	S R 04	弥生後期	浴・松ノ木
K T A K - 255	モミ属	柁目厚板	柁目	S R 04	弥生後期	浴・松ノ木
K T A K - 256	ヒノキ	板目厚板	板目	S R 04	弥生後期	浴・松ノ木
K T A K - 257	コウゾ	杭	丸木	S R 04	弥生後期	浴・松ノ木
K T A K - 258	ヒノキ	板目板	板目	S R 04	弥生後期	浴・松ノ木
K T A K - 259	ヒノキ	斜め薄板	斜目先端尖り	S D 02	弥生後期	浴・松ノ木
K T A K - 260	ヤナギ属	割材		S D 02	弥生後期	浴・松ノ木
K T A K - 261	ヒノキ	柁目板	柁目	S D 02	弥生後期	浴・松ノ木
K T A K - 262	ヒノキ	斜め板	斜目	S D 02	弥生後期	浴・松ノ木



版 圖



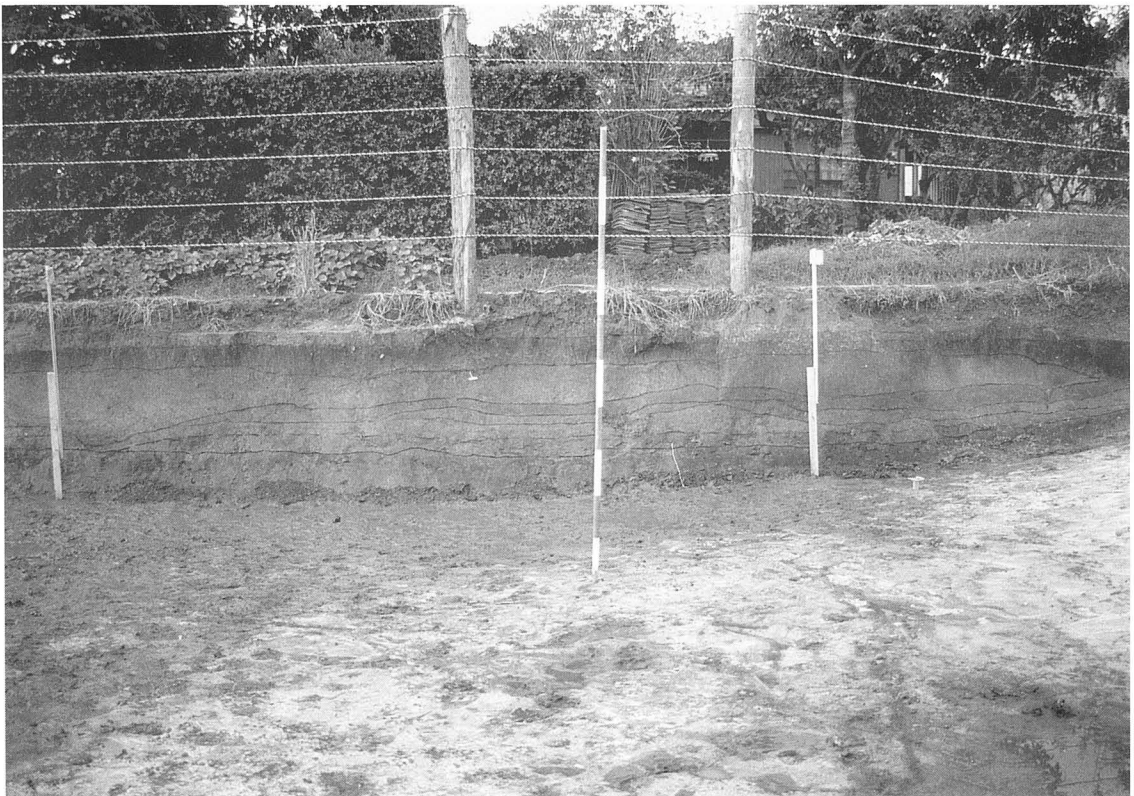
1. 調査前状況（東から）



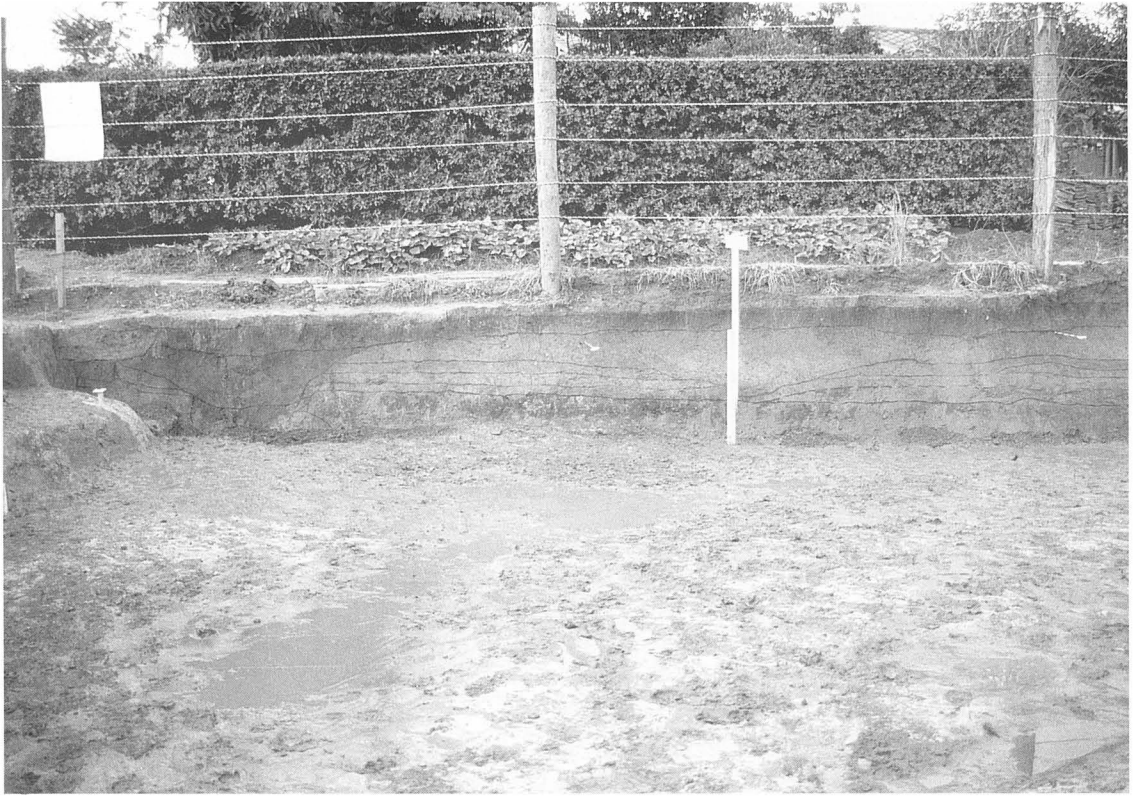
2. 調査終了状況（東から）



1. SX01完掘状況（東から）



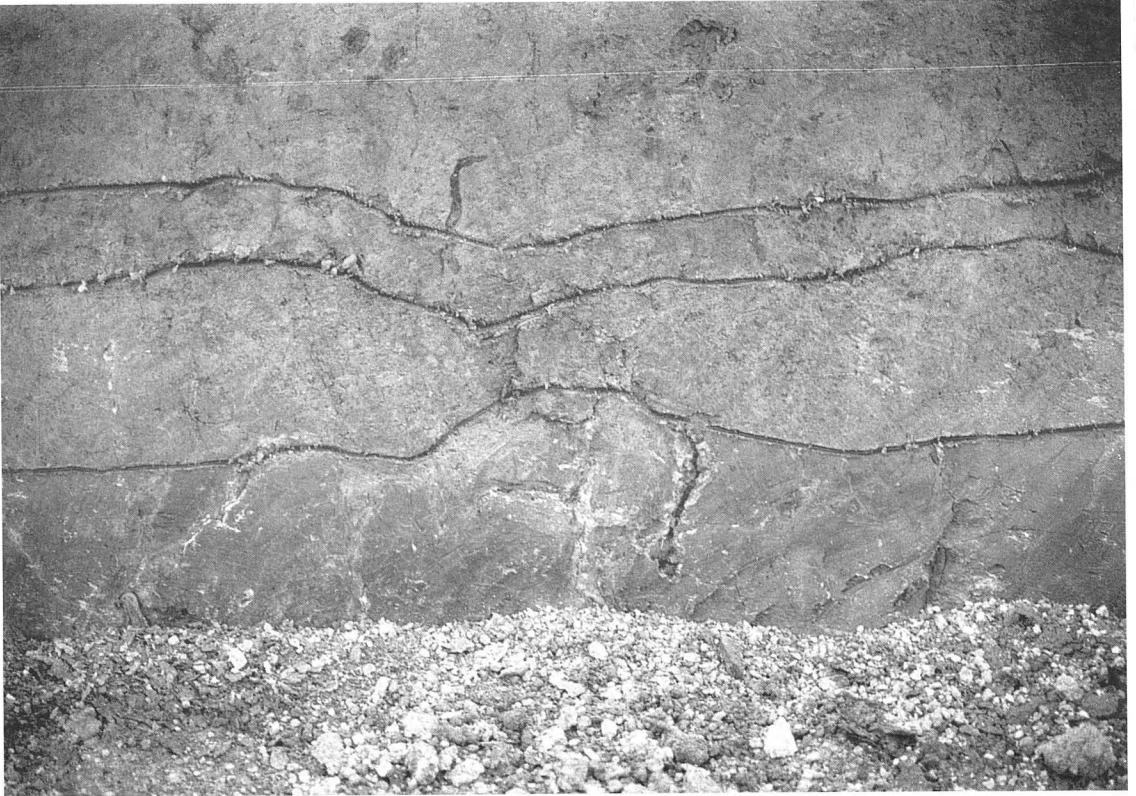
2. SX01北壁土層堆積状況（1）



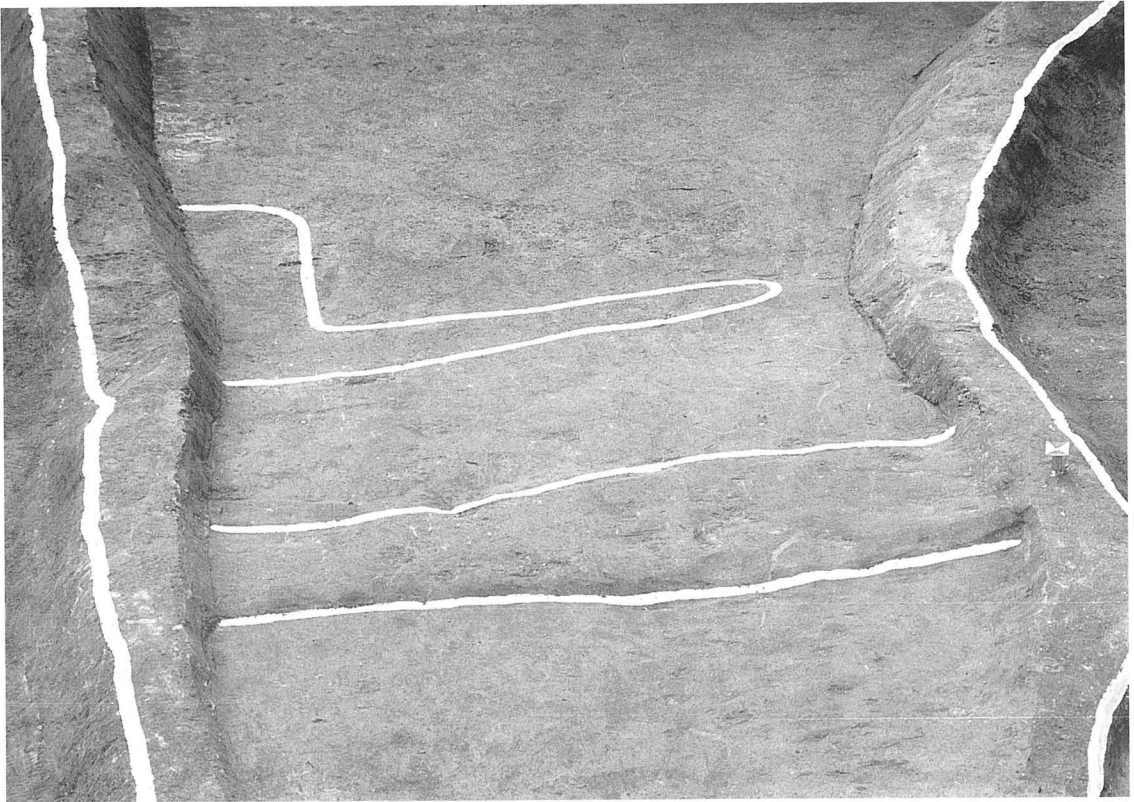
1. SX01北壁土層堆積状況 (2)



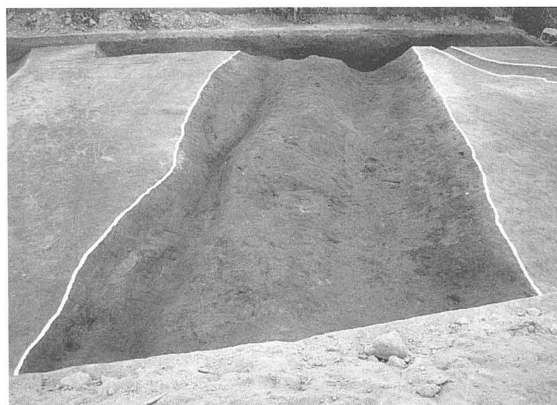
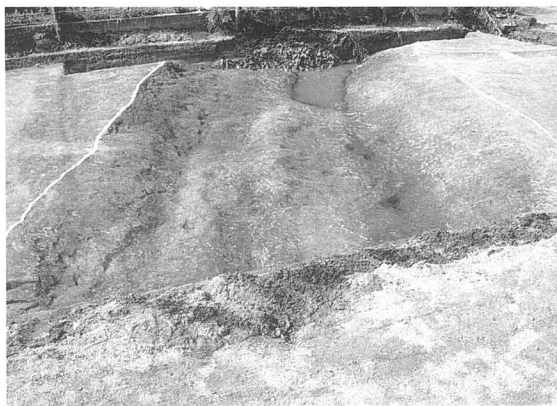
2. SX01西壁土層堆積状況



1. SX01西壁土層 水田畦畔



2. SX01水田畦畔検出状況（北から）

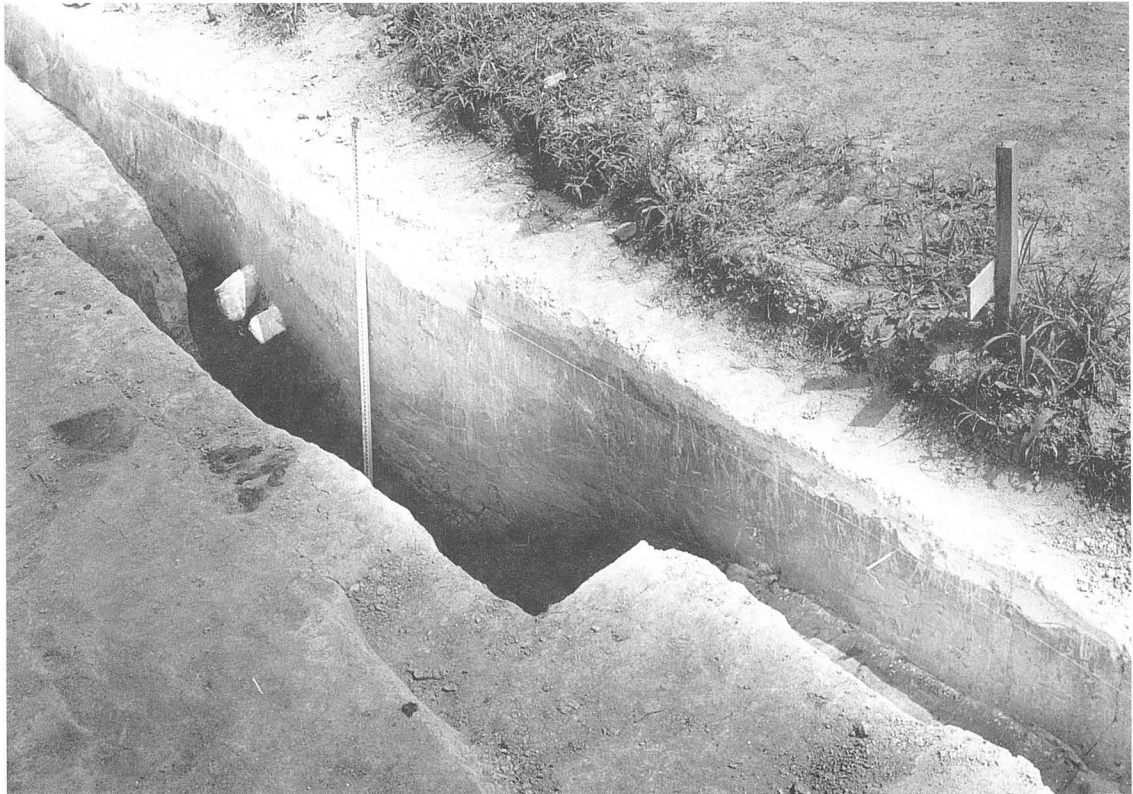


1. SD02 (北部) I~IV期

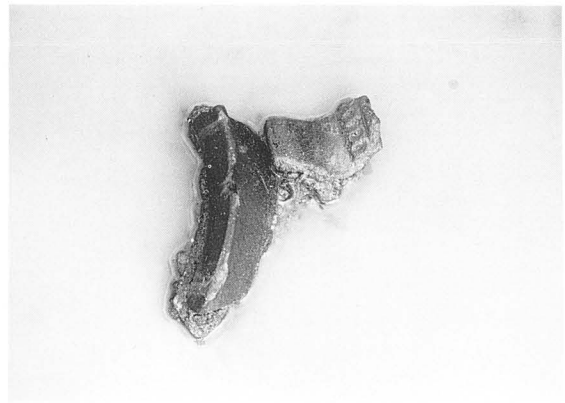
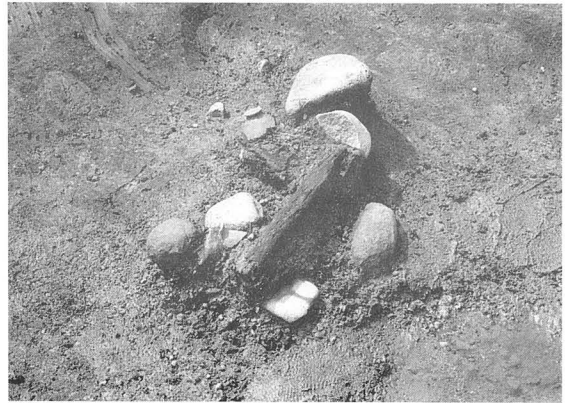
2. SD02 (南部) I~IV期



1. SD02土層堆積状況 (1)



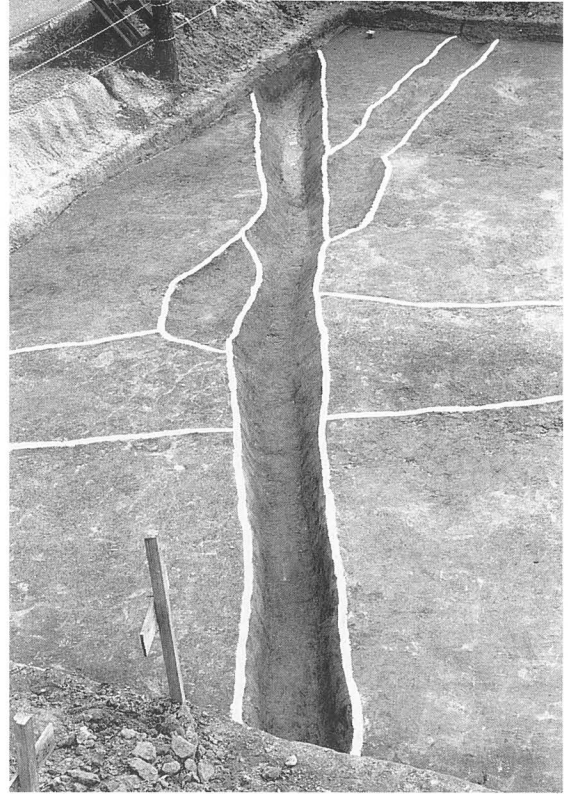
2. SD02土層堆積状況 (2)



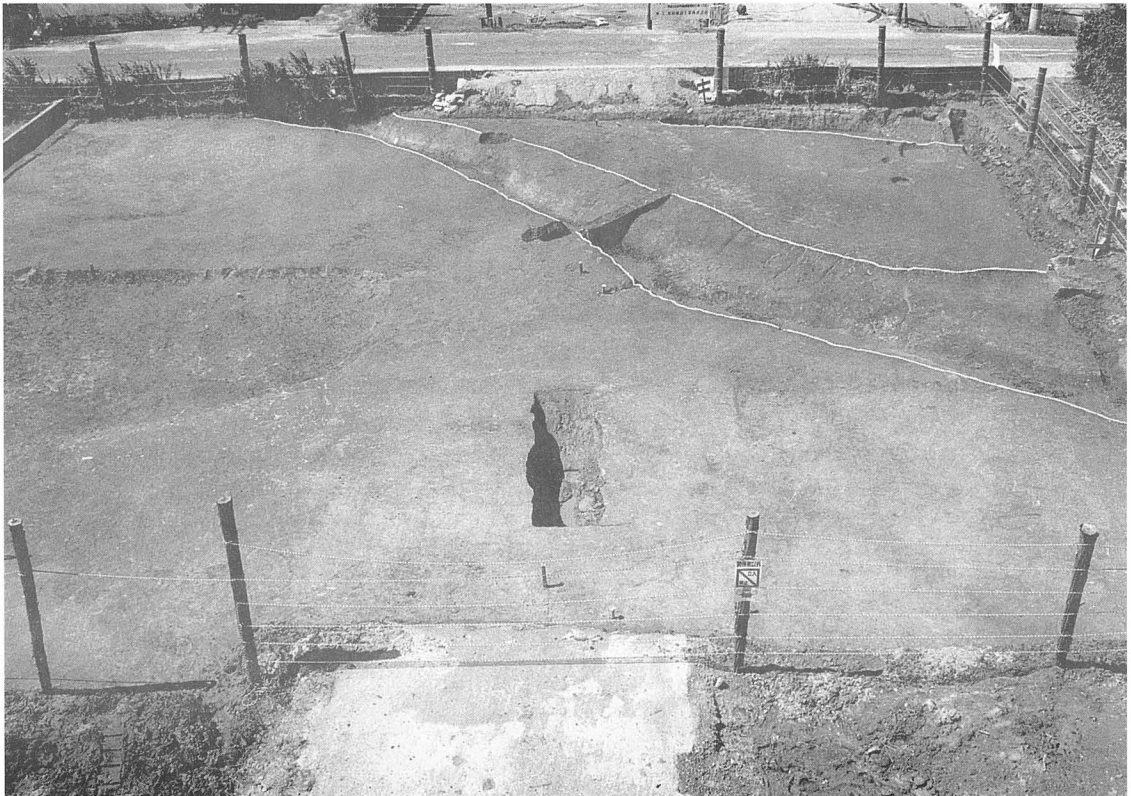
SD02遺物出土状況



1. SD04北部完掘状況（南から）



2. SD04南部完掘状況（北から）



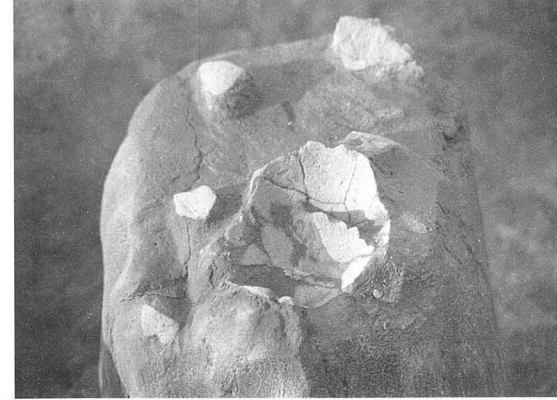
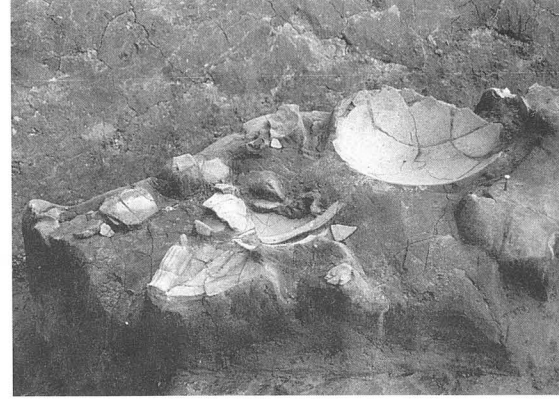
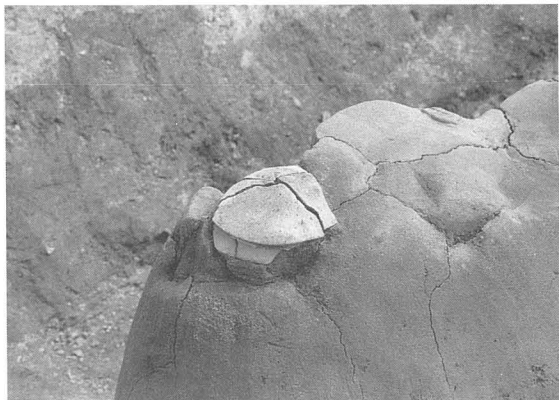
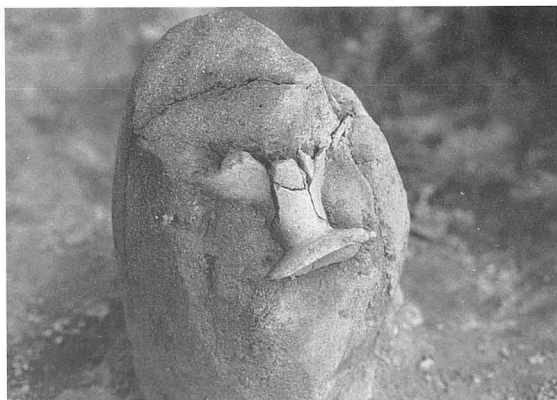
3. SD06・07完掘状況（東から）



1. SD06遺物出土状況



2. SD06土層堆積状況



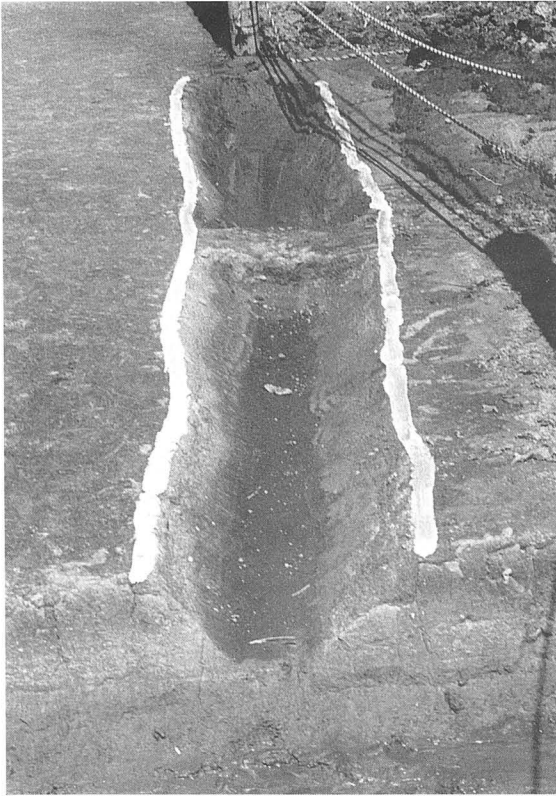
SD06遺物出土状況（細部）



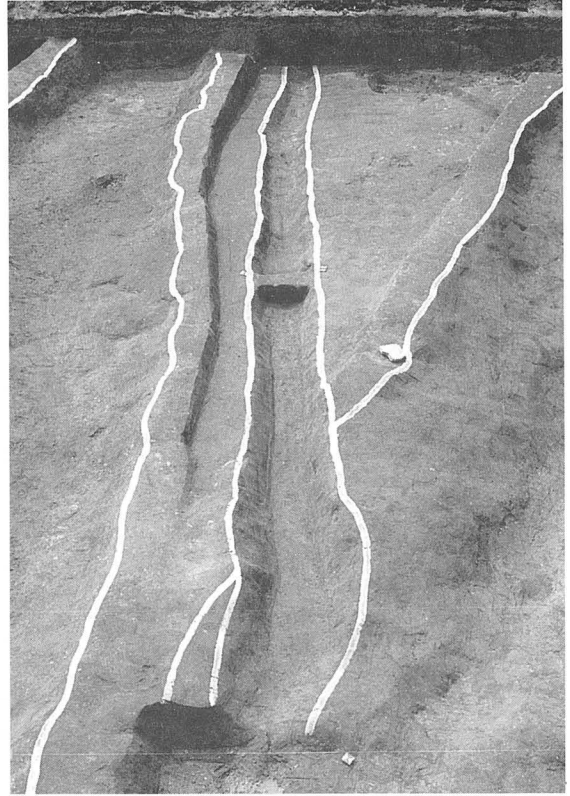
1. SD06完掘状況（北から）



2. SD07完掘状況（北から）



1. SD09完掘状況（南から）



2. SD10完掘状況（北から）



3. SR03-04完掘状況（東から）



1. SR03完掘状況（東から）



2. SR03南壁土層堆積状況



1. SR04北部完掘状況（西から）



2. SR04南部完掘状況（西から）



1. SR04北壁土層堆積状況



2. SR04北壁細部土層堆積状況



1. SR04杭列検出状況



2. SR04 13層櫓状木製品出土状況